

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— VII —

福岡県筑紫野市所在八隈遺跡の調査

1 9 7 6

福岡県教育委員会

正 誤 表

		誤	正
9頁	15行目	数々所発見	数個所発見
	23行目	遺跡に飛躍的に	遺跡は飛躍的に
9-10頁	Fig. 1	3. 観世音寺	4. 観世音寺
13頁	17~18行目	袖石は一辺は一辺	袖石は一辺
18頁	1行目	つまみのつくり例	つまみのつく例
28頁	14行目	3はやや大きく	4はやや大きく
80頁	見出し	弥生時代の遺措と遺物	弥生時代の遺構と遺物
111頁	3行目	PL. 74~76	PL. 73~75
111頁	12行目	PL. 73	PL. 71
112頁	21行目	PL. 75	PL. 73
114頁	3行目	PL. 75-1	PL. 72-1
115頁	22行目	PL. 78-2	PL. 76-2
117頁	4行目	PL. 78-1	PL. 77-1
117頁	26行目	PL. 77・78-2	PL. 77-2・78
119頁	20行目	Fig. 113	Fig. 113・PL. 80
Fig. ④		3. 褐土	3. 褐色土
		7. 真砂(粘質土茶褐色混り)	7. 真砂(茶褐色粘質土混り)
Fig. ⑤		15. 暗示褐色土	15. 暗褐色土層
Fig. ⑥		12. 地山灰茶土層	12. 地山系灰茶色土層
Fig. ⑧		7. 灰炭色土	7. 灰褐色土

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— VII —

福岡県筑紫野市所在八隈遺跡の調査

1 9 7 6

福岡県教育委員会

序

九州縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の調査は昭和51年をもって終了する予定であります。この8年の間に巨額の経費と膨大な人力をもって計159個所の調査を実施いたしました。これらは、いづれも貴重な内容をもつものであり、調査終了後、ただちにその成果を一般に公開すべきでありました。しかし打ち続く調査のために報告書の作成は遅れ遅れになっている現状です。

この報告書は昭和48年度から49年度にかけて実施した筑紫野市所在八隈遺跡の記録であります。調査は東京教育大学考古学研究室の増田精一助教授をはじめとする諸氏の手で始まり、半年以上にわたって実施していただきました。その真摯な努力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。また、発掘作業と、その後の整理作業に際して寄せられた関係各位のご尽力、特に調査期間中終始ご助力いただいた地権者松尾勝則氏に対しては、この報告書をもってお礼に替えさせていただきたく思います。

本書の発刊が遅れたことをお詫びするとともに、その内容につきまして関係者のご利用に供しうれば幸甚に存じます。

昭和51年7月1日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によつ破壊される予定の遺跡について行なつた事前調査のうち、昭和48年度に発掘した筑紫野市所在八隈遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の受託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、つぎのとおりである。
 - I 松浦宥一郎・酒井 仁夫・松村 一良
 - II 酒井 仁夫
 - III 酒井 仁夫
 - IV 松村 一良
 - V 松浦宥一郎
4. 陶器の鑑定は須恵町立民俗資料館館長 板橋謙吉氏に協力いただいた。
5. 昭和48年度に行なつた九州縦貫道関係の調査は、主として瀧竜二主事と、石山 勲・酒井仁夫・川述昭人・中間研志各技師があたり、昭和49年度は主として山本文和主事と、栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・川述昭人・上野精志・中間研志・池辺元明・児玉真一各技師が担当した。
6. 本書の編集は、酒井仁夫・松村一良が担当した。

本文目次

	頁
I 調査の経過	1
1 第I期の調査	1
2 第II期の調査	4
3 第III期の調査	6
4 第IV期の調査	8
II 位置と環境	9
III 古墳群の調査	13
1 第1号墳	13
2 第2号墳	23
3 第3号墳	26
4 第4号墳	34
5 第5号墳	41
6 第6号墳	46
7 第7号墳	52
8 第8号墳	54
9 第9号墳	57
10 小 結	58
11 土壙墓	65
IV 集落遺跡の調査	69
1 第1地点の調査	69
(1) 弥生時代の遺構と遺物	69
(2) 古墳時代の遺構と遺物	82
(3) その他の遺構と遺物	87
2 第2地点の調査	95
(1) 弥生時代の遺構と遺物	95
(2) 古墳時代の遺構と遺物	99
3 小 結	108
V 第1・2号墳周囲の調査	109

図 版 目 次

		本文対照頁
PL. 1	(1) 遺跡全景航空写真 東より(石山勲撮影)	13
PL. 2	(1) 遺跡南半航空写真 北東より(石山撮影)	13
	(2) 第1～第6号墳航空写真 東より(酒井仁夫撮影)	13
PL. 3	第1号墳	
	(1) 調査前の全景写真 北より(松浦宥一郎撮影)	13
	(2) 調査前の全景写真 東より(松浦撮影)	13
PL. 4	第1号墳	
	(1) 調査後の全景写真 北より(松浦撮影)	13
	(2) 調査後の前面全景写真 西より(酒井撮影)	13
PL. 5	第1号墳	
	(1) 石室奥壁 (松浦撮影)	13
	(2) 石室羨道及び閉塞石 (松浦撮影)	13
PL. 6	第1号墳	
	(1) 南側玄門上石組架構状況 (松浦撮影)	13
	(2) 羨道部石組架構状況 (酒井撮影)	13
PL. 7	第1号墳出土遺物	
	(1) 馬具・鏢・刀子 (阿南秀長撮影)	16
PL. 8	第1号墳出土遺物	
	(1) 須恵器① (阿南撮影)	18
PL. 9	第1号墳出土遺物	
	(1) 須恵器② (阿南撮影)	18
PL. 10	第1号墳出土遺物	
	(1) 須恵器③ (阿南撮影)	21
PL. 11	第1号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (阿南撮影)	22
PL. 12	第2号墳	
	(1) 調査前の盗掘壊 南より(松浦撮影)	23
	(2) 全景写真 南より(酒井撮影)	23
PL. 13	第2号墳	
	(1) 石室と墓壇 (酒井撮影)	23
	(2) 墓道の遺物出土状況 (酒井撮影)	23
PL. 14	第2号墳出土遺物	
	(1) 須恵器① (阿南撮影)	23

PL. 15	第2号墳出土遺物	
	(1) 須恵器② (阿南撮影)	25
PL. 16	第3号墳	
	(1) 全景写真 東より (酒井撮影)	26
	(2) 閉塞石 石室内より (酒井撮影)	26
PL. 17	第3号墳	
	(1) 石室内遺物出土状況 (酒井撮影)	26
	(2) 玄室内馬具出土状況 (酒井撮影)	26
PL. 18	第3号墳	
	(1) 羨道部遺物出土状況 (酒井撮影)	26
	(2) 銅椀・直刀出土状況 (酒井撮影)	26
PL. 19	第3号墳出土遺物	
	(1) 轡 (阿南撮影)	28
	(2) ガラス小玉 (阿南撮影)	28
	(3) 帯金具 (阿南撮影)	30
	(4) 耳環 (阿南撮影)	28
PL. 20	第3号墳出土遺物	
	(1) 直刀 (阿南撮影)	28
	(2) 刀子 (阿南撮影)	30
	(3) 鐔など (阿南撮影)	28
	(4) 鏃 (阿南撮影)	28
	(5) 鏃 (阿南撮影)	28
	(6) 銅椀 (阿南撮影)	30
PL. 21	第3号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (阿南撮影)	30
PL. 22	第3号墳出土遺物	
	(1) 土師器 (阿南撮影)	32
PL. 23	第4号墳	
	(1) 石室全景 (酒井撮影)	34
	(2) 前室遺物出土状況 (酒井撮影)	35
	(3) 耳環 (阿南撮影)	36
PL. 24	第4号墳出土遺物	
	(1) 須恵器① (阿南撮影)	37
PL. 25	第4号墳出土遺物	
	(1) 須恵器② (阿南撮影)	39
PL. 26	第5号墳	
	(1) 石室全景 南東より (酒井撮影)	41
	(2) 玄室遺物出土状況 (酒井撮影)	42

PL. 27	第5号墳出土遺物	
	(1) 鍬及び刀子・鏃 (阿南撮影)	42
	(2) 鉄斧 (阿南撮影)	42
	(3) 耳環 (阿南撮影)	42
PL. 28	第5号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (阿南撮影)	43
PL. 29	第6号墳	
	(1) 石室全景 南東より(酒井撮影)	46
	(2) 前室遺物出土状況 (酒井撮影)	47
PL. 30	第6号墳	
	(1) 須恵器出土状況 (酒井撮影)	47
	(2) 鉄鍬出土状況 (酒井撮影)	47
PL. 31	第6号墳出土遺物	
	(1) 鍬 (阿南撮影)	47
	(2) 耳環 (阿南撮影)	47
	(3) 土師器 (阿南撮影)	49
PL. 32	第6号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (阿南撮影)	49
PL. 33	第7号墳	
	(1) 第7・8号墳全景 南東より(酒井撮影)	52
	(2) 石室全景 南東より(酒井撮影)	52
PL. 34	第8号墳	
	(1) 墳土及び石室全景 南東より(酒井撮影)	54
	(2) 須恵器 (阿南撮影)	54
PL. 35	第7・8号墳出土遺物及び第9号墳	
	(1) 第7号墳出土須恵器 (阿南撮影)	53
	(2) 第7号墳出土小玉 (阿南撮影)	53
	(3) 第8号墳墓道埋土中出土銅鏡 (阿南撮影)	55
	(4) 第8号墳出土耳環 (阿南撮影)	55
	(5) 第9号墳全景 南より(酒井撮影)	57
PL. 36	土壙墓	
	(1) 第1号土壙墓 南より(酒井撮影)	65
	(2) 第2・3号土壙墓 南より(酒井撮影)	65
PL. 37	土壙墓	
	(1) 第3号土壙墓 南より(酒井撮影)	65
	(2) 第2号土壙墓 南より(酒井撮影)	65
PL. 38	第1地点	
	(1) 調査前の第1地点 北より(松浦撮影)	69

	(2) 南部遺構群 南より (川述昭人撮影)	69
PL. 39	第1地点	
	(1) 中央部遺構群 南より (松村一良撮影)	69
	(2) 北部遺構群 南より (進 博次撮影)	69
PL. 40	第1地点	
	(1) 第3号住居跡 西より (川述撮影)	69
	(2) 第5・6号住居跡 西より (進 撮影)	71
PL. 41	第1地点	
	(1) 第7～11・13号住居跡 西より (川述撮影)	72
	(2) 第7号住居跡 西より (川述撮影)	72
PL. 42	第1地点	
	(1) 第8号住居跡 南より (松村撮影)	75
	(2) 第11号住居跡 南より (川述撮影)	77
PL. 43	第1地点	
	(1) 第12号住居跡 西より (川述撮影)	79
	(2) 第9号住居跡 西より (川述撮影)	83
PL. 44	第1地点	
	(1) 第14号住居跡・第1号堅穴 南より (川述撮影)	91
	(2) 第1号溝状遺構 南より (川述撮影)	81
	(3) 第2号溝状遺構 南より (川述撮影)	95
PL. 45	第1地点	
	(1) 第3号住居跡出土土器 (阿南撮影)	69
PL. 46	第1地点	
	(1) 第4～6号住居跡出土土器 (阿南撮影)	70・71
PL. 47	第1地点	
	(1) 第7号住居跡出土土器 (阿南撮影)	72
PL. 48	第1地点	
	(1) 第10・11号住居跡出土土器 (阿南撮影)	76・77
PL. 49	第1地点	
	(1) 第9号住居跡出土土器 (阿南撮影)	85
PL. 50	第1地点	
	(1) 出土土製品及び石器 (阿南撮影)	87
PL. 51	第1地点	
	(1) 第1号堅穴出土日常雑器 (阿南撮影)	93
PL. 52	第1地点	
	(1) 第1号堅穴出土陶器① (阿南撮影)	93

PL. 53	第1地点			
	(1)	第1号堅穴出土陶器②	(阿南撮影)	93
PL. 54	第1地点			
	(1)	第1号堅穴出土陶器③	(阿南撮影)	93
PL. 55	第1地点			
	(1)	第1号堅穴出土陶器④	(阿南撮影)	93
PL. 56	第1地点			
	(1)	第1号堅穴出土陶器⑤	(阿南撮影)	93
PL. 57	第1地点			
	(1)	第1号堅穴出土陶器⑥	(阿南撮影)	93
PL. 58	第1地点			
	(1)	第1号堅穴出土陶器⑦	(阿南撮影)	93
PL. 59	第1地点			
	(1)	第7号堅穴出土陶器⑧	(阿南撮影)	93
PL. 60	第2地点			
	(1)	北半部遺構群	南より(川述撮影)	95
	(2)	南半部遺構群	北より(川述撮影)	95
PL. 61	第2地点			
	(1)	第1号甕棺墓	北より(川述撮影)	95
	(2)	第2号甕棺墓	南より(川述撮影)	97
PL. 62	第2地点			
	(1)	第1号甕棺	(阿南撮影)	95
	(2)	第2号甕棺	(阿南撮影)	97
PL. 63	第2地点			
	(上)	第1号住居跡	西より(川述撮影)	99
	(左)	第2号住居跡	南より(川述撮影)	100
PL. 64	第2地点			
	(1)	第4号住居跡	北より(川述撮影)	100
	(2)	第5号住居跡	北より(川述撮影)	101
PL. 65	第2地点			
	(左)	第6号住居跡	西より(川述撮影)	102
	(下)	第10号住居跡	南より(川述撮影)	104
PL. 66	第2地点			
	(1)	第11号住居跡	西より(川述撮影)	104
	(2)	第12号住居跡	西より(川述撮影)	105
PL. 67	第2地点			
	(1)	第13号住居跡	西より(川述撮影)	106

P.L. 68	第2地点		
	(1)	第5・8・11・13号住居跡出土土器（阿南撮影）	101・102・104・106
PL. 69	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	第1・2号墳周辺航空写真 東より（石山撮影）	109
	(2)	第1・2号墳周辺航空写真 南より（石山撮影）	109
PL. 70	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	B区土壘状遺構 西より（松浦撮影）	109
	(2)	B区土壘状遺構 南より（松浦撮影）	109
PL. 71	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	配石階段状遺構 北より（松浦撮影）	111
	(2)	配石階段状遺構 北より（松浦撮影）	111
PL. 72	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	C区土壘状遺構 東より（松浦撮影）	112
	(2)	C区土壘状遺構断面土層 西より（松浦撮影）	114
PL. 73	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	C区石組遺構と土壘状遺構 西より（松浦撮影）	112
	(2)	C区石組遺構 西より（松浦撮影）	114
PL. 74	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	C区石組遺構 北東より（松浦撮影）	112
	(2)	C区石組遺構一部分一 西より（松浦撮影）	112
PL. 75	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	C区石組遺構 南より（松浦撮影）	112
	(2)	C区石組遺構 北東より（松浦撮影）	112
PL. 76	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	D区石組遺構と土壘状遺構 東より（松浦撮影）	114
	(2)	D区石組下の土器出土状況（松浦撮影）	115
PL. 77	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	第2号墳上の石組遺構 南より（松浦撮影）	116
	(2)	A区土壘状遺構と石組 南より（松浦撮影）	117
PL. 78	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	調査前のA区土壘状遺構 西より（松浦撮影）	117
	(2)	調査後のA区土壘状遺構 西より（松浦撮影）	117
PL. 79	第1・2号墳周囲の遺構		
	(1)	B区検出石碑	116
PL. 80	第1・2号墳周辺出土日常雑器・陶器類		118

挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 筑紫野市周辺遺跡地図(松村作成)	9—10
Fig. 2 筑紫野市周辺の時代別遺跡分布図(酒井作成)	10
Fig. 3 八隈遺跡周辺地形図(松村作成)	12
Fig. 4 第1号～3号墳丘測量図(松浦・酒井他実測, 松村製図)	13—14
Fig. 5 第1号墳出土遺物実測図(松村実測, 製図)	15
Fig. 6 第1号墳出土須恵器実測図①(宮原・山本実測, 松村製図)	17
Fig. 7 第1号墳出土須恵器実測図②(森・宮原・山本実測, 松村製図)	19
Fig. 8 第1号墳出土須恵器実測図③(森・宮原・山本実測, 松村製図)	20
Fig. 9 第1号墳出土須恵器実測図④(森・宮原・山本実測, 松村製図)	21—22
Fig. 10 第1号墳出土土師器実測図(宮原・山本実測, 松村製図)	22
Fig. 11 第2号墳出土須恵器実測図(森・宮原・山本実測, 松村製図)	24
Fig. 12 第3号墳遺物出土状況実測図(酒井実測, 松村製図)	27
Fig. 13 第3号墳出土遺物実測図(松村実測, 製図)	27—28
Fig. 14 第3号墳出土馬具実測図(松村実測, 製図)	29
Fig. 15 第3号墳出土須恵器実測図(宮原・山本実測, 松村製図)	31
Fig. 16 第3号墳出土土師器・瓦器質土器, その他実測図(森・宮原・山本実測, 松村製図) ..	32
Fig. 17 第4・第5号墳丘実測図(酒井・内田・岩崎実測, 松村製図)	34
Fig. 18 第4号墳遺物出土状況実測図(酒井・松浦実測, 松村製図)	35
Fig. 19 第4号墳出土遺物実測図(松村実測, 製図)	37
Fig. 20 第4号墳出土須恵器実測図①(宮原・山本実測, 松村製図)	38
Fig. 21 第4号墳出土須恵器実測図②(宮原・山本実測, 松村製図)	39
Fig. 22 第4号墳出土土師器実測図(宮原実測, 松村製図)	39
Fig. 23 第5号墳遺物出土状況実測図(松浦・酒井実測, 松村製図)	41
Fig. 24 第5号墳出土遺物実測図(松村実測, 製図)	43
Fig. 25 第5号墳出土須恵器実測図①(宮原・山本実測, 松村製図)	44
Fig. 26 第5号墳出土須恵器実測図②(宮原・山本実測, 松村製図)	45
Fig. 27 第6号墳遺物出土状況実測図(松村実測, 製図)	47
Fig. 28 第6号墳出土遺物実測図(松村実測, 製図)	48
Fig. 29 第6号墳出土土師器実測図(松村実測製図)	49
Fig. 30 第6号墳出土須恵器実測図①(宮原・山本実測, 松村製図)	50
Fig. 31 第6号墳出土須恵器実測図②(宮原・山本実測, 松村製図)	51
Fig. 32 第6号・第7号墳丘測量図(内田・岩崎実測, 松村製図)	51

Fig. 33	第7号墳石室実測図(松村実測, 製図)	51—52
Fig. 34	第7号墳出土須恵器実測図(宮原実測, 松村製図)	53
Fig. 35	第7号墳出土小玉実測図(宮原実測, 松村製図)	53
Fig. 36	第8・第9号墳墳丘測量図(内田・松村実測, 松村製図)	53
Fig. 37	第8号墳出土遺物実測図(松村実測, 製図)	55
Fig. 38	第8号墳出土須恵器実測図①(宮原・山本実測, 松村, 製図)	56
Fig. 39	第8号墳出土須恵器実測図②(松村実測, 製図)	56
Fig. 40	第9号墳石室実測図(松村実測製図)	57
Fig. 41	第1・第2号土壙墓実測図(酒井・橋口実測, 酒井製図)	60
Fig. 42	第3号土壙墓実測図(酒井実測, 製図)	67
Fig. 43	第1地点遺構配置図(栗原・中間・進・中牟田・森・松村実測, 松村製図) ..	69—70
Fig. 44	第1地点第3号住居跡実測図(進・中牟田・松村実測, 松村製図)	69—70
Fig. 45	第1地点第3号住居跡出土土器実測図(宮原・山本実測, 松村製図)	69—70
Fig. 46	第1地点第4号住居跡実測図(松村実測, 製図)	70
Fig. 47	第1地点第4号住居跡出土土器実測図(松村実測, 製図)	70
Fig. 48	第1地点第5号住居跡出土土器実測図(山本・宮原実測, 松村製図)	71
Fig. 49	第1地点第5・第6号住居跡実測図(進・中牟田・森・松村実測, 松村製図)	71—72
Fig. 50	第1地点第7号住居跡実測図(進・松村実測, 松村製図)	71—72
Fig. 51	第1地点第7号住居跡出土土器実測図①(宮原・山本・重松実測, 松村製図)	73
Fig. 52	第1地点第7号住居跡出土土器実測図②(宮原・山本・重松実測, 松村製図) ..	73—74
Fig. 53	第1地点第7号住居跡出土土器実測図③(宮原・山本・重松実測, 松村製図)	75
Fig. 54	第1地点第8号住居跡実測図(進・松村実測, 松村製図)	75—76
Fig. 55	第1地点第8号住居跡出土土器実測図(山本・宮原実測, 松村製図)	75—76
Fig. 56	第1地点第10号住居跡実測図(松村実測, 製図)	76
Fig. 57	第1地点第10号住居跡出土土器実測図(松村実測, 製図)	77
Fig. 58	第1地点第11号住居跡実測図(進・松村実測, 松村製図)	77—78
Fig. 59	第1地点第11号住居跡出土土器実測図(宮原・山本実測, 松村製図)	78
Fig. 60	第1地点第12号住居跡実測図(進・松村実測, 松村製図)	79
Fig. 61	第1地点第12号住居跡出土土器実測図(山本・宮原実測, 松村製図)	79—80
Fig. 62	第1地点第14号住居跡実測図(松村実測, 製図)	81
Fig. 63	第1地点第14号住居跡出土土器実測図(山本・宮原実測, 松村製図)	81
Fig. 64	第1地点第1号溝状遺構実測図(進・松村実測, 松村製図)	81—82
Fig. 65	第1地点第1号溝状遺構出土土器実測図(山本実測, 松村製図)	82
Fig. 66	第1地点第6号住居跡出土土器実測図(宮原・山本実測, 松村製図)	82

Fig. 67	第1地点第9号住居跡実測図（進・松村・中牟田・森実測，松村製図）	83
Fig. 68	第1地点第9号住居跡出土土器実測図（山本・宮原実測，松村製図）	84
Fig. 69	第1地点第13号住居跡実測図（松村実測，製図）	86
Fig. 70	第1地点第13号住居跡出土土器実測図（松村実測，製図）	87
Fig. 71	第1地点出土土製品実測図（松村実測，製図）	87
Fig. 72	第1地点出土石器・石製品実測図（松村実測，製図）	88
Fig. 73	第1地点出土石器実測図（松村実測，製図）	89
Fig. 74	第1地点第1号配石土壙実測図（松村実測，製図）	91
Fig. 75	第1地点第1号土壙実測図（松村実測，製図）	91
Fig. 76	第1地点第1号竪穴実測図（松村実測，製図）	92
Fig. 77	第1地点第1号竪穴出土陶器実測図（宮原・山本実測，松村製図）	93
Fig. 78	第1地点第1号竪穴出土火舎，七輪実測図（宮原・山本実測，松村製図）	94
Fig. 79	第1地点建物遺構，第2号溝状遺構実測図 （栗原・中間・中牟田・進・松村実測，松村製図）	95—96
Fig. 80	第2地点遺構配置図（栗原・川述・中牟田・進・常木実測，松村製図）	96
Fig. 81	第2地点第1・2号甕棺墓実測図（常木・進実測，松村製図）	97
Fig. 82	第2地点第1・2号甕棺実測図（山本・宮原実測，松村製図）	98
Fig. 83	第2地点第1号住居跡実測図（中牟田実測，松村製図）	99
Fig. 84	第2地点第2号住居跡実測図（進実測，松村製図）	100
Fig. 85	第2地点第3号住居跡実測図（川述公実測，松村製図）	101
Fig. 86	第2地点第4・5号住居跡実測図（川述実測，松村製図）	101—102
Fig. 87	第2地点第5号住居跡出土須恵器実測図（宮原・山本実測，松村製図）	102
Fig. 88	第2地点第6号住居跡実測図（栗原実測，松村製図）	103
Fig. 89	第2地点第10号住居跡実測図（川述公実測，松村製図）	103—104
Fig. 90	第2地点第8号住居跡出土土器実測図（山本・宮原・松村実測，松村製図）	104
Fig. 91	第2地点第11号住居跡出土土器実測図（山本・宮原実測，松村製図）	104
Fig. 92	第2地点第11・12号住居跡実測図（中牟田・進実測，松村製図）	105
Fig. 93	第2地点第11号住居跡出土土器実測図（山本・宮原実測，松村製図）	106
Fig. 94	第2地点第13号住居跡出土土器実測図（宮原・山本実測，松村製図）	106
Fig. 95	第2地点第13・14号住居跡実測図（中牟田・進実測，松村製図）	107
Fig. 96	第1号墳上盛土北側土層断面図（内田・岩崎実測，酒井製図）	109
Fig. 97	第1・2号墳周囲の地形図（本橋・三好・斉藤・立木実測，松村製図）	109—110
Fig. 98	第2号墳周囲の遺構配置図（松村・望月・船山実測，松村製図）	109—110
Fig. 99	第1号墳西側裾部石組列（松村・望月・吉田実測，松村製図）	110
Fig. 100	第1号墳上盛土東側土層断面図（酒井実測，製図）	111

Fig. 101	第1号墳上配石階段状遺構（望月・吉田実測，松浦製図）	111
Fig. 102	第1号墳南東盛土断面図（酒井実測，松浦製図）	112
Fig. 103	C区列石遺構（松村・永見実測，松浦製図）	113
Fig. 104	第1号墳西側土塁断面図（内田・岩崎実測，酒井製図）	114
Fig. 105	D区凹地実測図（松村実測，松浦製図）	115
Fig. 106	第1号墳西側土塁及び凹地土層断面図（松村実測，松浦製図）	115
Fig. 107	第1号墳西側土塁及びD区溝状遺構断面図（岩崎実測，松浦製図）	115
Fig. 108	D区凹地，土塁及び溝状遺構断面図（松村実測，松浦実測）	116
Fig. 109	D区石組遺構実測図（酒井実測，製図）	116
Fig. 110	第2号墳配石溝状遺構南側土層断面図（斉藤・渡辺実測，酒井製図）	117
Fig. 111	第2号墳凹地配石溝状遺構実測図 （三好・斉藤・常木・大嶋・土屋・松村実測，松浦製図）	117—118
Fig. 112	第2号墳北側配石土塁実測図（内田・岩崎実測，松村製図）	117—118
Fig. 113	第1・2号墳周辺出土土器実測図（松村実測，製図）	119

附 図 目 次

Fig. ①	八隈遺跡古墳群及び第1地点遺構全体図（松浦・酒井・松村・進実測，松村製図）
Fig. ②	第1号墳石室実測図（松浦実測，松村製図）
Fig. ③	第2号墳石室実測図（内田・岩崎実測，松村製図）
Fig. ④	第3号墳石室実測図（内田・副島実測，松村製図）
Fig. ⑤	第4号墳石室実測図（松浦実測，松村製図）
Fig. ⑥	第5号墳石室実測図（大嶋・吉田実測，松村製図）
Fig. ⑦	第6号墳石室実測図（松村実測，製図）
Fig. ⑧	第8号墳石室実測図（内田実測，松村製図）
Fig. ⑨	第1・第2号墳周辺遺構配置図（松村・望月・岡部・船山実測，松村製図）

表 目 次

Tab. 1	古墳出土杯法量表（酒井作成）	58
Tab. 2	古墳出土杯一覧表（酒井作成）	59
Tab. 3	古墳出土杯篋記号一覧表（酒井作成）	60
Tab. 4	各古墳石室法量表（酒井作成）	62
Tab. 5	第1号墳石室と高麗尺による方眼（酒井作成）	63—64

I 調査の経過

昭和48年8月1日より昭和49年9月3日までの調査は、ほぼ4期に分けられる。それぞれの期間の主な調査内容は次のとおりである。

第Ⅰ期	昭和48年8月1日～昭和48年10月7日	石組み及び土壘状遺構の調査
第Ⅱ期	昭和48年10月8日～昭和49年4月19日	古墳群の調査
第Ⅲ期	昭和49年4月22日～昭和49年8月3日	進入路第1地点の調査
第Ⅳ期	昭和49年8月5日～昭和49年9月3日	進入路第2地点の調査

第Ⅰ期

発掘調査は昭和48年8月1日より開始し、同49年9月3日に終了、約13カ月の期間を要した。当初の発掘調査の対象は、丘陵上に存する1号墳（円墳）と、それと隣接する2号墳の2基の古墳であった。2号墳は墳丘はすでに消失しており、しかも石室もすでに破壊、抜去されたためか大きな凹地を呈していた。

まず、1号墳および2号墳の存する丘陵南半部の樹木、竹林の伐採、清掃を行ない、現況および近景の写真撮影を行なった。これらの作業と併行して、8月12日より15日までの4日間、古墳および周囲の地形測量を行なった。

伐採、清掃後の状況を見ると、1号墳の墳丘北側はすでに地山まで削平されており、墳丘東側上方には盗掘堀が認められ、石室の奥壁上段の一部が抜かれて人が出入りできるほどになっていた。石室内を覗いて、石室がほぼ完存していることを確認した。付近には奥壁の用材かと思われる花崗岩質の石材が散在してみとめられた。

また、1号墳の北西部裾より西方にかけて、巾約3m、高さ1m余の土壘が認められ、古墳以外の遺構の存する可能性も予測された。この土壘は調査対象範囲の西端で私道によって切断されているが、さらに西方に延びていることが確認された。

このような土壘は、2号墳凹地の北側にも認められ、丘陵東端の崖際まで続いている。

1号墳の南側裾付近、北東端崖際付近においては、径2～3m、高さ1m弱の円形状の土盛りが数カ所みとみられたが、凹地等の排土によるものかと考えられた。

1号墳西側土壘の中ほど北側に接して、径2m余の浅い楕円形凹地もみとめられた。

1号墳東側の平坦地、2号墳凹地東側平坦地に各々大石がみとめられ、また付近にも大小の石材が散在していたので、当初これらは破壊された石室の石材かと推測された。

盆休み後の8月17日より1号墳および2号墳の発掘を開始した。

1号墳は石室がほぼ完存しているので、最終的には盛土をすべて除去して石室を露呈させることを目的として発掘を進めることとした。

先ず、石室主軸方向に合わせて墳丘を東西南北に四分割し、巾50cmのセクションベルトを残しながら表土を取り除く作業にかかった。また同時に、1号墳の奥壁の盗掘破壊部分から石室内部に入り、中の堆積土を取り除く作業を先行させることとした。

玄室内の堆積土は1mほどと推定されたが、前室ないし羨道部は堆積土のために全く塞がれていた。石室内の排土作業は8月30日に終了し、副室と考えられる小規模の前室をもつ複室構造の横穴式石室であることを確認した。

なお、盗掘あるいは後世の内部利用のためか、床面と思われる部分は著しく攪乱され、礫・平石等を敷いたと推測される痕跡を僅かに残しているのみであった。床面および堆積土内においても遺物は殆んど発見されなかった。玄室中央部床面には地山を掘り込んだ円筒状の竪穴が発見され、後世明らかに石室部が利用されたことが判明した。

羨道および墓道部分の排土作業は、後述するように墳丘の表土の除去作業が遅れたために中止し、先に石室の平面図、側壁図を作成することとした。この割付け、図取りの作業は9月15日より始めて10月10日に終了した。

なお前室の排土作業を終えた時点で、羨門の閉塞石が大部分抜かれており、ここからも盗掘を受けていることが判明した。

1号墳墳丘の表土剥ぎは、多数の樹木および孟宋竹の伐根作業によって墳丘を崩さないよう配慮したので困難をきわめた。

墳丘の西側すなわち墓道の表土を剥がして行くにつれ、墳頂部よりやや下った位置で平石を3枚配した遺構らしきものが検出され、その下方には角礫や割石等が散在し、さらに墳丘裾部分には土留めのためと思われる礫や割石を重ね組み合わせた石列が現われた。この石列は土塁の東端より南北に配され、墳丘の南西部裾付近で角をなして、さらに東側に延びることが確認された。あたかも方墳を思わせるように配されているが、その位置が明らかに墓道上にあると推意されること、石組中から種子島銃の鉛玉が発見されたこと、また石組に石臼の破碎したものを使用していること等より、本古墳とは直接関係のない近世以降の遺構ではないかと想定された。

墳丘の北東部、北西部、南東部の中段にやや大き目の石が散在して現われ、一部は盛土の土留めの如く配されているが、やはり本古墳に属するものとしては疑問とされた。

また、北東部裾より奥壁側盗掘坑にかけて、大きな石を5個階段状に配したのも発見され

たが、これも後世のものと理解された。

このように1号墳の墳丘およびその裾付近に、本古墳とは直接関係のみとめられない後世の人為的な配石遺構等が存することが判明した。従って、墳丘自体も当初の姿ではなく、かなり変形していることが推測された。

一方、2号墳においては凹地の清掃を行ない、現状を写真撮影して凹地の中側より発掘に着手した。

排土作業が進行しても一向に石室の石材らしきものは現われず、石室はやはり全く破壊、抜去されたのであろうと想像されたところ、周囲地表面より約2mほど掘り下げた時点で、1号墳西側裾部の石列遺構と同じような小割石を重ね組合せた溝状の遺構が発見された。

この石組の溝状遺構を追求して凹地を南北に拡張した。溝はほぼ南北方向に3mほどにわたり、その北端で東側に曲って突き当たった。そのあたりには石組はない。南端をさらに掘り進むと、溝の両側に大きな石が現われたが、底面に敷石が発見されたので、石室前室の袖石に比定される可能性が強く考えられた。

8月27日～29日、溝の中央付近と、その南北両端の3カ所において土層断面を作成し、この遺構の全容を把握することを急いだ。

その結果、石組を配した溝状遺構は、後世古墳の石室を破壊して、その石材を使用し、石室の所在した位置に設けられたものと推定され、その小割石の用い方等より、1号墳西側裾部の石列との関連も強く考えられた。凹地自体は西側が崖状を呈し、東側に舌状に延び出し、地山を掘り込んでいる。

写真撮影のため凹地の周囲、ことに凹地東側平坦部の表土を除去したが、その南側に小割石を多数集め配したものがみとめられた。

こうした折り、遺跡地の地主である松尾勝則氏より、本遺跡地が『筑前国続風土記』に記載されている江戸時代「蜂の隈」の屋敷跡、庭園跡ではないかとの御教示を得た。

そこで、『筑前国続風土記』の記事の内容や1号墳上の列石遺構、2号墳の配石溝状遺構、土塁の存在等を鑑み、調査の対象を周囲一帯に拡張し、先ず近世以降と思われる配石遺構や土塁と関連する遺構群を検出、把握することを目的として、発掘調査の方針を転換した。従って、1号墳・2号墳の古墳自体の追求は後回しとすることとした。

また、調査対象地域から外されていた丘陵下東側平坦地に関しても、屋敷跡等の存する可能性があるとして、公団側と交渉、協議して調査を実施することとした。

古墳周囲の調査は、2号墳東側平坦地をA区、2号墳と1号墳との間の平坦地をB区、1号墳西側、土塁の南側をC区、同土塁の北側をD区と便宜的に区割りして、C区の表土剥ぎより開始した。

抜根しつつ表土を20cmほど剥ぎとると、一帯に黄褐色の山砂の層が現われたが、これは整

地層と解された。その面で、1号墳裾部の列石遺構と直交する東西方向の列石遺構が発見された。やはり土留めや境界を示す遺構と解され、先の列石遺構と関連するものと考えられた。

これらの列石と土塁とに囲まれた内側に、建物の遺構の存する可能性が充分考えられたので精査追求した。しかし確たる遺構は検出できず、陶磁器片が少数出土したにすぎなかった。

配石遺構の南側は、表土下黒色土層でやや浅く谷状に凹み、大小の礫、石が多数散在していたが、列石西端のすぐ南側の立石を2枚配した石組のみ遺構と考えられた。

次は土塁およびD区の表土剥ぎに移った。

C区と同様、15cmほどの表土を除去すると、整地層と考えられる黄褐色の山砂の層が現われた。

当初みとめられた浅い楕円状の落ち込みは、鍋底状を呈する土壇となり、その西側に土塁より一段下って短く北に延びる土塁状の高まりが現われた。この高まりの西側に、併行する巾の狭い小溝が伴った。

C区の東側では4～5個の平石等が浮いた状態でみとめられたにすぎず、遺構は検出されなかったが、土塁寄りに位置する所に、2枚の石を隣接して裾え、そのすぐ南側に接して1枚の立石のみ、みとめられる石組遺構が発見された。この石組下からは、後述するように挿鉢が発見された。

B区においても、表土を除去すると固い面をなす平坦地となっており、2号墳墳丘の上を整地したものと考えられる。北東部の土盛りの南側に、庭石様の長大な石が置かれているが、下に根固めかと思われる小礫群があり、石の表面に碑文が刻まれているのが発見された。

1・2号墳の周囲の第一段階としての遺構群の検出を終えたところで、10月1日航空写真撮影を行なった。

そして、列石等の図取り、また現状での地形測量を含めての遺構群の全体測量を行なって、A～D区をさらに掘り下げ、1号墳の墓道および羨道部の追求、1号墳墳丘のたち割り、2号墳の墳丘および石室掘り方、石室プランの追求を行なうこととした。 (松浦宥一郎)

第Ⅱ期

10月8日～16日 古墳群東側の崖下平坦地に工事用パイロット道路を通したいとの要望が公団側よりなされた。その場合、当地点に遺構の存在が予測されるため、巾2m、長さ65mのトレンチを南北方向に設けて、遺構の種別および密度を確認したのち、道路工事は掘削せずに盛り土する。古墳群調査終了後に、丘陵部にパイロット道路を切り替え、当初のパイロット道路部分の調査を行うことにした。

トレンチは南側より1区, 2区と区切り, 13区まで設けた。その結果, 6区・9区・11~12区で遺構の存在が確認された。6区の遺構中からは弥生中期末の土器片が集中して出土した。

10月15日~10月31日 1号墳に3本のトレンチを設定し, 石組み遺構や土塁と墳丘の関係及び墳丘盛り土と石室, 掘り方との関係を追求する。石組遺構や土塁の断面図を作成してのち, 墳丘を検出する。10月27日に望月・松村両君が帰京する。

11月1日~11月20日 1号墳の墓道および墳丘を検出し, 墳丘の実測を行う。また, 閉塞石およびその下の土層断面の実測を行う。1号墳北側の土塁は土層断面図を作成したのち取り除き, 地形実測を行う。10月16日には1号墳関係実測をすべて終了し, 墳丘の全景写真を撮影する。

11月21日~11月29日 3号墳の発掘調査を実施する。北西側崖断面に露出していた石材の南北両側にトレンチを設け, 墳丘面の探査から調査を開始する。22日には石室プランをほぼ検出する。玄室内の土砂を除去中, 奥壁側には角礫および小河原石を積み上げていることが判明した。その上には人骨が集積されていた。礫中からは須恵器片および鉄片が出土した。28日には玄室および羨道の床面を掘り終えた。玄室北側袖部より馬具類が, 羨道部から馬具類, 大刀, 銅腕, 須恵器杯が出土した。大刀は南壁下に石材と並行して置かれ, その上に銅腕が伏せ置かれていた。29日には遺物の出土状況写真撮影および実測を行なった。この間, 27日には公団側と協議がもたれた。議題は, 1. 公団の来年度工事計画について。2. 現在調査中の八隈・剣塚両遺跡, 今後調査予定の山ノ口・畑添I・II遺跡の調査と工事工程の調整について。3. 剣塚遺跡保存問題についての3点であった。

11月30日~12月22日 丘陵中央部の小屋の北側の調査に入る。まず全体を6区画に区分し, 南側より調査を進めることとする。伐採作業の後を追って地形測量をする一方, 同じ進行で表土剥ぎ作業を行う。12月7日には4号墳を, 15日には5号墳を検出する。いずれも遺物の出土が多く, 写真撮影および出土状況実測図を作成する。墳丘はほとんど残存していない。この間に3号墳の石室実測図を作成する。14日には松村君が, 17日には一時帰京していた松浦氏・常木君および桐朋女子短期大学学生7名が, 19日には吉村君が調査に参加する。12月1日, 県道切り替え工事中の道場山から多量の甕棺が出土する。ただちに公団工事長および前田建設と話し合い, 工事は一時中止し, 1月末より調査を開始することとした。崖断面に露出した8基については, ただちに調査することとし, 人骨の入った甕棺については, 日没後までかかって九大医学部の橋口助手に調査願った。3日には8基すべての調査を終え, 各甕棺実測図および配置図を作成した。

12月23日~12月25日 浮羽工業高校郷土部の上野美之教諭・佐藤義幸教諭および生徒10名を迎え, 2号墳の検出を計る。配石溝状遺構を取り除き, 古墳掘り方を調査する。石材は羨道部のみ残っており, 東西両壁間の床面上には須恵器杯多くが配置されていた。奥壁側は2基の土

墳によって切られていた。25日をもって本年の調査を打ち切った。

1月7日～1月17日 2号墳の調査を再開する。床面を清掃し、写真撮影・実測を行うと共に、墳丘を切る第1～第3号の土壙墓を調査する。内部から検出された人骨は保存状態が良好であった。人骨は3体とも仰臥し、四肢は極端に折り曲げられていた。16日には九大医学部の橋口助手の助力により、人骨を取り上げた。

5号墳の調査はこの間も続行し、17日には遺物出土状況の図面を完成した。

1月18日～2月9日 4号墳の北側、約750㎡の表土剥ぎを行なった。この間、樹木の根株のみをブルドーザーを利用して剥ぎ取った。2基の古墳主体部が発見され、6・7号墳とした。

2月11日～3月3日 雪の降る日が多かったが、その中で調査を継続した。6・7号墳の石室や墳丘の検出、床面遺物の実測、写真撮影を行なった。7号墳北側で8号墳を発見する。墓道の黒褐色落ち込み土中から、弥生式土器片と共に、内行花文鏡が出土した。2月21日、調査と併行して進めていた縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳの編集を完成し、印刷に回した。3月3日に9号墳を検出し、この日をもって丘陵上の発掘作業をすべて終了する。

3月4日～3月19日 進入道路の北側で遺構の探査を実施した。小ピットや溝があり、中から弥生式土器や須恵器小片が混在して出土したのみであった。3月8日には大島・永見・常木の3君が、10日には松浦氏が調査に参加し、各古墳の実測を担当してもらった。

3月19日には発掘作業がすべて終了し、作業員と打上げをする。古墳の実測作業は継続する。3月7日、公団担当者と前田・五洋の両建設会社と共に今後の調査日程について協議する。道場山 甕棺群の調査開始および八限、剣塚両遺跡の調査終了についてであり、道場山遺跡は3月11日調査開始、剣塚遺跡は4月14日調査終了、八限遺跡は4月20日より進入道路を切り替え、その下の遺構の調査を開始することとした。

3月20日～4月19日 各古墳石室の実測を行い、4月19日に、すべて終了した。(酒井仁夫)

第Ⅲ期

4月22日 調査を開始する。八限古墳群調査期間に進入路に設定した4本のトレンチの調査によって、進入路全面にわたって遺構の存在が予想されていたので、全面発掘の必要が感じられていた。

まず、工事中進入路中央部の盛土除去作業を開始する。盛土は厚い碎石層からなっており、進入路全面にわたって固く締った盛土を少人数の作業員で除去することは困難と思われた。

5月1日 除去作業と並行して、除去作業の済んだ中央部において、3m方眼のグリッドを設定し、遺構の検出にとりかかる。

5月2日～5月12日 第1～4号住居跡、多数のピットが検出される。第3号住居跡から遺

構掘りを始める。進入路仮設の際、ブルドーザーにより壁の大部分を削平されているにもかかわらず、床面から多数の弥生式土器が検出される。

5月13日～5月31日 本線工事に必要な側道仮設工事が進入路南端に廻ってきたため、中央部での盛土除去、遺構検出作業を中断して、南端から盛土の除去作業を開始する。進入路南部は盛土が比較的薄いため、作業はスムーズに進み、盛土下より、建物遺構・溝状遺構・石組遺構・ピット群などが続々と検出される。

6月1日～6月10日 天候が不順のため、作業休みの日が続く。

6月11日～6月22日 進はハサコの宮遺跡の調査を終え、調査に加わる。進入路南部で遺構掘りにとりかかる。建物遺構周辺では陶器細片の出土が目立つ。中央部では第5～11・13・14号住居跡、円形竪穴、ピット群等が検出される。

6月23日～6月29日 進入路南端より実測を開始する。栗原・中間両技師、中牟田・森氏の応援を受ける。中央部では遺構掘りを開始する。第7号住居跡では弥生式土器の出土が目立つ。第8号住居跡を床面まで掘り下げたところ、炭化材、焼土等が出土する。火災に合ったものと推定される。第9号住居跡はベット状遺構をもつ長方形住居跡であることが判明する。

第9号住居跡東壁側中央部では焼土のかたまりが検出され、カマド状遺構の崩れたものと推定された。床面出土の土器は古式土師器の範に属するものである。第6号住居跡では北壁中央部にカマドを設けており、カマド内から甕形土器が検出される。第6号住居跡は第5・9号住居跡を切っており、床面上から7世紀後半の須恵器1個が出土する。第9号住居跡北側では数軒の住居跡が切り合っていた。これらの遺構は調査区外にのびているため、切り合い関係を明確にすることができなかった。この間に工事用進入路の盛土除去作業は終了する。

7月1日～7月23日 進入路南部の遺構実測が終了し、中央部の遺構実測に移る。円形竪穴の遺構掘りを開始する。内から多量の陶器、火舎類が出土する。一方、進入路北部の表土剥ぎにとりかかる。表土下より、丘陵裾に沿って南北に走る溝状遺構、住居跡2軒、大溝、ピット群などが検出され、順次北端から遺構掘りにとりかかる。溝状遺構内より弥生後期の器台形土器が出土する。第12号住居跡の壁はすでに耕作により削平されていたが、周溝が回り、鍵形の周溝にかこまれた床面と考えられる平坦部からは数点の弥生式土器が出土する。第15号住居跡は調査区域外にその遺構の大半があるため調査を断念した。

7月24日～7月31日 大溝を掘り下げる。大溝は鍵形にまがり、第12号住居跡を切って調査区域外の東へのびている。進入路北部の遺構実測と並行して、進入路南部より遺構の写真撮影を開始する。

8月1日～8月3日 すべての遺構実測、写真撮影を終了する。3日に発掘器材等のあとかたづけを行なう。調査終了10分前、第1地点北端から40m北方の民家の樹木移植作業現場にて、甕棺2基が発見された。

第Ⅳ期

8月5日第2地点の調査を開始する。工事が極めて切迫していたため、ブルドーザーを利用して整地層を除去し、遺構の検出をはかる。その結果、甕棺発見地を中心として、7世紀後半の住居跡15軒を掘り上げ、9月3日写真撮影等すべての作業を終了する。(松村一良)

遺跡の調査関係者はつぎのとおりである。なお、遺物整理には文化課嘱託の岩瀬正信氏の多大な助言をいただき、遺物の実測にあたっては山本タカ子、宮原真祐美、重松絢子の3氏の助力を得た。

総 括

教 育 長	森 田 実	教 育 次 長	西 村 太 郎
文 化 課 長	森 英 俊	文化課課長補佐	菅 隆
文化課課長補佐	今 井 岩 雄	文化課課長補佐	藤 井 功
調 査 係 長	松 岡 史	技 術 主 査	鶴 久 嗣 郎

庶 務 会 計

文化課庶務係長	前 田 栄 一	文化課庶務係主事	諸 岡 満
文化課庶務係主事	瀧 竜 二	文化課庶務係主事	山 本 文 和
嘱 託	因 将 太		

発 掘 調 査 員

東京教育大学 助 教 授	増 田 精 一	東京教育大学 博 士 課 程	松 浦 宥一郎
文化課技師	栗 原 和 彦	文化課技師	川 述 昭 人
文化課技師	酒 井 仁 夫	文化課技師	中 間 研 志

発掘調査補助員

次郎丸 達 朗	中牟田 賢 治	岩崎(佐土原)逸男	進 博 次
内 田 始	副 島 源 司	松 村 一 良	
東京教育大学学生 浮羽工業高校郷土部生徒	福岡教育大学学生 桐朋女子短期大学生	明治大学学生	

日本道路公団福岡建設局

局 長	吉 田 喜 一	次 長	塩 坂 富 司
総 務 部 長	中 川 了 一	技 術 一 課 長	森 原 稠
総 務 課 長	遠 藤 明 美	総 務 課 長 代 理	石 川 雄 三

同福岡工事事務所

所 長	山 本 隆 義	筑紫野工事長	吉 井 宏 幸
庶 務 課 長	西 田 建 治	工 務 課 長	八 尋 勇 次
所 員	小 村 浩		

Ⅱ 位置と環境 (Fig. 1~3)

八隈遺跡は筑紫野市大字武蔵字八隈に所在する。標高 275m の天拝山東側裾部に位置し、筑紫野の平野に接している。

筑紫野の平野は、福岡平野と宝満川流域平野の接点にあり、御笠川と宝満川の分水嶺である。平野の中央には三郡山系の高雄山が南側に凸出している。高雄山の西側および同山を開析した流路は御笠川となって博多湾へ流入する。

東側の流路は西側の宮地岳との間を南向して有明海へと注いでいる。また、天拝山より派出した立明寺の丘陵は高雄山系丘陵に南面している。天拝山と立明寺丘陵の間の谷水は2流ある。一支は天拝山麓にそって流れる鷺田川であり、北行して御笠川に合流する。一支は立明寺丘陵を迂回して宝満川に合流する。つまり、この地域は筑前と筑後の国境に位置し、宝満川の基点である米山峠を介して、遠賀川の潤す筑豊の平野に接している。それだけに、大陸から北九州沿岸で需要した文化を後方へ伝派する主要なセンターとなっている。また、軍事的にみても要衝の地であるため、大宰府政庁ができ、大野城、水城が築かれたわけである。そのころ米山峠は、豊国と継ぐ、重要な交通路となっていた。

さて、この地域の遺跡をみると、先土器時代から歴史時代にかけての各種の生活の跡が残っている。まずプレ縄文時代の遺跡であるが、山口川と宝満川の合流点周辺の台地より、数々所発見されている。高雄山の麓では、野黒坂遺跡、峠山遺跡においてナイフ形石器・台形石器・マイクロコア等が発見されており、立明寺丘陵では、常松遺跡・永岡遺跡・萩原遺跡において同種の石器が発見されている。大宰府政庁の整地層中からもポイントやスクレーパーが発見されている。縄文時代の遺跡は現在のところ、発見例が少なく、押形文土器と同時期の石器が採集された萩原遺跡、宮地岳山麓の阿志岐A古墳群墳丘下で検出された晩期住居跡に代表される。

天拝山東麓で確実な縄文時代遺構の発見例はないが、塔ノ原遺跡においては後期の遺物が、八隈遺跡においては、早期の遺物が若干採集されている。

弥生時代になると遺跡に飛躍的に増加する。現在のところ、前期初頭の遺跡は発見されておらず、板付Ⅱ式以降である。前期の住居跡や貯蔵穴は野黒坂遺跡・剣塚遺跡で、甕棺は、剣塚遺跡・塔ノ原遺跡・道場山B地点、原口遺跡において発見されている。甕棺は、いずれも天拝山麓の発見例である。原口遺跡では、この時期の溝がみつまっている。

中期に至ると天拝山麓はもとより、高雄山・立明寺の丘陵で遺跡が増大する。常松・永岡両遺跡では、舌状台地を横断する大規模なV字溝が各所でみつまっている。宝満川に面した高雄山麓の東側丘陵では一帯に、この時期の遺跡がみられる。吉ヶ浦の甕棺群、野黒坂の集落跡は、その代表であろう。天拝山麓の道場山A地点からは中期後半から後期にかけての甕棺が

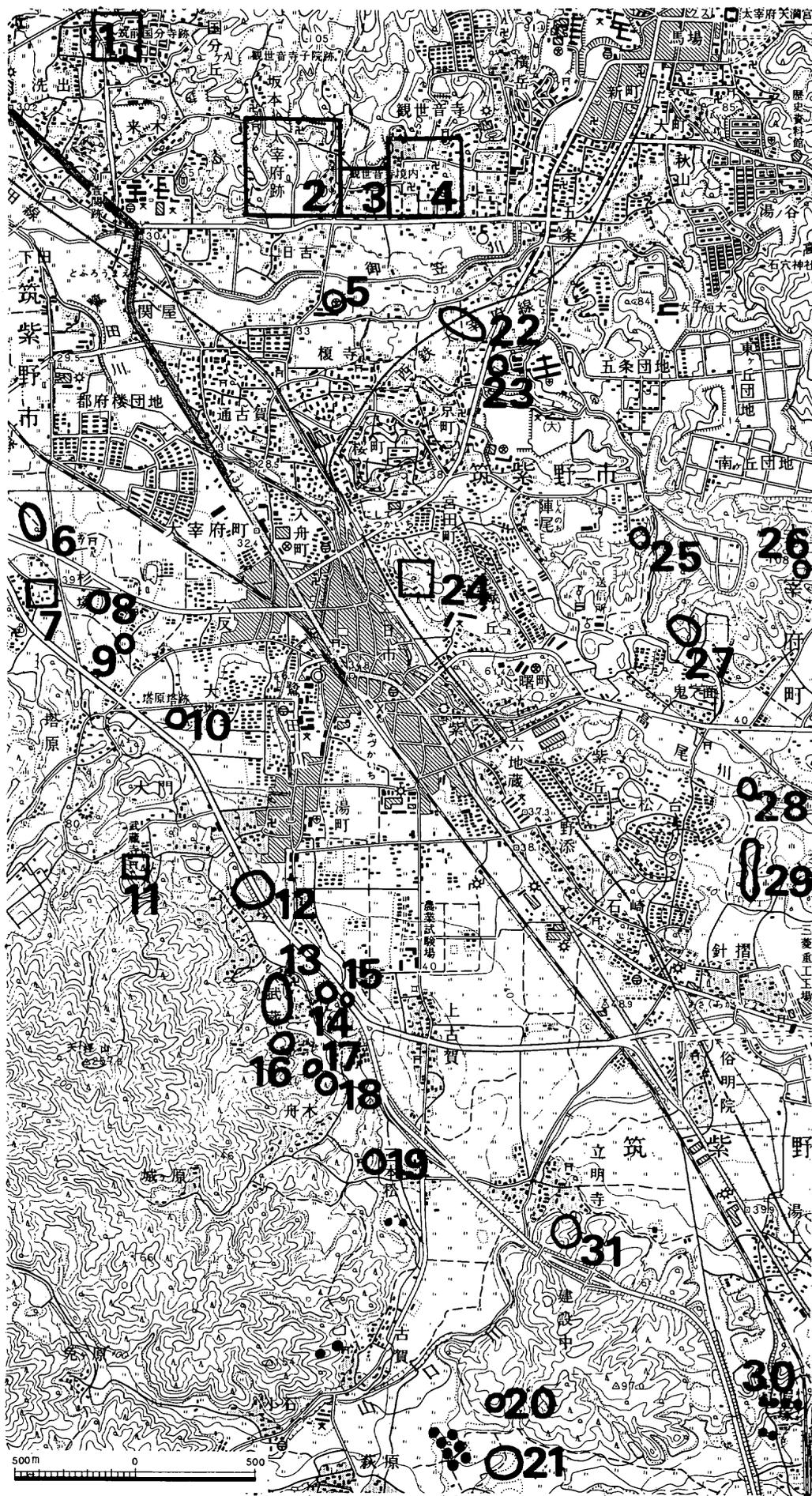
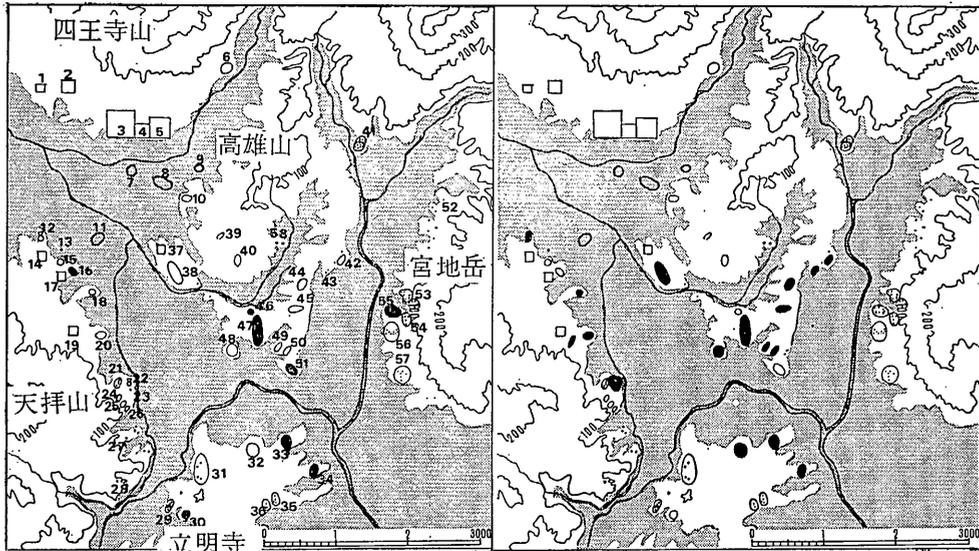


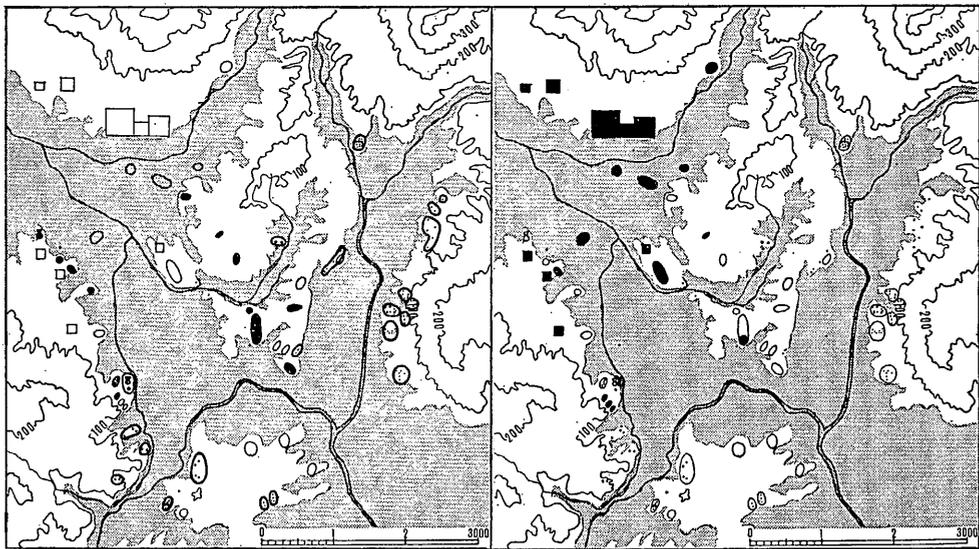
Fig. 1 筑紫野市周辺遺跡地図 (1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 筑前国分寺 | 2. 大宰府政庁跡 | 3. 学校院跡 | 3. 観世音寺 | 5. 鼓石遺跡 |
| 6. 剣塚遺跡 | 7. 杉塚廃寺 | 8. 唐人塚遺跡 | 9. 塔ノ原遺跡 | 10. 桶田山遺跡 |
| 11. 武蔵寺 | 12. 道場山遺跡 | 13. 八隈遺跡 | 14. 原口古墳 | 15. サギタ山遺跡 |
| 16. 畑添2地点 | 17. 畑添1地点 | 18. 山ノ口遺跡 | 19. 扇祇古墳群 | 20. 萩原古墳 |
| 21. 萩原遺跡 | 22. 五條遺跡 | 23. 君ヶ畑遺跡 | 24. 般若寺跡 | 25. 池田遺跡 |
| 26. 菖蒲浦古墳群 | 27. 結ヶ浦遺跡 | 28. 大曲り遺跡 | 29. 野黒坂遺跡 | 30. 假塚古墳群 |
| 31. 立明寺古墳群 | | | | |



1. プレ縄文・縄文時代の遺跡(黒塗り分, 以下同様)

2. 弥生時代の遺跡



3. 古墳時代の遺跡

4. 古代・中世の遺跡

1. 筑前国分尼寺 2. 筑前国分寺 3. 大宰府政庁跡 4. 学校院跡 5. 観世音寺
6. 浦城跡 7. 鼓石遺跡 8. 五條遺跡 9. 大宰府史跡第33次調査地点 10. 君ヶ畑遺跡
11. 市ノ上遺跡 12. 剣塚遺跡 13. 埴安神社古墳 14. 杉塚廃寺 15. 唐人塚遺跡
16. 塔ノ原遺跡 17. 塔ノ原廃寺 18. 桶田山遺跡 19. 武蔵寺 20. 道場山遺跡
21. 八隈遺跡 22. 原口古墳群 23. 鷺田山遺跡 24. 畑添第2地点 25. 畑添第1地点
26. 山ノ口遺跡 27. 扇祇古墳群 28. 大振山古墳群 29. 萩原古墳群 30. 萩原遺跡
31. 立明寺上の山古墳群 32. 竹藪遺跡 33. 永岡遺跡 34. 常松遺跡 35. 假塚古墳群
36. 大牟田古墳群 37. 般若寺跡 38. 修理田遺跡 39. 池田遺跡 40. 結ヶ浦遺跡
41. 塚口古墳群 42. 六本松遺跡 43. 柚ノ木遺跡 44. 吉ガ浦遺跡 45. 江牟田遺跡
46. 大曲り遺跡 47. 野黒坂遺跡 48. カケ塚遺跡 49. イカリノ上遺跡 50. 上ノ浦遺跡
51. 峠山遺跡 52. 田代古墳群 53. 阿志岐B古墳群 54. 阿志岐D古墳群 55. 阿志岐A古墳群
56. 阿志岐C古墳群 57. 天山古墳群 58. 宮浦浦古墳群

Fig. 2 筑紫野市周辺の時代別遺跡分布図(縮尺 1/100,000)

112基も検出されており、鉄矛・鉄戈・イモガイ製腕輪が副葬されていた。

弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての住居跡は、鷺田山遺跡、八隈遺跡、野黒坂遺跡、江牟田遺跡等でみつかっている。同時期の墓地は、前代とは極端な変化をとげている。一般に占地を更え、石棺や石蓋土壙に埋葬されることはもとより、周溝や、墳丘をもったいわゆる古墳の登場である。密集する石棺や石蓋土壙群は唐人塚遺跡・桶田山遺跡・江牟田遺跡で発見されている。周溝墓としては峠山遺跡と江牟田遺跡がある。古式古墳としては剣塚の前方後方墳および方墳、菖蒲浦1号墳、そして原口古墳がある。このうち剣塚古墳は唐人塚遺跡に臨接しており、密接な関連をもっていたと考えられる。菖蒲浦1号墳のまわりには5基の棺が2基の割竹型木棺を取り巻くように配置されていた。原口古墳群は4基からなり、その1号墳が全長70mの前方後円墳で、三角縁神獸鏡を出土している。2号墳の主体部は小竪穴式石室であり、立明寺1号古墳と類似している。これら古式古墳は全て沖積平野に面しており、地形から考えると、般若寺跡周辺にも存したかと推定される (Fig. 2)。

後期古墳群は、この地区でも多くあり、これまで遺跡の希薄であった宮地岳の山麓に数100基の群集墳がみられる。宝満山の一支が南に延びた先端には塚口古墳群があり、宝満川の流域では最も北に位置している。鷺田川と山口川を挟んだ両岸には、八隈古墳群・原口古墳群・扇祇古墳群・萩原古墳群・立明寺上の山古墳群等がある。四王寺山の南麓には、坂本口の一基を除いて、まったく存しない。

奈良時代になると、大宰府政庁や官寺をはじめ、杉塚廃寺・塔ノ原廃寺・武蔵寺・般若寺が建立され、それまでの地域の様相を一変させる。特に条坊制の施行によって、それまでの沖積地が大きく整備されたと考えられる。平安時代後期から鎌倉時代にかけての生活跡は、それまで遺跡の希薄であった御笠川流域低地に広まっていた。

以上、概観した歴史的風土の中で、八隈遺跡は、どのような位置を占めるであろうか。弥生時代中期から7世紀前半までの住居跡と9基の古墳を含む当遺跡は、臨接する原口古墳群と、その周辺および鷺田山遺跡と一連のものと考えられる。原口古墳群は4基の古墳よりなる。第1、第2号墳は前述のとおりであり、第3号墳は竪穴系横口式石室を主体とし、鹿角装鉄剣、鉄鎌を副葬していた。周溝からは須恵器の甕・甕・土師器碗を出土した。第4号墳は主体部が不明である。古墳の周囲から土壙墓7基と弥生時代前期の甕棺が出土している。鷺田山遺跡は竪穴系横口式石室を主体とする円墳1基の他、弥生時代前期の貯蔵穴や溝、後期の住居跡が検出されている。つまり、この地域は弥生時代前期以来の集落遺跡であり、その一部は墓地となっていた。それが、古墳時代になって、鷺田川、山口川の潤する沖積地および高雄や立明寺の丘陵を睥睨する丘陵の東端に原口1号墳が築かれるが、この地が原口1号墳被葬者一族の累代の墓所であり、八隈古墳群も、その延長線上にあるとは考えられないだろうか。(酒井仁夫)

註) 原口遺跡及び鷺田山遺跡については赤崎敏夫氏の教示による。

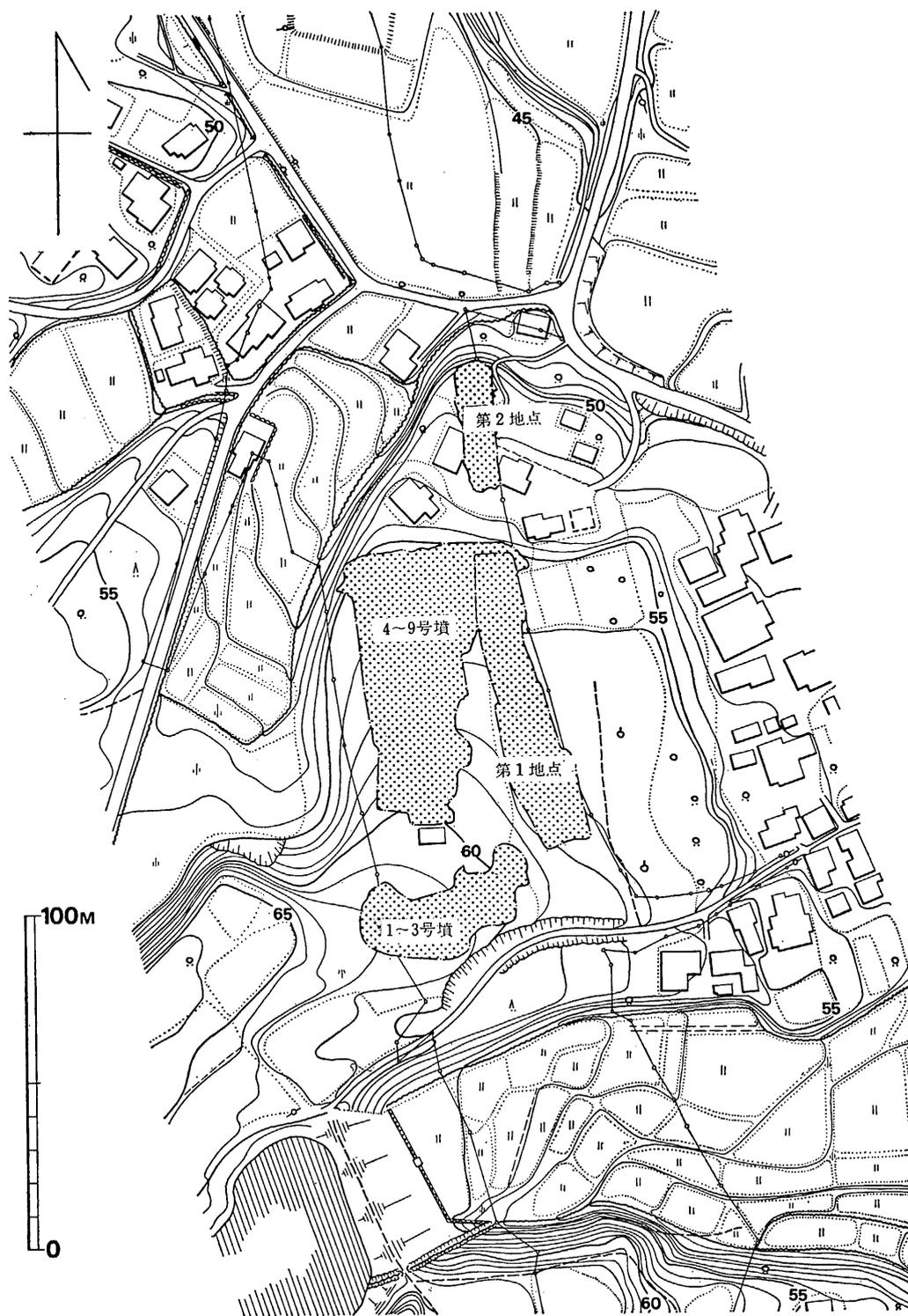


Fig. 3 八限遺跡周辺地形図 (縮尺 1/2,000)

Ⅲ 古墳群の調査 (PL 1・2)

1 第 1 号 墳

墳丘 (Fig. 4, PL. 3・4)

墳丘の外形は近世の庭園類似遺構の造築に際して、一辺略14mの方形に変形され、東西両側には、土塁が取り付けられていた。また墳丘上には各種石組が構築されていた。これら近世遺構を取り除いたところ、径約15mの円墳となった。

4.5×9mの墓壙と石材の間には赤色粘質土と白色砂質土(バイラン土)を交互に版築して、掘り方を埋め込んでいる。その上には、砂質土と粘質土を種々の割合で混ぜ合わせた土砂を盛り上げている。盛土の高さは約2.5mを計るが、奥壁側では旧地表および地山を1.1m削り出している。なお、床面から墳丘上面までは4.6mある。丘陵尾根に向かう奥壁側には巾0.5mの周溝がある。

石室 (Fig. ①, PL. 5・6)

内部主体は、主軸をN-60°-Eにとり、南西方向に開口する全長約7.8mの複室、両袖式の横穴式石室である。

玄室は長さ3.12m、奥壁側で巾2.2m、袖の部分で2.5mをはかる。奥壁には床面よりの高さ1.25mの大石一板を立てて腰石としている。盗掘によって上部が破壊されているが、本来は4~5個の石を横積みして築かれていたと考えられる。側壁は両側とも2個の石を横積みして腰石としており、その長さ3.7mである。ただし、奥壁の北西側が南西側に張り出し、また袖石が同一方向にずれるため、玄室の平面形は菱形に近い恰好となっている。南東側の袖石は一辺は一辺1.6mの方柱形を呈しているが、奥壁側に向かって張り出しており、その端部に厚さ40cmの仕切り石を置いている。腰石の上には長さ1.4~1mの石を横にして積み上げ、その間を小口30~50cm大の石で埋めている。玄門袖石の上には長さ1.2~1.3mの石を横積みして、内側にせり出させている。その上には長さ1.8mという長大な石をわたしかけ、さらにその上に2個の石を横積みして、天井石に至っている。その構築法は、奥壁と同様である。天井は3個の巨石を石室主軸と直角方向に軸を向けて築かれている。床面より天井までの高さは2.8mである。床面には20cm大の石が散乱しており、本来は敷石があったものと考えられる。なお、床面中央には口径1.6×1.2mの穴が掘り込まれていた。盗掘に際して掘られたものであろう。

前室は、玄室仕切り石より、中軸線上で2.8m続き、玄門袖石から、一個の横積石を挟んで、袖石となっている。この袖石間には長さ70cmと20cmの2個の仕切り石が置かれている。こ

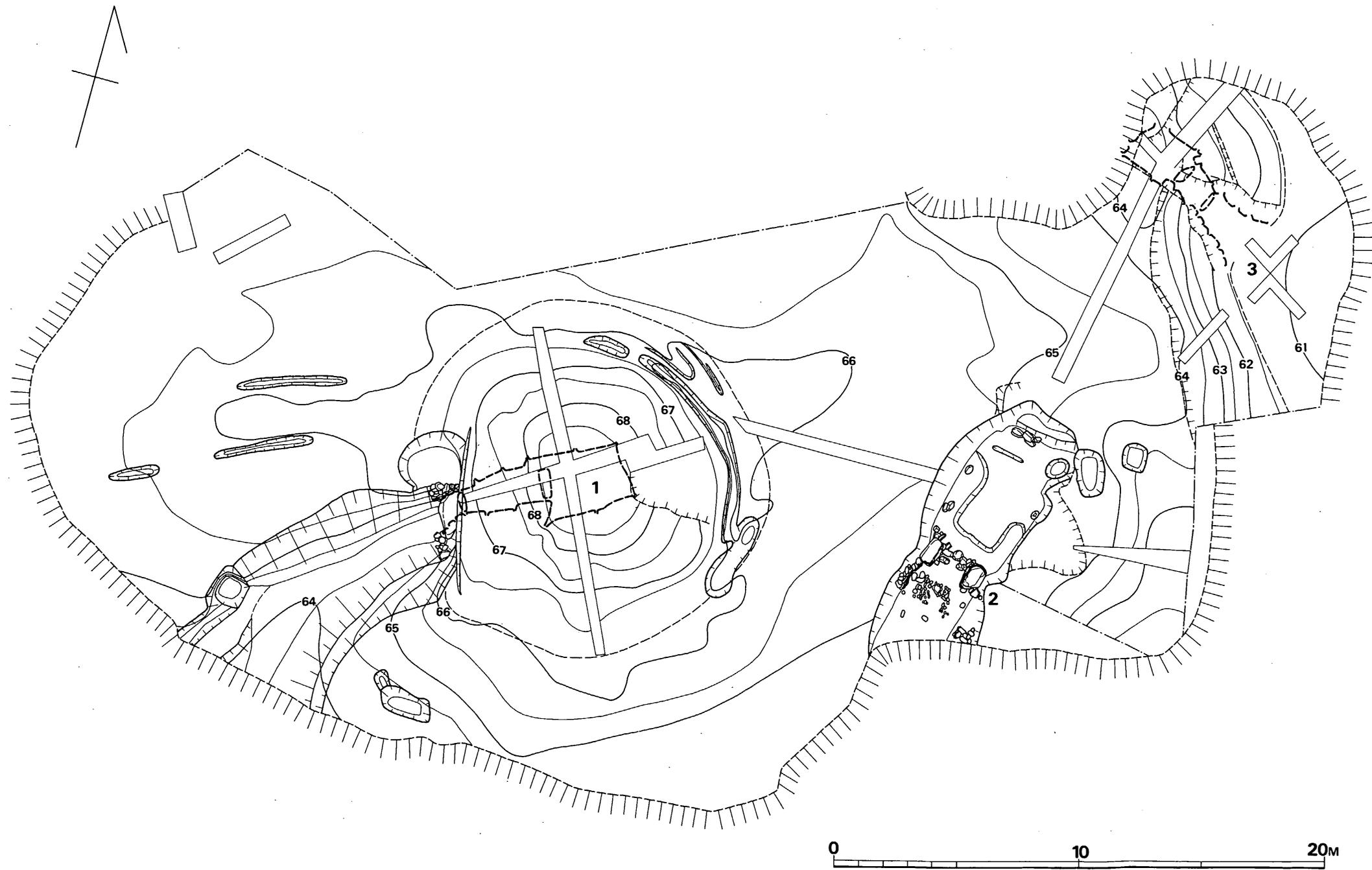


Fig. 4 第1号～3号墳丘測量図（縮尺1/200）

の袖石の上には玄門袖石の上部でみられたと同様に長さ1.2mの石を横積みしている。この石および腰石の上には40~50cm大の石を持ち送りしながら築き上げ、1個の石で天井となしている。前室部にも石が散乱しており、敷石が施されていたと考えられる。

羨道は30~40cm大の石材を積み上げ、1個の天井石を置いている。この部分の石は墓道側壁に直接持たせかけている。床面は、仕切り石側に向かって傾斜している。

墓道は約7mまっすぐ伸び、さらに南側へ約3mまがりながら伸びたところで、農道法面に切られている。墓道の上端巾は羨道近くで3.1mだったものが、農道法面側では7mと広がっている。床面は直線部分ではほぼ平坦であり、南屈してからは、地形にそって下降する。

閉塞は、羨道前面で行われている。まず仕切り石の外側と接して、長さ70cm、高さ60cmの石を立て、さらにその外側を砂質土と赤色粘質土を用いて版築している。立石の $\frac{2}{3}$ 以上埋め込んだ上に、石材を積み上げて閉塞している。

遺物 (Fig. 5~10, PL. 7~11)

石室内の破壊は著しく、遺物も床面に接して現位置を保っていると考えられる例は皆無であった。遺物はすべて玄室および羨道部の攪乱土、墓道の埋土中より出土した。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

- | | | | |
|-----|-----|--------|--------|
| (1) | 装身具 | 銅釧 | 1個 |
| (2) | 武器 | 鉄鏃 | 1本以上 |
| | | 鏑 | 1個 |
| (3) | 馬具 | 轡 | 1式 |
| | | 銅鈴 | 1個 |
| | | 帯金具 | 3個 |
| | | 飾り金具 | 1個 |
| (4) | 工具 | 刀子 | 3本 |
| (5) | 土器 | 須恵器 | 62個体以上 |
| | | 杯(蓋・身) | 47個体以上 |
| | | 高杯 | 3個体以上 |
| | | 甗 | 4個体 |
| | | 壺 | 3個体 |
| | | 横瓶 | 3個体 |
| | | 土師器 | 2個体以上 |
| | | 高杯 | 1個体 |
| | | 台付壺 | 1個体 |

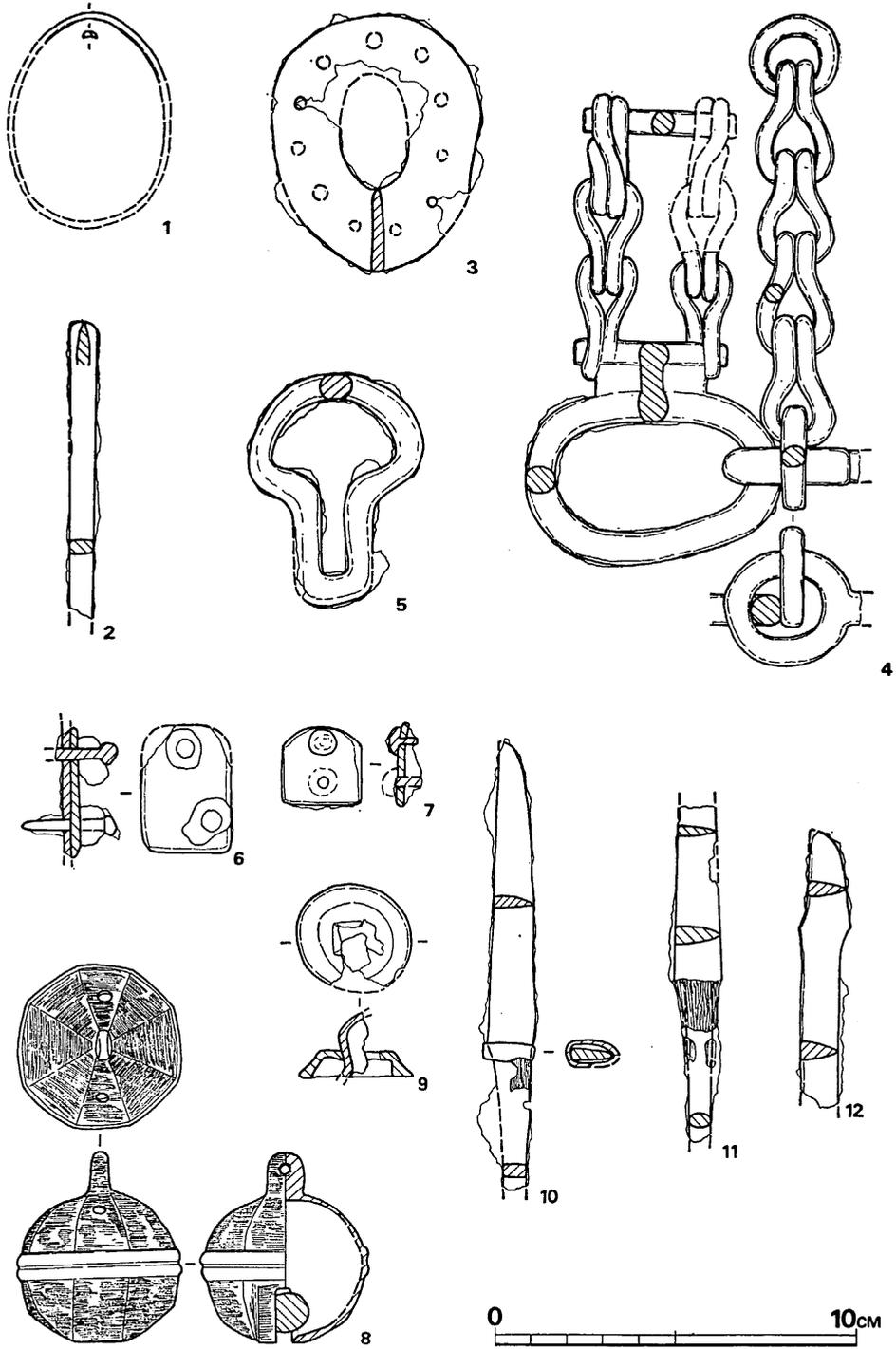


Fig. 5 第1号墳出土遺物実測図（縮尺 1/2）

銅釧 (Fig. 5-1) 金銅製品である。断面カマボコ形をなし、巾4mm、厚さ1.5mmをはかる復元径は長軸約6cm、短軸約4.5cmになると推定される。腐蝕著しく、細部は不明である。

鉄鍔 (Fig. 5-2) 関無平造鑿筋式の鉄鍔で、最大巾が刃部にあり、8mmはかる。

鏢 (Fig. 5-3, PL. 7) 3~4mmの窓を11個等間隔に配している。長径71mm、短径57mm、刀身を通す部分は一部破損しているが、長径32mm、短径19mmになろう。厚さは外縁に向かうほど厚くなり、中央部で1.5mm、外縁部で3.5mmをはかる。端部はやや丸味を帯びる。

轡 (Fig. 5-4, PL. 7) は立聞をもつ環状鏡板に銜と兵庫鎖を取り付けた轡である。立聞の両端に連結された兵庫鎖は片側3連ずつ延び、一本の鉄棒によって再び結合されている。そこから面繫へ連続する革帯が延びると考えられる。銜端の環状部には小環が取り付け、そこから4連の兵庫鎖が連結されている。その端に引手金具が取り付けられたと考えられる。鏡板の長径は7cm、短径は5.2cmである。面繫へ連続する兵庫鎖は引手に連なるそれに比べて、やや細作りである。銜は2連分残存しており、一本の長さは8.5cmである。5は引手か面繫に関係する金具であろう。

帯金具 (Fig. 5-6・7) いずれも金銅製品である。一端は丸味を帯びる。6は3本の鉋で留められている。鉋頭の径は10mm、高さは7mmと高い。7は2本の鉋で留められ、鉋頭の径は7mm、高さは3mmである。

銅鈴 (Fig. 5-8, PL. 7) 平面八稜形をなし、開口部方向の面は他のそれに比べて巾広い。その直角方向の面の肩部に各々径約4mmの孔をもつ。側面はほぼ球形をなし、中央に2本の凸帯をもつ。その中間が継ぎ目であろう。開口部の両側には巾4mmの凸帯が平行している。中には径約1cmの円礫を入れている。径4.2cm、高さ4cm、立聞の高さ1.1cmである。

飾り金具 (Fig. 5-9) 金銅製品で径3.1cmの台座の中央には一辺9mmの孔があき、中に巾9mmの板状金をU字形に曲げて通している。

刀子 (Fig. 5-10・11・12, PL. 7) 10は先端部をわずに欠損する。関無しであり、身長85mm、最大巾13mm、身厚3mm、茎は長さ38mm以上、最大巾11mm、厚さ3.5mmである。茎には木質部が残存して附着している。11は刃部先端を欠損する。両関であり、身長50mm以上、最大巾13mm、身厚5mm、茎は長さ44mm、最大巾7mm、厚さ4mmで、断面形は楕円形を呈する。12は刃部中央に関をもつ特殊な刀子である。峰部中間にも段を生じている。身長77mm以上、最大14mm、厚さ4.5mmである。

須恵器 (Fig. 6-9, PL. 8~11)

蓋 (Fig. 6・7, PL. 8, 9) 各古墳出土蓋をI~V類に区分した。

- I類 口径13.2cm~13.5cm。器高3.3cm~3.4cm。身受けのかえりなし。
- II類 口径11.5cm~13cm。器高3.4cm~4.3cm。身受けのかえりなし。
- III類 口径9.2cm~11.4cm。器高3.1cm~4.3cm。身受けのかえりなし。
- IV類 口径9.5cm~11.0cm。器高2.0cm~2.7cm。身受けのかえりあり。

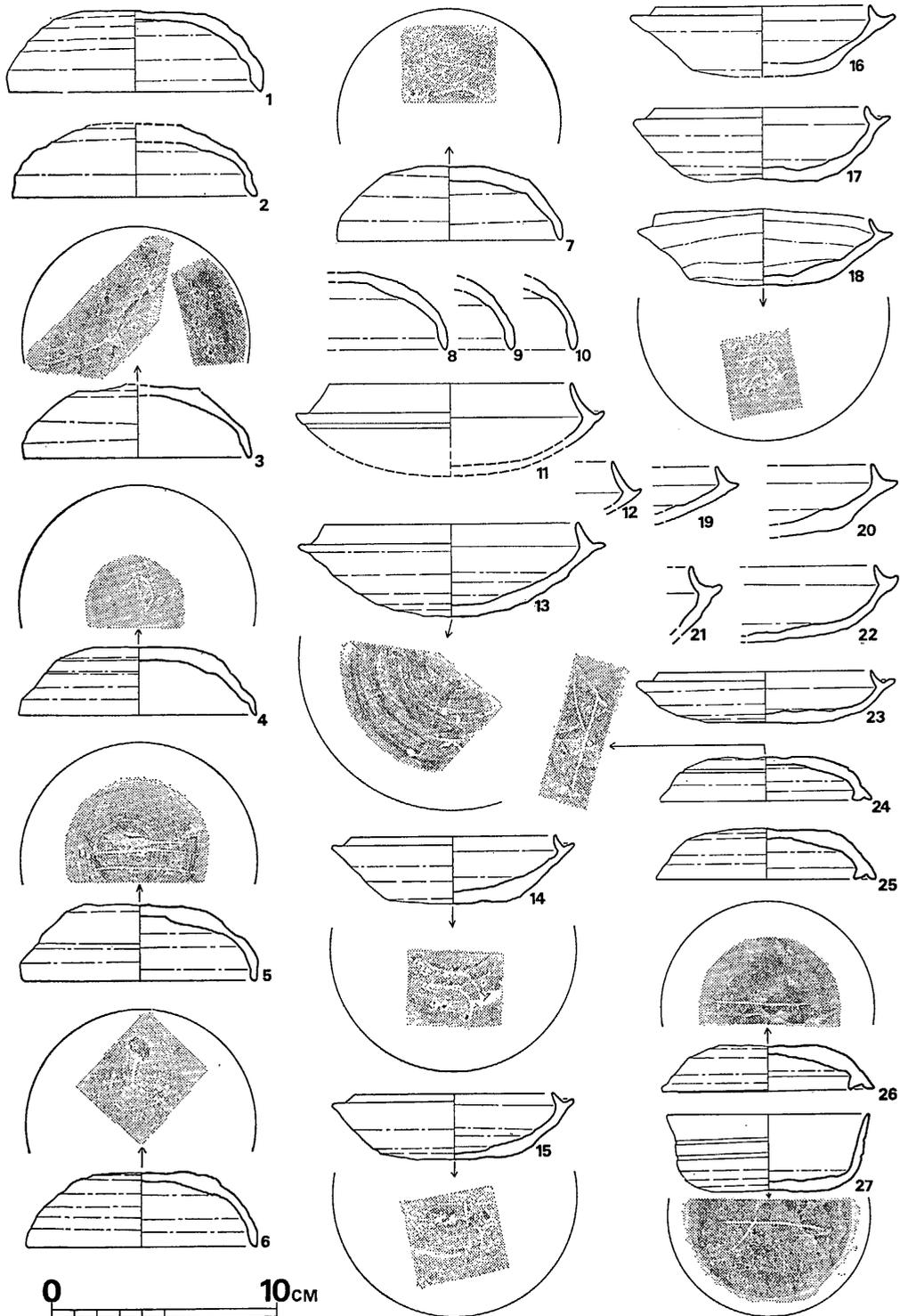


Fig. 6 第1号墳出土須恵器実測図① (縮尺1/3)

V類 口径12.3cm~18.3cm。かえりの高さ0.2cm~1.0cm。宝珠形つまみのつくり例もある。

このうち当古墳出土のものはⅢ類以降である。

Ⅲ類 (Fig. 6-1~10) は、口縁部が外側へ張るもの(2~4)と、垂直に立つもの(5~10)、内側に入るもの(1)とがある。端部は丸味をもつものがほとんどであるが、とがるもの(4)もある。天井は平坦である。調整法は天井部篋削りを施しており、5は時計廻りの篋削りの走向が観察される。内面の頂部周辺はナデを施し、残りはすべて横ナデが施されている。色調は灰色ないし灰黒色を呈している。胎土には砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

Ⅳ類 (Fig. 6-24~26) は、身受けのかえりが口縁部水平面とほぼ同じである。天井部は平坦である。24は肩に一本の沈線をもつ。天井部から肩にかけ粗い篋削りがみられ、以外は内外面にわたってナデ調整を施している。乳灰色を呈している。胎土は精製されたものが多く、焼成は悪い。

V類 (Fig. 7-28~41) は、すべて宝珠形つまみが付くと考えられる。身受けのかえりは口縁部水平面より長く出るもの(28~30・32・34~36・40・41)と、ほぼ水平のもの(31・33・37~39)とがある。前者は器高が高く、35は天井部からかえりの先端まで2.8cmをはかる。篋削りしたのち、内外面にわたって横ナデ調整を施している。灰色を呈する。細砂粒を含み、焼成は良好である。

杯身 (Fig. 6・7, PL, 8・9) 各古墳出土杯身を蓋の区分に対応すると次のようになる。

I類 口径13.6cm~14.2cm。立上り0.7~1.4cm

Ⅱ類 口径11.8cm~13.5cm。立上り0.5~0.8cm

Ⅲ類 口径10.8cm~11.7cm。立上り0.4~0.7cm

Ⅳ類 口径9.1cm~9.8cm。立上りなし

Va類 口径11.5cm~12.2cm。立上りなし

Vb類 口径12.8cm~13.5cm。高台付

I類 (Fig. 6-11~13, 19~22) は、口径がわかるものは11・13のみである。11・12は立上りが長く、1.4cmはかる。13の立上りはまっすぐ伸び、端部は丸い。19・20・22の立上りは内傾し、端部はややとがる。天井部は11~13, 21が丸味を帯びるのに対し、19・20・22は器高が低く、平坦に近くなると考えられる。灰色か灰黒色を呈する。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。

Ⅱ類 (Fig. 6-16) は、立上りは短くなり、立ち気味になる。灰黒色を呈し、焼成は良好である。

Ⅲ類 (Fig. 6-14・15・17・18・23) は、立上りが短く、17を除いて端部はとがり気味である。体部はまっすぐか、やや反り気味のもの(15・17・23)とがある。灰色から黒灰色を呈し、

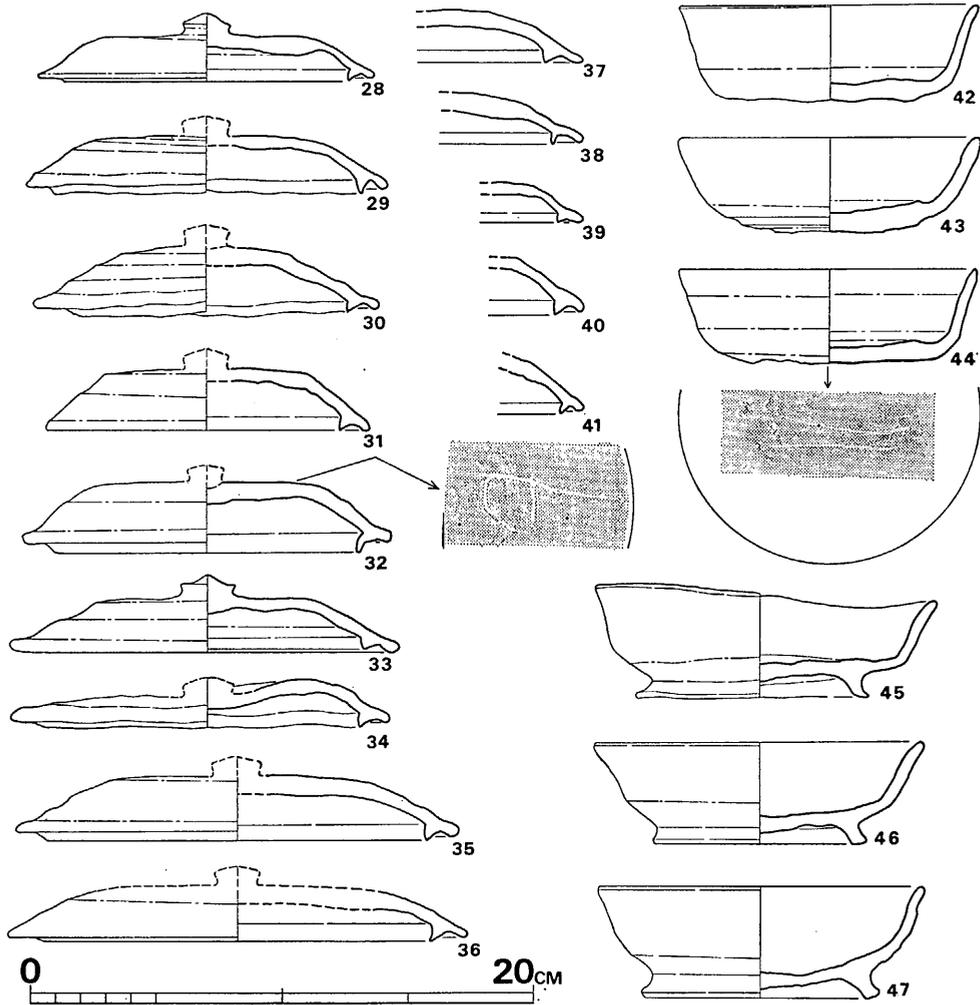


Fig. 7 第1号墳出土須恵器実測図② (縮尺 1/3)

焼成は良好である。

IV類 (Fig. 6-27) は、体部に2本の沈線をもつ。底部には反時計方向の篋削り痕がみられる。体部は内外面とも横ナデ調整を施し、底部内面はナデ調整している。乳灰色を呈している。胎土中には細砂粒を含んでおり、焼成は不良である。

Va類 (Fig. 7-42~44) は、口縁部が外反するもの (42・44) と、内傾するもの (43) とがある。器厚は底部から口縁部まで、ほぼ同一である。43・44の底部は未調整である。灰色から黒灰色を呈している胎土中に細砂粒を含み焼成は良好である。

Vb類 (Fig. 7-45~47) は、高台端のとがるもの (45) と、巾広く肉厚のもの (46・47) とがある。底部と体部の境に稜があり、口縁部は外反する。灰色を呈し、焼成は良好である。

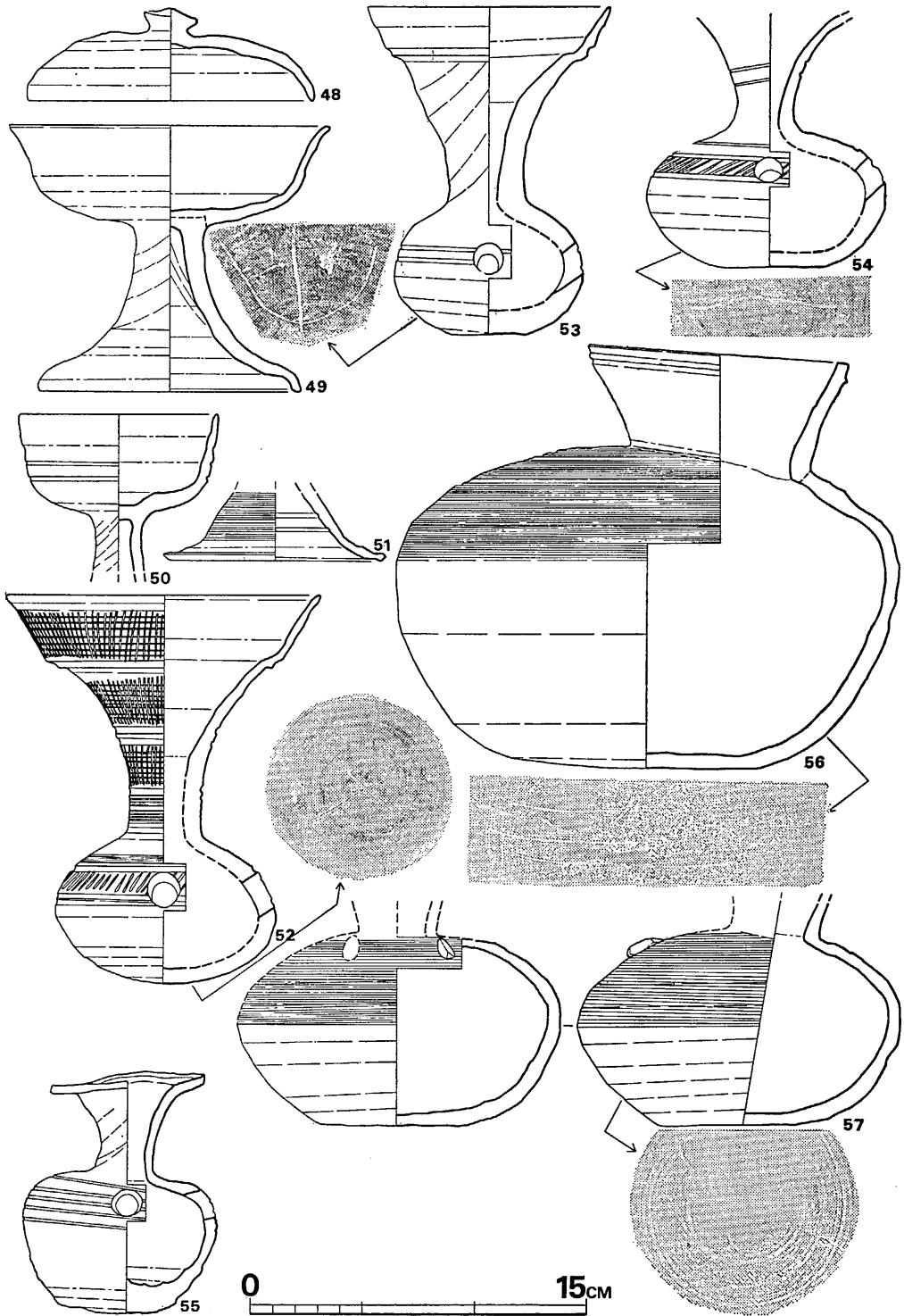


Fig. 8 第 1 号 墳 出土 須 恵 器 実 測 図 ⑧ (縮 尺 1/3)

高杯蓋 (Fig. 8—48) は、宝珠形つまみをもつ蓋で、肩部に丸味をもち、身受けのかえりをもたない。口唇部は直立し、ややとがる。灰色を呈している。胎土中の砂粒は少なく堅緻である。

高杯 (Fig. 8—49~51, PL. 9) 大小2類ある。

I類 (Fig. 8—49) は、体部から口縁部にかけて、なだらかに外反する。脚柱部には、内外面ともにしぼり痕がみられる。脚裾は丸味をもって内傾する。端部は丸い。胎土中に粗い砂粒を多く含み、内外面とも灰黒色を呈する。焼成は良好である。杯部外面は横ナデし、杯部内面および脚柱裾部はナデ調整している。口径14.2cm, 脚裾径10.5cm, 器高11.8cmである。

II類 (Fig. 8—50・51) 50の杯体部には2本の沈線が入り、脚柱部の内外面にはシボリ痕が認められる。口径8.9cmである。51の脚裾部外面には平行櫛目紋がある。脚端部はわずかに跳ね上がる。脚裾径は10.1cmである。50は黄褐色を呈している。砂粒を含まず、焼成は良好である。51は灰黒色を呈している。砂粒を含み、堅緻である。

甗 (Fig. 8—52~55, PL. 10) 球状部に対して口縁部径の大きなものと、小さなものの2類がある。

I類 (Fig. 8—52・53) は、口縁部と頸部との境に沈線が入り、段をなす。52は口縁部から頸部にかけて刷毛による調整を行い、その上から数本の沈線を施している。口唇部内外面はナデ調整している。球状部には径1.5cmの孔があり、その上下に平行沈線が入る。この間に、櫛描き列点を施している。球状部は篋削りをし、肩部から上は横ナデ調整している。口縁部径14.1cm, 球状部径9.8cm, 器高17.8cmである。53の頸部外面には絞り痕が認められる。球状部には径1.4cmの孔があり、横に2本の沈線が引かれている。外面の球状部底部はナデ調整、他は全体に横ナデ調整されている。口縁部径10.8cm, 球状部径8.4cm, 器高14.6cmである。いずれも胎土中に砂粒を含み、焼成良好である。

II類 (Fig. 8—54・55) は、いずれも大きな球状部をもつ。54の口縁部は欠損している。頸部および球状部に沈線が入り、球状部の孔横の2本の沈線間に櫛描き列点が施されている。球状部肩から頸部にかけては横ナデ調整している。球状部径は10.7cmである。55はゆがみの大きな類で、口唇部はやや跳ね上がる。頸部に絞り痕がある。球状部には5本の沈線が入る。外面の球状部肩部から口縁内部側にかけて横ナデ調整している。口径6.9cm, 球状部径8.7cm, 器高10.7cmである。両者とも焼成は良好である。

横瓶 (Fig. 8—56・57, PL. 10) は、3点出土した。56は口縁部はやや立ち上り気味で、外側の胎土をつまみ出し、凸帯を作り出している。口唇部は面取りを行なって、平坦である。丸い肩部には櫛描文が入っている。口径11.6cm, 最大径22.3cm, 器高19.0cmである。黒褐色から灰褐色を呈している。胎土中に細砂粒を含み、焼成は良好である。57は頸部上半を欠損している。丸い肩部には櫛描文が入っている。肩部には2箇所、粘土粒を張り付けている。最大径

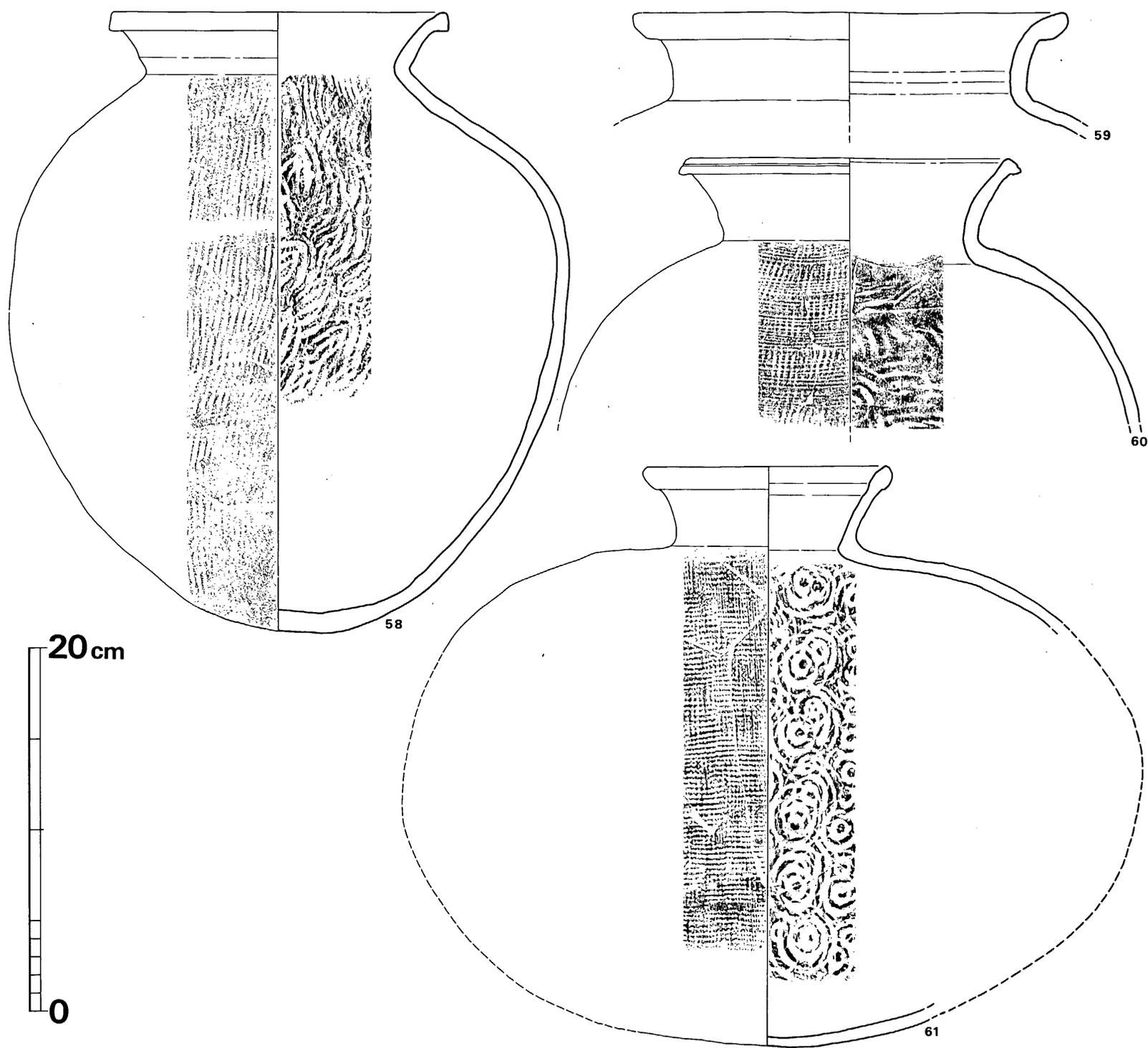


Fig. 9 第1号墳出土須恵器実測図④(縮尺1/3)

14.4cmである。暗灰色を呈している。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。Fig.9—61は大形の、いわゆる俵瓶である。頸部下の外面には格子状叩き目が、内面は同心円文が入る。口唇部は粘土をかぶせて整形しており、丸くなる。口径13.9cm、胴部最大径40.4cm、器高32.1cmである。外面は黒色から灰褐色を呈する。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。

壺 (Fig.9—58~60, PL.11)

3個体出土している。いずれも口縁部が短く、櫛描き波状文を施している。58と60の口唇部は平坦面を有するが、59は丸く作られている。外面の格子状叩き目は58に比べて60は繊細である。内面の同心円文も、同様なことが首肯される。58は口径18.8cm、胴部最大径30.9cm、器高34.1cmである。59・60の口径は、それぞれ24.0cm、18.9cmである。いずれも灰黒色を呈している。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。

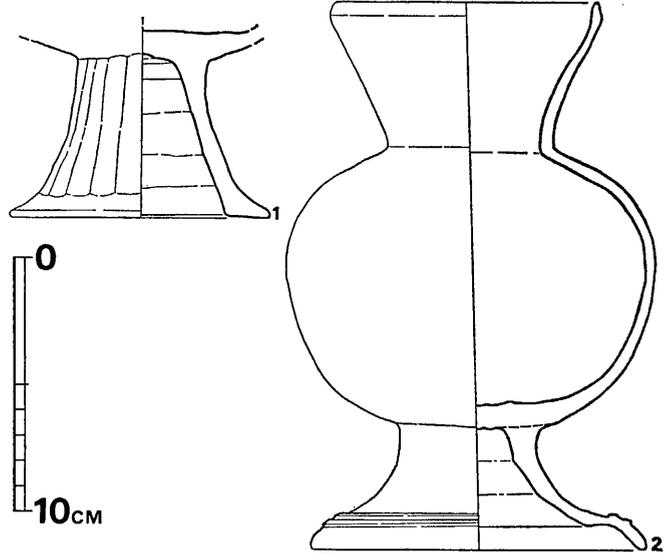


Fig. 10 第1号墳出土土師器実測図(縮尺1/3)

土師器 (Fig.10, PL.11)

高杯 (Fig.10—1) の脚柱は巾広く、篋削りされている。脚端は平坦面をもつ。内側には巻上げの痕跡が認められる。褐色をし、胎土中は砂粒を多く含んでいる。焼成は良好である。

脚付壺 (Fig.10—2, PL.11) の口縁部はゆるやかに外反し、端部は内傾する。口唇部は丸味をもつ。胴部は球状を呈する。脚裾部には削り出した2本の凸帯をもち、端部は内側に引き出されている。焼成が不十分なため、器壁の化粧土が剝落し、調整法は不明である。脚内面は篋削りしている。

2 第 2 号 墳

墳丘 (Fig. 4, PL. 12—1)

墳丘の外形は近世の石組遺構及び中世の土墳墓によって、まったく改変され、調査開始時には古墳であるとは識られなかった。近世及び中世の遺構の調査後、それらを取り除いたところ、径約15mの円墳となった。ただし石材は羨道の一部を残すのみで、まったく残存せず、従って石室裏込めも認められなかった。

墳丘盛土は西側、つまり丘陵鞍部側では地山を切り込んだ上に積んでおり、その厚さ約80cm残存していたにすぎない。それに対し、東側、つまり谷側では墳丘の上を後世盛土して整地しており、墳丘の残存状態は比較的良好であった。石室掘り方は上端で、4.6m × 7.2mであり、墓道へと続いている。

石室 (Fig. ③, PL. 12—2・13—1)

内部主体は、主軸をN—12°—Eにとり、南西方向に開口する。前述したように石室はほぼ全壊しているので、詳細は不明であるが、全長約7mの両袖式の横穴式石室であろう。

残存していた石材は奥壁裏込めと、西壁側の2個の裏込め石のみである。

石材抜き痕より考えられる玄室は長さ3.5m、巾約1.8mで、1号墳に比べてやや狭長である。複室の可能性もあろう。

羨道は前面の腰石と上部の若干の石材のみ残っていた。西側壁の腰石は外に向かうほど小さくなり、外側2個の石の上には50cm大の石が乗り、その上に、さらに25cm大の石が積まれている。東側壁は2段の石材が積み、その内に20cm大と40cm大の石を詰めている。これら両側壁の間には敷石がみられ、40cm大の石を敷いている。この付近で、玄門から掘り窪められていた地山が立ち上がり、外側に約1mの長さの平坦面をなす。それから先はまた地山が立ち上がり約80cm伸びるが、その上には小石が散乱していた。その上面は、先述の羨道敷石と同一レベルである。羨道はこの付近で切れていたと考えられる。

墓道は南側の崖によって崩されており、長さ2m残すのみである。この中間から、須恵器杯の蓋と身が集中して出土した。

遺物 (Fig. 11, PL. 13~15)

石室内からは遺物はまったく検出されなかった。墓道中より出土した須恵器は杯身、蓋とも17個体あった。このうち9個体が完形であり、他もほとんどが完形に近い。身と蓋がセットになって出土したのが2例ある (PL. 13)。

出土遺物は上述須恵器のみである。

須恵器

蓋 (Fig. 11—1~9, PL. 14) は、すべてⅢ類に属する。口唇部は丸味をもち、口縁部は軽く外

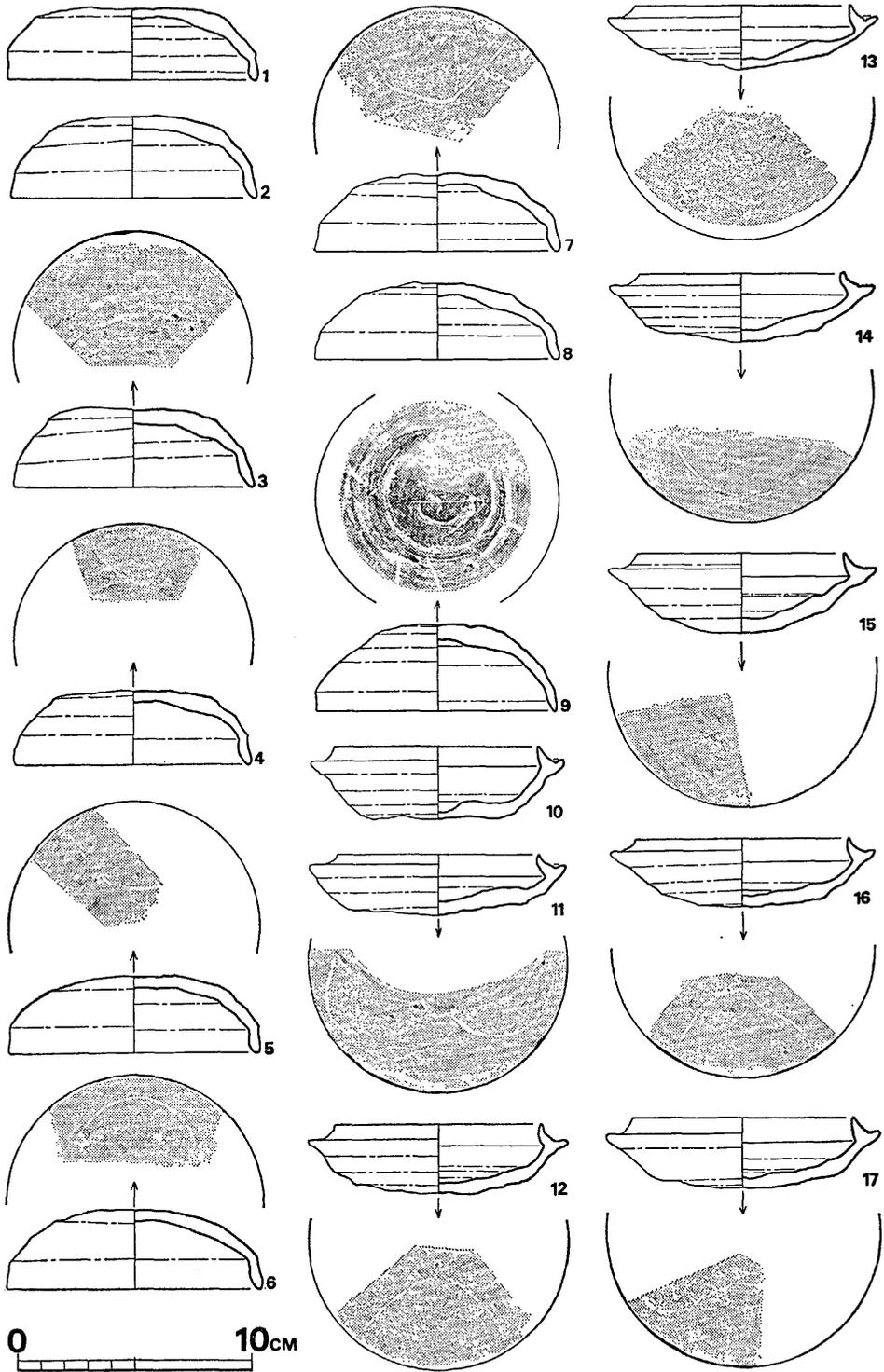


Fig. 11 第 2 号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

反する。天井部は若干丸味を帯びる。口径は10.2cm～11cm，器高は2.1cm～2.5cmである。乳黄色を呈し，焼成不良なものがほとんどであるが，2は褐色を呈し，焼成も良好である。ヘラ記号は全てU字形である。

杯身 (Fig. 11-10～17, PL. 15) は，蓋受け部の立上りが低く，口唇部は丸い。受け部は浅い。口径は10.9cm～11.7cmで，立上りは5.0～7.0mmである。蓋と同様に乳黄色を呈し，焼成は不良である。ヘラ記号はU字形である。

3 第 3 号 墳

墳丘 (Fig. 4, PL. 16-1)

丘陵の東端に位置し、奥壁側及び北側の墳丘は、崖法面によって、ほとんど削り取られている。両側壁側の掘り方埋土と南側の若干の盛土を残しているのみである。墳丘径は約10mであろう。

墓墳壁と石室用材との間には灰色砂質土と赤褐色粘質土を交互に版築している。北側の丘陵鞍部側では天井石近くまで版築し、その上は15cm内外の厚さで墳土を盛り上げている。北側の谷側では腰石裏に茶褐色粘質土混りの灰色砂質土を埋め込んでおり、版築されていない。

石室 (Fig. ④, PL. 16)

当古墳群では最も保存状態の良い石室をもつ古墳である。内部主体は、主軸を N-58°-W にとり、南東方向に開口する全長7.2mの複室、両袖の横穴式石室である。

玄室は長さ2.3m、巾2.0mをはかる。奥壁は床面よりの高さ1.15mの大石一枚を立てて腰石としている。その上に2個の石を横積みして構築されている。両側壁とも奥壁横には巾1.7mの石を横積みしており、腰石となしている。腰石の上には40cm前後の石を持ち送りしながら積み上げて、その上に1.6m×1.4m、厚さ60cmの大石をのせて天井としている。なお北側壁の上部と天井の間の石材は欠損していた。羨道側及び南側壁下には敷石が残っており、本来は全面に敷石されていたものと考えられる。

玄門袖石には巾30cm、床面よりの高さ40cm前後の石材を利用している。南側の玄門袖石は土圧等によって内側に倒れ込んでいる。両石間の距離は床面近くで1.1mで、その間に玄室との仕切り石を置いている。前室腰石の上に積んだ2段の横積み石と、玄門袖石上一段の石材の間には長さ1.6mの石の一端を両側壁各々にのせ、その上に小石を積んで、天井石を支えている。

前室は、巾1.2m、前後の仕切り石間で長さ1.2mをはかる。前門袖石の間隔は、1.0mで、その間に長さ96cm、巾50cmの仕切り石を置いている。床面には長さ15cm大の石を利用して敷石されている。

羨道腰石はすべて縦積みであり、上には2～3段にわたって石材が横積みされている。なお、羨道端の両側壁の間隔は2.5mと広がっている。

墓道は自然地形の急な傾斜を利用しつつ、羨道の広がりをおし広げるように広がっている。約2.5m伸びたところで崖法面によって切られている。

遺物 (Fig. 12~16, PL. 17~22)

出土状況 (Fig. 12, PL. 17, 18)

玄室の北側袖石横、及び羨道の両仕切り石間の敷石上より、遺物が出土した。

玄室の北側袖石横で出土した遺物は馬具のみで、轡が1セットと帯金具が含まれる。これら

は、連結された収態としては完全なるものではなく、銜と鏡板、兵庫鎖が分離して出土した。追葬される際に、この一隅に取りかたづけられたとも考えられる。羨道からは直刀1、銅椀1、鉄鏃、馬具及び杯の身と蓋各3個体が出土した。床面敷石よりいづれも5~10cmほど高いレベルからの出土である。直刀は南側壁にそって平行して置かれており、その上に銅椀が伏せ置かれていた。杯類は北側壁近くに置かれていたが、蓋と身はバラバラになっていた。鉄鏃及び馬具は散乱した状態で、数も少ない。銜が一本、直刀の下より出土した。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

- | | | |
|---------|------|-------|
| (1) 装身具 | 金環 | 4個 |
| | ガラス玉 | 3個 |
| (2) 武器 | 直刀 | 1振 |
| | 鏢 | 2個 |
| | 縁金具 | 2個 |
| | 鉄鏃 | 10本以上 |
| (3) 馬具 | 轡 | 1式 |
| | 鉸具 | 2個 |
| | 帯金具 | 6個 |
| | 飾り金具 | 1個 |
| | その他 | 1個 |
| (4) 工具 | 刀子 | 2本 |
| (5) 銅椀 | | 1個 |

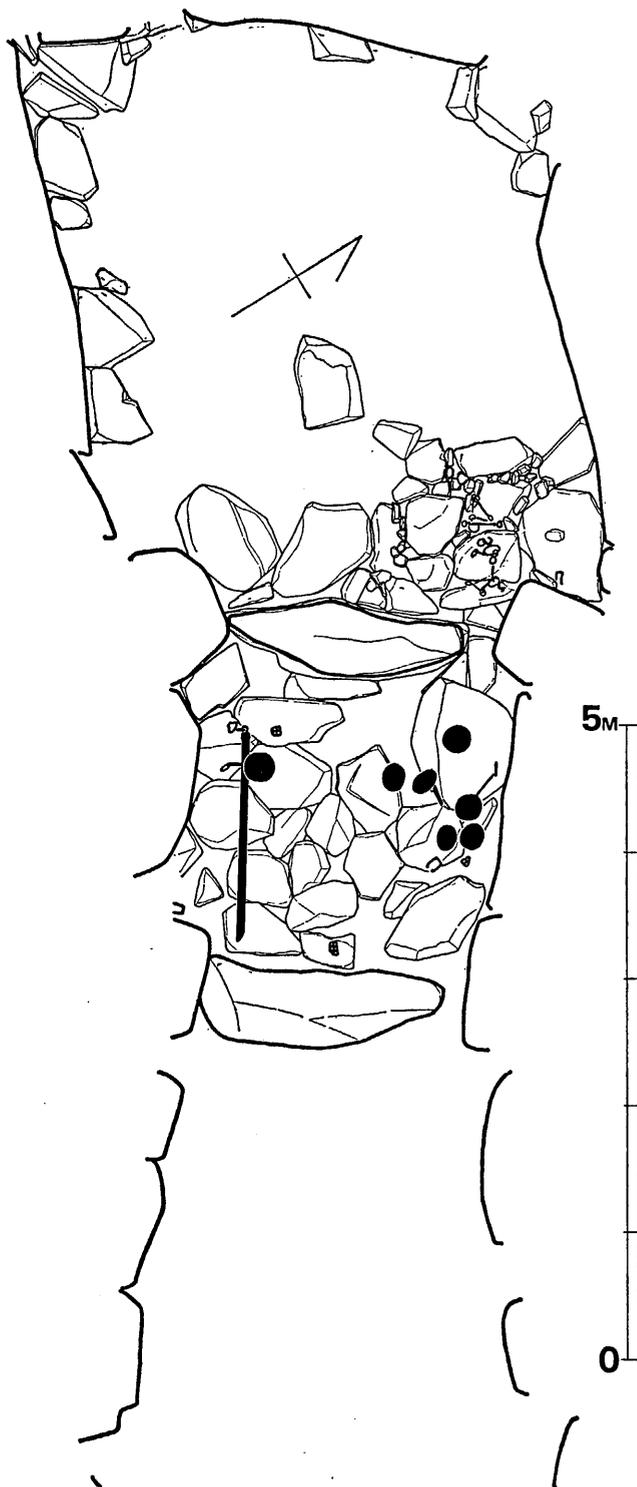


Fig. 12 第3号墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/30)

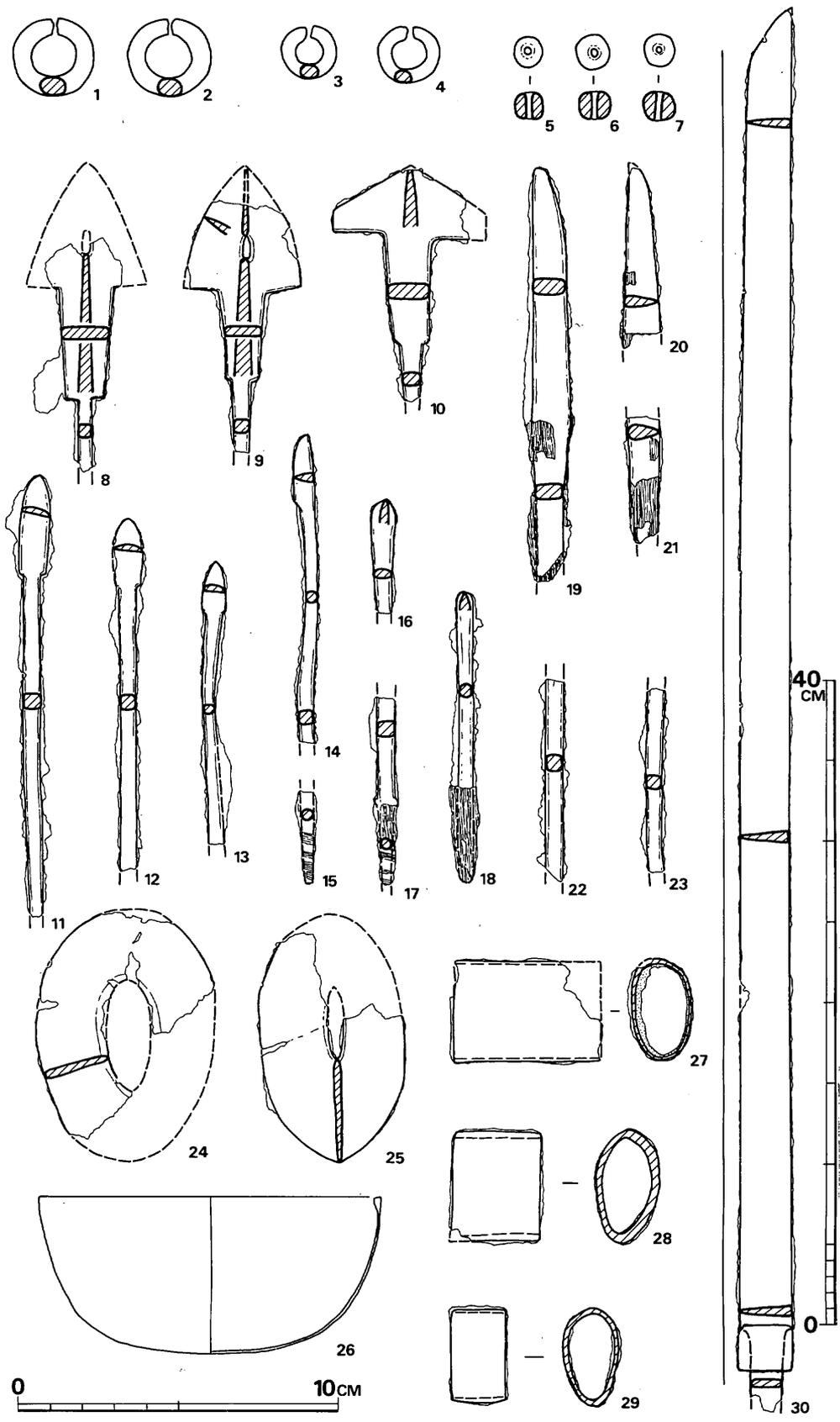


Fig. 13 第3号墳出土遺物実測図(縮尺1/2, 30のみ1/4)

(6) 土 器 須恵器 12個体以上

杯 (蓋・身)	7 個体
高杯	2 個体
甌	1 個体
横瓶	1 個体
壺	1 個体
土師器 13個体	
杯	3 個体
皿	9 個体
椀	4 個体
小壺	1 個体
日常雑器	2 個体

金環 (Fig. 13-1~4, PL. 19) 1と2, 3と4が対である。金箔の残りはよい。1・2の径は2.6×2.4cm, 3・4の対のうち, 3はやや大きく, 2.0×1.7cmである。

ガラス玉 (Fig. 13-5~7, PL. 19-4) 風化のため白色化しているが, 本来はコバルトブルーのねりガラスである。径は各々9, 11, 10mm, 高さは8, 9, 9mmである。

直刀 (Fig. 13-30, PL. 20-1) 出土した際には完形であったが, その後, 目釘穴以下の茎が欠損した。平棟, 平造りで, 刃わたり81.6cm, 切先近くの巾3cm, 柄近くで3.4cm, 厚さ6mmである。茎は本来7.5cm, 巾2.3cmあって, 端部より1.5cmのところ目釘が入っていた。関部には巾2.7cm, 断面で長径3.5cm, 短径1.8cmの楕円形の縁金具がある。その外側には Fig. 13-25の鐙が装着されていた。茎を通す孔は推定長さ2.4cm, 巾5mmと小さい。28の縁金具が附属していた。

鐙 (Fig. 13-24・25, PL. 20-3) 24は大刀用の鐙である。推定長7.9cm, 巾5.5cmをはかり, 無窓である。刀身を通す孔は長径3.4cm, 短径1.4cmである。

縁金具 (Fig. 27~29, PL. 20-3) 27は巾4.6cm, 29は1.7cmで断面の長径は各々2.9cmと2.6cmである。内部に木質が附着している。

鉄鏃 (Fig. 13-8~18, 22・23・PL. 20-4) 8, 9は両丸造三角形式で両関である。鋒の中央に長三角形の窓を設けている。茎の全長は不明である。断面は方形を呈する。身長3.9cm, 最大巾2.6cmである。10は両関両丸造変形三角形式である。茎の断面は方形を呈する。身部長2.1cm, 最大推定巾4.8cmである。11・12・13は片丸造鏃箭式に属する。全長は不明である。14は片丸箭式で鏃被の中間は断面丸造りである。棘鏃被である。

轡 (Fig. 14-7・8・11・12, PL. 19-1) 玄室より集中して出土したが, 錆が甚しく, 各部分ごとバラバラになっている。7と8は鏡板である。楕円形環状部の立間の両端には兵庫鎖が連結し

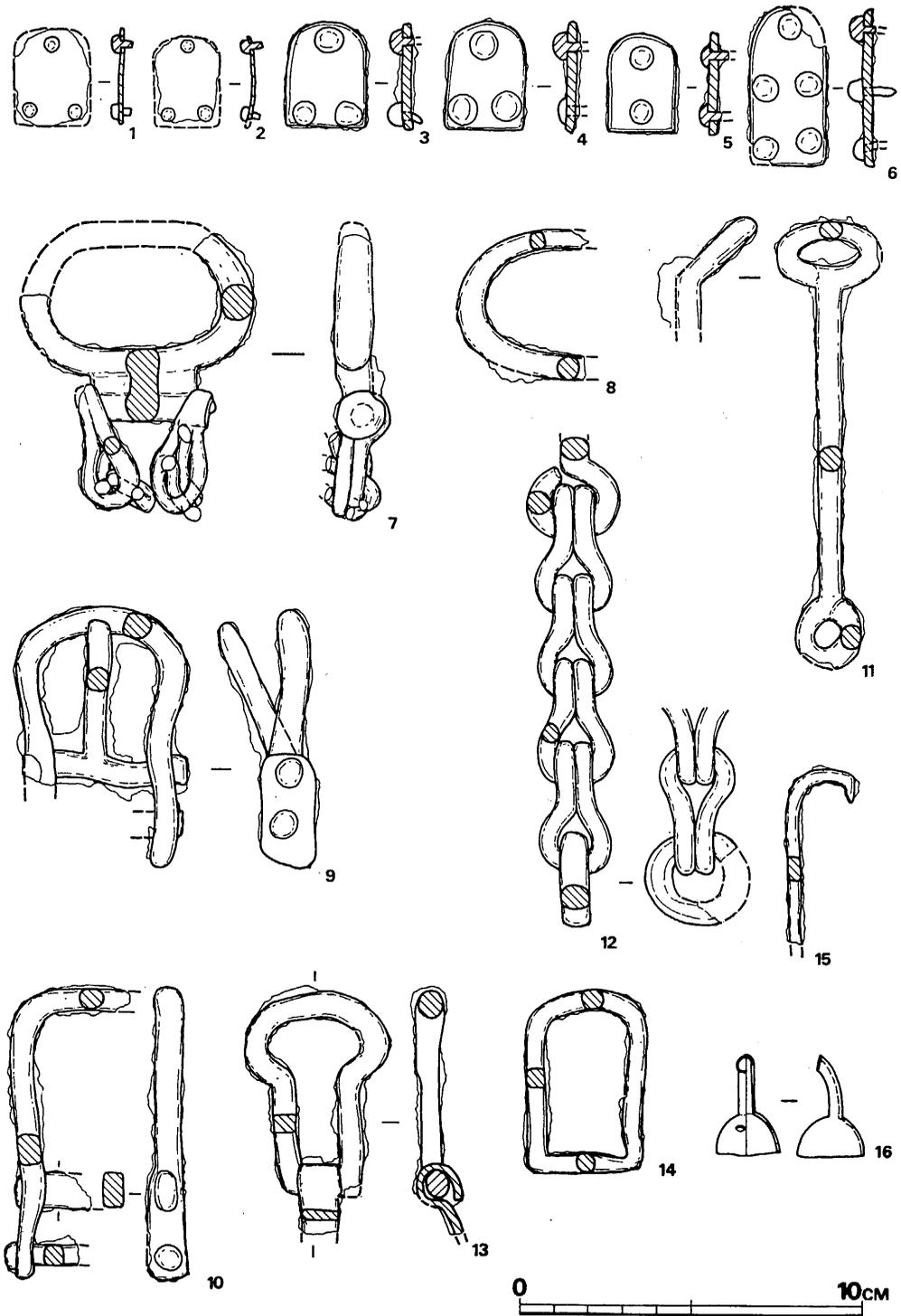


Fig. 14 第3号墳出土馬具実測図 (縮尺 1/2)

ている。12は引手金具に取り付けられた兵庫鎖であり、4連続している。11は引手金具である。引手金具の全長は13.1cmである。

鉸具 (Fig. 14-9, 10, PL. 19-1) 9と10は丁字状刺金を体部のU字状金棒に刺し通している。底辺の横棒は別造りである。

用途不明金具 (Fig. 14-13~15-1) 13は断面長方形の板状金具を曲げて取りつけている。

帯金具 (Fig. 14-1~6, PL. 19) 1・2は青銅製ではほぼ同大である。長さ1.8cmである。3・4は金銅製で、大きな頭の鉸3個で留めている。裏に革痕が観察される。長さ3.2cmである。5・6も金銅製の金具で、2・3とセットをなすものであろう。6の完全な鉸の長さは1.4cmである。5の長さは2.4cm、6は4.6cmをはかる。

飾り金具 (Fig. 14-16) 銅製品である。使用された個所は不明であるが、馬具に取りつけたものと考えた。半球状部の天井部には径4.5mmの中空管が立っている。半球状部の肩には径2mmの小孔が開けられている。

刀子 (Fig. 13-19~21, PL. 20-2) いずれも破片である。19の茎には関はなく、木質に被われている。刃は立っていない。残存長は5.2cm、最大厚は3mmである。

銅椀 (Fig. 13-26, PL. 20-6) 口径10.7cm、器高4.9cmをはかる。口唇部は平坦で、内側に張り出している。器壁は極めて薄く仕上げられ、底部まで厚味は変らない。

須恵器 (Fig. 15, PL. 21)

蓋 (Fig. 15-2~4) は、すべてIV類に属する。天井部は平坦で、時計まわりの筥による回転痕を残している。身受けのかえりは短かく、口縁部水平面よりわずかに長い。天井部以下にナデ調整を施している。灰褐色を呈している。胎土中の砂粒は極めて小さく、良質である。焼成は良好である。

杯身 (Fig. 15-1, 5~7) III類とIV類のものが含まれる。

III類 (Fig. 15-1) は、墓道より出土した。かえりの先端と底部を欠損する。受け部は浅く、口唇部は丸味をもつ。灰色を呈し、焼成は不良である。

IV類 (Fig. 15-5~7) は、同類の蓋とともに羨道から出土した。平坦な底部から、ほぼ直線的にのびる体部をもち、口縁部は若干外反させている。口唇部は丸く仕上げられている。底部は筥削りされており、ヨコナデ調整された体部との境に稜をつくっている。灰色から灰褐色を呈する。胎土は良質で、焼成も良好である。

高杯 (Fig. 15-8, 9) 2点とも玄室から出土した。8の杯部底は楯描き調整され、体部に2本の沈線をもつ。わずかに外反する口縁の端部は丸い。脚柱部にはシボリ痕がみられ、中央部に2本の沈線をもつ。脚裾部は跳ね上り、端部は平たく面取られている。灰黒色を呈し、焼成良好である。口径8.1cm、脚裾径6.5cm、器高8.6cmである。9の杯部体部には3本の沈線を引いている。口縁部は薄く仕上げられ、わずかに外反する。端部はややとがり気味である。脚柱

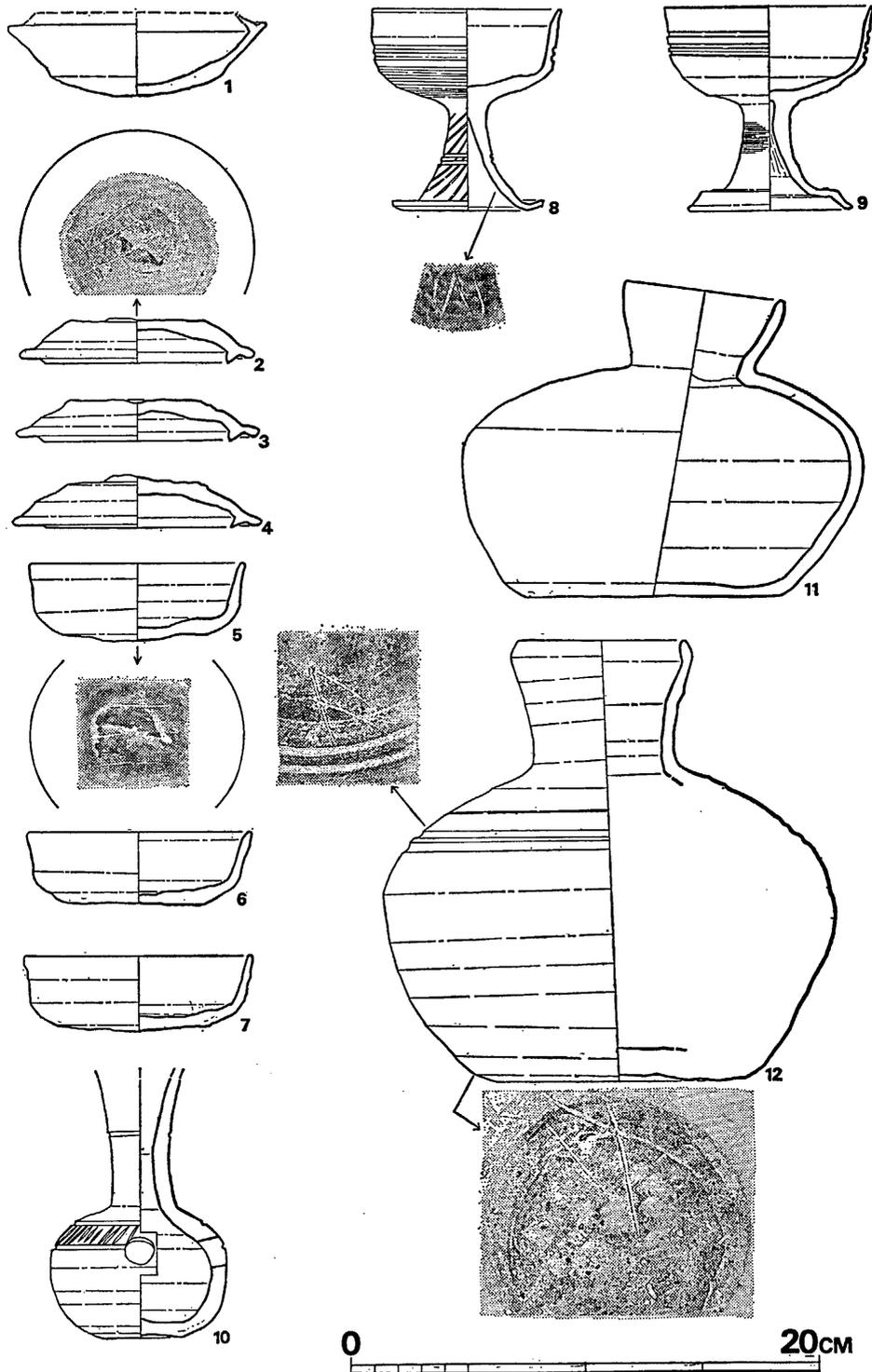


Fig. 15 第3号墳出土須恵器実測図（縮尺 1/3）

部の内側にシボリ痕がみられ、外面楕描き調整されている。脚裾は段をもち、端部は水平に近い。灰黒色を呈する。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。口径9.0cm, 脚裾径7.1cm, 器高8.7cmである。

甕 (Fig. 15-10) の口縁部は欠損している。頸部中央に一条の沈線を有し、内面にシボリ痕がみられる。球状部に口径1.3cmの孔があり、その上下に平行沈線が入る。その間に、楕描き列点を配している。篋削りをし、肩から上は横ナデ調整している。球状部径は7.5cmである。

横瓶 (Fig. 15-11) は、玄室埋土中より出土した。口縁部をわずかに内傾させ、端部は丸く仕上げている。肩部から胴部にかけては丸味をもち、底部との境には稜をもつ。口縁部内外はヨコナデ、肩部は楕描き調整を行っている。灰色から黒色さらに赤褐色を呈している。胎土中に砂粒が多く、焼成は良好である。口縁部径6.9cm, 胴部最大径17.1cm, 器高13.5cmである。

壺 (Fig. 15-12) は、玄室内上層埋土中より出土した。口縁部は内傾し、端部に丸い。なだ

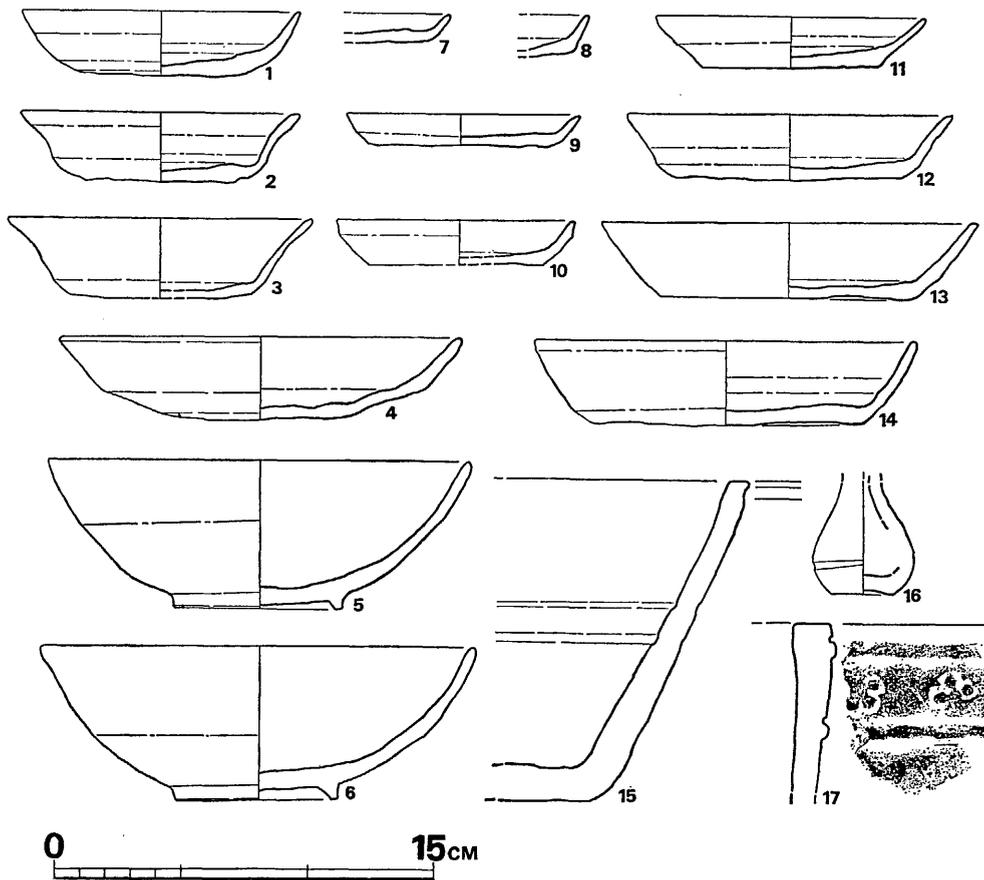


Fig. 16 第3号墳出土土師器・瓦器質土器・その他実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

らかな肩部に2条の沈線を有する。底部は上げ底になっている。黒灰色を呈する。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。口縁部径7.1cm, 胴部最大径19.4cm, 器高18.8cmである。

土師器 (Fig. 16, PL. 22) いづれも玄室・羨道・墓道の埋土中より出土した。

杯 (Fig. 16—1~3) 口縁が直線的に伸びるもの(1)と、外反するもの(2・3)とがある。底部は平坦である。休部内外面はヨコナデ、内底部はナデ調整している。底部には回転篋切り痕がついている。2の内面にはベンガラが附着し、上に煤がついている。1・2は淡黄褐色、3は赤褐色を呈している。

皿 (Fig. 16—4・7~14) 4は休部中央に稜をもち、直線的に口縁が伸びる。休部内外面はヨコナデ、内底部はナデ調整している。底部には板目がみられる。黄褐色を呈し、硬質である。7~10は糸切り底の小皿である。休部内外面はヨコナデ、内底部はナデ調整している。黄褐色を呈し、焼成良好である。11~14の皿はいづれも休部内外面をヨコナデ、内底部をナデ調整している。底部には糸切り痕の上に板目がついている。

椀 (Fig. 16—5・6) は、瓦器である。5は口縁部の内外面のみ、6は外面全体が燻されている。5は口径16.8cm, 器高5.9cm, 6は口径17.3cm, 器高6.1cmをはかる。

小壺 (Fig. 16—16) 精製した白色粘土を用いて作られている。器壁に丹が塗られている。底部には糸切り痕がみられる。

日常雑器 (Fig. 16—15・17) 15の内面には一部煤が附着している。胎土中に砂粒を含む。内外面とも灰褐色を呈し、焼成は良好である。17は火舎であり、口縁部には2本の凸帯間に梅花文が附されている。褐色を呈し、焼成は良好である。

4 八隈4号墳

墳丘 (Fig. 17)

墳丘盛土は、開墾によって全て削平されていた。地山面での地形測量を行い、コンタをとると、径約10mの墳丘であったことが想像される。古墳掘り方は、上端で奥壁側が3.5m、羨道と前室の境で2.2mをはかり、台形を示している。そこから若干広がりながら墓道へと続いている。掘り方と石材の間には褐色土を版築しながら埋め込んでいた。周溝はない。

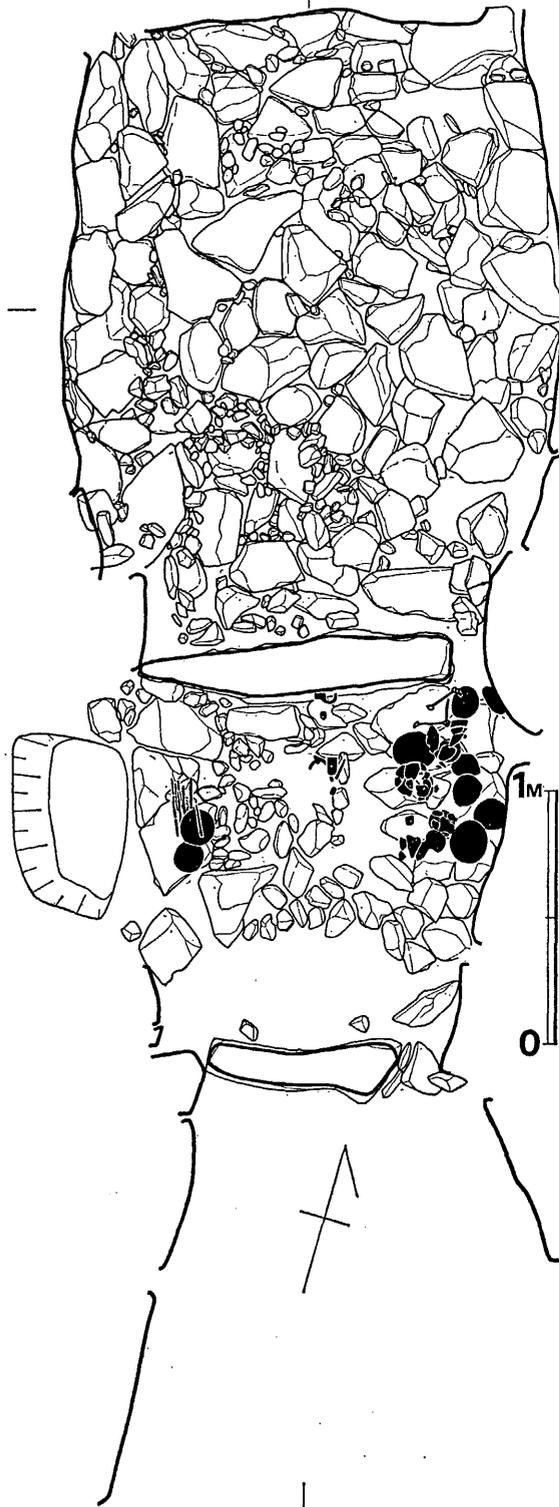
石室 (Fig. ⑤, PL. 23)

内部主休は、主軸を N-16°-W にとり、南側に開口する全長約5.8mの複室、両袖式の横穴式石室である。石材の残存状態は極めて悪い。

玄室は長さ2.45m、巾は奥壁側で1.7m、玄門部分で1.4mをはかる。奥壁は床面よりの高



Fig. 17 第4・第5号墳墳丘実測図 (縮尺 1/200)



さ84cmの石を立てて腰石としている。盗掘によるものであろうが、床面との角度が60°近くまで、倒れ込んでいる。東壁は巾1.3mの石と40cm大の石2個、西壁は1.7mの石と40cm大の石1個でそれぞれ構成されている。両壁ともやや胴張りになっているが、石材の関係だろう。

玄門は東側のものが大きく、両壁側は小さい。その間の距離1.3mで、中間に長さ1.2m、最大巾24cmの仕切り石を据えている。玄室内には20cm大の平石を敷きつめ、その上及び間には、玉砂利を敷いていた模様である。

前室は玄室側で巾約1.5m、羨道側で1.2m、長さ1.4mの台形を呈する。玄門、羨門間の西壁の石は欠損しており、石材掘り方のみ検出された。羨門は東壁側では巾40cm、西側では巾30cmの石を立積みしていた。羨門内の距離は82cmであり、間には長さ70cmの仕切り石が据えられていた。前室の床面は玄門仕切り石より掘り窪められ、その上に盛土して、玄室と同一レベルに敷石されていた。

羨道は西壁側、つまり山側で長さ1.8m続き、末広がりになっている。

掘り方から続く墓道は羨道の広がりに従って広がり、西壁側で約7.0m続く。

閉塞石は根石のみ残っていた。石室の主軸方向に三個の石を並べており、仕切り石との間に1個の石を主軸と直角方向に据えていた。

遺物 (Fig. 18~22, PL. 23~25)

出土状況 (Fig. 18, PL. 23)

Fig. 18 第4号墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/40)

前室床面より各種須恵器、土師器、鉄器類が集中して出土した。これらは盗掘の際であろうか、石室内部に落ち込んだ石材の圧力で、ほとんどが破損していた。

前室東壁側からは高杯 1、甗 1、横瓶 1、杯身 4、杯蓋 4、土師器杯 2 が出土し、周辺に馬具があった。杯は蓋と身がセットになっていた。西壁側では杯身と蓋が並び置かれ、身の上に鉄鏃がのっていた。また墓道や羨道からも遺物が出土している。墓道の埋土上層からは近世陶器や弥生式土器まで出土しているが、下層では須恵器杯で当古墳群出土例としては最も古式のもの (Fig.20—1~4) が検出されている。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

(1)	装身具	金環	4 個
(2)	武器	鉄鏃	6 本以上
(3)	馬具	轡	1 式
		帯金具	3 個
(4)	工具	刀子	2 本
(5)	土器	須恵器	26 個体以上
		杯 (蓋・身)	19 個体以上
		高杯	3 個体
		甗	1 個体
		埴	1 個体
		横瓶	1 個体
		土師器	2 個体以上
		杯身	2 個体

金環 (Fig. 19—1~4, PL.23) 1 と 2, 3 と 4 はセットである。前者は径 2.6cm, 後者は径 2.0cm である。4 は腐蝕のため身細りしている。

鉄鏃 (Fig. 19—5~11) 5・6 は片刃箭式の鉄鏃である。7 は両関両丸造鑿箭式に属する。8・10・11 は片丸造鑿箭式で、両関と思われる。

轡 (Fig. 19—17~27) 17~19 は楕円形素環の鏡板である。18 と 19 は同一個体であろう。立聞の中央に 21mm × 4mm の革紐通しの透しが開けられている。21・26・27 は引手金具である。26 の全長は 10.5cm である。22~25 は銜で、棒状部の全長は 4.7cm である。

帯金具 (Fig. 19—14~16) 14・15 は方形を呈し、鉤頭は扁平で小さい。16 は長方形を呈するが全長は不明である。鉤頭は扁平であるが大きい。

用途不明金具 (Fig. 19—19・20) は、最大巾 9mm の板状金具で連結されていたと考えられる。

刀子 (Fig. 19-12・13) は、茎のみが出土している。12は関なしのようである。

須恵器 (Fig. 20・21, PL. 24・25)

蓋 (Fig. 20-1・2・4・6・8~14, PL. 24・25)

I類 (Fig. 20-1・2) は、墓道床面近くから出土している。口径13cm, 器高3.4cmをはかる。天井部は平坦である。口唇部は丸味をもつ。灰色から灰黒色を呈している。胎土中に砂粒を含み、やや軟質である。

II類 (Fig. 20-4) は、羨道から出土している。口径11.7cm, 器高4.0cmをはかる。天井部は丸く肉厚である。口縁部は内側に肥厚し、体部との境に稜を生じている。端部は内傾し、口唇部はややとがる。暗赤褐色を呈している。胎土中に僅かの砂粒を含むが良質であり、硬質で

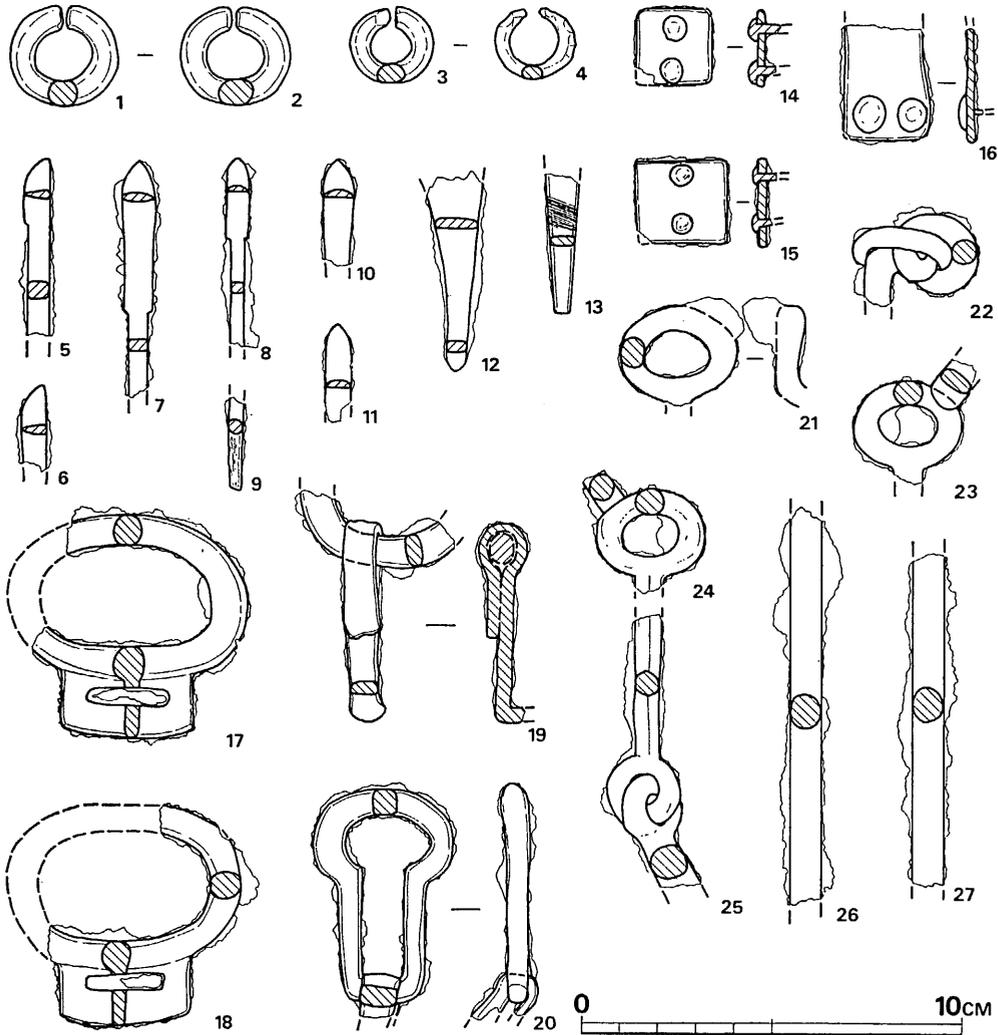


Fig. 19 第4号墳出土遺物実測図 (縮尺 1/2)

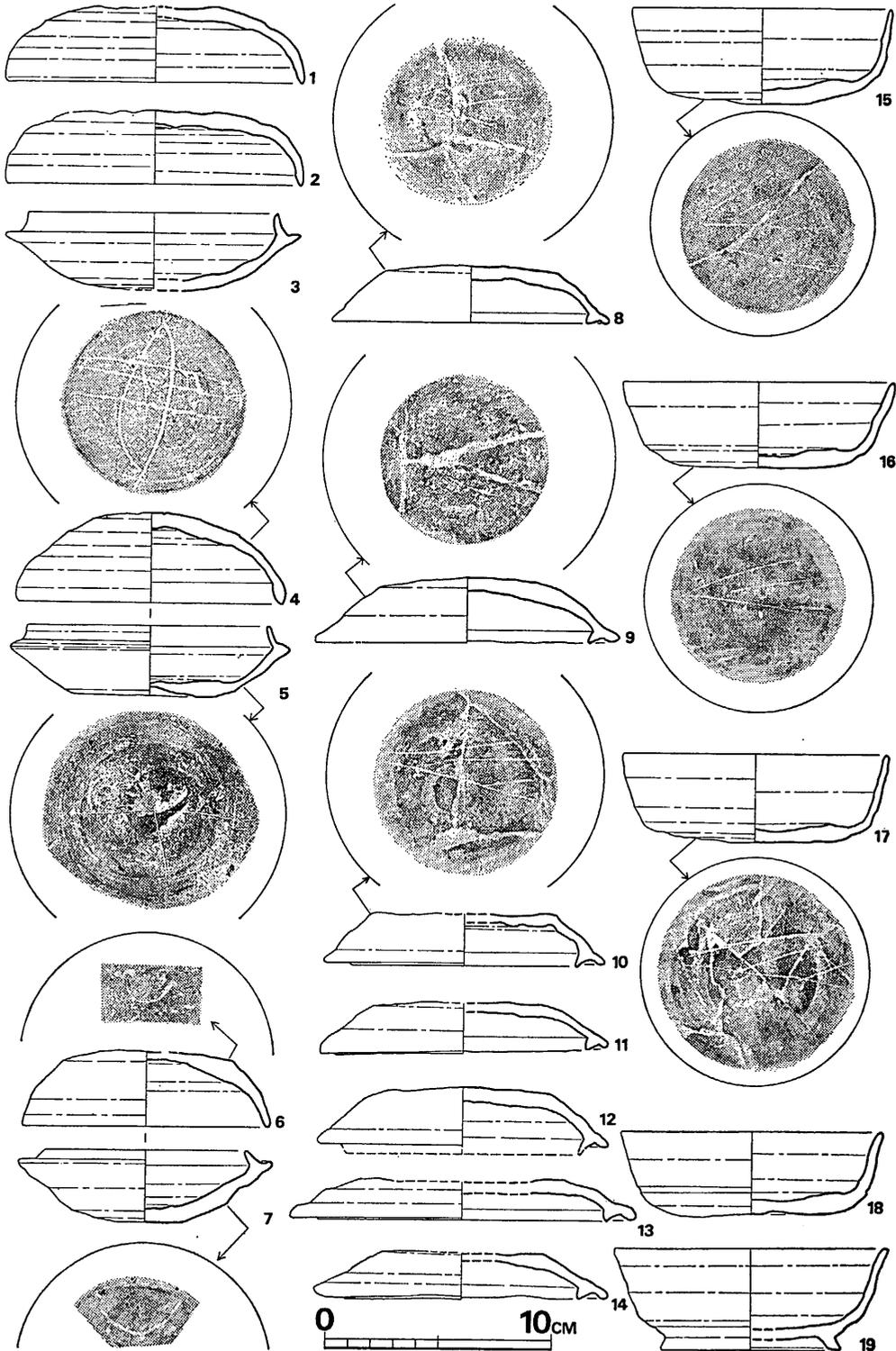


Fig. 20 第 4 号 噴 出 土 須 恵 器 実 測 図 (縮 尺 1/3)

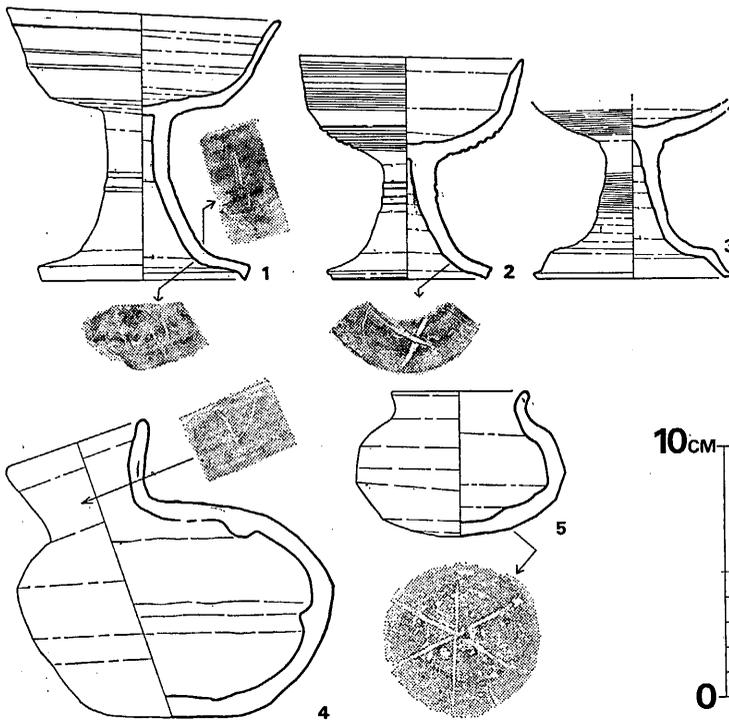


Fig. 21 第4号噴出土須恵器実測図(縮尺 1/3)

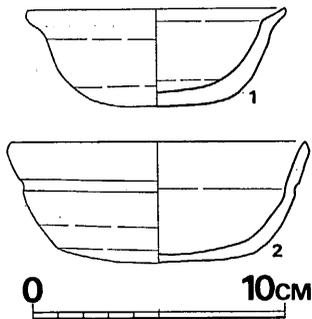


Fig. 22 第4号墳出土土師器実測図(縮尺1/3)

ある。

Ⅲ類 (Fig.20-6) は、前室西壁側床面から出土し、7の杯身とセットである。口径10.9cm, 器高3.3cmをはかる。天井部は平坦に近く、口唇部は丸い。器面調整のナデは粗雑であり、焼成が悪いため、器面が甚しく風化している。

Ⅴ類 (Fig.20-8~14) は、天井部が丸く、身受けのかえりは12を除いて短かく、口縁部水平面とほぼ同位である。口縁部は外に折れまがり、体部との境に稜をもっている。

口径は最小の8が12.3cm, 最大の13が15.3cmである。かえりの長さは破損品の12を除くと、最低の8が1.5mm, 最高の10と13が3mmである。8・9・12は15~18の杯身とセットになるもので、前室東壁側床面から出土している。

杯身 (Fig.20-3・5・7・15~19, PL.24, 25)

I類 (Fig.20-3) は、墓道床面から出土している。底部を欠損しているが、ふくらみをもつものと考えられる。受け部は浅い。立ち上りは直立している。口径11cm, 最大径13cm, 立ち上り0.9cmをはかる。灰色を呈し、硬質である。

Ⅱ類 (Fig.20-5) は、羨道部から出土した。底部は平坦で、受け部は浅いというより、むしろふくらんでいる。立ち上りは細い。最大径12.3cm, 立ち上り高さ7.5mmである。胎土は良質である。暗赤褐色を呈し、硬質である。

Ⅲ類 (Fig.20-7) は、底部は丸味をもち、肉厚である。体部中央が強いナデによって窪んでいる。立ち上りは内傾し、細い。端部は丸い。胎土中に砂粒が多く、粗質である。軟質なため、器面の損傷が甚しい。

V類 (Fig. 20—15~19) は、墓道出土の 19 のみが高台をもつ。15~17 は体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的にのび、薄く引き延している。口唇部は丸い。18・19は口縁部をやや外反させている。口径は最小の15が11.5cm、最大の16が12.15cmである。15~17 が前室床面出土である。15~18は淡灰色を呈し、軟質である。胎土は良質である。19は灰色を呈し、硬質である。

高杯 (Fig. 21—1~3, PL. 25) 1の杯部口縁は外反し、端部は丸い。体部中央に2段の稜をもつ。杯底部は楕描き調整している。脚柱部中央に2段の稜があり、杯底部からその段までは、ほぼ直線的である。柱部と裾部との境にも稜がある。脚裾端部は内側にひねり出されている。杯部は径11.0cm、器高4.0cm、脚柱部高6.6cm、脚裾部径8.2cmである。胎土は精良である。灰色を呈し、硬質である。前室床面より出土した。2は全体に肉厚である。杯体部と口縁部との境に稜がある。口縁先端部はやや尖っている。楕描き調整を行い、体部中央と口縁内外面をヨコナデ調整している。体下半部には5条の沈線を引いている。脚柱部は短かく、中央に2条の沈線を引いている。脚裾端部は強いナデによってやや窪んでいる。硬質である。杯口統部径88cm、器高4.1cm、脚柱部高4.8cm、脚裾部径6.1cmである。墓道より出土した。3は2段式脚柱部であり、裾端部は跳ね上っている。脚柱部高5.5cm、脚裾部径7.6cmである。

埴 (Fig. 21—5, PL. 25) は、口縁部径5.5cm、器高5.8cmである。胴部は篋削り、口縁部の内外面のみヨコナデしている。灰黒色を呈し、硬質である。

横瓶 (Fig. 21—4, PL. 25) は、口縁部径5.7cm、胴部最大径12.7cm、器高11.8cmである。胴部は篋削りし、口縁部内外面のみヨコナデしている。精良な粘土を用いている。乳灰色を呈し、軟質である。

土師器 (Fig. 22)

杯 (Fig. 22—1, 2) は、前室床面より出土した。体部から口縁部の内外面は篋磨きしている。1は口径10.3cm、器高3.8cmであり、2は口径11.7cm、器高4.3cmである。いずれも明茶褐色を呈し、焼成は良好である。

5 八隈5号墳

墳丘 (Fig.17)

墳丘は耕作によってであろう、全く取り払われていた。当墳と第4号墳の墓壙間の最短距離が約5mであるので、墳丘の径は約9mを出るまいと考えられる。

墓壙から墓道にかけての掘り方は、ほぼ直線的に伸びており、巾は奥壁側で約3m、墓道端で2.3mであり、全長は10.0mである。墓壙と石室腰石との間には赤色粘質土と白色砂質土を交互に版築して裏込めしている。

石室 (Fig.⑥, PL.26-1)

内部主体は、主軸をN-38°-Wにとり、南東方向に開口する全長約4mの複室、両袖式の横穴式石室である。

玄室は長さ2m、奥壁側で巾1.5m、袖の部分で98cmをはかる。奥壁は床面よりの高さ1.15m、厚さ約30cmの扁平な石を立てて腰石としている。盗掘に際して移動したのであろうが、若干内側に傾いている。両側壁は各2個の用材を置き、奥壁及び玄門との間は小礫をもって補填している。玄門は西側で高さ1.04m、東側で90cmの方柱状の石材を用いている。その間の距離は仕切り石上で92cmである。床面には一辺20cm大の平石が敷きつめられていた。墓壙床面と敷石の間には、敷石を水平にするに必要な厚さ2cmから10cmの土砂を敷いていた。

前室は前後の仕切り石間で長さ約90cm、巾1.34mをはかる。両壁にも各1個の用材を置いている。前門は西壁で高さ1m、東側で90cmの方柱状の石材を用いている。両者間の距離は、仕切り石上で85cmである。東西の壁側床面には一部敷石がある。

羨道は両壁とも各1個の石を用いて腰石としているのみで、ごく短い。

閉塞石はその下段を残すのみであるが、構築法については、興味深いものがある。つまり、前門間の

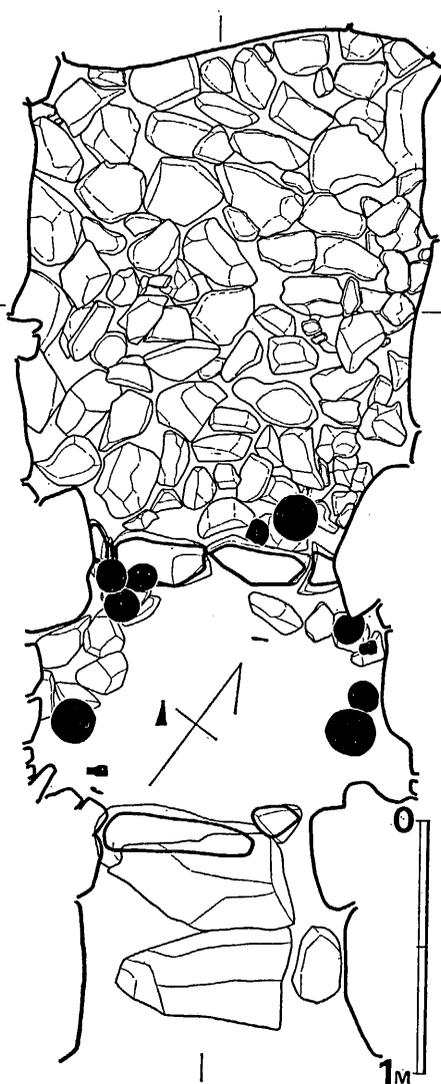


Fig. 23 第5号墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/30)

仕切り石と水平になるように地山を掘り込んで2個の石を横に敷き、その上にほぼ同大の石を同じように横積みしている。本来、この方法で、さらに上に積み上げられていたものであろう。

遺物 (Fig. 23~26, P L. 26~28)

出土状況 (Fig. 23, P L. 26-2)

玄室からは耳環2個と銅線が、床面から浮いた状態で出土した。

玄門脇から前室にかけての敷石及び床面上からは各種の遺物が出土した。須恵器では平瓶3・杯身3・杯蓋3が、他に鉄斧2・鉄鍬3・刀子1・鍬1が出土した。墓道の黒色落込土中からも高杯・杯身・杯蓋・高台杯が出土した。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

(1)	装身具	耳環	2個
(2)	武器	鉄鍬	3本
(3)	工具	刀子	3本
		鉄斧	2個
		鍬	1本
(4)	土器	須恵器	13個体以上
		杯(蓋・身)	8個体以上
		高杯	1個体
		平瓶	3個体

耳環 (Fig. 24-10・11, P L. 27-3) 10は銀環で、径8mmの太目造りである。環部径は2.9cmである。11は腕蝕が甚しいため、金環か銀環かは不明である。径2mmの細目造りで、環部径は1.6cmである。

鉄鍬 (Fig. 24-1~3, P L. 27-1) 腸袂式のもの(1)と円頭広根斧箭式のもの(2・3)とがある。1は鋒部最大巾3.4cm、鋒部長は6.9cm、莖長3.4cm、全長推定9.6cmである。3は6.1cmで同型造りである。莖は両者共隅丸方形であり、2の莖には木質部が残存している。

刀子 (Fig. 24-4~6) は、いずれも全形を顕らかにしない。4・6は両関、5は片関と考えられる。莖にはいずれも木質部が残存している。莖断面はいずれも隅丸方形である。

鍬 (Fig. 24-7, P L. 27-1) は、先端部を欠くが、莖部から刃部半端以上を残している。刃部の残存長3.7cm、莖部長7.0cm、全長13.1cmである。莖部は断面方形を呈し、厚さ8mmと部厚い。莖部の先には、別個体の鉄器が長さ3.6cmにわたって附着している。断面は方形である。

鉄斧 (Fig. 24-8・9, P L. 27-2) は、いずれも前室床面より出土した。両者共袋状を呈し、略同形である。8の袋先端部巾3.2cm、9の同巾3.6cmをはかる。鉄地厚は約2mmである。8の背部には木部装着に適する方形の穿りがある。全長は両者略同大で8.0cmをはかる。

須恵器 (Fig. 25, 26, P L. 28)

蓋 (Fig. 25—1~4, P L. 28) 1・3は墓道, 2・4は石室床面上から出土した。

Ⅱ類(1~3) 2・3は歪みが甚しいが、この類に含まれるであろう。口縁部は垂直に近く、端部は丸い。調整法は天井部に篋削りを施しており、1と2は反時計廻り、3は時計廻りの篋削りの走向が観察される。2と3のヘラ記号は同一である。いずれも暗灰色を呈している。胎土には砂粒を含み堅緻である。

Ⅲ類(4)は、天井部が平坦で、口縁部は垂直に立ち、内側は肥厚している。端部は丸味をもつ。胎土中に砂粒を含んでいる。灰色ないし灰黒色を呈し、堅緻である。

杯身 (Fig. 25—5~9, P L. 28)

Ⅰ類(6)は墓道から出土した。立上りは11cmあり、薄く仕上げられている。端部は略尖り気味である。蓋受け部は浅い。器高は4.2cmと深い。灰色を呈し焼成良好である。

Ⅱ類(5・8) 5は前室床面より、8は墓道より出土した。立上りは5は直線的に内傾し、端部は尖り気味なのに対し、8は反り気味で短かく、端部は丸い。ヘラ記号はⅡ類蓋と同様である。

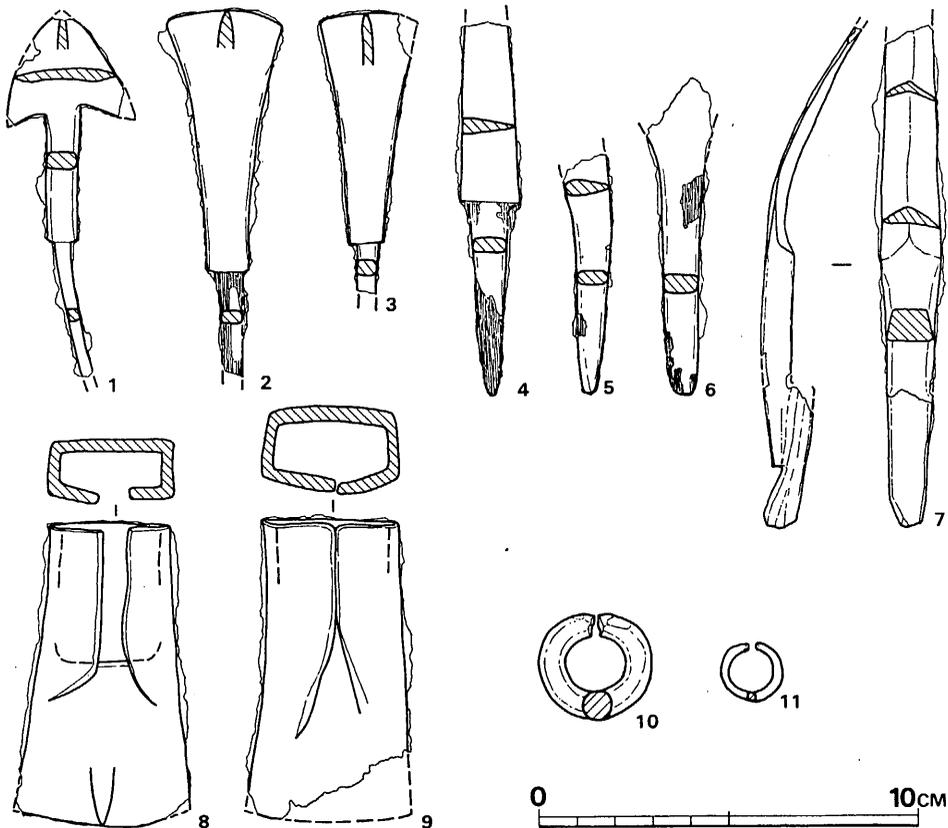


Fig. 24 第5号墳出土遺物実測図(縮尺 1/2)

Ⅲ類(7)の立上りは短かく、受け部は浅い。淡い明褐色を呈している。胎土は精製されているが軟質である。

Vb類(9)は、墓道中から出土した。体部上半で一旦括れた後、外反する。口縁端部は尖っている。高台は外側に張り、短い。

高杯 (Fig.25-10, P.L.28) 杯部のみ墓道から出土した、底部と体部の境に稜があり、その上部に3条の沈線を施している。口縁部は短かく外反させており、端部は丸い。口径15.2cmである。灰黒色を呈し、焼成は良好である。

平瓶 (Fig.26-1~3) 3個体とも石室床面から出土した。1及び3は前室、2は玄室の出土品である。1・3はいづれも体部篋削りの後にカキ目調整を行っている。特に1の場合は底部

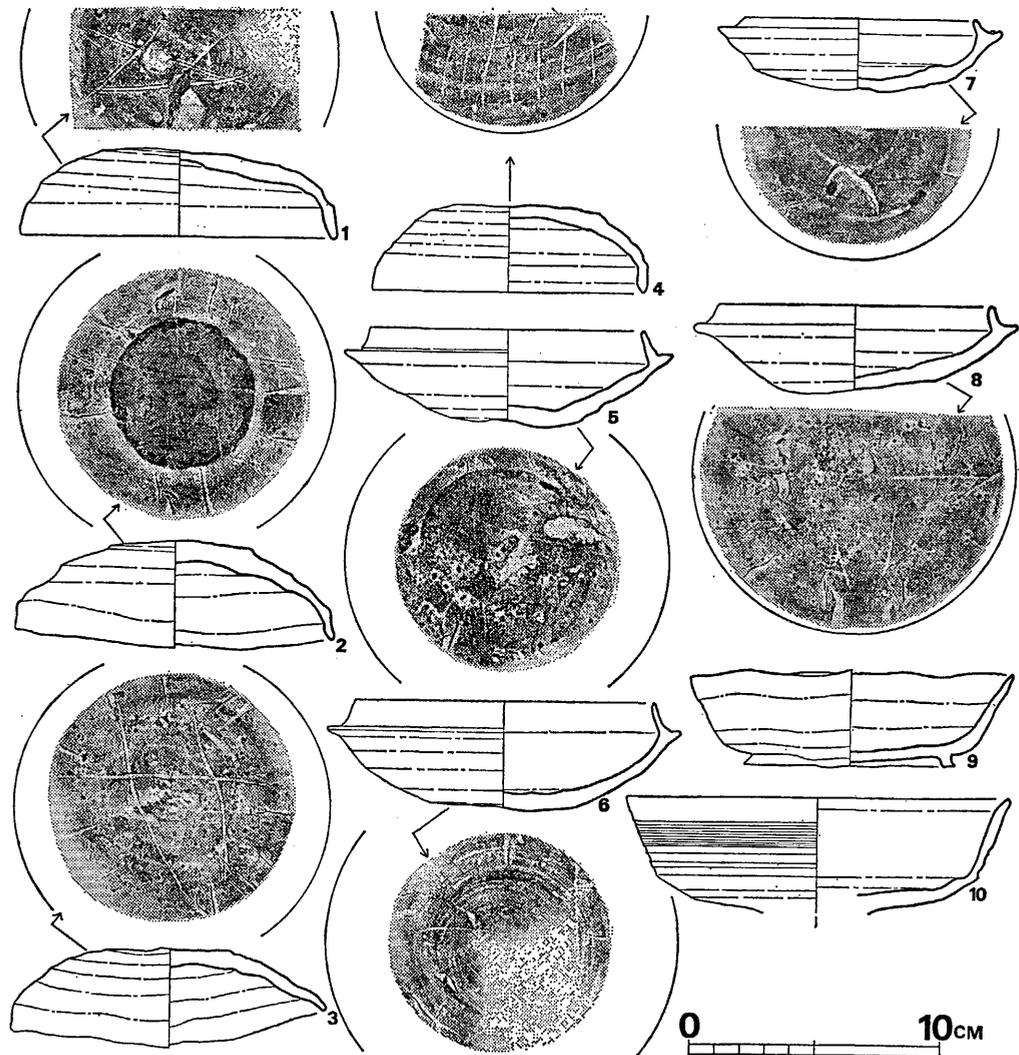


Fig. 25 第5号墳出土須恵器実測図① (縮尺 1/2)

にまで及んでいる。3の口縁部外側には刺突痕が、内側にはへら記号がある。1は明灰色を呈し、軟質なのに対し、3は灰黒色を呈し、堅緻である。2は頸部が体部中央に寄り、直立している。口縁部は内彎気味で端部は丸い。体部は篋削りののち、上半のみヨコナデ調整を施している。灰褐色から、一部黒褐色を呈し、焼成良好である。

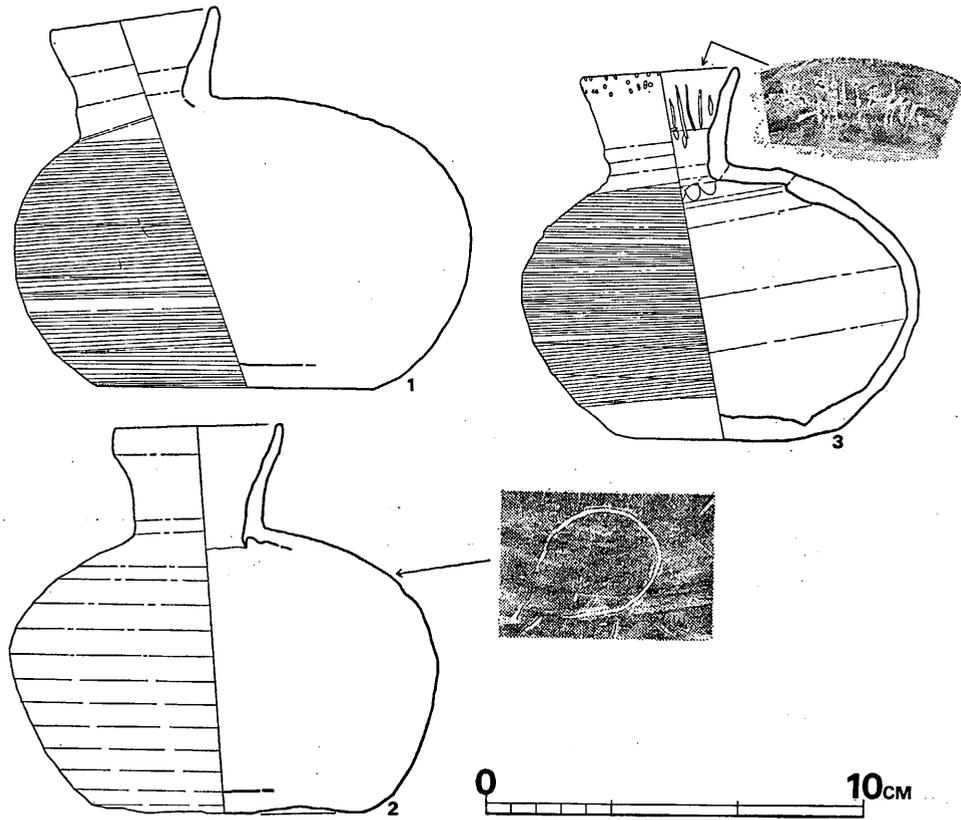


Fig. 26 第5号墳出土須恵器実測図② (縮尺 1/3)

6 八 隈 6 号 墳

墳丘 (Fig. 32)

墳丘は開墾によってであろう、全く取り払われていた。当墳の墓壙と第7号墳墓道との最短距離は8.5mあるので、墳丘の径は約12mを出るまいと考えられる。

墓壙は奥壁側で巾3.3m、羨道部側で2.75m、長さ5.7mである。墓壙と石室用材との間には赤色粘質土と白色砂質土を交互に版築して裏込めしている。

石室 (Fig. ⑦, P L. 29)

内部主体は、主軸をN-38°-Wにとり、南東方向に開口する全長4.92mの複室、両袖式の横穴式石室である。

玄室は長さ2.5m、奥壁側で巾1.85m、袖の部分で1.8mをはかる。奥壁は床面よりの高さ1.5m、厚さ約35cmの扁平な石を立てて腰石とし、西側壁との間には、さらに巾30cm、高さ1.1mの柱状の石を立てている。盗掘に際して移動したのであろうが、奥壁中央の用材は、内側に傾いている。両側壁は各々2個の用材を腰石とし、その上に2ないし3枚の石を横積みしている。床面には南西側壁側にのみ敷石がみられる。本来は全体に敷かれていたと考えられる。玄門は北東側で高さ1.1m、南西側で1.2mの方柱状の石材を用いている。その間の距離は仕切り石上で65cmである。仕切り石は1個で、最大巾15cmの石を玄門間いっばいに置き、床面下に深く埋め込んでいる。

前室は前後の仕切り石間で長さ約94cm、巾は中央部で1.53mをはかる。両壁とも各1個の用材を腰石としている。玄室のそれと比べると一廻り小さい。その上には巾40~50cm大の扁平割礫を横積みしている。前門は北東側で高さ82cm、南西側で84cmの方柱状石を用いている。両者間の距離は仕切り石上で80cmである。仕切り石は厚さ20cm、巾40cm、長さ70cm大の石を利用しており、南西側前門との間隙に小礫を詰めている。

羨道部分は腰石両壁とも各々1個を置くのみで、その上に小口巾40cm大の礫を横積みし、墓壙両隅を埋めている。

閉塞石は前門間仕切り石上から積まれている。まず仕切り石上に、横巾が前門間いっばいで、高さ60cmの石を立て、根石1個を置きながら墓道側に床面より50cmの厚さにわたって土砂を積み上げている。その土の上から、立石の上にかけて、石室の主軸方向に長い石を積み重ねている。南西側がその残存状態が良好で、羨道床面より1.2mの高さまで観察される。

墓道は約8m直線的に延び、崖によって切られている。巾は墓壙側で1mあり、中央で50cm近くまで括れた後、崖側で再び1mとなる。傾斜は羨道から4°の角度で下がり、中間で一旦上がって後、崖側では7°の角度になっている。

遺物 (Fig. 27~31, P L. 29~32)

出土状況 (Fig. 27, P L. 29~2・30)

玄室からは耳環及び土師器高杯が床面から浮いた状態で、鉄鏃が1点床面から出土している。前室からは杯身、蓋が各5枚、鉄鏃多数がまとまって出土した。杯蓋は2枚重ねと3枚重ねの状態では出土しており、蓋と身が相い合さった状態ではなかった。遺物はいずれも床面より20cm前後浮いており、その程度に前室が埋もれて後に追葬があり、その際に埋納されたものであろう。

墓道からは杯身及び蓋各1点、甕片が出土した。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

- | | | |
|---------|--------|--------|
| (1) 装身具 | 耳環 | 1個 |
| (2) 武器 | 鉄鏃 | 20本以上 |
| (3) 馬具 | | 1点 |
| (4) 工具 | 刀子 | 1本 |
| (5) 土器 | 須恵器 | 18個体以上 |
| | 杯(蓋・身) | 13個体以上 |
| | 器形不明脚台 | 1個体 |
| | 甕 | 2個体 |
| | 土師器 | 1個体 |
| | 高杯 | 1個体 |

耳環 (Fig. 28-1, P L. 31-2) は断面楕円形、環部径2.3cmの金環である。

鉄鏃 (Fig. 28-2~22, P L. 31-1) 広根式のもの(2~4)と細根式のもの(5~22)とがある。2は円頭広根式に属すると考えられる。3は広鋒両丸造三角形式で棘篋被である。最大巾2.6cm, 身長は推定3.6cmである。篋被は断面が隅丸方形で、長さ2.1cmである。4は片丸造で長い鋒部をもつ。最大巾1.5cm, 身長6.4cmである。篋被は断面隅丸方形で、長さ1.7cmである。5~7は片刃箭式である。5は片関であり、他は関無しである。8~15・21・22は鏃箭式に属

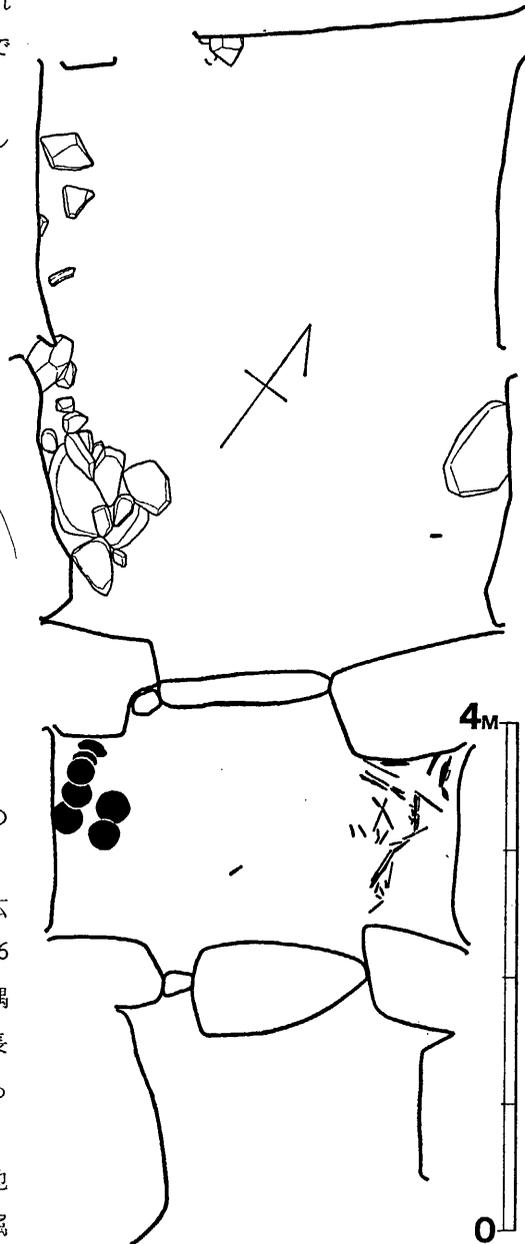


Fig. 27 第6号墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/30)

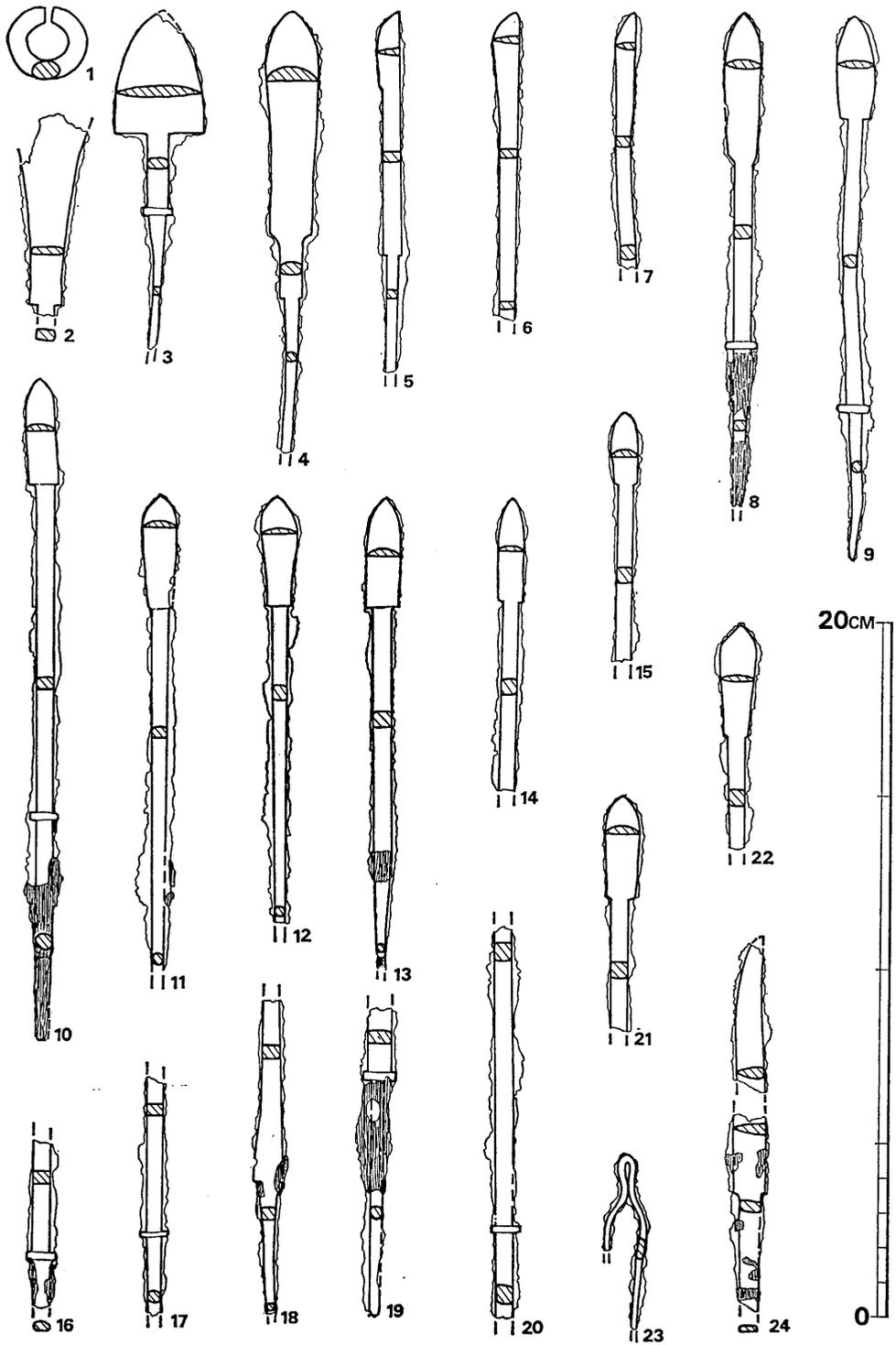


Fig. 28 第 6 号墳出土遺物実測図 (縮尺 1/2)

し、8・9は両丸造り、他は片丸造りである。9及び10は完形品で、9は身部長2.9cm、篋被長8.2cm、茎長4.2cmをはかる。16~20は棘篋被である。

馬具 (Fig. 28—23) 使用場所は不明であるが、馬具の一部と考えられる。第3号墳出土品 (Fig. 13—13) 及び第4号墳出土品 (Fig. 19—20) の一部と同品と考えられる。板状の鉄で中央に環部を設け、その後U字状に開いている。

刀子 (Fig. 28—24) は、茎端及び刃部中央部と先端部を欠損している。刃部及び茎の一部に木質を附着させている。

須恵器 (Fig. 29・30, P L. 32)

蓋 (Fig. 29—1~7, P L. 32)

Ⅱ類 全ての蓋がこの類に含まれる。5と7は墓道出土、他は全て前室の一括出土品である。口径は5が13cmをはかり、最大であるが、他はどれも12cm前後である。器高は2が3.6cmと最低であり、他はどれも4cm前後である。天井部は丸味をもち、口縁部は軽く内側に折りまげている。1及び2に特にこの傾向が強いため、内面に段を生じている。口縁の端部はどれも丸味を持つ。色調は灰黒色から暗赤色でやや軟質である。

杯身 (Fig. 29—8~13, P L. 32)

Ⅱ類 全ての杯身がこの類に含まれる。8が墓道からの出土品で、他はどれも前室の一括出土品である。体部から底部にかけては8を除いてどれも丸味をもち、立上りは8が直線的に内傾する他は、全て反り気味で端部はやや尖る。受け部はどれも浅い。口径は10が最小で11.8cm、11と13が最高で12.6cmである。立上りの高さは全て6~7mmである。色調、焼成共に蓋と同様である。

埴 (Fig. 29—14) 胴部以下及び口縁部を欠損している。口縁は直線的に立ち上り、器壁は薄い。内外面ともにヨコナデされている。灰褐色を呈し、焼成良好である。

甕 (Fig. 30—1・2) 両者とも墓道から出土した。1の口縁部は端部が丸くつくられている。内面の下部に同心円叩き目が入る。色調は灰褐色から黒色で、焼成良好である。2の口縁部は平坦面を有しており、中央に一条の沈線が引かれている。内面の叩き目は粗い。灰黒色を呈し、堅緻である。1の口径は24.2cm、2は19.0cmである。

土師器 (Fig. 31, P L. 31—3) 口縁部は長く、反り気味に外反し、端部は丸い。脚柱部から脚裾にかけては軽い稜を生じるほどに外側へ張り出している。裾端部は丸い。杯部は内外面ともにヨコナデされている。脚柱部は内外面とも篋削りされ、裾内外面はヨコナデ調整されている。精製された粘土を使用しており、赤褐色を呈して、焼成良好である。

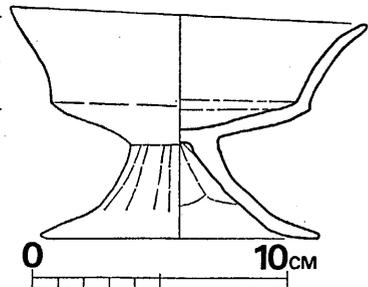


Fig. 29 第6号墳出土土師器実測図
(縮尺 1/3)

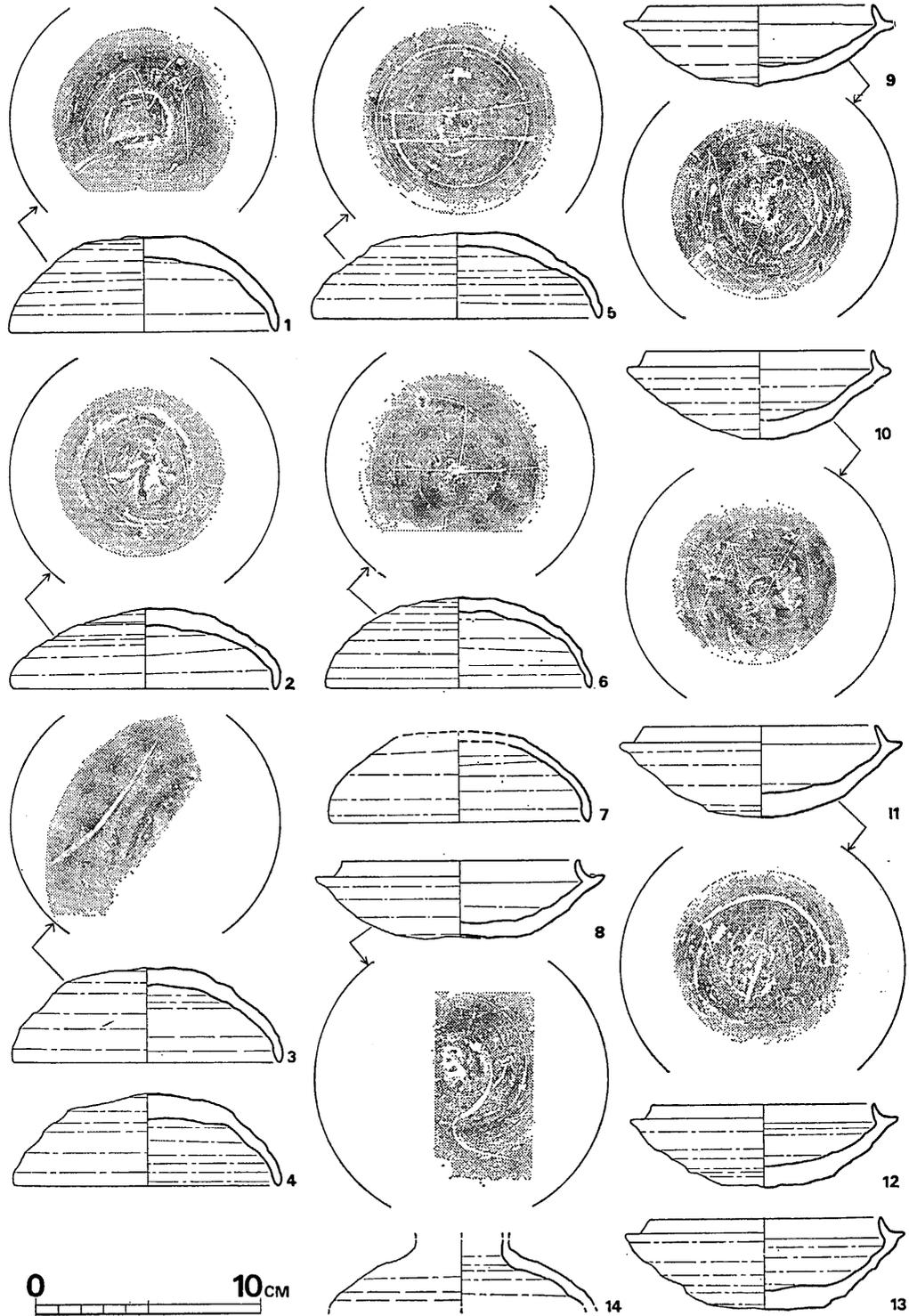


Fig. 30 第 6 号 墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

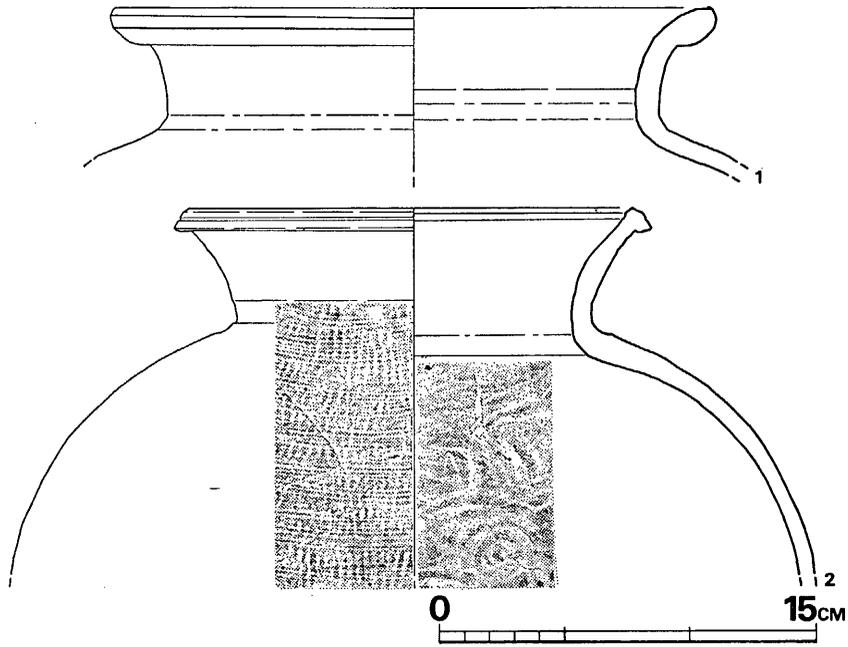


Fig. 31 第6号墳出土須恵器実測図② (縮尺 1/3)

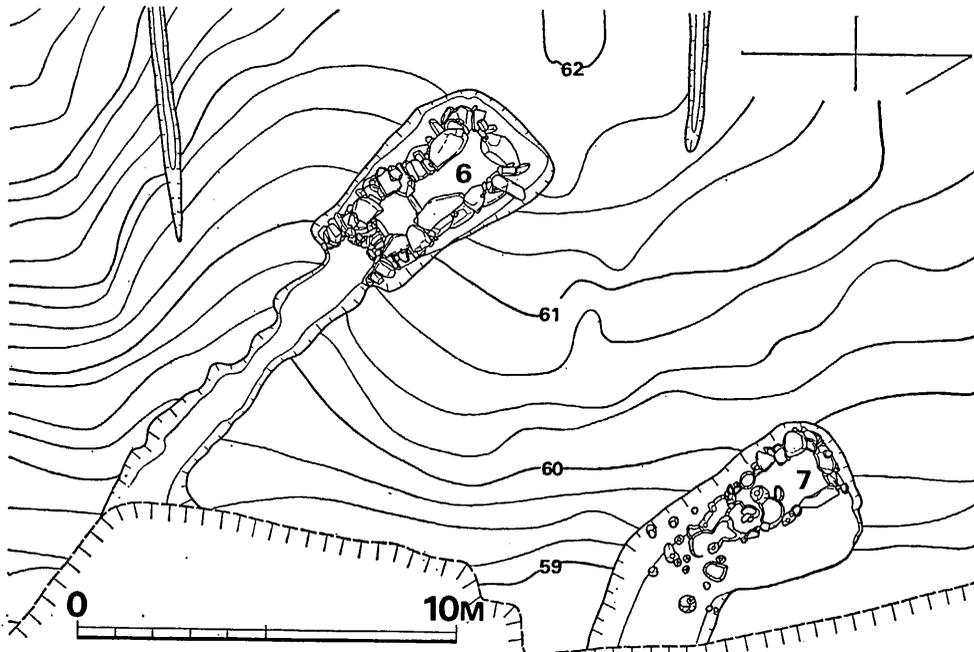
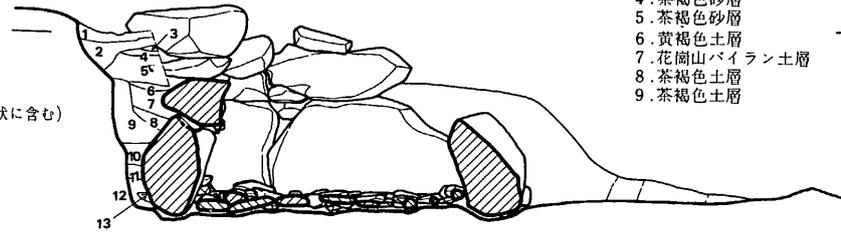


Fig. 32 第6・第7号墳丘測量図 (縮尺1/200)

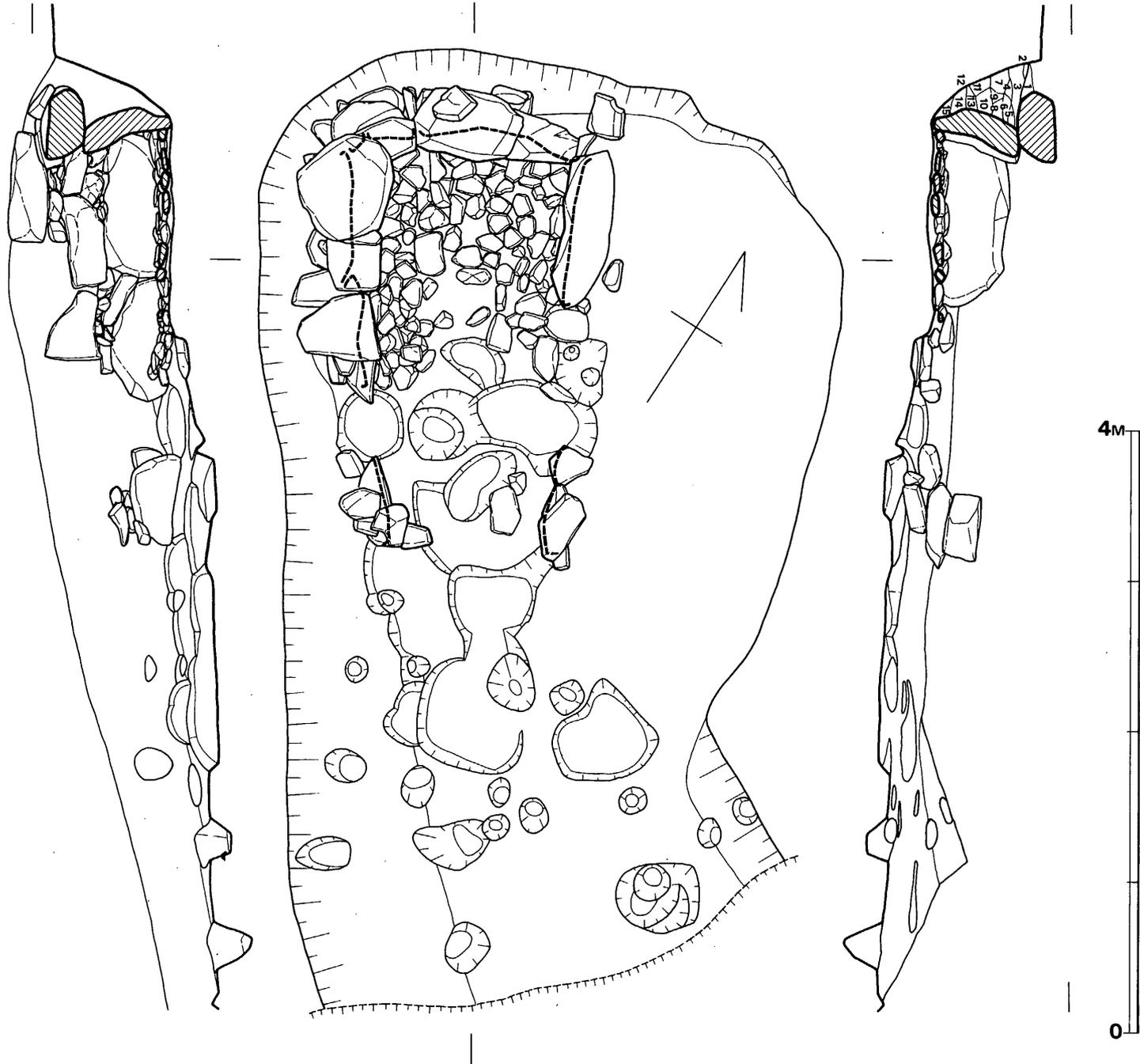
1. 表土層
2. 褐色土層
3. 花崗岩バイラン土層
4. 褐色土層 (白色砂を含む)
5. 暗褐色土層
6. 明褐色土層 (やや粘質あり)
7. 褐色土層 (②よりやや暗色)
8. 白色砂層
9. 茶褐色土層 (花崗岩バイラン土をブロック状に含む)
10. " (白色砂を若干含む)
11. 茶褐色土層 (⑩より粒子が細かい)
12. 茶褐色土層 (⑩よりさらに粒子が細かい)
13. 白色粘土層



1. 褐色土層
2. 黄褐色土層
3. 茶褐色土層
4. 茶褐色砂層
5. 茶褐色土層
6. 黄褐色土層
7. 花崗山バイラン土層
8. 茶褐色土層
9. 茶褐色土層

10. 花崗岩バイラン土層
11. 白色砂質土混り褐色土層
12. 褐色土層
13. 暗褐色土層
14. 茶褐色土層
15. 花崗岩バイランドを含む褐色土層

6000M



4M

0

Fig. 33 第7号墳石室実測図(縮尺1/40)

7 八隈7号墳

墳丘 (Fig. 32, P.L. 33)

墳丘は第5・6号墳と同様に全て取り払われていた。当墳の墓壙と第8号墳の墓道との最短距離は4.2mであるので、墳丘の径は約11mを出るまいと考えられる。

墓壙は東壁が盗掘に際して壊されており、詳細は不明であるが、奥壁側の北東寄りに若干段がみられるので、その点をコーナーだとすると、奥壁側で巾約3mとなり、墓壙と墓道の屈折点では巾約2.8mとなる。石室用材の裏込めは奥壁側と、西壁側で版築が認められる。

石室 (Fig. 33, P.L. 33)

内部主体は、主軸をN-35°-Wにとり、南東方向に開口する横穴式石室である。石室構造については用材の多くが腰石にいたるまで破壊されているので、詳細は不明であるが、以下に述べる理由により、全長約4mの複室、両袖式と考えられる。

まず玄室であるが、西側の2個の腰石に隣接する円形のピットは玄門を据えた掘り方と考えられる。さらにその東側のピットは仕切り石の、そのさらに東側のピットは東側玄門のそれぞれの掘り方と考えられる。すれば玄室の規模は長さ1.7m、巾は奥壁側で1.56m、玄門側で1.2mと推定される。奥壁は2個の扁平な石を腰石として用いている。床面よりの高さは約60cmと低い。西壁は2個の用材を腰石とし、奥壁寄り、その上に2段の石を横積みしている。腰石の床面からの高さは50cm弱である。東側の壁は2ないし3個の腰石をもって築かれていたと考えられる。奥壁側腰石に南接してピット2口があり、それが南側腰石の掘り方と思われるからである。玄室床面は全面に敷石されていたのであろうが、中央部から仕切り石寄りにかけては荒されて残存状態が良くない。掘り方の上端から推定して玄門間の距離は約50cmと考えられる。

前室は両側壁の一部が残っている。その間の距離は中央部で1mはかる。玄門掘り方の南側上端及び、側壁用材の南端間の距離から推定して、長さは約80cmと考えられる。両側壁の中央南側にある瓢箪形ピット上半に接して前門があったと推定される。その間の距離はピットの東西距離から推して約60cmと思われる。

羨道は瓢箪形ピットの南端をもって終ると考えるのが妥当ではなかろうか。すれば羨道の長さは約1mとなる。羨道から墓道にかけての位置に多数のピットが認められたが、これらは盗掘か、あるいは古墳廃棄後の樹根痕であろう。

墓道は約1.4m羨道から延びたところで崖によって切られている。その位置で、底面巾約2mをはかる。

遺物 (Fig. 34・35)

玄室床面より2点のガラス小玉を、墓道埋土中より杯身1点を検出したにすぎない。

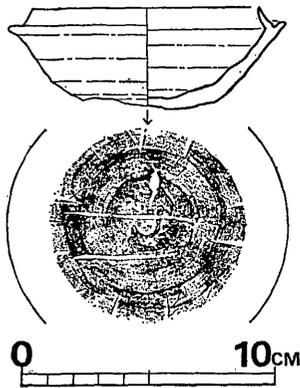


Fig. 34 第7号墳出土須恵器
実測図（縮尺1/2）



Fig. 35
第4号墳出土
小玉実測図
（縮尺1/2）

ガラス小玉 (Fig 35—1.2) は、径を各々
5 mm, 3 mmと異にするが、同様にライトブ
ルーを呈する。

杯身 (Fig. 34) はⅢ類に属する。立上り
は直線的に内傾して、端部は尖がる。受け
部はやや深いが短い。器高は3.9cmと径
の割には深い。灰色を呈し、堅微である。

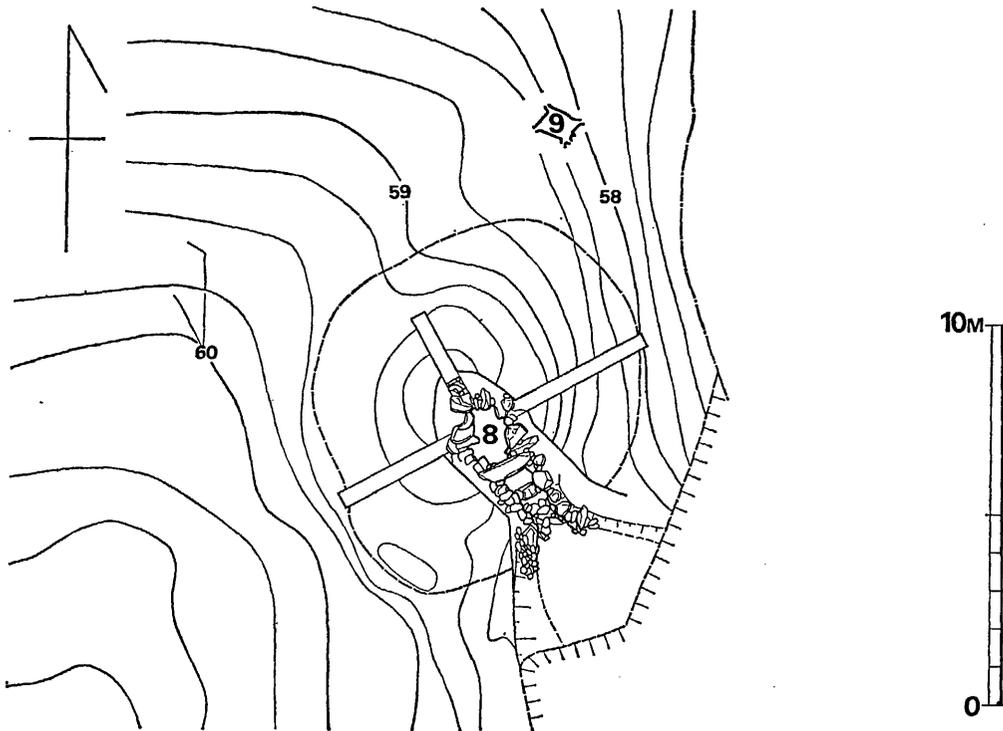


Fig. 36 第8・第9号墳墳丘実測図（縮尺1/200）

8 八 隈 8 号 墳

墳丘 (Fig 36, P L 34)

珍らしく墳丘を残していた古墳である。旧地表上に灰褐色土、灰黄色土あるいは明橙色土を盛り上げている。調査時においては最高所で68cmの盛り土を見たのであるが、本来は旧地表より1.4mの高さがあったと推定される。墳丘の径は東西方向で8.8mである。このうち盛り土による部分の東西径は約6.2mである。墓壙は最大巾を玄室中央部にし、上巾3.12mをはかる。最狭部は羨道中央で、上巾1.66mである。その点から墓道に向って広がり、崖で切られる下端では上巾3.5mとなる。墓壙と石室用材との間には赤色粘質土と白色砂質土を用いて版築している。

石室 (Fig ⑧, P L 34)

内部主体は、主軸をN-28°-Wにとり、南東方向に開口する全長約5mの複室、両袖式の横穴式石室である。残存状態は当古墳群中では極めて良好であり、玄門上では天井石が残っていた。

玄室は中央部で長さ1.94m、奥壁側で巾1.6m、袖の部分でも同様の1.6mである。奥壁は床面に対して71°の傾きである。腰石は2個の用材よりなり、床面よりの高さは西側の石で58cm、東側の石で70cmである。その上に3段ないし、4段の横積み石が残っている。側壁は西側で3個、東側で2個の石を腰石としている。床面からの高さは30~40cmであり、西側では用材の掘り方底面から玄室床面まで約50cmあるので、材そのものは割に大きい。玄門は床面よりの高さが東西共に50cmの方柱状の石を利用している。その間の距離は仕切り石上で88cmである。床面は敷石されている。墓壙床面上にある程度土砂を積みながら、上面がそろうように敷石している。玄室中央部で、土層の厚さが最も薄いのが、それでも、墓壙床面より敷石上面まで18cmはかる。

前室は両壁各々1個の腰石よりなる。中央部で長さ70cm、巾1.24mである。用いられている石材は小さく、西側の腰石など、床面からの高さは10cmにすぎない。前門は、西側で床面からの高さ70cm、東側で60cmの方柱状の石を利用しており、仕切り石上でその間の距離は80cmである。その上に2段に石を横積みして天井石を上に乗架している。

羨道部の長さは西側で2.1m、東側で1.8mはかり、末端では巾1.3mとなる。羨道部の用材は裏込めがなく、直接掘り方の壁に凭せ掛けている。

遺物 (Fig.37, P L.34-2・35)

遺物は前室から羨道にかけての埋土中から破碎された状態で出土した。床面からの出土品はない。銅鏡は墓道の埋土中より弥生式土器片と共に出土した。

出土品はつぎのとおりである。

(1) 装身具	耳環	4個
(2) 武器	鉄鏃	2本
(3) 銅鏡		1枚
(4) 土器	須恵器	8個体以上
	杯(蓋・身)	5個体
	壺蓋	1個体
	直口壺	1個体
	壺	1個体

耳環 (Fig.37-1~4, P.L.35-4)

1・2は対の金環、3・4は対の銀環である。環部外径は前者が2.5cm、後者は2.3cmである。保存状態は比較的良好である。

鉄鏃 (Fig. 37-5・6)

は、円頭広根斧箭式に属する。5は刃部巾は2.9cm、鋒部長は7.1cmである。

銅鏡 (Fig.37-7, P.L.35-3)の保存状態は良好である。小型の内行花文鏡で、平縁凸面である。8花文である。

須恵器 (Fig.38・39, P.L.34-2)

蓋 (Fig.38-1~4)

Ⅲ類 全てこの類に含まれる。口径の割に器高がある。口縁部は直立するが、1は内傾する。体部の篋削りは極めて粗雑である。暗灰色を呈し、軟質である。

杯身 (Fig. 38-5) 羨道から出土した小片である。立ち上がりは8.5mmあり、端部は尖がる。受け部は浅く、短かい。

壺蓋 (Fig.38-6) 墓道から出土した。平坦な天井部と体部の境に一条の沈線を有する。口縁部は外彎し、端部は丸い。ヨコナデは丁寧である。色調は灰褐色で、軟質である。

直口壺 (Fig 38-7) 墓道から破砕されて出土した。口縁部は接ぎ目から折れて、極く一部分を残すのみである。胴部最大径の位置よりやや上に2条の沈線を有する。肩から口縁にかけて

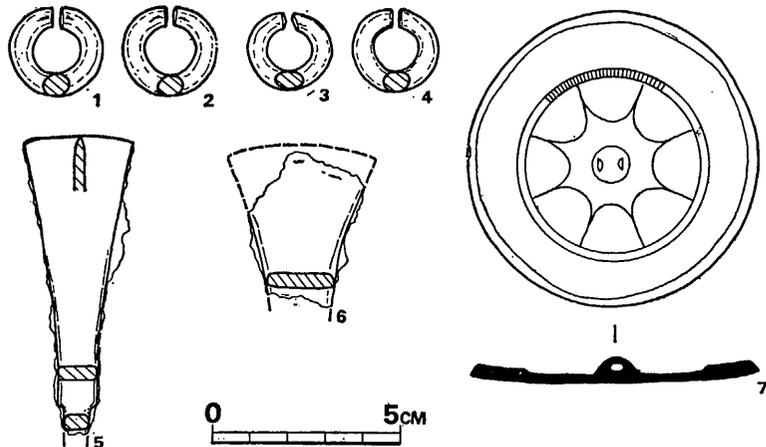


Fig. 37 第8号墳出土遺物実測図 (縮尺1/2)

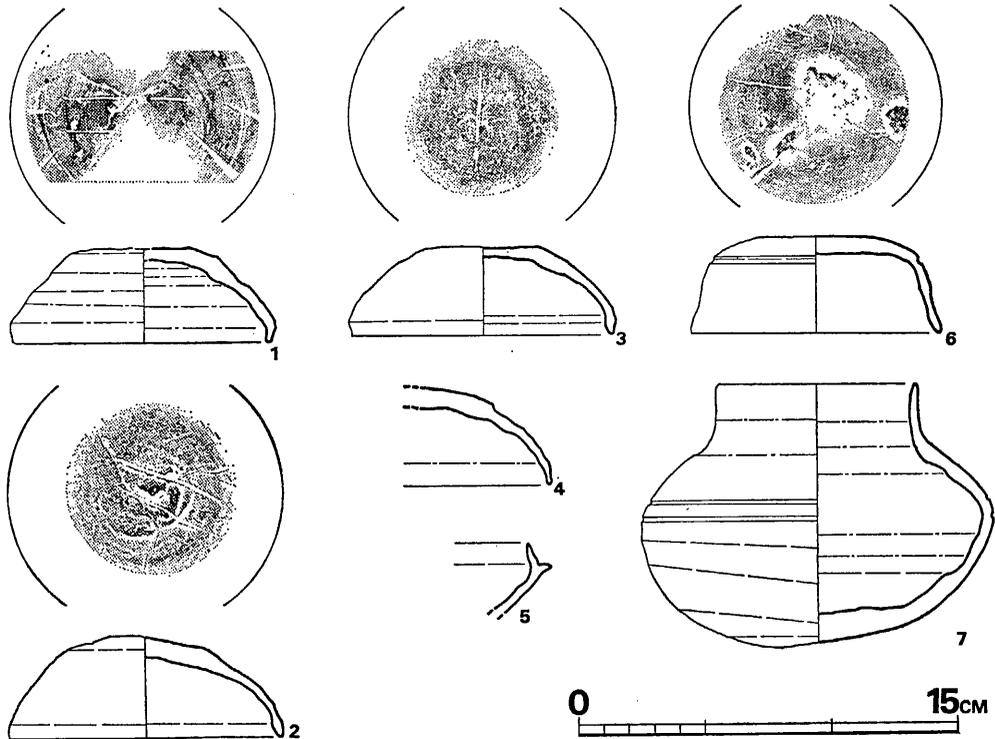


Fig. 38 第 8 号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

は、なだなかに移行する。直立する口縁の端部は丸い。全体に丁寧にナデられている。胎土中に多く砂粒を含んでいる。暗灰色を呈し、堅緻である。

壺 (Fig 39) 羨道及び墳丘から出土した。平坦な口縁の内外面から頸部にかけてヨコナデし、肩部にカキ目を施している。胴部以下は外面に籐状叩き目、内面に同心円叩きがみられる。口径19.3cm、胴部最大径33.7cm、器高35.7cmである。

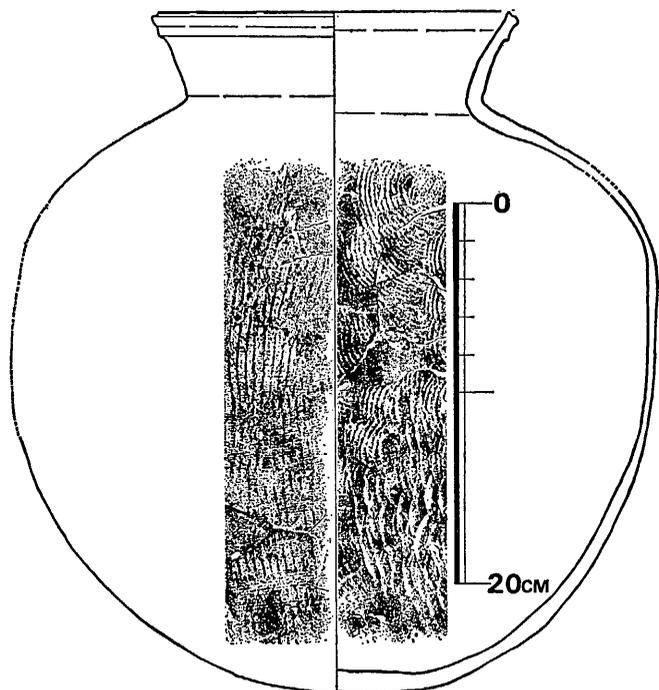


Fig. 39 第 8 号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/4)

9 八隈9号墳

8号墳の北側でみつかった小石室である。北側の墓壇壁は工事に際して破壊され、検出不可能であった。

石室 (Fig 40, PL 35-5)

主体部は、主軸をN-60°-Wにとっている。四面、各々1個の石を腰石としている。床面には敷石しているが、東壁側には壁と平行して長さ22cmの石があり、あたかも横穴式石室の仕切り石状をなしている。

遺物

石室及び墓壙中の遺物は皆無であった。

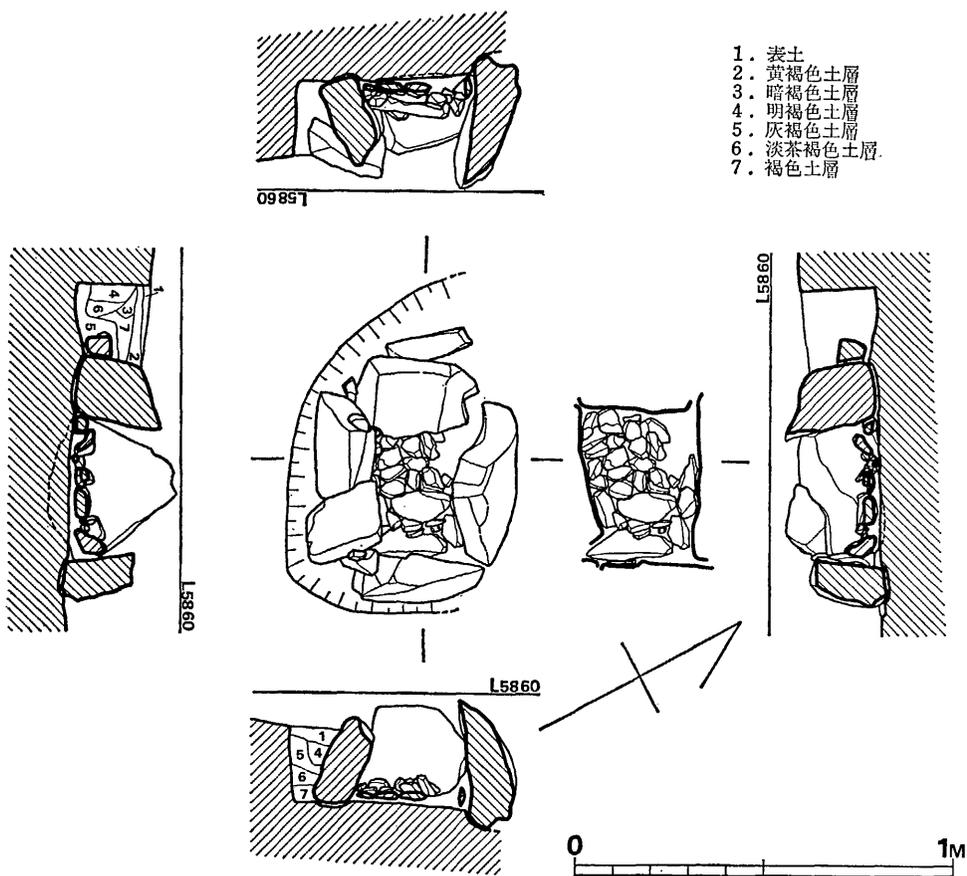


Fig. 40 第9号墳石室実測図 (縮尺1/40)

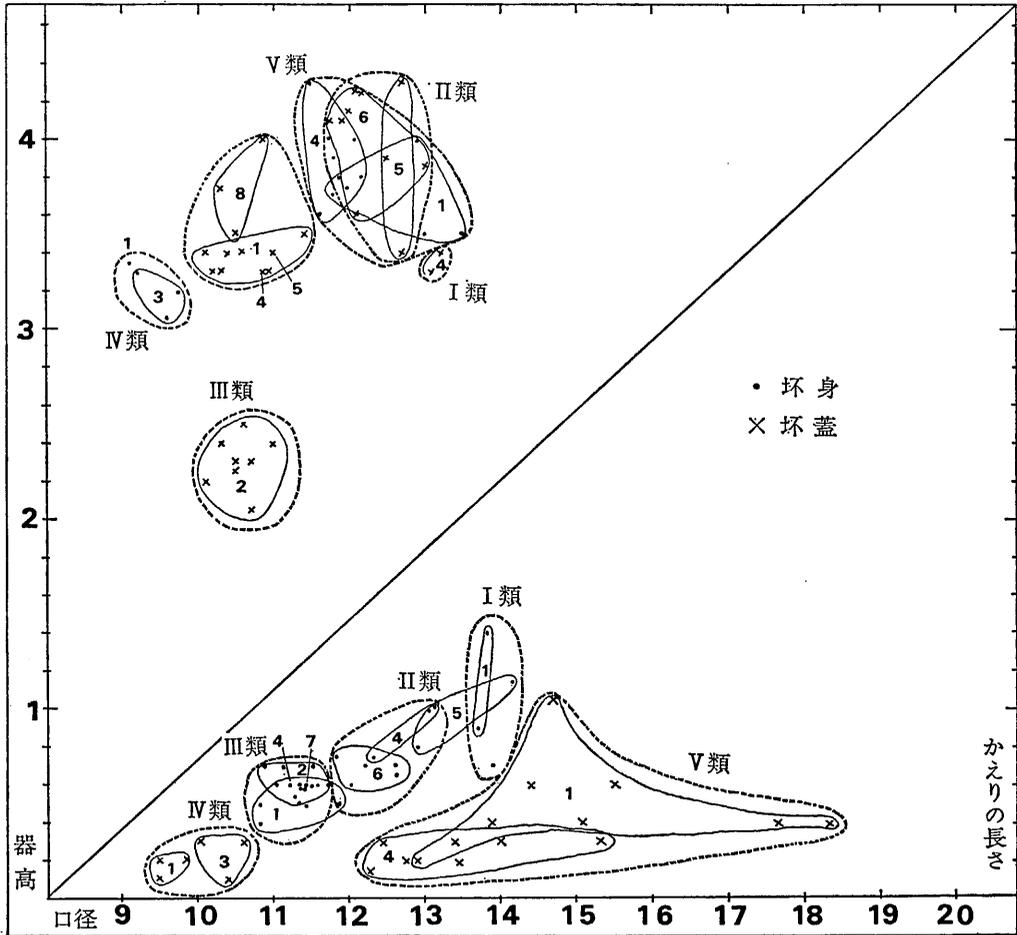
10 小 結

(1) 遺 物

a 杯の法量よりみた各古墳の編年

各古墳の生消時期を決定するうえで、器形変化の著しい須恵器杯について考察してみる。Tab. 1 は各古墳出土須恵器杯のうち、計測可能なもののみをドットしたものである。身や蓋で「かえり」のないものについては、その器高と口径を、「かえり」のあるものについては、その長さとお口径をそれぞれX軸、Y軸としている。この際、高台及びつまみについては器高計測の中に含めていない。

蓋及び身の分類はすでに述べてきたとおり、I類からV類まで区分している。先学のこれまでの研究にこの分類を鑑みると、I = III b, II = III b—IVa, III = IVa, IV = IV b, V = V—VIa



Tab. 1 古墳出土杯法量表 (単位cm, 表中のアラビア数字は古墳号名)

と考えられる。各古墳出土の各類杯について総括すると、次のようになる。

1号墳

副葬された状態で埋納されたものがないために、当古墳の盛期、あるいは追葬の最終期について正確に言及することはできない。出土した類はⅠ類からⅤ類まで全てそろっており、その量も他の古墳出土例を上回っている。このうち、集中している類は、Ⅲ類とⅤ類である。

2号墳

出土した類はⅢ類のみである。この古墳出土杯蓋は、1・4・5・7・8号出土のⅢ類蓋とその器高において顕著な差がある。つまり他例の器高が3.3cm～4cmに集中するのに対して当例は2.1cm～2.5cmに集中する。器形もほぼ均一化されている。後述する篋記号にしても同様である。

3号墳

Ⅲ類及びⅣ類が出土している。床面出土の杯は全てⅣ類であり、この時期に当古墳が廃棄されたと考えられる。

4号墳

Ⅳ類を除き、Ⅰ類からⅤ類まで出土している。床面出土例としてはⅢ類とⅤ類があり、このうち、Ⅴ類が集中しているので、この時期に当墳が廃棄されたと考えられる。

5号墳

Ⅰ類からⅢ類まで、及びⅤ類が出土している。このうち、床面出土したのはⅡ類である。Ⅴ類は墓道出土のものであり、他墳からの流れ込みも考えられる。Ⅰ類の時期に築造され、Ⅲ類の時期に埋納を終えたと考えるのが妥当であろう。

6号墳

全てⅡ類に含まれるが、杯身のうち1点(Fig31—8)は、Ⅰ類に入れたほうが妥当かと思う。いずれにせよ、追葬の最終期はⅡ類の時期に求められる。

7号墳

墓道出土の1点のみであり、Ⅲ類に含められるが、盗掘がなければ、床面出土の可能性として、Ⅳ類以降まであったと考えられる。

8号墳

前室から羨道にかけて、Ⅲ類のみが出土している。床面出土品がないので詳細は不明であり、その前後の時期を考慮する必要があるだろう。

9号墳

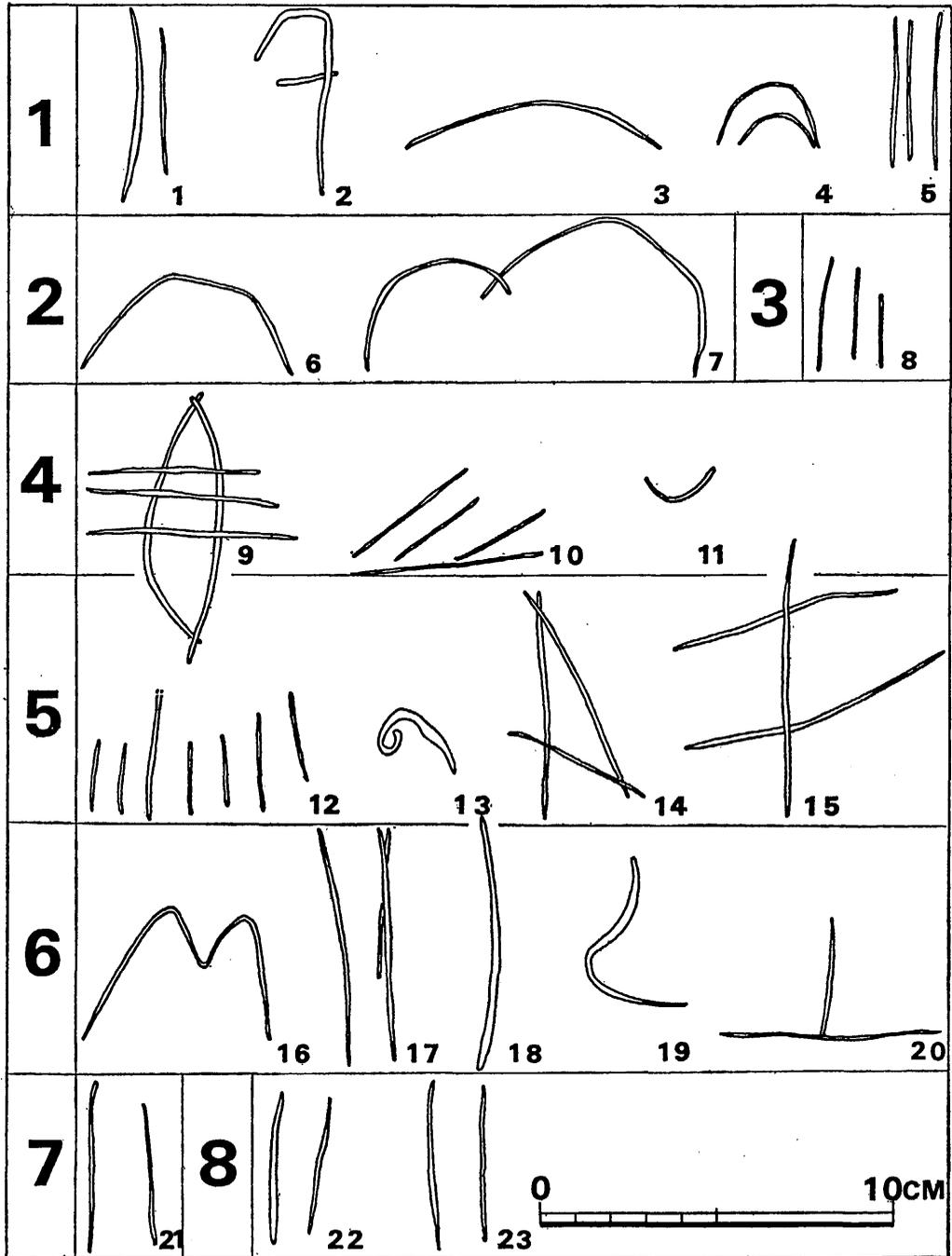
出土品がまったくなく、杯については考慮のし

分類 古墳号	I	II	III	IV	V
1					
2			■		
3			■		
4				■	
5		■			
6		■			
7				■	
8			---		
9					

Tab. 2 古墳出土杯一覧表

ようがない。

以上を総括すると、Tab.2のようになる。なお太線で記した時期は最終追葬時期を表わしている。



Tab. 3 古墳出土地記号一覧表 (太字数字は古墳号名)

b 篋記号

各古墳出土須恵器のうち、杯に附された篋記号のみを集めたのがTab 3である。各古墳それぞれ代表的な記号があり、以下のとおりである。

1号墳では4の記号が多く、それはⅢ類に含まれる。2号墳は6及び7のようなU字形及びU字形の2連続きであり、Ⅲ類に含まれる。3号墳は8の記号がみられ、Ⅲ類である。4号墳は各種の記号があるが、10及び11のものが多く、前者はⅡ類、後者はⅢ類である。5号墳の記号もバラエティーに富むが、16の記号が主体であり、Ⅱ類に含まれる。6号墳出土杯の記号のうち圧倒的に多いのは16で、Ⅱ類に含まれる。7及び8号墳の記号は同種で、両者共Ⅲ類である。

以上のように、各古墳ごとに集中して多い篋記号があるのは、副葬に際して、一定数の杯を同一窯よりもたらしたからであろう。当遺跡の近郊で、須恵器の供給が考えられるのは、当然牛頸地区であり、この地域古窯跡出土須恵器との製作法及び型式面での比較と同時に、篋記号の対照が必要となろう。その意味で、平田窯跡A地点1号窯出土品中にTab. 3—4に類似した記号が、B地点1号窯中出土品に11に類似した記号がみられることは興味深い。^{註1}

c 馬具と武器の埋納について

各古墳のうち馬具が出土したのは、1号・3号・4号・6号である。轡はいづれも素環の鏡板を附属させたものであり、雲珠や辻金具と共に、金銅製の鏡板は皆無である。鞍や鐙は出土していない。木製であり、鉄張りもされていなかったのだろうか。いづれにしても装飾性に貧しく実用一点張りである。なお1号墳の場合、馬鈴の出土から鑑みて、金銅製馬具が納められていたとも考えられる。

各古墳より出土した武器は主に鉄鏃であり、1号墳では鏑の出土により、大刀が納められていたと考えられる。3号墳から直刀が出土している。

以上の事実を総括すると次のように考えられる。

- (1) 当古墳群の被葬者のうち比較的多くは乗馬をなしうる階層にある。
- (2) 馬の装備は単純で実用的である。ただし、1号墳のある時期の被葬者は金銅製馬具を装した可能性がある。
- (3) 武器は貧弱であり、甲冑類はまったくない。

(2) 遺 構

a 石室の構造

各古墳の構造を比較すると Tab. 4 のようになる。

		1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳	9号墳	
主軸の方位		N60°E	N12°E	N58°W	N16°W	N38°W	N38°W	N35°W	N28°W	N60°W	
石室の全長		7.8	7?	7.2	5.8	4	4.92	4	5	0.8	
玄 室	長さ	3.12	3.5?	2.3	2.45	2	2.5	1.7	1.94	0.8	
	巾	奥壁側	2.2	1.8?	2.0	1.7	1.5	1.85	1.56	1.6	0.6
		玄門側	2.5	?		1.4	0.98	1.8	1.2	1.6	0.5
	敷石	有?	—	有	有	有	有	?	有	有	
玄門間巾		1.5		1.1	1.3	0.92	0.65	0.5	0.88	—	
前 室	長さ	2.0	—	1.2	1.4	0.9	0.94	0.8	0.7	—	
	巾	1.5	—	1.2	1.5~1.2	1.34	1.53	1	1.24	—	
	敷石	有?	—		有		—	—	—	—	
前門間巾		0.9	—	1.0	0.82	0.85	0.80	0.6	0.8	—	
羨道長さ		0.8	2+ α	2.7	1.8	1.3	1.2	1	2.1	—	
墓道長さ		7+ α	1.5+ α	2.5+ α	7	5.2	8+ α	1.4+ α	0.4+ α	—	
墓 塚	長さ	9	7.2	?	5.8	5	5.7	4.4?	4.2	1.7	
	巾	奥壁側	4.8	4.6	3.6	3.5	3	3.3	3	3.12	
		羨道側				2.2	2.3	2.75	2.8	1.66	1.2

Tab. 4 各古墳石室法量一覧表(単位メートル)

9基の石室は構造上3区分される。

I類) 1・3・4号墳の前室は縦長か正方形である。2号墳も同様でなかったかと思われる。

II類) 5~8号墳の前室は横長である。

III類) 9号墳は石棺であり、横穴式石室の退化形態である。

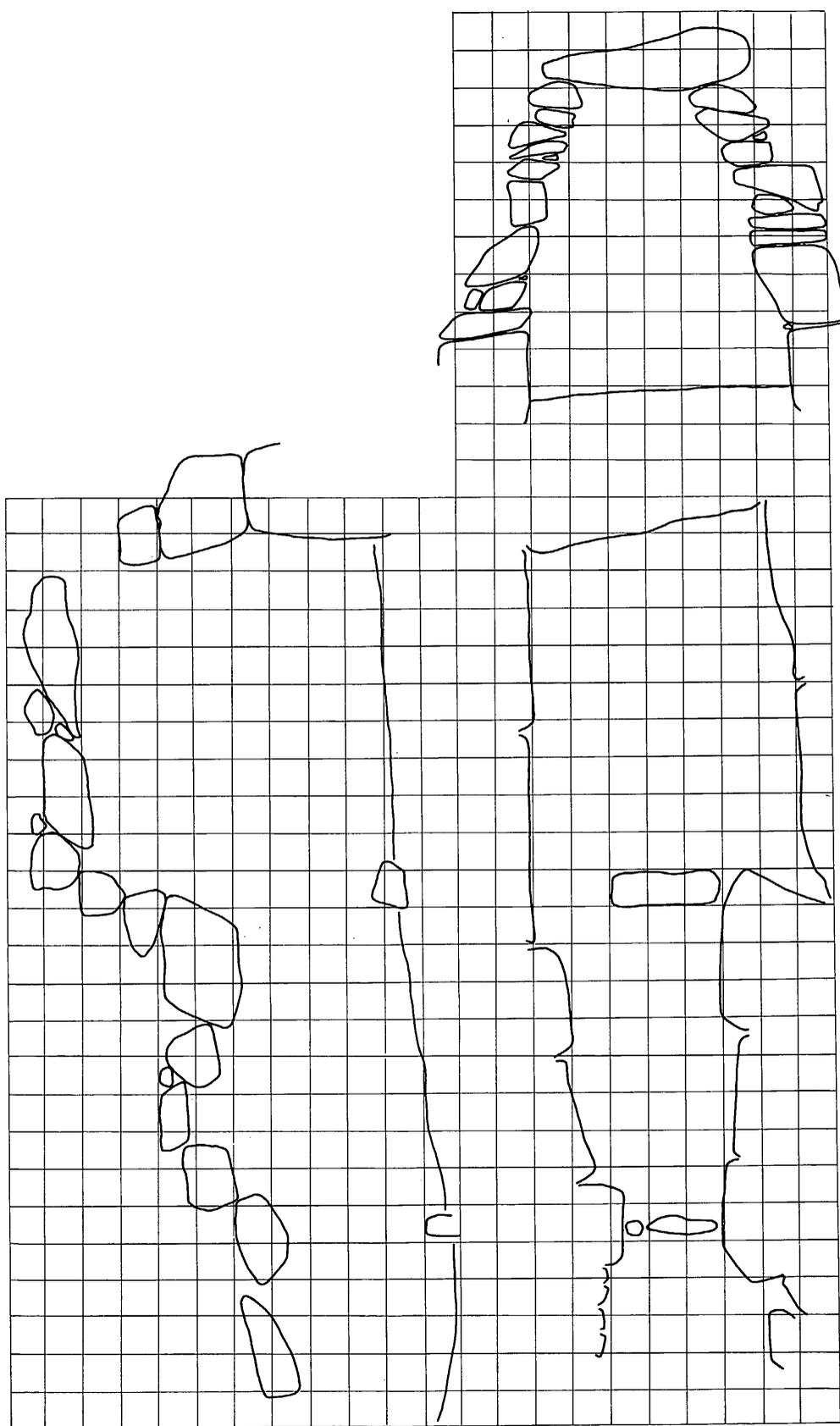
横穴式石室構築の企画にあたっては、厳格な尺度使用があったとされている。尾崎喜左雄氏は石室各部の計測値の最大公約数が大略35cmと30cmの二種に集約されることから、前者を高麗尺、後者を唐尺にあたとされている。

福岡平野周辺の後期古墳築造の企画にあたって、何らかの尺度の使用が推定されている。福岡市西区の相原古墳群、同片江古墳群の調査を実施した柳沢一男氏は、石室プラン各部位を詳細に検討した結果、横穴式石室築造にあたって使用された尺度は晋後尺—高麗尺—唐尺と変化したと推定されている。つまり「相原3号墳と6号墳の石室の検討の結果……企画の復原が可能になった。……福岡市周辺においては、高麗尺伝来以前には別の尺度の企画による石室があることが知られ、これを1尺24.5cmとする晋後尺にその源流を求めるのがもっとも妥当であることを知った。そして晋後尺から高麗尺への使用尺度の変化は6世紀中葉を遡らない時期、^{註2} おおむね後半代に行われたと推定される。」とのべ、片江7号墳については「袖巾55cm、羨道入口部より3石目に置かれている立石の巾90cmという計測値は唐尺換尺値2尺・3尺に近い。^{註3} 従って唐尺使用の可能性も一応勘案しておくべき……。」と述べられている。以上の観測は非常に興味のある問題点を含んでおり、九州の横穴式石室研究の新らたな進展をもたらすものと考えられる。横穴式石室を主体とする古墳の場合、その多く、恐らくは99%までが、盗掘にあり、石室は破壊され、副葬品が持ち出されている。また追葬の際には、以前埋納の副葬品を室外に掃き出したと推定されるので、古墳築造初年の決定には多くの困難が伴っているのが現状である。その際、築造の段階で墳丘中に埋められた遺物が一つの決め手となろう。前述の築造に際して使用された尺度の時代による変化と、墳丘中出土遺物の編年とを合わせ考えることによって、使用尺度の変化がより正確に理解されるであろう。なお、八隈古墳群では墳丘中出土遺物はない。柳沢氏の研究成果に基き、八隈古墳群各石室についても検討してみた。完全に残っていた唯一の石室である第1号墳にそれを代表させてみた (Tab. 5)。

第1節で既述したとおり、1号墳石室は奥壁が主軸に対して直角にならずその歪みに比例して玄室左右両壁も歪んでいる。また玄室袖石は左右対称でないため、一見片袖式に見える。こうした石室でも企画にあたって尺度を意識したのかどうか、疑問の残るところである。

高麗尺 (1尺=35cm) を利用して方眼を引くと、玄室は巾7尺、高さ8尺となる。長さについては北西壁10尺半、南東壁11尺であり、奥壁中央と仕切り石まででは丁度9尺となる。天井の巾は3尺、長さ8尺である。袖石間の巾4尺である。

2号墳は盗掘により、石材がないため詳細は不明であるが、玄室石材掘り方の上端は高麗尺の5尺に当る。3号墳は高麗尺を利用して測ると、端数が多い。因みに1尺=30cmとする唐尺を利用すると、全長21尺、玄室長7尺、巾6尺に近い。4号墳は高麗尺を利用すると全長16尺、玄室長6尺、巾5尺、前室長4尺となる。5号墳は唐尺を利用すると玄室長6尺、巾5尺、前室長2尺、巾4.5尺に近い。6号墳は高麗尺を利用して玄室長7尺、巾5尺、前室長2尺、巾4.5尺に近い。7号墳は高麗尺を利用して玄室長5尺、巾4尺、前室長2尺、巾3尺、全長12尺に近い。8号墳は唐尺を利用すると、玄室長7尺、巾5尺、前室長2尺、巾4尺、全長17尺に近い。



Tab. 5 第1号墳石室と高麗尺による方眼(1尺=35cm)

さて、以上のとおり、1・2・4～7号墳は高麗尺を、3・5・8号墳は唐尺を利用したとも考えられる。この推量が当を得たものかどうか、遺物の編年と対比させてみる。前節で述べた須恵器杯分類により、3号墳はⅢ、Ⅳ類を、5号墳はⅠ～Ⅲ類を、8号墳はⅢ類の杯を出土している。5号墳の場合、当古墳群出土須恵器杯の最古式を含んでいることになり、高麗尺から唐尺への変化という推定とは矛盾する。上述の尺度決定の作業が安易にすぎたのか、遺物の混入があったかのどちらかであろう。

b 群の構造

一つの古墳群中の各単位を知る上で、最も興味深い問題点を提供するのは墓道であろう。水野正好氏は墓道を根道・幹道・枝道・茎道の4種に区分し、集落から各古墳にいたる道について論述されている。^{註4} 実際、那珂川町観音山古墳群においては、延々と続く墓道が検出されている。八限古墳群の場合、僅か数メートルを残して、南側及び東側の崖法面によって切られており、全容を捉えることは不可能である。

前節で考察したとおり、石室構造は3種に分けたが、Ⅰ類の4号墳は5号墳の北東に位置し、両墓壙間の最短距離は約5mである。墳土を盛った時、当然相接するか、あるいは新旧関係によって切り合ったことが想定される。一方6号墳墓壙間との最短距離は9mをはかる。以上の理由から4・5号墳と6～8号墳は別単位ではなかろうかと思われる。築造時期についてはさらに前節で述べた杯による編年によって、4⇔5号墳（第2グループ）、6→7・8号墳（第3グループ）の先後関係が推定される。1～3号墳（第1グループ）は全てⅠ類の石室構造を持ち、出土遺物や、尺の関係から1→2→3号の関係にある。

以上1～8号墳は3つの単位よりなり各単位の築造時期差について考察したが、各古墳の最終追葬時は築造時期差とは平行でない。第1グループでは1号墳が、第2グループでは4号墳が最終期まで追葬され、Ⅴ類の杯を出土している。第3グループは7号墳がⅣかⅤの時期まで追葬されたと考えられる。この場合単葬墓である9号墳が第3グループの最終墓とも思われる。

以上3単位のグループのうち、第1グループの遺物の内容が最も豊富であり、3つのグループの中では有勢であったことが知られる。特に1号墳は石室も飛び抜けて大きく、使用された石材も巨大である。立地にしても丘陵中央にあり、占地の面からも、最も好位置にある。1号墳に最初葬られた人間の死を契機としてこの古墳群が営まれ、その家族が有位を保つなかで、第2、第3のグループも先葬者との類縁関係にもとづいて埋葬されていったことが窺える。

これらの被葬者との関連については、次章、集落遺跡の説明の後に、再考したい。（酒井仁夫）

- 註 1. 坂詰秀一「筑前平田窯跡」有山閣 1969
 2. 柳沢一男「相原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集 p51 1974
 3. 柳沢一男「片江古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集 p79 1973
 4. 水野正好『群集墳の構造と性格』「古代史発掘一6」講談社 1975

土 壙 墓

2号墳を切って、3基の土壙墓が検出された。1号及び2号土壙墓はさらに、配石溝状遺構によって墓壙の一部を破壊されていた。人骨の保存状態は比較的良好であった。

第1号土壙墓 (Fig. 41, PL. 36—1)

北側及び西側壁は、配石溝状遺構によって切られていたため、正確には言えないが、略方形を呈していたと考えられる。墓壙の深さは約70cm、底面で約60cm×70cmである。

埋葬状態

墓壙の中央には、底面より53cmの位置に標石が置かれていた。この石は一辺約30cmの四角い花崗岩であり、古墳石材によく見られる形状をしている。墓壙中に東側より砂質土と赤色粘質土を交互に落とし込み、約15cmの厚さに堆積させて後、人骨を埋葬している。

人骨

埋葬形態は横臥屈葬で、膝頭を肩甲骨側まで強く折り、その上に下顎をのせている。頭蓋は残存していなかった。左大腿骨の長さは37.5cmである。頭位はS—50°—Eである。

第2号土壙墓 (Fig. 41, PL. 36—2・37—1)

第1号墓の北、第3号墓の東に位置する。墓壙は方形を呈し、底面で83cm×111cmをはかり深さ約80cmである。

埋葬状態

墓壙の底面に人骨を置き、上に灰白色砂質土や赤色粘質土、花崗岩小礫を混ぜて、層位をなすことなく、恐らくは一度に積み込まれたものであろう。上層に長さ30~40cm大の花崗岩礫をのせている。

人骨

埋葬形態は、仰臥屈葬で両腕を胸に組み、上に肩巾に等しく大腿骨を折っている。右大腿骨長は41.7cmである。頭位はN—11°—Wである。

第3号土壙墓 (Fig. 42, PL. 36—2・37—2)

第2号墳墓壙の東北隅を切って作られている。略方形を呈し、73cm×122cmをはかり、深さは約90cmである。

埋葬状態

墓壙床面より、人骨の周囲から鉄製角釘が出土した。釘の長さは最大7.5cm、他は3.5cmから5cmである。恐らくは板組合わせの木棺中に埋葬されたものであろう。

人骨

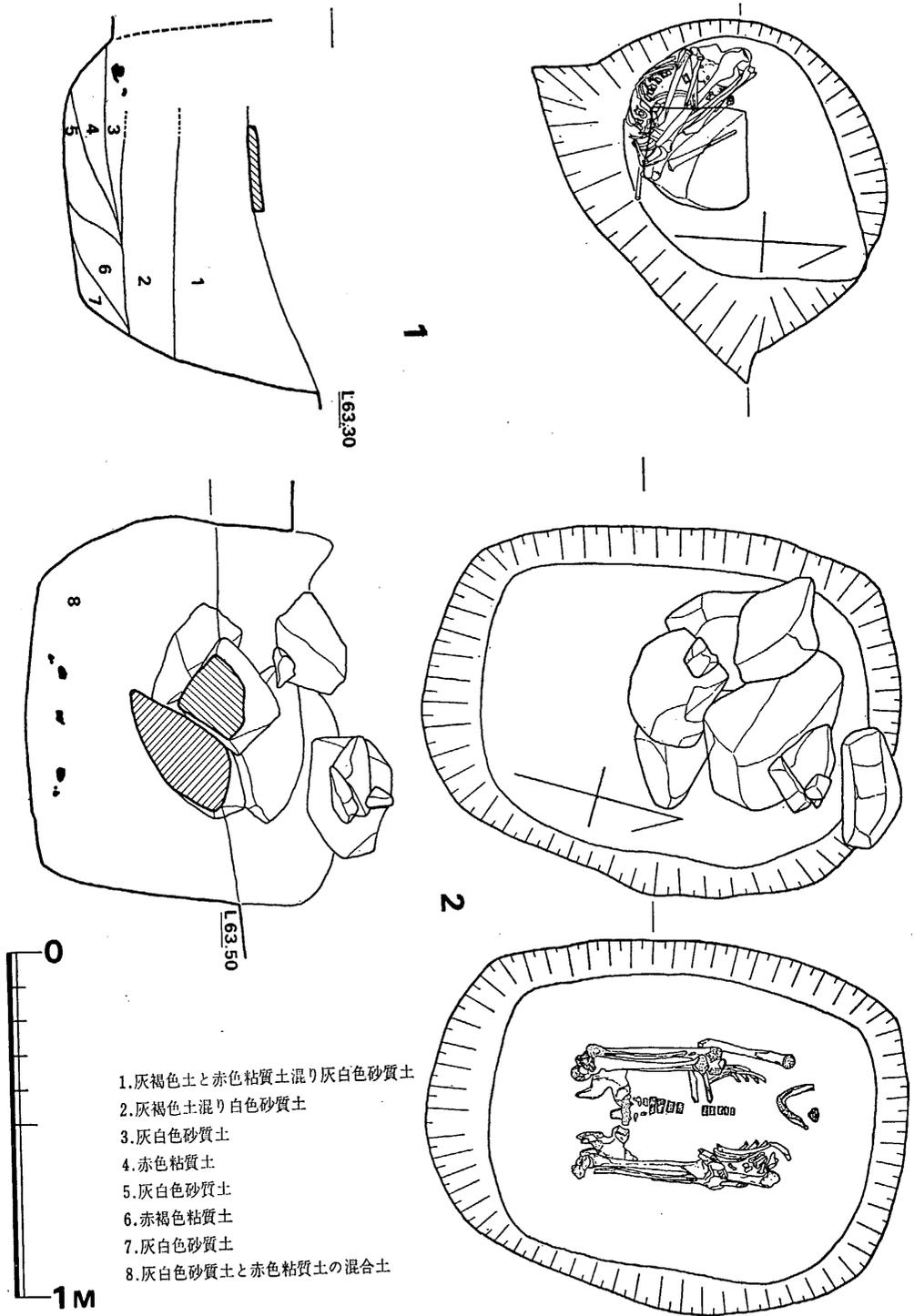


Fig. 41 第1・第2号土壙墓実測図 (縮尺1/20)

埋葬形態は、横臥屈葬である。左肩を下にした手甲は左膝頭の位置に、右手甲は胸前に置かれていたと考えられる。頭蓋は残っていない。頭位は $N-10^{\circ}-W$ で、第2号土墳墓の人骨とほぼ等しい。

小結

中世の土墳墓は筑紫野市内の調査においても、各所から発見されている。

1) 山の口遺跡

底辺長 $140\text{cm} \times 85\text{cm}$ で、木棺を使用した可能性がある。内部より糸切り底の杯^(註1)が出土している。

2) 桶田山遺跡

木棺墓から5基検出されている。いづれも、鉄釘が出土しているところから、木棺とみなされている。副葬品として刀子、へら切り離し底^(註2)の土師器杯が出土している。

3) 唐人塚遺跡

一辺の長さ 1m 前後の方形土墳墓が4基検出されており、人骨が屈葬の状態^(註3)で埋葬されていた。中には洪武通宝が副葬されていた。

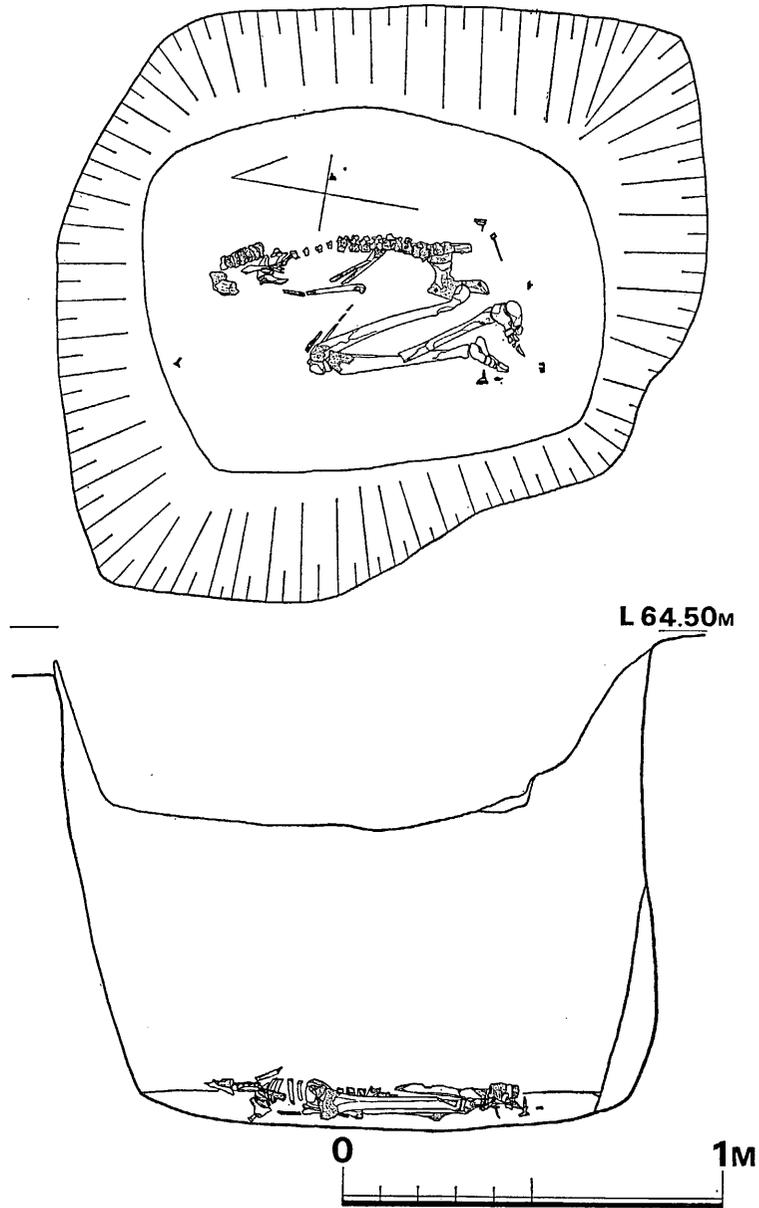


Fig. 42 第3号土墳墓実測図(縮尺1/20)

4) 剣塚遺跡

(註4)
火葬墓2基，木棺墓8基，土墳墓1基が検出されている。

5) 塔ノ原遺跡

2基の土墳墓が検出されている。1基は230cm×80cmの長方形を呈し，中に窺起こし底の土師器皿6枚が副葬されていた。他の1基は長さ130cmの楕円形を呈し，糸切り底の杯が1枚副葬されていた。(註5)

6) 原口遺跡

(註6)
6基の中世土墳墓が検出されている。

以上，概述したとおり，これら土墳墓は木棺を埋納したものが多く，時代は，土師器杯や唐人塚出土の宋銭から見て鎌倉から室町時代にかかるものと考えられる。八隈遺跡発見の土墳墓の時期については，確たる副葬品がなく，決め手がないが，鉄製角釘の形からみて，同種のもを出土した桶田山検出木棺墓の時期と近いのではなかろうか。また，八隈検出土墳墓は，いづれも7世紀にかかる古墳を破壊した上に造られ，さらに近世の石組遺構によって切られていることから，消極的ではあるが，同様の時期が首肯される。(酒井仁夫)

- 註 1) 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書—VI—1975
2) 同上
3) 「祖先のあしあと」筑紫野市所在遺跡の調査報告会資料
4) 同上
5) 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書—IV—(本文編)1974
6) 赤崎敏男氏の御教示による。

IV 集落遺跡の調査

1 第1地点の調査 (Fig. 43, PL. 38, 39)

丘陵の鞍部には10基の後期古墳(1基は崖崩れのため消滅)が、又、平坦部端には前期古墳である原口古墳をはじめ、数基の古墳が営なまれている。第1地点はこれらの古墳にはさまれた平坦部西隅に位置する。遺構としては弥生時代中期から古墳時代後期にかけての住居跡15軒(+ α)、溝状遺構、ピット群、江戸時代から明治初期にかけての建物遺構、竪穴等が検出された。遺物は中期・後期弥生式土器、古式土師器、須恵器、土製品、石器、陶器等が出土している。

(1) 弥生時代の遺構と遺物

第3号住居跡 (Fig. 44, PL. 40-1)

平面形は不整円形を呈し、規模は径約4.6mを有する。東部壁附近は攪乱をうけている。住居跡の上部は削平をうけており、壁高5~10cmを測る。床面は比較的良好に締まっている。住居跡中央部では一辺80cm、深さ30cmの方形ピットが検出され、内部には、焼土混りの灰が詰っていた。壁もよく焼けていたことから炉跡として使用されたものであろう。柱穴としての並びは明らかでない。ピットは、床面から多数検出された。

出土遺物 (Fig. 45, PL. 45)

弥生式土器多数が出土した。主に床面東半部からの出土である。西半部より砥石2個、北東部より台石1個が出土したが、取上げ前に紛失した。

壺形土器 2は朝顔形に開く口縁部で、肥厚しながら立上る。口縁部上端に稜がつく。

甕形土器 1・3・4はいずれも「く」字口縁と称されているものである。1は口縁の立上りが強い。3の口縁下に斜めに刷毛目を入れ、頸部下に縦方向の刷毛目調整を施している。4は口縁部上端がはね上がるもので、内面は横ナデ、外面は縦方向の刷毛目調整である。外面に煤の付着が認められる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。

器台形土器 9・10はいずれも内外面に指頭調整痕が顕著である。9は口縁部上端が内側につまみ出されており、内面にしぼりの痕跡を残す。外面は横ナデ調整を施し、胎土、焼成ともに良好である。

鉢形土器 11はやや内彎気味に立上り、底部は平底をなす。内外面ともに横ナデ調整である。12は内反り気味に立上り、底部は欠損する。外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げている。



Fig. 43 第1地点遺構配置図(縮尺1/200)

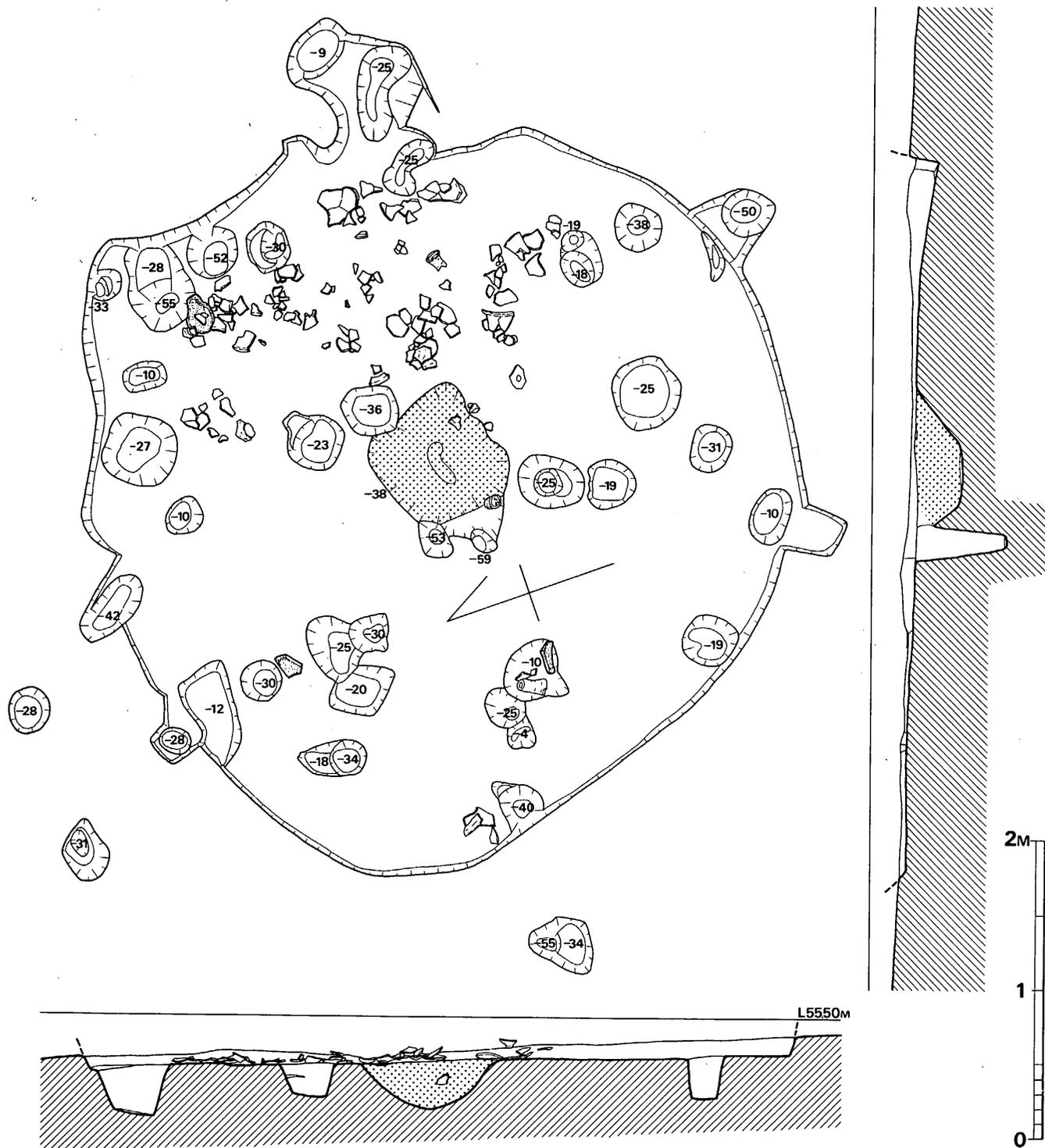


Fig. 44 第1地点第3号住居跡実測図(縮尺1/40)

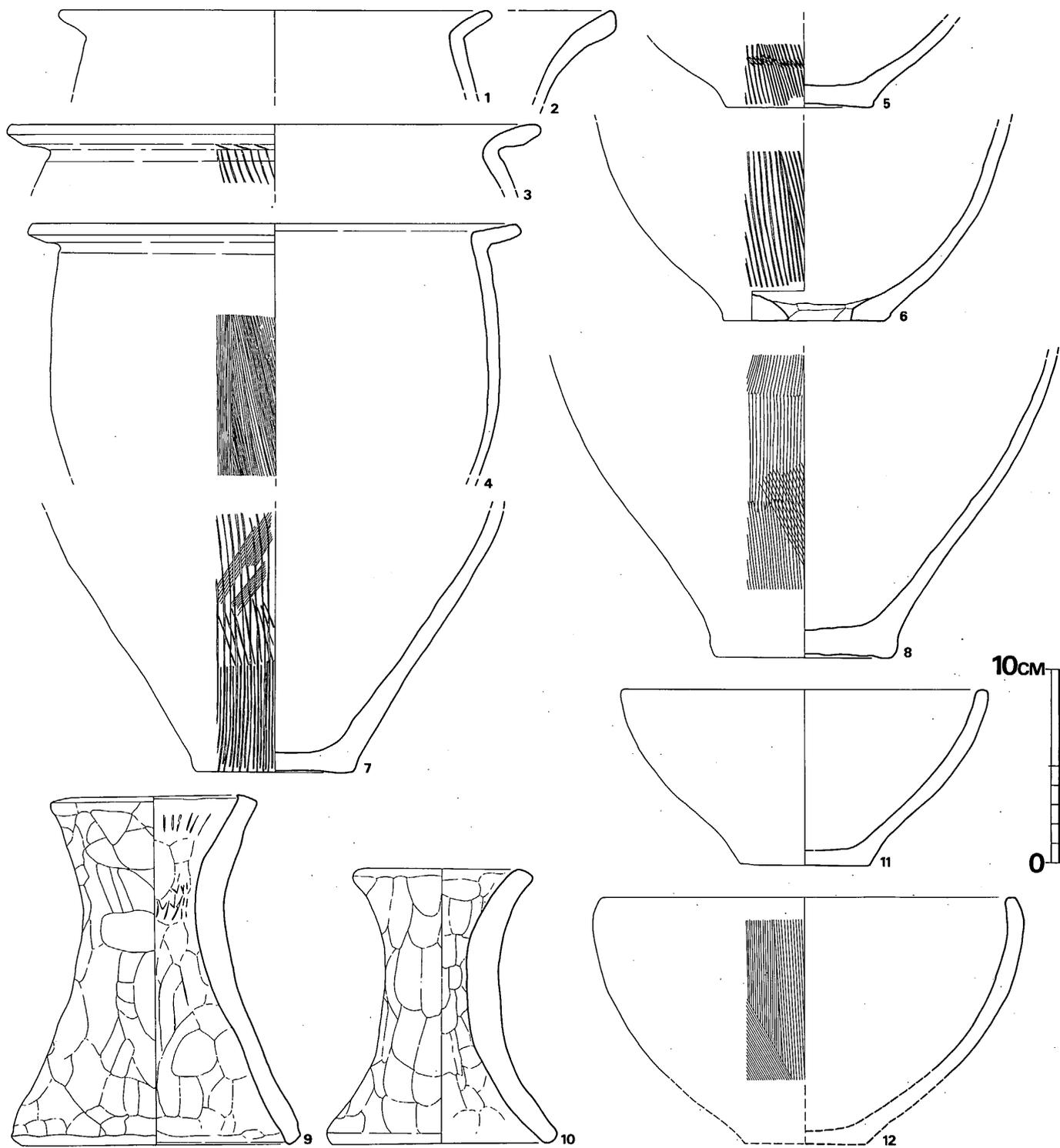


Fig. 45 第1地点第3号住居跡出土土器実測図(縮尺1/3)

外面に靱痕を残す。胎土に砂粒を含むが焼成良好である。暗茶褐色を呈する。

底部 5・6は壺形土器, 7・8は甕形土器の底部であろう。5はやや上げ底である。外面に刷毛目調整し, 胎土, 焼成ともに良好である。灰茶褐色を呈する。6は焼成後の底部穿孔が認められ, 煤が付着する。7は二種類の刷毛によって仕上げている。8は外面に煤の付着が認められ, 器壁は薄手である。褐色を呈し, 焼成は良好である。

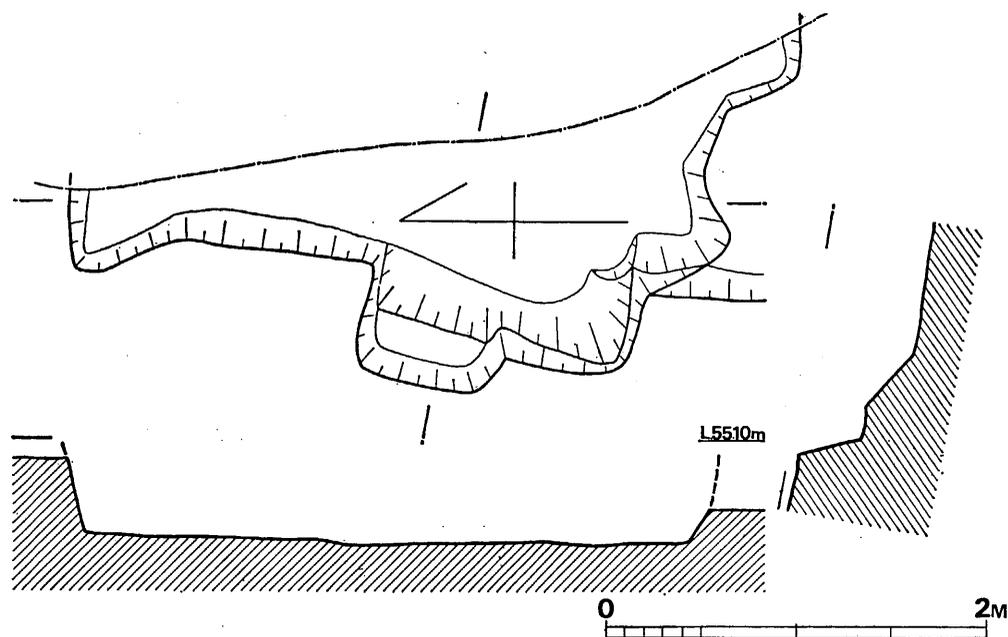


Fig. 46 第1地点第4号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第4号住居跡 (Fig. 46)

調査区境界際に位置するため, 西壁と南北両壁の一部を確認したのみである。形状は方形若しくは長方形を呈すると考えられる。西壁長3m, 壁高は西壁で40~50cmを測る。西壁南寄りには壁に掘込んだ階段状遺構を設けている。遺物は床面から弥生後期初頭に比定される器台形土器の完形品1点が出土したが, 取上げ前に盗難に会い紛失した。他に覆土中から壺形土器片が検出された。

出土遺物 (Fig. 47, PL. 46-1)

壺形土器 胴下部を欠損する。口縁部は垂直に短く立ち上り, 端部は軽く押えられている。内面は荒い刷毛目, 外面には刷毛目が入り, 口縁部は横ナデ調整している。胎土, 焼成ともに良好である。色調は茶褐色を呈し, 外面に煤が付着する。口径8.4cm。

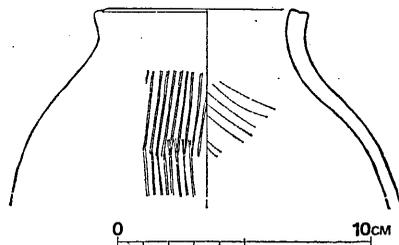


Fig. 47 第1地点第4号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)

第5号住居跡 (Fig. 49, PL. 40-2)

本住居跡は $5.70 \times 4.20m$ の長方形を呈する。軸線はほぼ南北である。東壁を古墳時代後期の第6号住居跡に切られている。壁の残りは良好で、約70cmを測る。南壁西寄りには階段状遺構を有する。床面は花崗岩のバイラン土のため、締り具合は悪い。床面東壁寄りに6箇所のピットが検出された。内2箇所のピットには焼土混りの灰が詰っており、周辺に掻き出したような状態で広がっていたが、附近3箇所のピットはその灰で覆われてはいない。他にも床面から壁に沿って6箇所ピットが検出されたが柱穴としての配列は不明である。

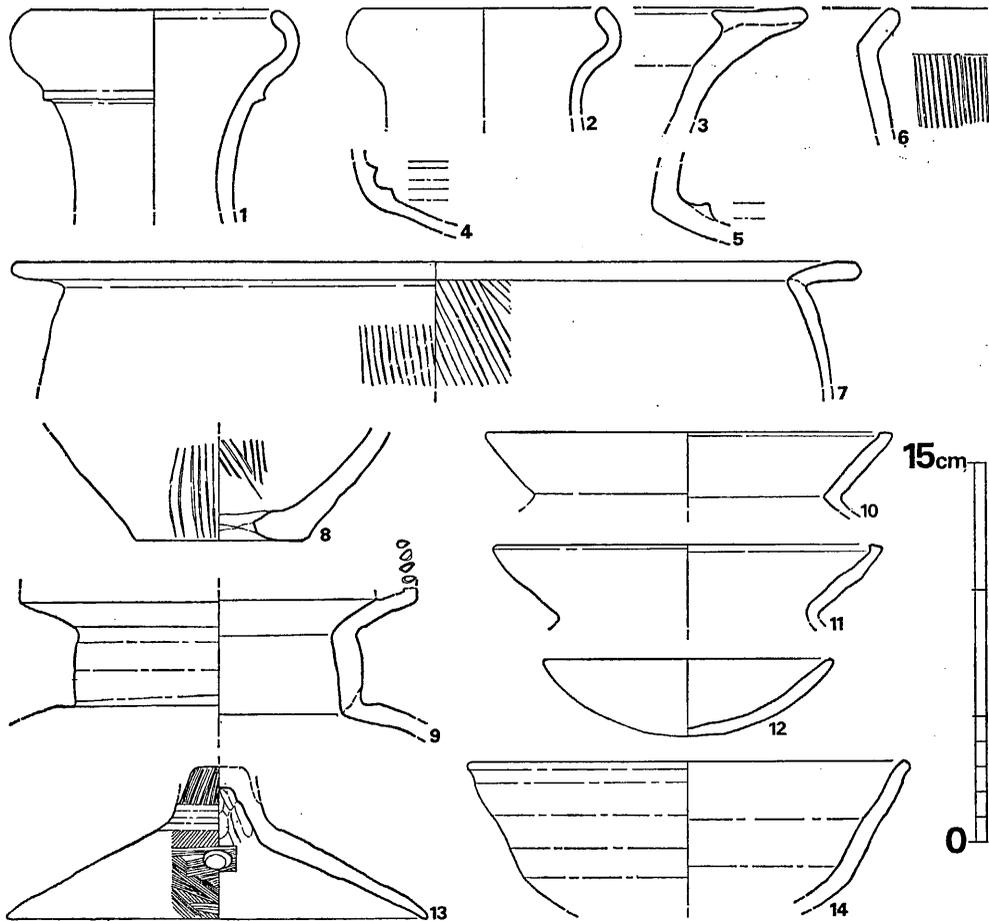


Fig. 48 第1地点第5号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)

出土遺物 (Fig. 48, PL. 46-2~5)

遺物は、北壁下床面から弥生式土器片が、南壁の階段状遺構附近の覆土中から流れ込んだ状態でまとまった土師器が検出された。

弥生式土器 (1~8)

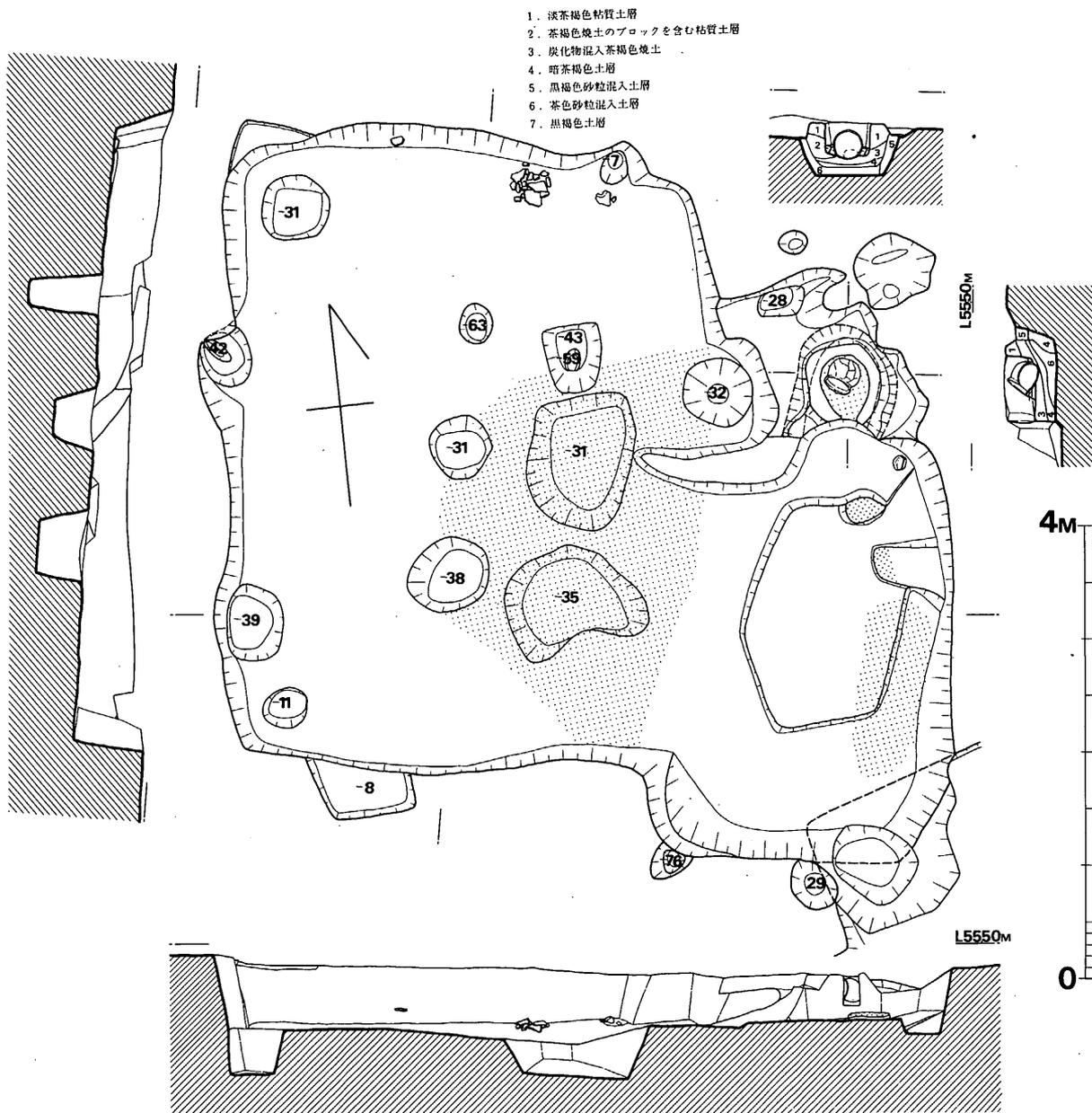


Fig. 49 第1地点第5・6号住居跡実測図(縮尺1/60)

壺形土器 1・2は袋状口縁を有する壺形土器の口縁部である。1は口縁下に1条の削り出し三角突帯を巡らす。内外面ともに横ナデ調整を施している。胎土、焼成ともに良好で、乳灰色を呈する。3は鋤状口縁をもち、口縁部上端が凹む。胎土に石英砂粒を含み、焼成は良好である。茶褐色を呈する。4・5は壺形土器の頸部で、4は頸部に2条の三角突帯を、5は頸部に1条の三角突帯を巡らす。胎土、焼成、色調などの特徴から1と4、3と5は同一個体と思われる。

甕形土器 7は強く外反する「く」の字状口縁をもつ甕で、胴中央部以下を欠く。最大径は口縁にあり、胴部の張りは弱い。口縁部内面は、横方向の刷毛目。頸部下内外面に縦方向の刷毛目が入る。外面に煤が付着している。全体に薄手である。砂粒を胎土に含むが、焼成は良好であり、色調は暗茶褐色を有する。口径33.2cm。

底部 8は壺の底部であろう。底部には焼成後の穿孔を有する。内外に刷毛目が入る。底部はナデ調整であり、胎土、焼成ともに良好である。淡褐色を呈する。

土師器 (9~14)

壺形土器 9は壺の頸部で、頸部の立上りは、やや丸味をもつ。内外面ともにナデ調整である。胎土は精製された粘土を用いており、焼成は良好。灰褐色を呈す。

甕形土器 10・11は甕の口縁部で、口唇部は内側にわずかにつまみ出されている。11は頸部からやや内彎気味に立上がる。いずれもナデ調整で、胎土、焼成ともに良好である。灰茶褐色を呈す。10は口径16cmを測る。

椀形土器 12は、内外面ナデ調整で、口径11.4cm、器高3.1cmを測る。灰色を呈し、焼成不良。13は口縁部下に凹線をもつ。器壁は厚く、焼成は不良、口径17.4cm。

脚部 13は台付鉢の脚部でやや内彎気味に広がり、脚端部径16.6cmを測る。外面は不定方向の櫛目調整のあと、ヘラ磨きで仕上げている。小孔は3ヶ所有する。精製された粘土を用いており、焼成は非常に良好である。

第7号住居跡 (Fig. 50, PL. 41-2)

本住居跡は隅丸方形を呈し、東西約5.8m、南北約5.5mの規模を有する。床面積は約31.9m²で、北壁下には周溝を認める。東側壁は第8号住居跡を切っており、東側壁前面の床面には後世の掘込みによる攪乱が認められる。床面の縮り具合は比較的良好で、中央部附近では、薄い焼土混りの灰層の広がり確認された。西南隅には1.05×0.85m、深さ0.83mを有する二段掘りの楕円形ピットを配する。内部から丹塗土器片多数が検出された。他に住居跡内から多数のピットを検出したが、柱穴としての配列を明確にすることは出来なかった。炉跡は認められない。

出土遺物 (Fig. 51~53, PL. 47)

出土遺物は弥生式土器が大半を占めるが、そのほとんどが細片である。口縁部等の数から類推すると少なくとも30個体以上にのぼる。また東壁側の後世の落込みと考えられる攪乱部から

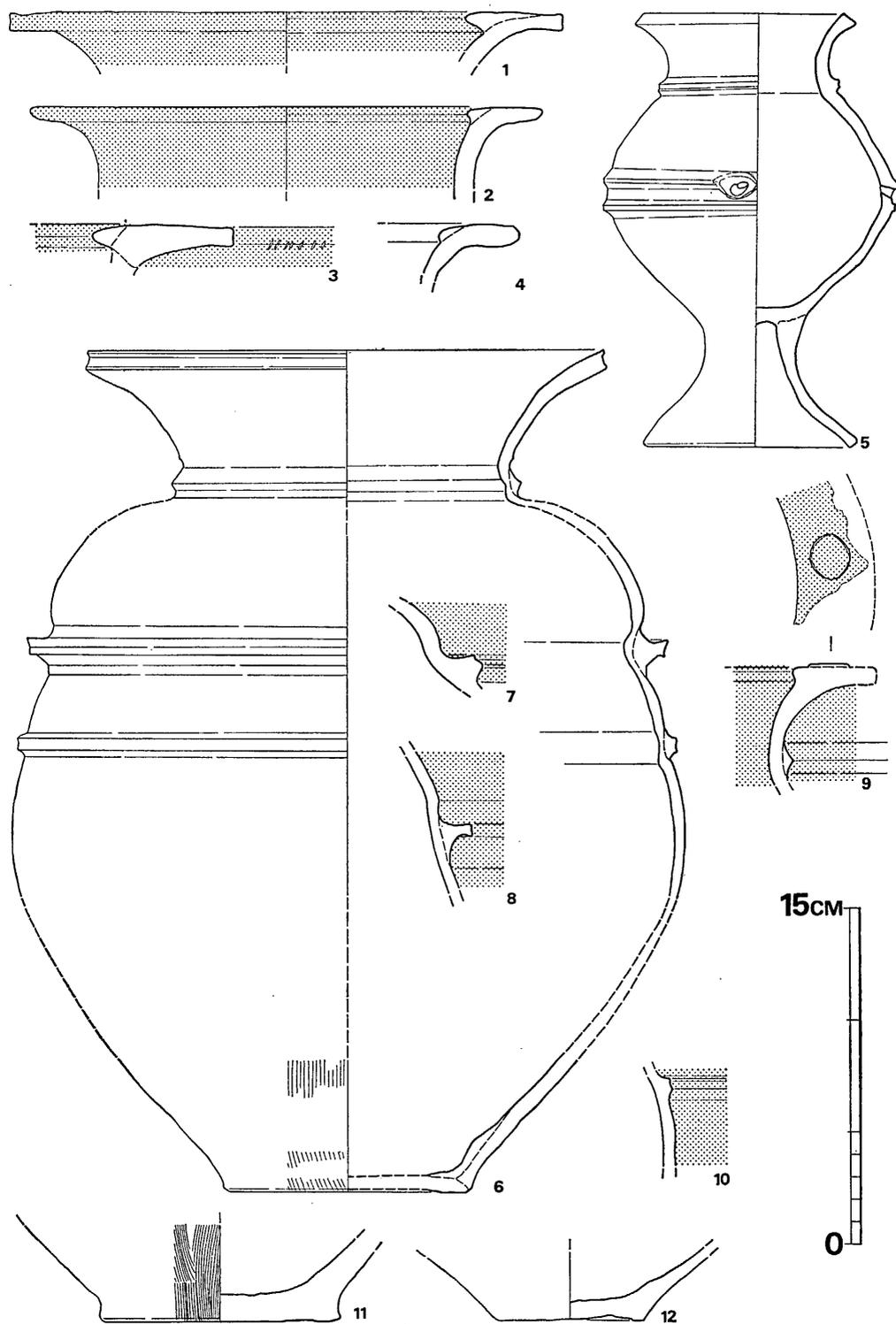


Fig. 51 第1地点第7号住居跡出土土器実測図① (縮尺1/3)

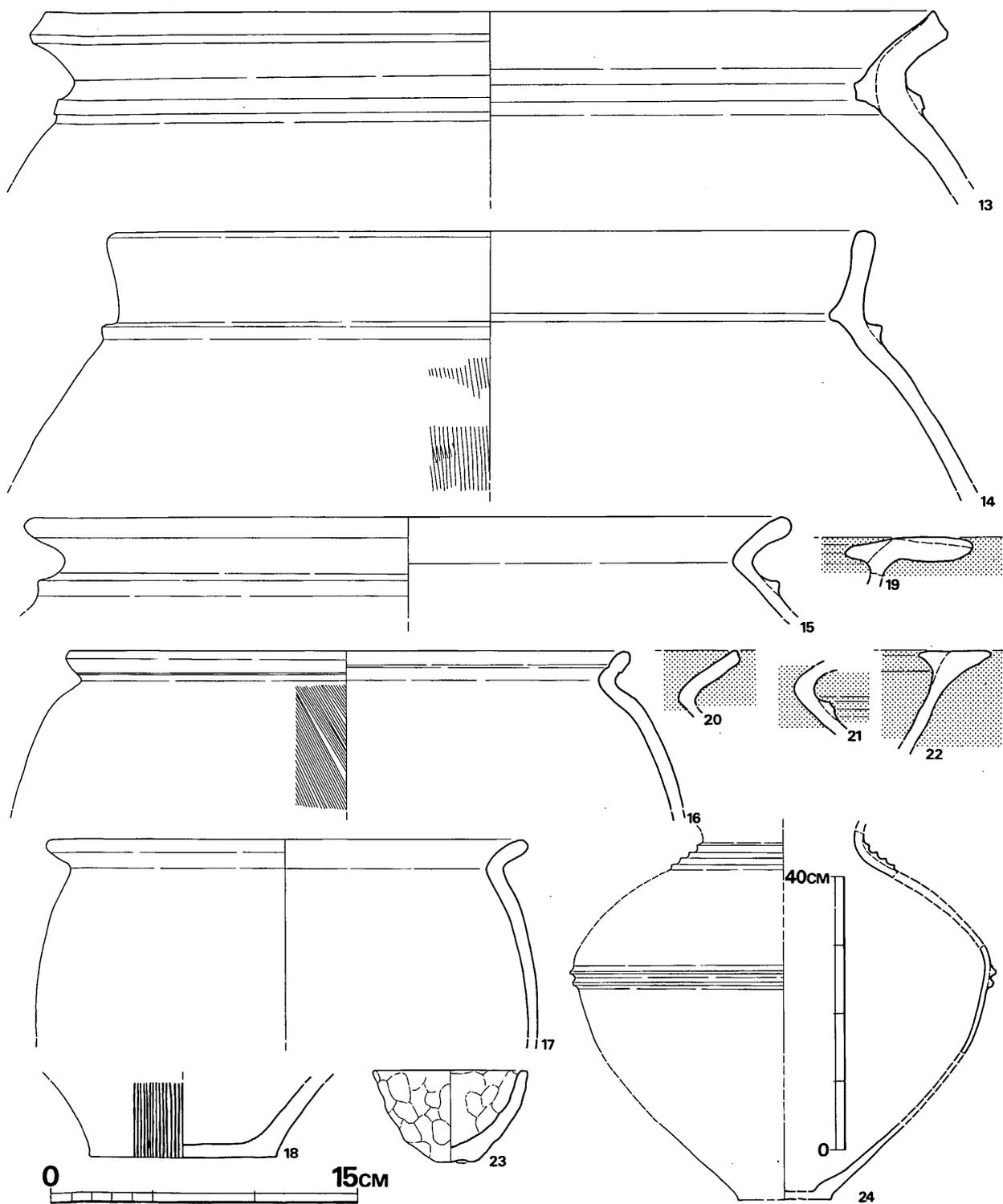


Fig. 52 第1地点第7号住居跡出土土器実測図(2)(縮尺1/3)

3点の土師器皿が出土した。

壺形土器 (Fig. 51—1~9, 24) 1~4・9はいずれも壺形土器の口縁部破片で、口縁は鋤形をなす。4以外はいずれも内外面に丹塗磨研が認められる。3は口唇部に粗い刻みを施す。9は口縁部上面にボタン状の貼付けをし、頸部に1条の三角貼付け突帯を巡らす。6は壺形土器で細片のため、実測図上で復元したものである。口縁部径は23.3cmをはかる。「コ」の字頸部から大きく朝顔形に外反し、口唇部は軽く押えられている。頸部の立上りに貼付け三角突帯を肩部下に貼付け鋤状突帯を、さらに胴部に貼付け「コ」の字突帯を各々1条巡らしている。「コ」の字突帯下で胴部最大径(復元値)30.0cmをはかる。外面はナデ調整であるが胴下部に刷毛目調整の痕跡を残す。底部はやや上げ底気味である。胎土に石英砂粒を含み、乳灰色を呈し、焼成は不良。6と同様な器形を有する壺形土器は他に3個体分検出されており、いずれも細片で復元不能である。いずれも外面に丹塗磨研の痕を残す(7・8)。5は脚付壺形土器で、口縁部は朝顔形を呈し、短く外反しながら肥厚する。頸部付け根に1条の複線突帯を、また胴部の最も張った位置に2条の複線突帯を巡らす。胴部の複線突帯間には焼成前の穿孔を認める。脚部は下位ほど細みで裾部はやや内側にすぼまる。器面調整はナデ調整で、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で、明茶褐色である。口径9.8cm、胴部最大径13.2cm、脚裾部径9.5cm、器高9.4cmを測る。以上1~6・9は西南隅楕円形ピットからの出土である。24は大形の壺形土器で、胴部最大径は上位にある。頸部付け根断面三角形の貼付け突帯を4条巡らし、胴部に2条の貼付け線複突帯を巡らす。底部は平底をなす。器面の荒れが著しいが、胴部は刷毛目の痕跡を残す。胎土に多量の砂粒を含み、茶褐色を有する。焼成は良好。

甕形土器 (Fig. 52—13~17) 13は、甕の口縁部で、復元口径44.8cmを測る。口縁は「く」の字形を呈し、頸部下に「コ」の字突帯を1条巡らす。内外面ともに横ナデ調整。胎土に多量の砂粒を含み、色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。14は、口縁部は「く」の字口縁であるが直口気味に立上る。胴部の張りは強いと考えられる。15も14と同様に胴部が強く張るものと考えられる。ナデ調整で焼成は良好。16は短く外反する「く」の字口縁をもち、肩部を有する。外面は刷毛目調整、赤褐色を呈し、焼成良好である。17は「く」の字口縁をもつ甕形土器で、胴部の張りは弱い。20, 21は「く」の字口縁を有する甕形土器の口縁部及び口頸部で内外面ともに丹塗磨研が認められる。

高杯形土器 (Fig. 52—19・22) いずれも鋤状口縁部を有し、丹塗り磨研が認められる。19は口縁の内外端が下がる。22の口縁部は短く仕上げられている。ともに焼成は良好である。

手捏ね土器 (Fig. 52—23) 23は手捏ねの鉢形土器で、内外面に指頭圧痕を明瞭に残す。胎土に多量の砂粒を含むが、焼成は良好である。灰褐色を呈する。

底部 (Fig. 51—11・12・52—18) 11・12は壺形土器、18は甕形土器の底部であろう。11・18は外面刷毛目調整である。12はやや上げ底気味で器壁は薄手である。いずれも焼成は良い。

土師器 (Fig. 53)

いずれも住居跡の攪乱部から出土した。

1・3は杯で、底面に篋切り痕と板目を残す。器面はナデ調整。淡明褐色を呈する。2

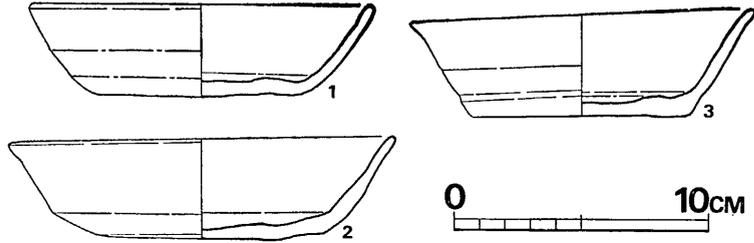


Fig. 53 第1地点第7号住居跡出土土器実測図③ (縮尺1/2)

は大杯で、底面は篋切り後、丁寧なナデ調整で仕上げる。灰色を呈す。1～3はいずれも胎土に細砂を含むが、焼成は良好である。1は口径13.5cm、底径8.0cm、器高3.7cm。2は口径15.2cm、底径11.6cm、器高3.9cm。3は口径13.5cm、底径8.6cm、器高4.0cmを測る。

第8号住居跡 (Fig. 54, PL. 42-1)

径約6.90mの円形を呈する。北西壁を第7号住居跡に、東壁を第10号住居跡に切られているが、壁の残存状況は比較的良好で、壁高40～60cmを測る。周溝は認められない。中央には1.60m×1.20m、深さ35cmの長方形ピットが存在する。内部は加熱された形跡はなく、白色砂が詰っていた。北側床面では、中央から壁に向かって放射状に並ぶ丸木状の炭化物が数本検出され、附近には、焼土混りの灰層の広がりか認められた。おそらく火災に会ったものであろう。床面から多数のピットが検出された。おそらく中央の長方形ピットを間にして、南北両方向に位置する(各々床面より-37、-45の深さをもつ)ピットが、主柱穴で他数本が支柱穴と考えられる。

出土遺物 (Fig. 55)

壺形土器 (1～3)は短頸壺で、外面及び頸部内面は丹塗磨研である。器壁は薄く、焼成、胎土ともに良好。2・3はいずれも「鋤」状口縁をもつ。2は器面の荒れが著しい。3は口縁外側の張り出しが強く、口縁上面に径約2cmの円板を貼り付けている。口縁上面は丹塗りで、内外面に流れ落ちている。胎土に石英砂粒を含むが焼成良好で、灰色を呈する。

甕形土器 (4～7)は、甕の口縁部である。4は肉厚の口縁部で、端部は丸味をもち、若干内彎する。内外面横ナデ調整。焼成、胎土良好。灰黄褐色。5は口縁内側及び外側の張り出しが強い。口縁上面に横方向の刷毛目が入る。色調は赤褐色を呈しており、焼成は良好である。6は内外面ともに横ナデ調整で、口唇部はわずかに凹む。外面に煤が付着する。胎土に小砂粒を含むが焼成は良好。灰茶褐色である。7は「く」の字を呈する甕の口縁部で、短く立上り、口唇部は肥厚し丸味をもつ。内面は横方向の、外面は斜め方向の刷毛目で仕上げている。色調は灰赤褐色を呈し、焼成は良好。復元口径23.9cm。

底部 8は壺か小形甕、9は甕の底部であろう。いずれも平底をなし、胎土に砂粒を含み、焼成良好。

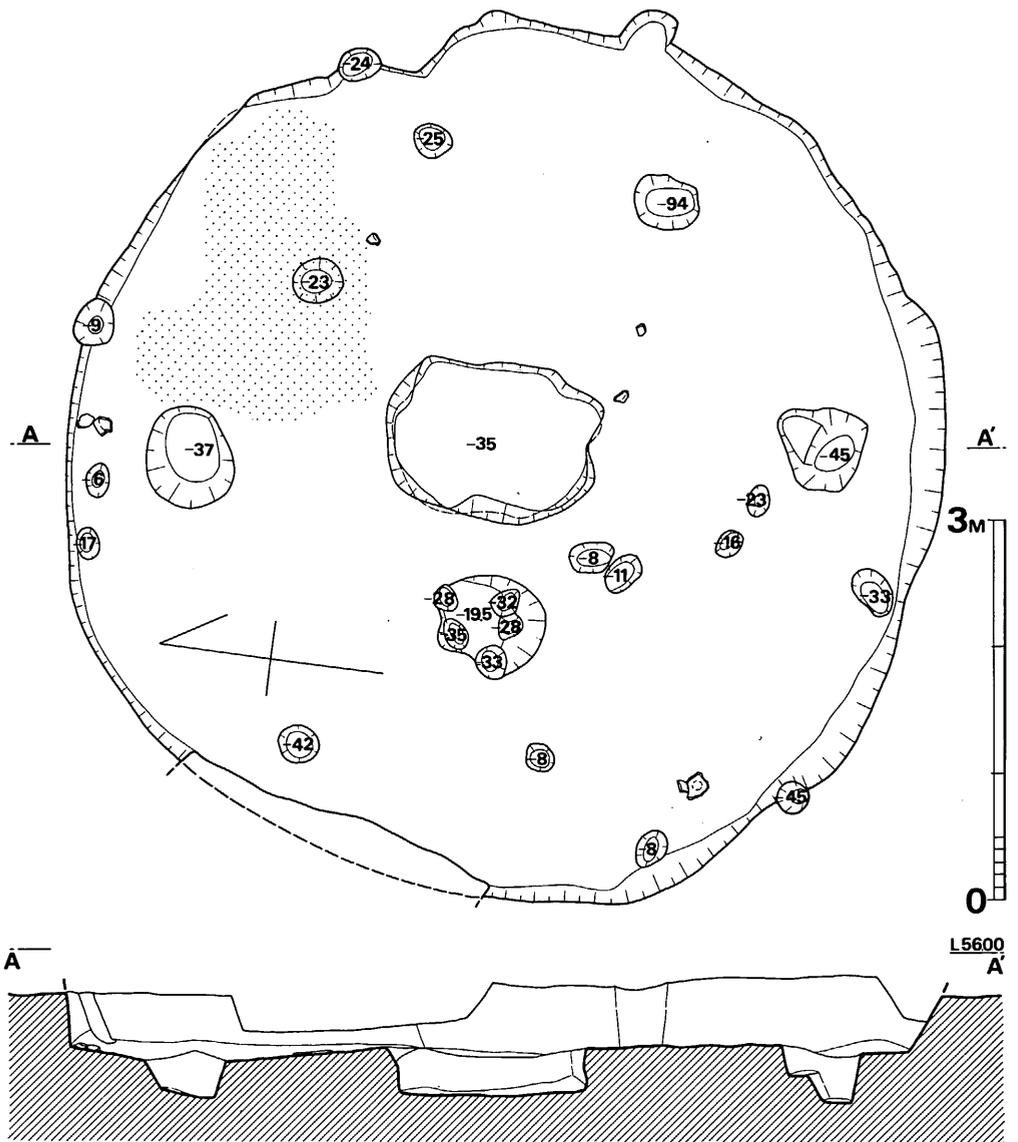


Fig. 54 第1地点第8号住居跡実測図(縮尺1/60)

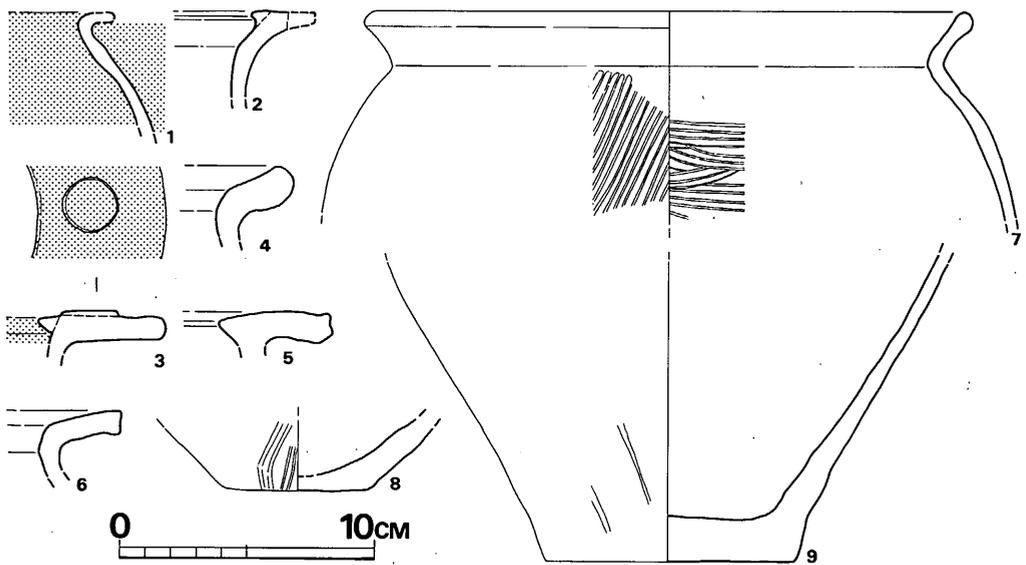


Fig. 55 第1地点第8号住居跡出土土器実測図(縮尺1/3)

第10号住居跡 (Fig. 56)

平面形は不整形をなし、南北約3.70m、東西約2.30m、壁高は約35cmを測る。西南隅は第8号住居跡を切っている。床面は平坦をなす。中央には焼土が認められる。加熱され、煤の付着した円柱形の花崗岩3石と甕形土器底部が検出された。おそらく花崗岩3石は炉の支脚として使用されたものであろう。床面中央のピットは主柱穴と考えられる。他にも支柱穴と考えられるピットを数箇所検出した。遺物は他に床面から壺形土器片が出土した。

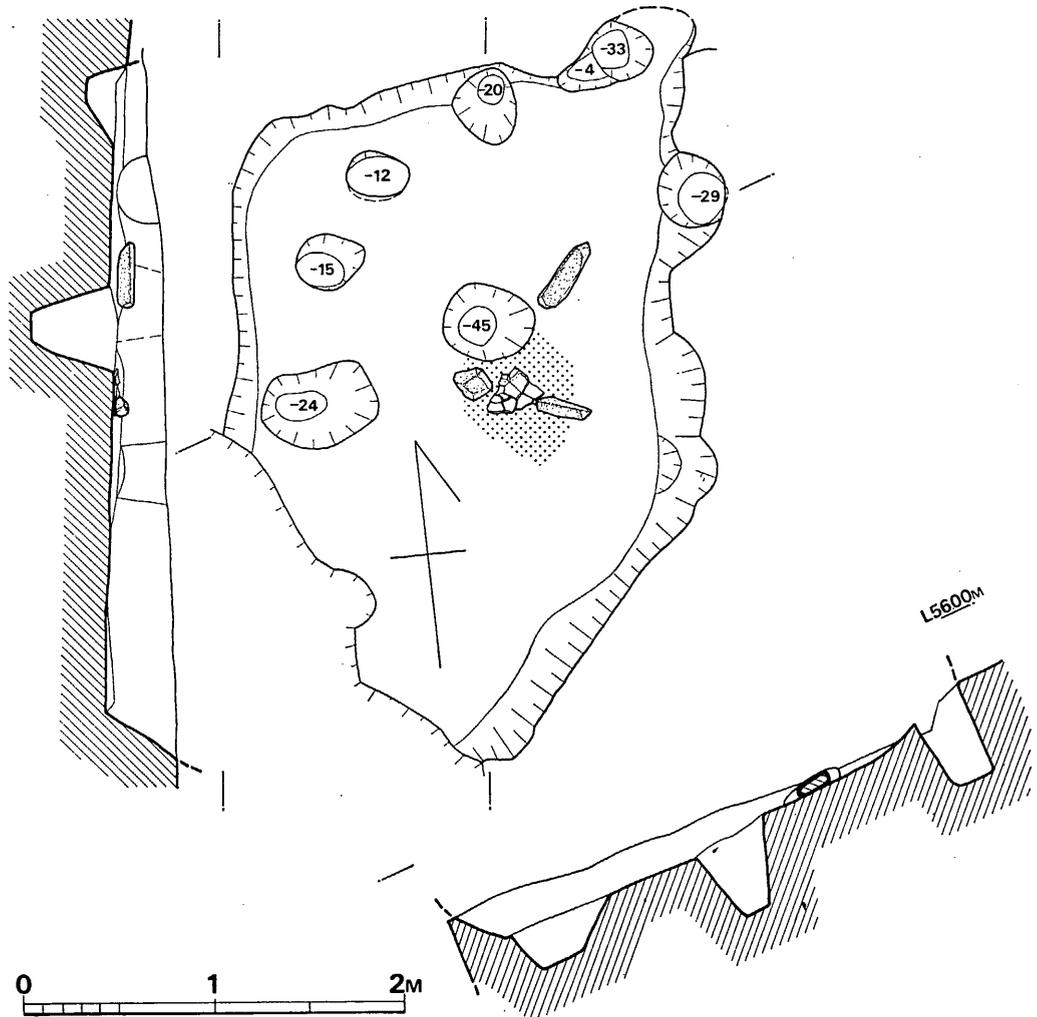


Fig. 56 第1地点第10号住居跡実測図 (縮尺1/40)

出土遺物 (Fig. 57, P L. 48-1・2)

1は壺形土器の肩部で、貼付け鏝状突帯を1条巡らし、締付けている。内面はナデ調整、外面は丹塗磨研で仕上げている。精製された胎土を用いており、焼成は良好。2は甕形土器の底部

で、平底をなす底部から直線的に立上る胴部をもつ。内面ナデ調整、外面は縦方向の刷毛目調整で、煤が付着する。胎土、焼成ともに良好、色調は灰茶褐色を有する。

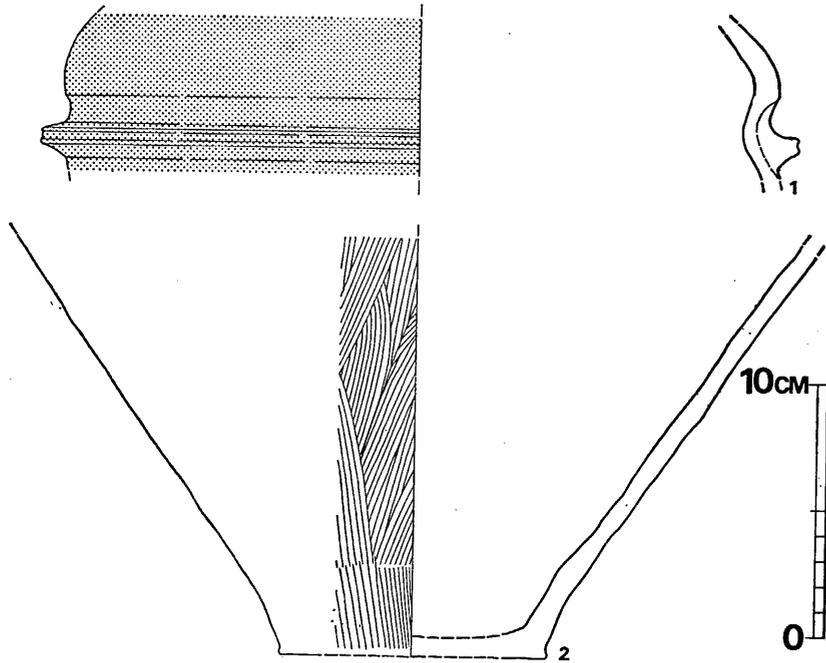


Fig. 57 第1地点第10号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）

第11号住居跡 (Fig. 58, PL. 42-2)

長辺約6.20m、短辺約5.00mの長方形を呈する。北壁を第13号住居跡に、また南壁を建物遺構に切られている。壁高は約40cmを測る。床面の縮りは良好で、中央部附近では薄い灰層の広がり認められ、灰層下より70cm×55cm、深さ14cmの長方形ピットが検出された。内部は焼けて固くなっており、焼土が詰っていた。東壁に沿って約4.50m×1.50mの長方形を呈する削出しのベット状遺構が設けられており、壁とベット状遺構が接する面には周溝がめぐる。ベット状遺構面と床面との比高は約20cmを測る。西南隅にも方形の削出しのベット状遺構を設けている。南壁に接する2個所の不定形ピットはいずれも内部が固く焼けており、これらと接する附近の側壁は同様に焼けている。住居内から多数のピットが検出されたが、支柱の並びは明らかでない。

出土土器 (Fig. 59, PL. 48-3~9)

大部分が床面上から検出された。

甕形土器 1~6は甕の口縁部で、「く」の字口縁をなす。1は頸部下に三角突帯が巡る。2は肉厚の頸部をもち、外面に刷毛目が入り、煤が付着する。胎土、焼成ともに良好で、黒茶褐色を呈する。口径31.4cmを測る。5は口縁端が内側に引き出されている。

鉢形土器 9は小形の鉢で平底をなし器壁は薄手である。外面に横方向の刷毛目を施す。焼成良好。口径11.4cm、器高5.4cm、底径4.6cmを測る。10も平底をなすが、口縁端が不整いであ

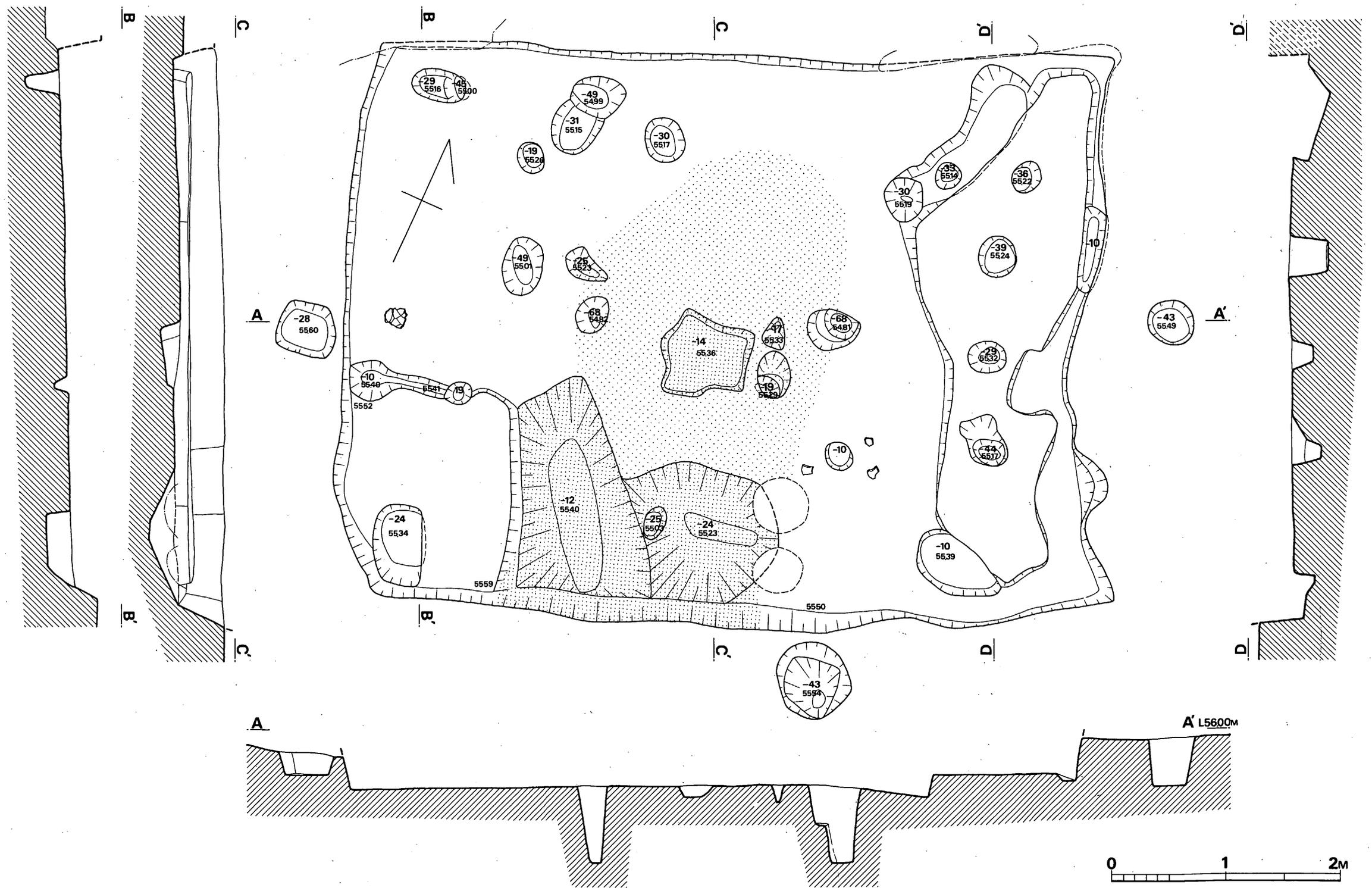


Fig. 58 第1地点第11号住居跡実測図(縮尺1/40)

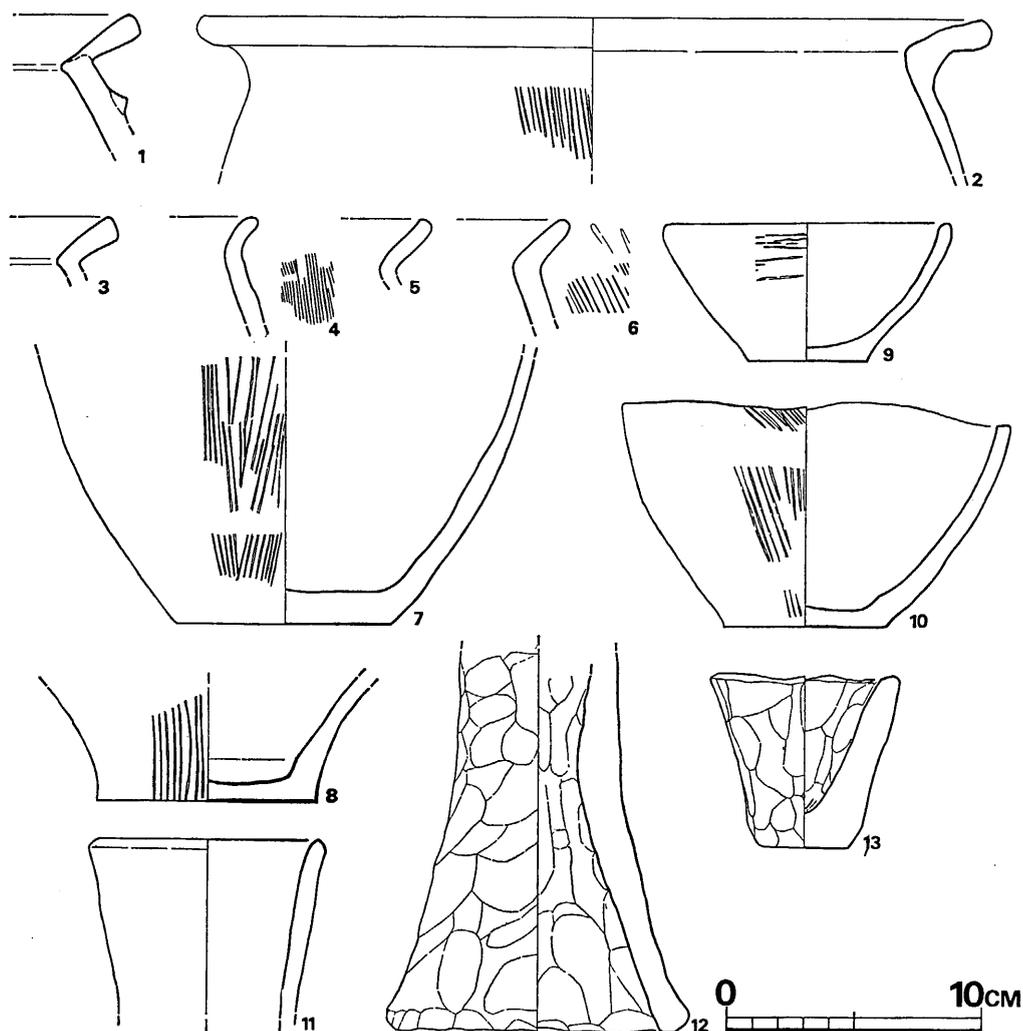


Fig. 59 第1地点第11号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）

る。外面は刷毛目調整。胎土に多量の砂粒を含むが焼成良好で灰褐色を呈する。口径15.4cm，器高8.8cm，底径6.4cm。

壺形土器 11は長頸壺の口縁部で，口縁端は内側に稜がつく。内外面ともにナデ調整を施し灰白色である。焼成不良。

器台形土器 12は上半部を欠く。内外面に指頭調整の痕跡を残す。胎土に多量の砂粒を含むが焼成は良好で，茶褐色を呈する。脚裾部径12cmを測る。

手捏ね土器 13は手捏ねの鉢で，内外面に指頭調整痕を残す。厚手である。茶褐色を呈し，焼成は良好。口径7.5cm，器高6.8cm，底径3.5cm。

底部 7・8は甕の底部であろう。7は内彎気味に立上り，8は外彎気味に立上る。ともに

平底をなし、外面に刷毛目が入る。胎土、焼成いずれも良好。

第12号住居跡 (Fig 60, PL. 43-1)

遺構上面は耕作により削平されているため、北壁のわずかな立上りと鍵形に走る周溝を残すのみである。南壁側は大溝によって切られている。本来は1辺4m以上の方形を呈していたものと推定される。北壁の器高は約20cmを測る。北壁下の周溝は西壁側で直角に折れ、約3.30m

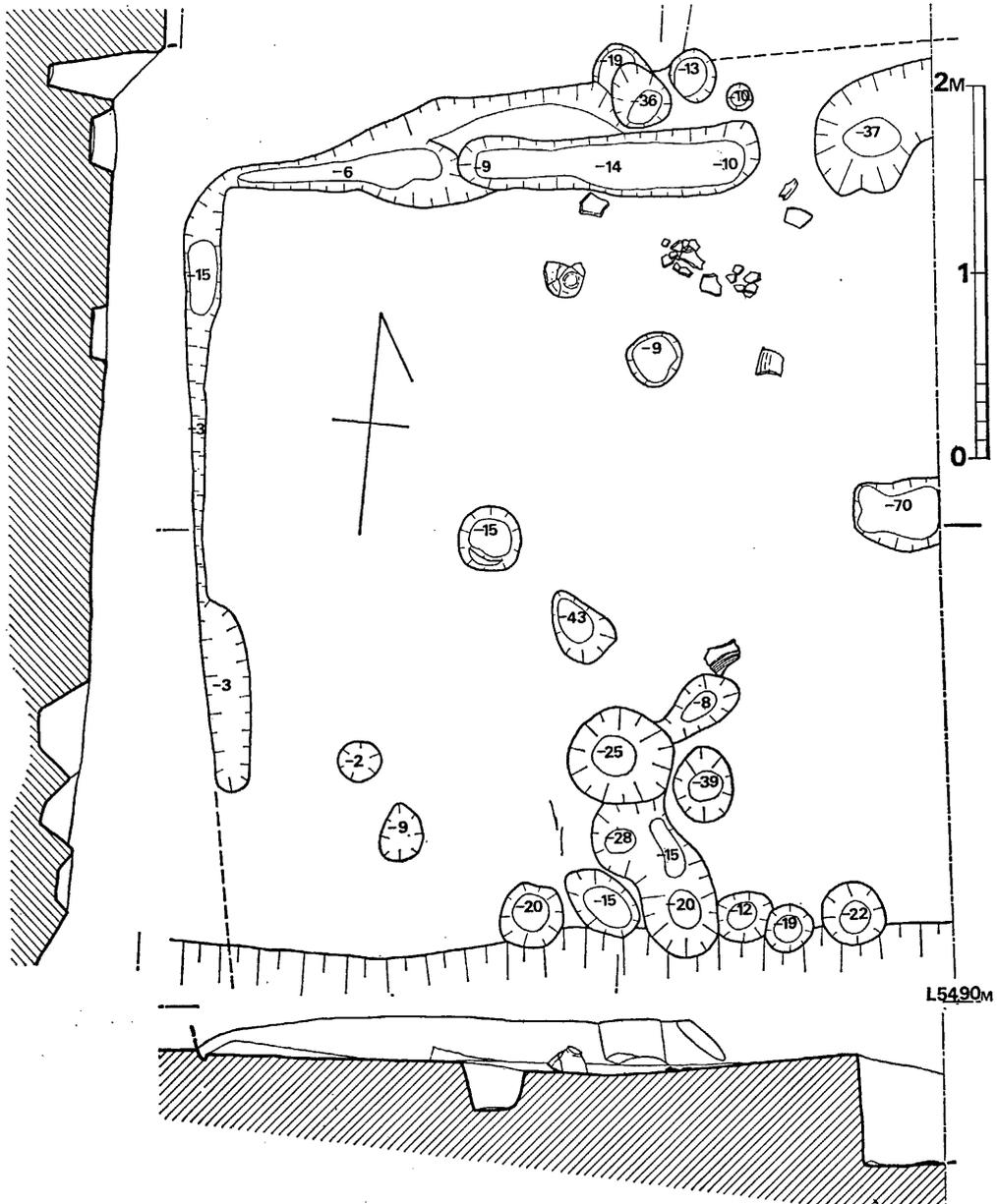


Fig. 60 第1地点第12号住居跡実測図 (縮尺1/40)

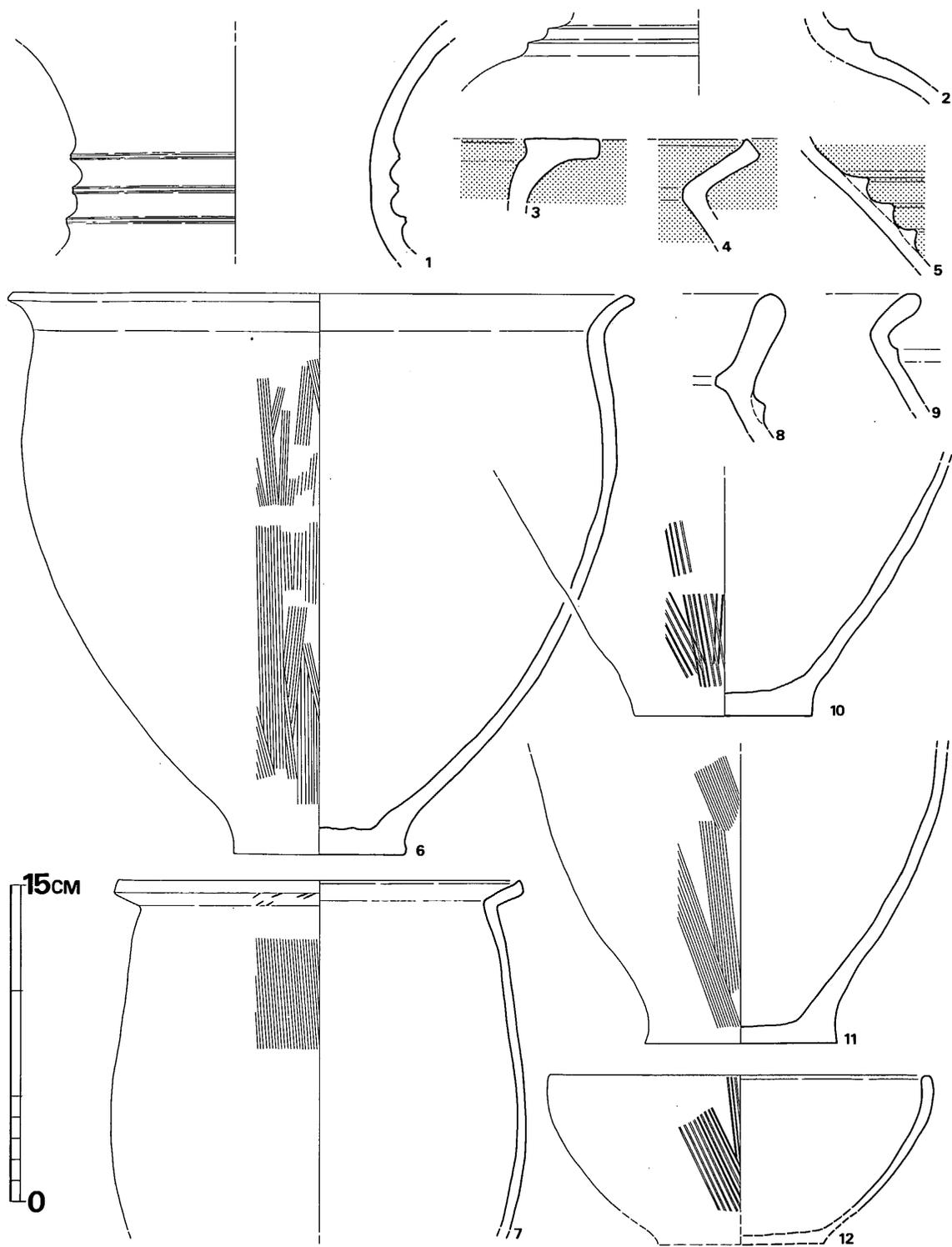


Fig. 61 第1地点第12号住居跡出土土器実測図(縮尺1/3)

で消えている。床面から多数のピットを検出したが、柱穴の配列は不明である。

出土遺物 (Fig. 61)

遺物は床面に貼り付いた状態で弥生式土器多数が出土した。本住居出土の弥生式土器の接合資料が大溝内より出土している。

壺形土器 1は壺の頸部で、3条の複線突帯が巡る。灰黄褐色で、焼成は良好。2も壺の頸部で立上り、つけねに2条の三角突帯が巡る。3は「鋤」状口縁をなし、内側の張りは弱い。内外面共に丹塗りである。5は壺の肩部で、3条の貼付けの三角突帯を巡らす。内面はナデ調整。焼成は良好。外面に丹を塗っている。

甕形土器 4は口唇部端が跳ね上る。内外面丹塗りである。6はゆるやかな「く」の字状口縁を呈し、胴部の張りは弱い。底部は平底をなす。外面には刷毛目調整が入る。胎土は精製された粘土を用いており、焼成は良好。淡褐色を呈す。口径29.7cm, 器高26.5cm, 底径8.2cmを測る。7は「く」の字口縁を呈し、口唇部上端は跳ね上る。胴部の張りは弱く、胴部最大径は下位にある。口縁下には刻目が入る。器面の荒れが著しいが、刷毛目の痕跡を残す。外面には煤が付着する。焼成は不良。口径19.5cm, 胴部最大径19.8cmを測る。8は「く」の字状口縁を呈し、口縁部は内彎気味に立上る。頸部下には1条の貼付け三角突帯が巡る。口縁内側の張り出しは強い。9も「く」の字口縁を呈し、頸部下に1条の削出し三角突帯が巡る。8, 9ともに精製された胎土を用いる。

鉢形土器 12は内彎しながら立上り、口縁部はやや内側に傾く。外面には刷毛目が入るが口縁部、内面は横ナデ調整によって丁寧に仕上げられており、薄手である。胎土、焼成共に良好。灰褐色を呈する。口径18.3cm。

底部 10・11は甕の底部であろう。いずれも平底をなし、外面には刷毛目が入り、煤が付着する。底部周辺は横ナデ調整を施す。胎土は良質の粘土で、焼成は良好。

第14号住居跡 (Fig. 62, PL. 44-1)

第1号竪穴に切られて、西壁附近を残すのみである。本来、長方形を呈するものと考えられる。西壁長3.1m, 壁高10~15cmを測る。北西隅には100×75cm, 深さ90cmの長方形ピットをもつ。この長方形ピットの中から丹塗りの弥生式土器片が検出された。

出土遺物 (Fig. 63)

壺形土器 1は短頸壺の頸部で、内面はナデ調整後、外面はヘラ磨き後丹塗りを行なう。胎土、焼成共に良好。2・3は長頸壺の頸部で、頸部つけねに1条の三角突帯を巡らす。内外面丹塗りである。4は壺の胴部で、胴部最大径部に1条の「コ」の字突帯を巡らす。内外面横ナデ調整。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好。

甕形土器 5・6は「く」の字状口縁を有する。5は立上りが強く、口唇部は丸味をもつ。灰茶褐色である。6は短かく大きく外反する。内外面ともに横ナデ調整をし、灰褐色を呈する。

器台形土器 8,
9は器台の裾部である。8は裾部が肥厚し、外側に引出されている。いずれもナデ調整で良質の粘土を用いている。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

底部 7は、甕の底部であろう。平底をなすが、若干凹む。内外面ナデ調整。焼成は良好。灰茶褐色を呈する。

第1号溝状遺構

(Fig. 64,
PL. 44-2)

第1地点北部の丘

陵裾に沿って南北に

のびる。溝の北端は丘陵の段落ちにより、また南端は大溝によって切られている。溝上部は耕作によって削平されている。現存長約15m、幅60~100cm、深さ40~60cmである。溝底は多少高低差はあるが、大体平坦である。

出土遺物 (Fig. 65)

溝底から、丹塗り弥生式土器細片と器台形土器が出土している。丹塗り土器は小片のため図示しなかったが、袋状口縁をもつ長頸壺片、短頸壺片などがみられる。器台形土器は厚手で、脚部が欠失する。受部は大きく外反しており、受部内

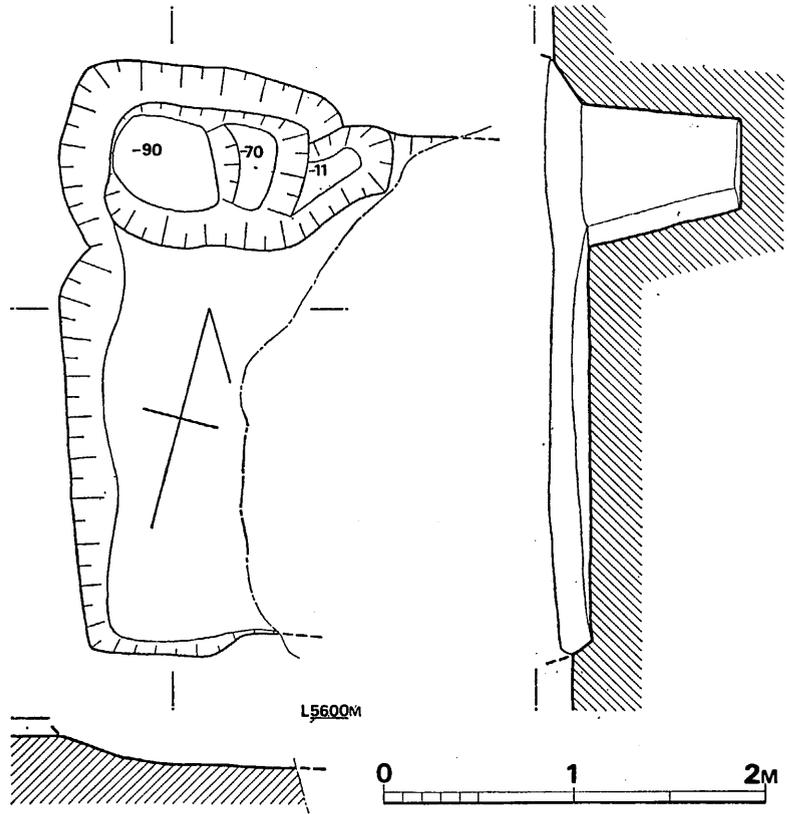


Fig. 62 第1地点第14号住居跡実測図 (縮尺1/40)

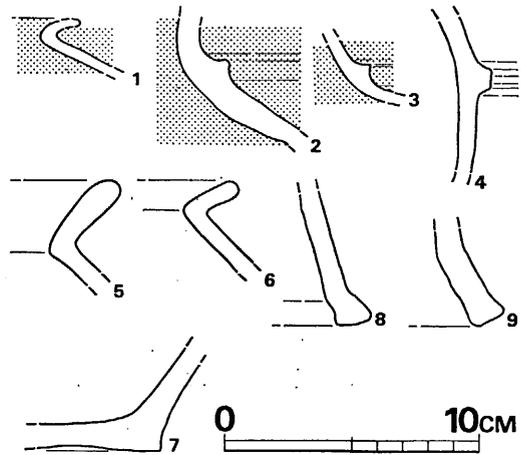
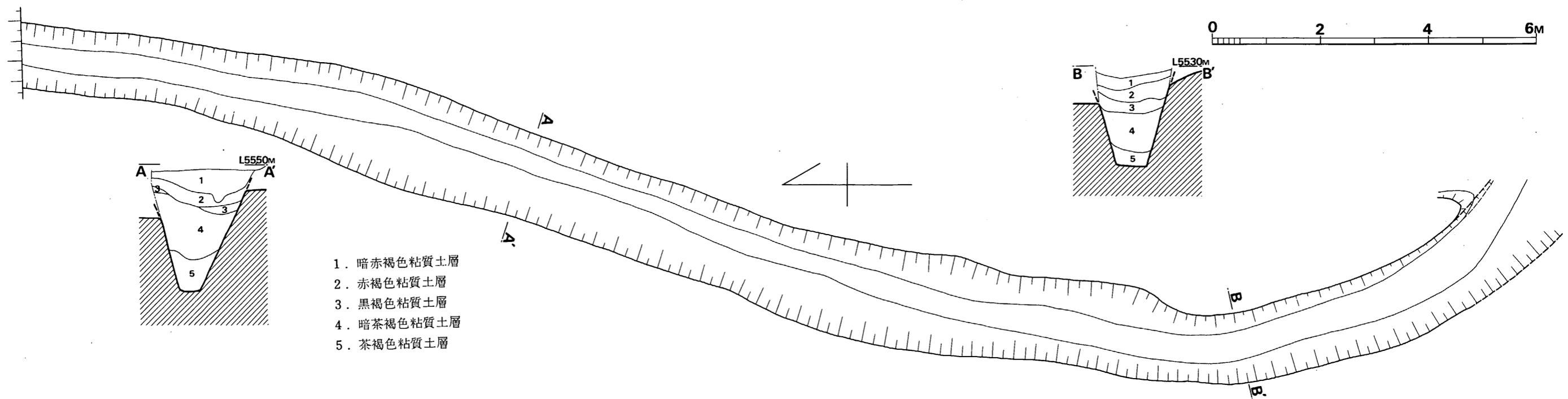


Fig. 63 第1地点第14号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)



- 1. 暗赤褐色粘質土層
- 2. 赤褐色粘質土層
- 3. 黑褐色粘質土層
- 4. 暗茶褐色粘質土層
- 5. 茶褐色粘質土層

Fig. 64 八限遺跡第1地点第1号溝状遺構実測図(縮尺1/80)

面は横方向の刷毛目調整を施し、内面には指頭調整痕としぼり痕を残す。外面は指頭調整のあと、斜め方向のナデ調整で仕上げている。胎土に多量の砂粒を含むが、焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈する。受部径14.4cmを測る。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

第6号住居跡 (Fig. 48, PL. 40-2)

主軸を第5号住居跡と同一方向にとり、同住居跡の東壁を切っている。また、東南隅は第9号住居跡を切る。本来は長方形をなすと考えられるが、西壁の立上りは南寄りで確認したのみである。南北約3.80m、東西約2.70m、壁高約70cmと比較的小形である。北壁中央にはカマドを設けている。住居内には張り出さず、壁内に約100×80cm、深さ30cmの楕円形ピットを掘り、その中に淡茶褐色の粘土質を馬蹄形に貼っており、内部は固く焼けて締まっている。奥行60cm、最大幅40cm、間口15cmを測る。焚口は壁に入り、住居床面と焚口との比高は約25cmを測る。カマドの中には土師器甕完形品が倒れ込んでいた。煙出しの穴は確認できなかった。

出土遺物

(Fig. 66, PL. 46-6・7)

1は北東隅の床面から出土した須恵器碗で、器形の歪みが大きく整形は粗い。底部にヘラ記号を有する。焼成良

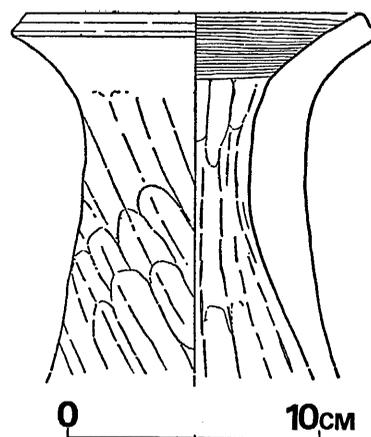


Fig. 65 第1号溝状遺構出土土器実測図 (縮尺1/3)

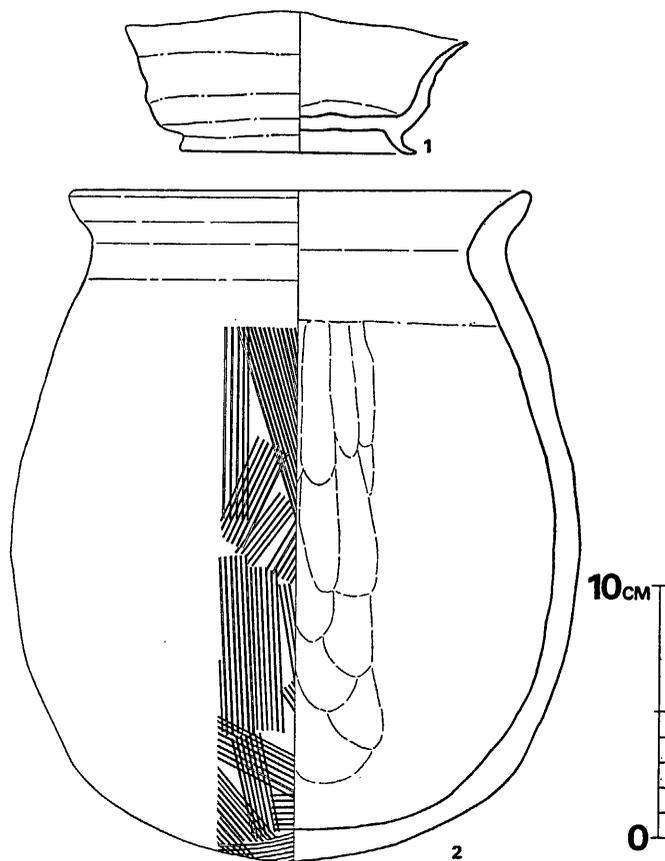


Fig. 66 第6号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)

好。口縁部径約13.5cm, 器高5.5cm。2は土師器甕で, カマド内より出土した。口縁は「く」の字状に外反し, 胴部最大径はやや下位にある。胴内面は篋削りのあと上部を横ナデ調整している。胴外面は刷毛目調整である。器壁は全体的に肉厚である。胴外面には煤が付着する。色調は暗茶褐色を呈し, 胎土に砂粒を含むが焼成は良好。口径18.1cm。胴部最大径22.3cm, 器高26.5cm。

第9号住居跡 (Fig. 67, PL. 43-2)

一辺約4.70mの方形を呈する住居跡と考えられるが, 南壁は攪乱を受けている。全体に壁の残りは悪く, 壁高は10~15cmを測る。東壁中央部にはカマド状遺構らしきものを設けている。東壁に接して床面を楕円形に掘り凹め, 中央に板石を敷き, この板石を取り囲むように, 小石

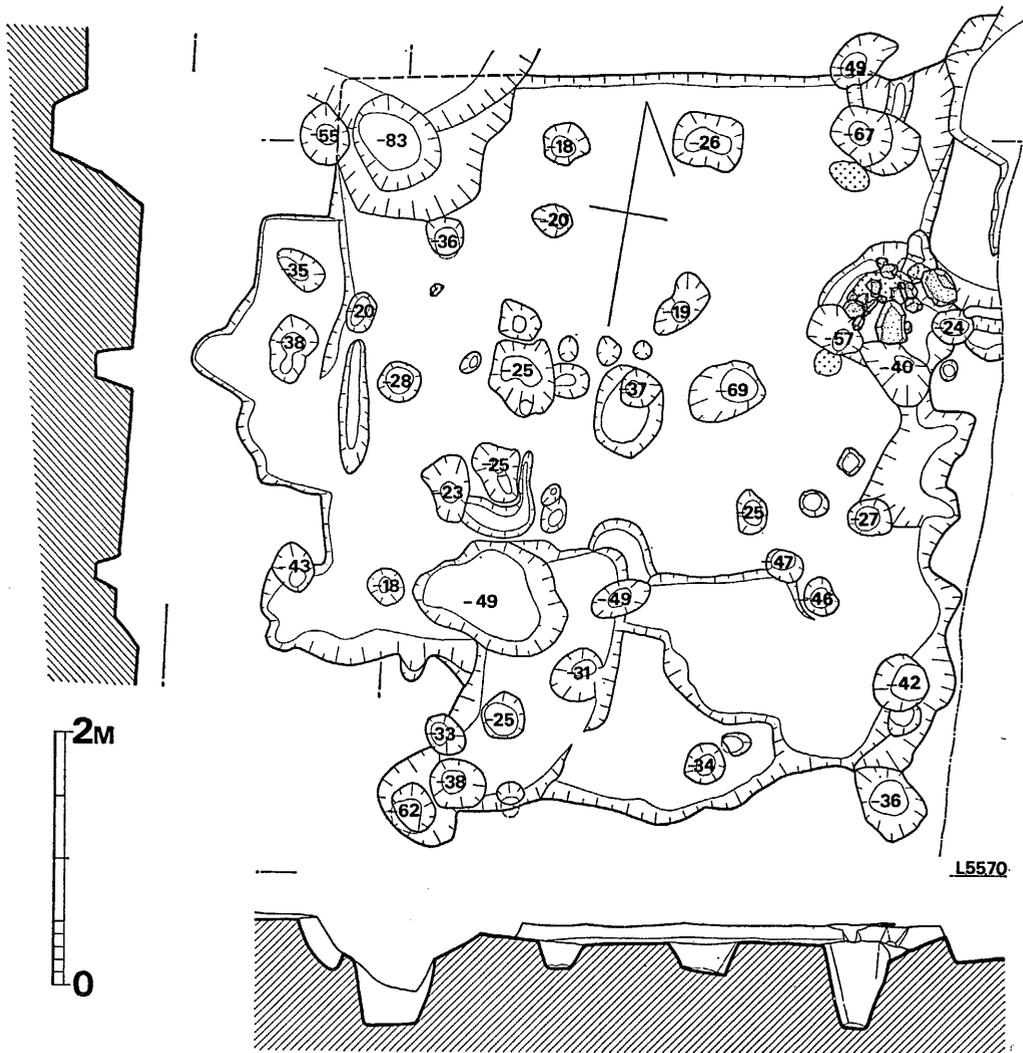


Fig. 67 第1地点第9号住居跡実測図 (縮尺1/60)

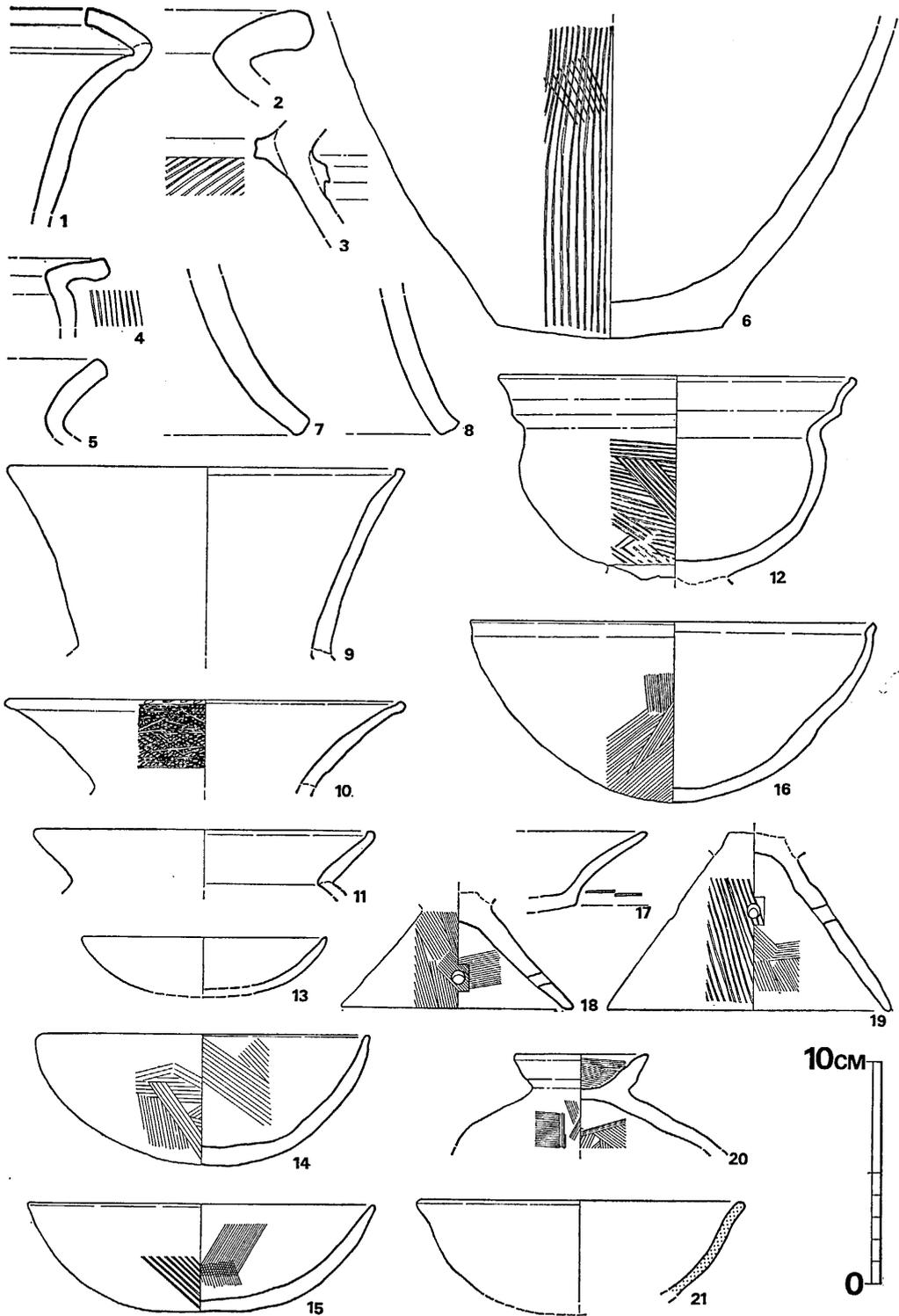


Fig. 68 第1地点第9点住居跡出土土器実測図(縮尺 1/3)
(1~8 弥生式土器, 21瓦器, 9~20土師器)

を混ぜた粘土帯が半円形に突き出している。粘土帯及び板石は加熱の形跡を残し、附近には焼土及び灰の堆積が認められた。板石前面の壁には煙道と考えられる溝が続き、発掘区外へ延びている。北西隅には径1m弱、深さ83cmの円形ピットが検出されたが、第6号住居跡によって切られている。西壁には長方形の張り出しがある。床面の締りは良好で、特に中央附近は強く踏み固められている。床面から多数のピットが検出されて、柱穴と考えられピットも数個検出されているが、配列を明確にすることはできなかった。

出土遺物 (Fig. 68, PL. 49)

遺物は床面中央附近から土師器が、南壁の攪乱部附近から弥生式土器がそれぞれ集中して出土した。特に脚付壺(12)は壺形土器の口縁部(9)を倒置した上に載せた状態で床面から出土した。壺形土器の口縁部は二次的に器台として使用されたものであろう。

弥生式土器 (1~8)

1は、袋状をなす壺形土器の口縁部である。色調は灰黄褐色を有し、胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良好であるが、器面の荒れが著しい。2~5は甕形土器の口縁部である。2は肉厚で、大きく外反する口縁部は内外面とも丁寧にナデ調整を行なっている。3は、頸部に1条の「コ」の字突帯を巡らし、内側の張り出しは発達している。張り出し下は刷毛目調整。4は大きく外反する口縁部で、端部は若干跳ね上る。いずれも胎土、焼成ともに良好。7・8は器台形土器の脚部で、内外面ナデ調整している。胎土中に石英砂粒を含む。焼成は良好。6は甕の底部であろう。平底をなすが若干丸味をもつ。胴部は内彎気味に立上る。外面は刷毛目調整、内面は不定方向ナデ調整を施している。色調は茶褐色、一部黒色を呈し、胎土、焼成は良好。

土師器 (9~20)

壺形土器 9は強く立上る口縁部をもち、口唇部は軽く内側につまみ出している。内外面ともに横ナデ調整で丁寧に仕上げている。外面には煤が付着する。胎土に細砂を含むが、焼成は良好。灰色を呈する。10は大きく外反する口縁部をもち、口唇部は軽く内側につまみ出し、口唇部外側にはヘラによる刻目が施されている。外面は刷毛目調整後、ヘラ磨きによって仕上げている。内面はナデ調整し、胎土、焼成ともに良好。暗い灰色を有する。

脚付壺形土器 12は脚部を欠失する。わずかに張り出す胴部をもち、外反する口縁部は有段をなす。口唇部はわずかに内側へつまみ出されている。底部は丸底をなす。胴部及び底部の脚接合面に煤の付着が認められる。口縁部内側面は横ナデ調整。胴部は刷毛目調整のあと篋磨きで仕上げている。胎土は良質であるが、焼成はややあまい。赤褐色を呈する。口径16.1cm、現存器高12.1cm。

鉢形土器 13~16は鉢である。口縁部はいずれも外反しない。13は小形で、口径11.0cmを測る。14・15は内外面に刷毛目が入る。14は口径15.0cm、器高5.9cm。15は口径15.5cm、器高4.9cmを測る。16は口唇部外面が軽く押えられ、凹線が入る。外面に刷毛目を施す。口径18.2cm、

器高8.1cmを測る。いずれも精製された胎土を使用しており、焼成は良好である。

高杯形土器 17は高杯の杯部で有段をなす。内外面ともに入念なヘラ磨きが施されている。杯部有段部外面には刷毛状工具によるとみられる刻目が入る。良質粘土を用いており、焼成良好。灰色を呈す。

脚部 18・19は脚付鉢の脚部であろう。いずれも、直線的に開く脚部で、内外面に刷毛目が入る。ともに3孔を有する。茶褐色を呈し、胎土、焼成良好。

蓋(?) 20は把手部内面、傘部内外面に刷毛目が入る。把手部の調整は粗く、脚部の可能性もある。胎土、焼成は良好で、灰茶褐色を有する。

瓦器 21は瓦器の碗形土器で、底部は欠失する。内彎気味に立上り、口唇部はわずかに外反する。灰褐色を有し、焼成は不良。

第13号住居跡 (Fig. 69)

平面形は極めて不整形を呈しているが、一応住居跡として取扱う。南壁は第9号住居跡を切っていると思われるが確認できなかった。東西約3.40m、南北約2m (+α)を測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高10~25cmを測る。床面は平坦をなし、西壁下に不整形ピット、中央に円形ピットを有する。

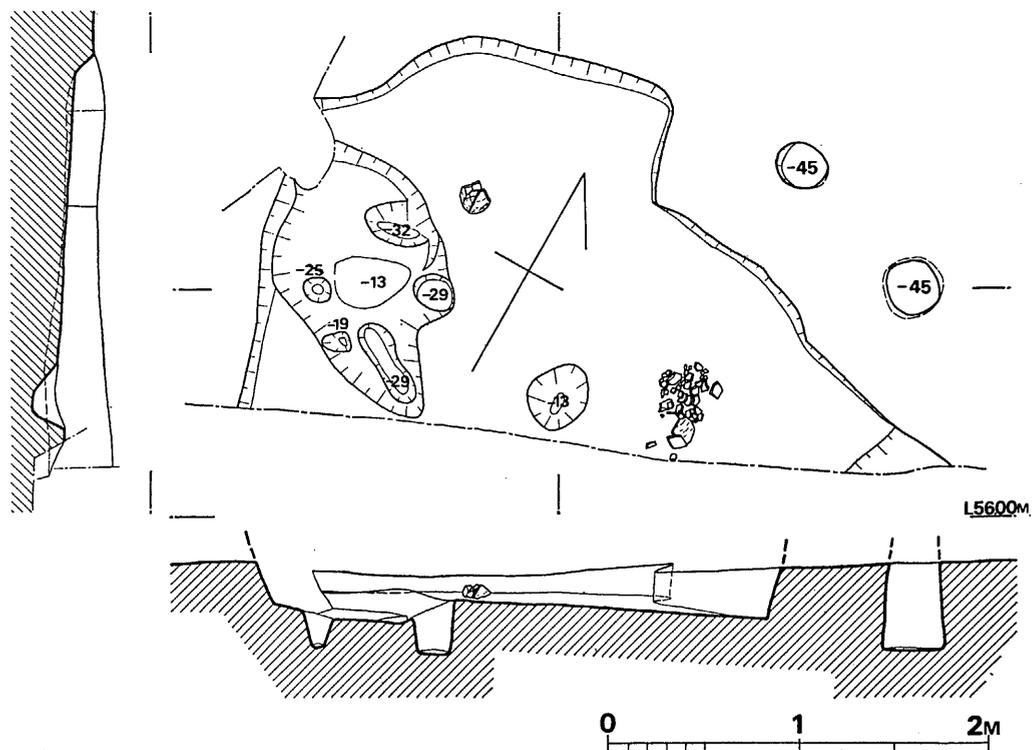


Fig. 69 第1地点第13号住居跡実測図 (縮尺 1/40)

出土遺物 床面上から甕形土器が2個体分碎片となって出土した。

甕形土器 1・2は甕の口縁部で、口縁部はやや内彎気味に立上り、口唇部は軽く押えられ、内外側に張り出している。1は胴部中央以下を欠失する。胴部内面は篋削り、上部及び外面は横ナデ調整をしている。全般に薄手である。胎土に粗い砂粒を含み、焼成は不良。灰褐色を呈す。2は内外面ともに横ナデ調整。胎土、焼成とも不良。褐色を呈する。

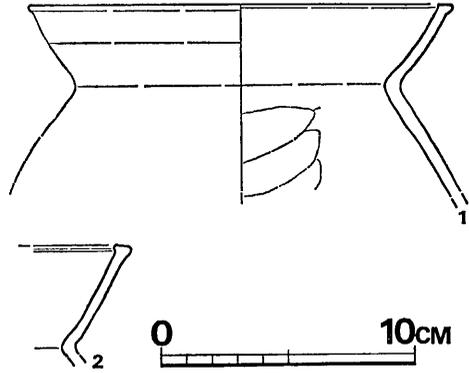


Fig. 70 第1地点第13号住居跡出土土器実測図(縮尺 1/3)

(3) その他の遺構と遺物

大半が表土からの出土で、遺構に伴うものは少ない。

土製品 (Fig. 71, PL. 50)

1は土製の勾玉で、全体の形状は細身につくられており、腹部より尾部にかけてつよく彎曲する。全面ナデ調整で、良質の胎土を用い、焼成も良好である。茶褐色を有する。長さ2.8cm、厚さ0.8cm、尾部で0.6cmを測る。

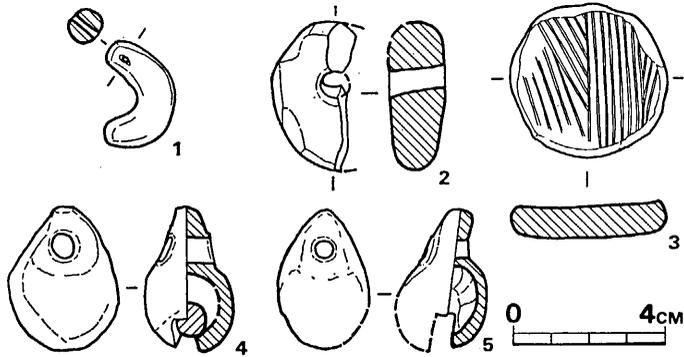


Fig. 71 第1地点出土土製品実測図(縮尺 1/2)

2は本来は楕円形を呈していたものと考えられるが、 $\frac{1}{2}$ を欠失する。長さ4cm、厚さ1.5cmを測り、中心よりややずれて孔を有する。全面丁寧なナデ調整を施す。胎土、焼成ともに良好で、明褐色を有する。3は土製円盤で、土器片を二次的に再加工して、扁平な円形に整形している。片面には刷毛目を有する。おそらく、弥生式土器片を利用したものであろう。焼成は良好で茶褐色を呈する。径4.2cm、厚さ0.8cm。

4・5は土製の鈴で、4は球形の胴部に山形の鈎手部がつく。鈎手部の孔は一方から行なっている。孔周辺には指頭圧痕を残す。内部の玉は径0.8cmを測る。胎土、焼成ともに良好で灰明褐色を有する。5は胴部と内部の玉を欠く。

石器 (Fig. 72・73, PL. 50)

石斧 (Fig. 72-1~3) 1は玄武岩製石斧で、頭部および刃部は敲打の痕跡を残す。体面は入念に研磨されているが未製品と考えられる。現長15.3cm、最大幅7.7cm、最大厚4.2cmを測る。八隈8号墳墓道より出土。2・3は片刃石斧で、いずれも木工用である。2は内厚で断面は台

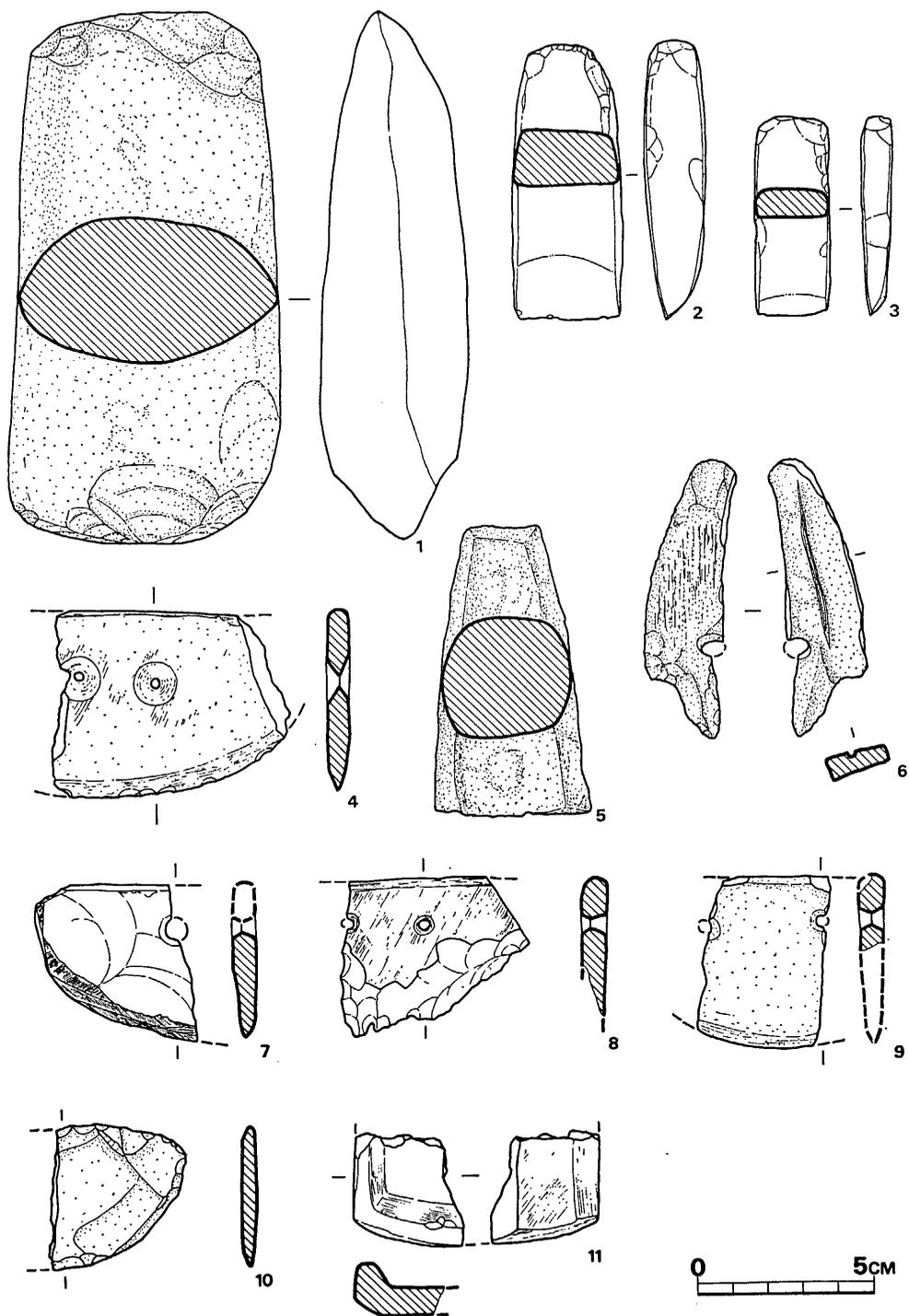


Fig. 72 第1地点出土石器・石製品実測図（縮尺1/2）

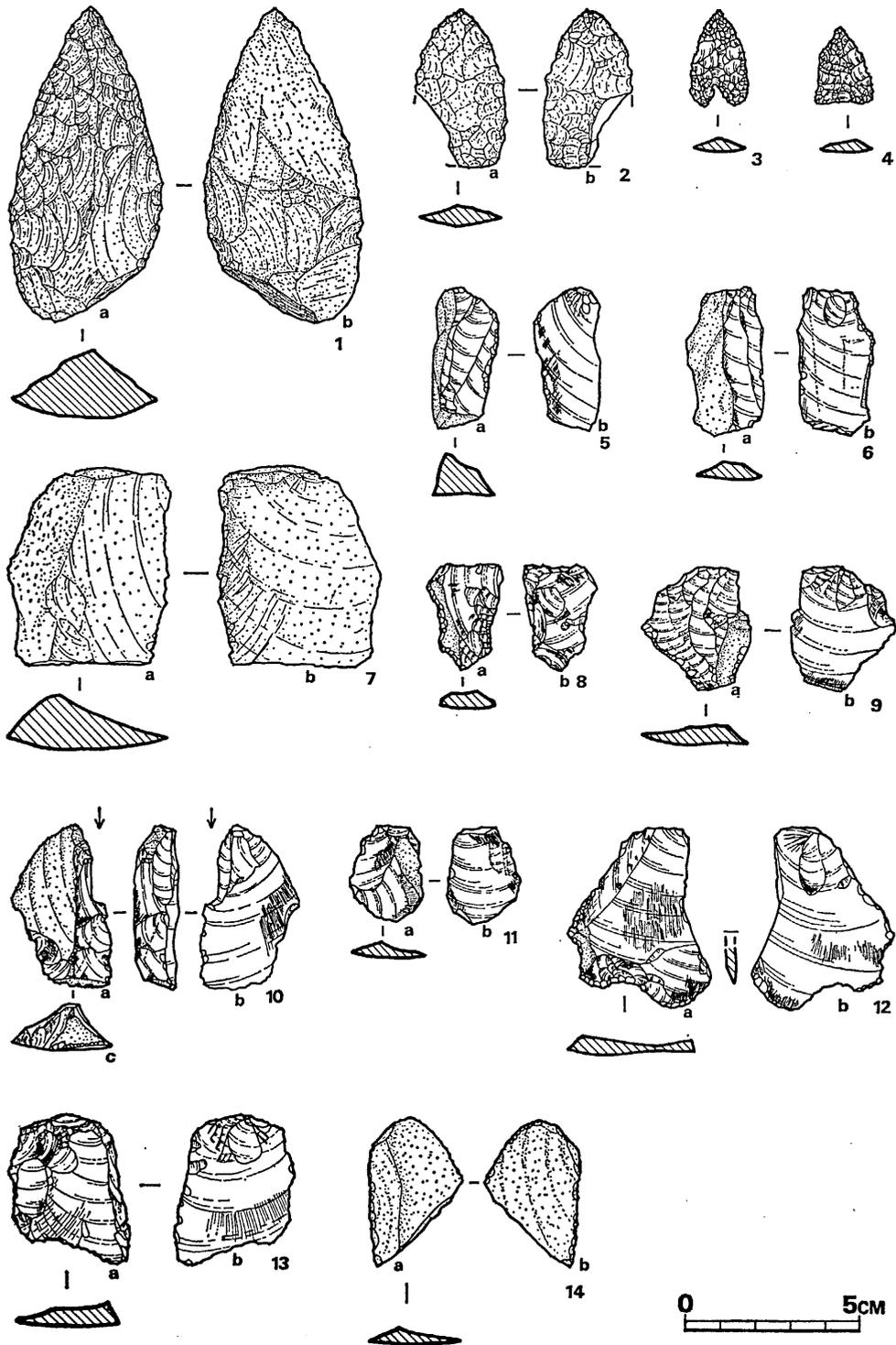


Fig. 73 第1地点出土石器実測図(縮尺1/2)

形状をなす。刃部幅3cm、厚さ1.8cm、長さ7.9cm。3は扁平で、刃部幅2.2cm、厚さ0.6~1cm、長さ5.6cmを測る。

石庖丁 (Fig. 72—4・7~10) いずれも欠損品で、4・7・8は小豆色の輝緑凝灰岩製、9は硬質砂岩製、10は粘板岩製。

その他の石器 (Fig. 72—5・6・11) 5は砂岩製で四角柱状をなし、上下両面は平坦である。6は硬質頁岩製で、両面は研磨され、一孔を有する。片面には1条の沈線を刻んでいる。おそらく、石戈等の欠損品を二次的に砥石として利用したものであろう。11は滑石製の硯の欠損品である。

尖頭器 (Fig. 73—1) 肉厚のサヌカイト剥片を素材とした半両面加工の木葉形尖頭器である。a面は部分的に大きな剝離痕を残しているが、ほぼ全面に細かなリタッチが行なわれている。b面は左側縁のバルバー・スカーを除去するため、調整剝離を行なっている。全体として左右対称に成形されていないのはb面左下部に自然面を有するという素材自体の形態的制約のためであろう。

石鏃 (Fig. 73—2~4) 2はサヌカイト製石鏃で、両側縁が内に彎曲する。3は黒色黒耀石を素材にした石鏃で、両側縁は内に彎曲し、基部は鋭く抉入する。4は黒色黒耀石を素材とする石鏃で、両側縁が先端部近くで屈折する。基部は僅かに内彎する。

縦長剥片 (Fig. 73—5~7) 5・6は黒色黒耀石の縦長剥片で、いずれもa面左側縁に自然面を残し、a面右側縁に細かな使用痕を認める。b面はフィツシャー方向に細かい擦痕が認められることから、ナイフとしての機能を果たしたものと考えられる。7はサヌカイト製でa面左側縁には自然面を残し、b面左側縁に細かな使用痕が認められる。

側刃搔器 (Fig. 73—8~9) 8は黒色黒耀石の縦長剥片を素材とし、両側縁に内彎する部分に部厚い刃をつけている。9も黒色黒耀石を素材とし、a面左側縁下部に細部加工を行なっている。

削器 (Fig. 73—12・13) いずれも内彎形削器で黒色黒耀石の不定形剥片を素材とする。12のa面下縁は細かくリタッチが行なわれている。

彫器 (Fig. 73—10) 10は黒色黒耀石の肉厚な縦長剥片を素材とし、a面右側縁上方から槌状剝離を1回行なっている。下縁には搔器としての使用痕を残す。

なお1のみは風化のため、表面はパティナによって灰褐色をおび、一見して他の石器と区別できる。先土器時代の製品であろう。

第1号配石土壌 (Fig. 74)

平面形は110×35cmの不整長方形をなす。断面はいわゆる舟形墳をなし、深さ約18cmを測る。土壌掘込面上には10数個の安山岩転石を配する。土壌内は固く締っており、内部から何も検出されなかった。

第1号土壇 (Fig. 75)

3.2m×2.0mの不整形をなす。壁は急角度で掘込まれており、現存壁高約25cmを測る。床面は平坦をなし、2個のピットを有する。床面中央から、馬の下顎骨(×印)が検出された。

第1号竪穴

(Fig. 76, PL. 44-1)

平面形は、楕円形を呈し、長軸約5.00m、

短軸約4.20m、深さ1.30m~1.50mの規模を有する。西壁は第14号住居跡を切っている。東南壁は中央に向かって傾斜するが、他の壁はほぼ垂直である。遺物は遺構確認面の下位約40cmから

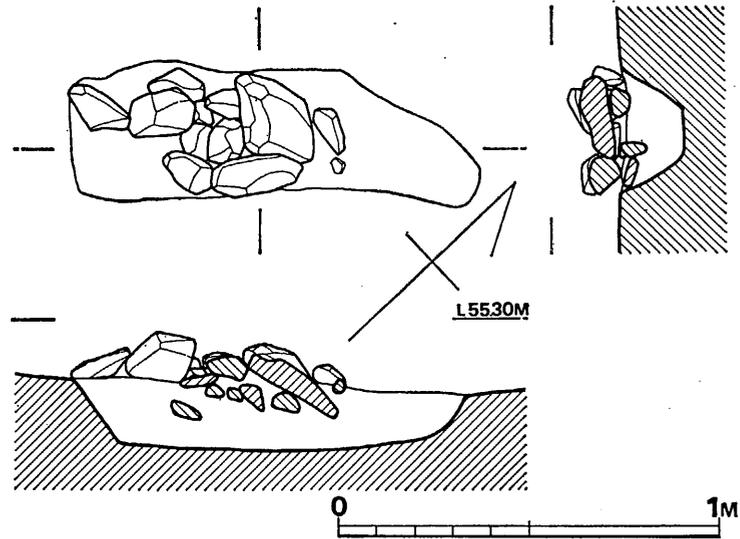


Fig. 74 第1地点第1号配石土壇実測図(縮尺1/20)

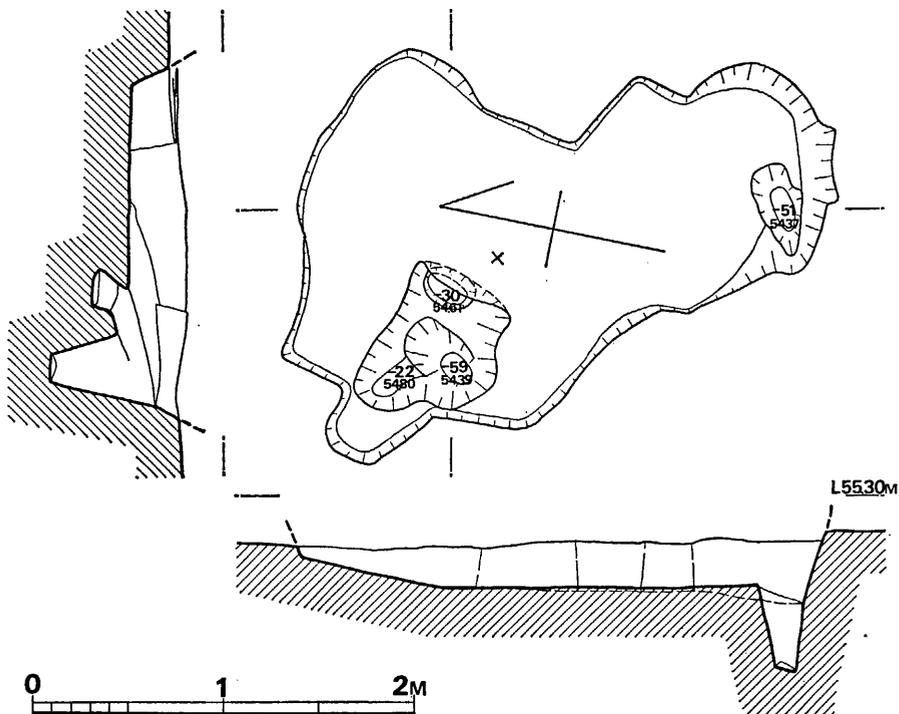


Fig. 75 第1地点第1号土壇

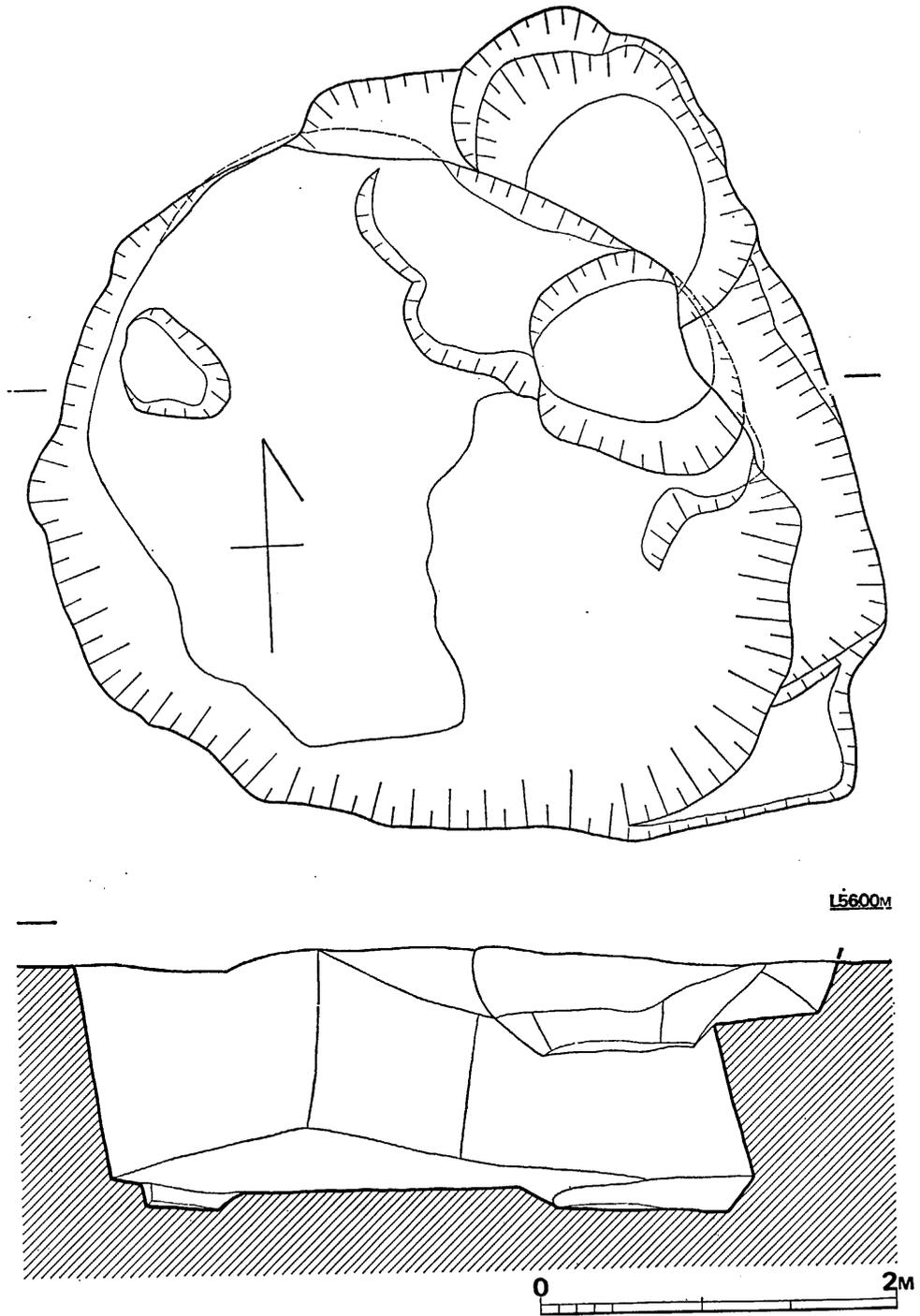


Fig. 76 第1地点第1号竖穴実測図 (縮尺1/40)

床面にわたってほぼ全面的に出土した。遺物は陶器，火舎類が大半を占め，その他少数の土製品，弥生式土器が出土した。竪穴内の土層図をみると，レンズ状の薄い土層が厚く重なっており，流れ込みの堆積状況とは異っている。遺物片の接合状況等を考えてみて，この竪穴はある短い期間に意識的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物 (Fig 77・78, PL. 51~59) は，江戸中期から明治初期に至ると考えられる肥前系陶器が大半を占める。器種としては茶碗，小鉢，小皿などが揚げられる。産地として小鹿田，白石，萩，有田，唐津と広範囲にわたっている。日常雑器としては土瓶，火舎，七輪などがあり，特異なものとしては紅皿，ハト笛，童子形人形などがある。本竪穴は明治の初期に，伝世していた古唐津などの陶器と一緒に，当時の日常雑器類が何らかの事情で捨てられ埋められたもので，おそらく，本竪穴南方の建物遺構と関連する遺構であろう。

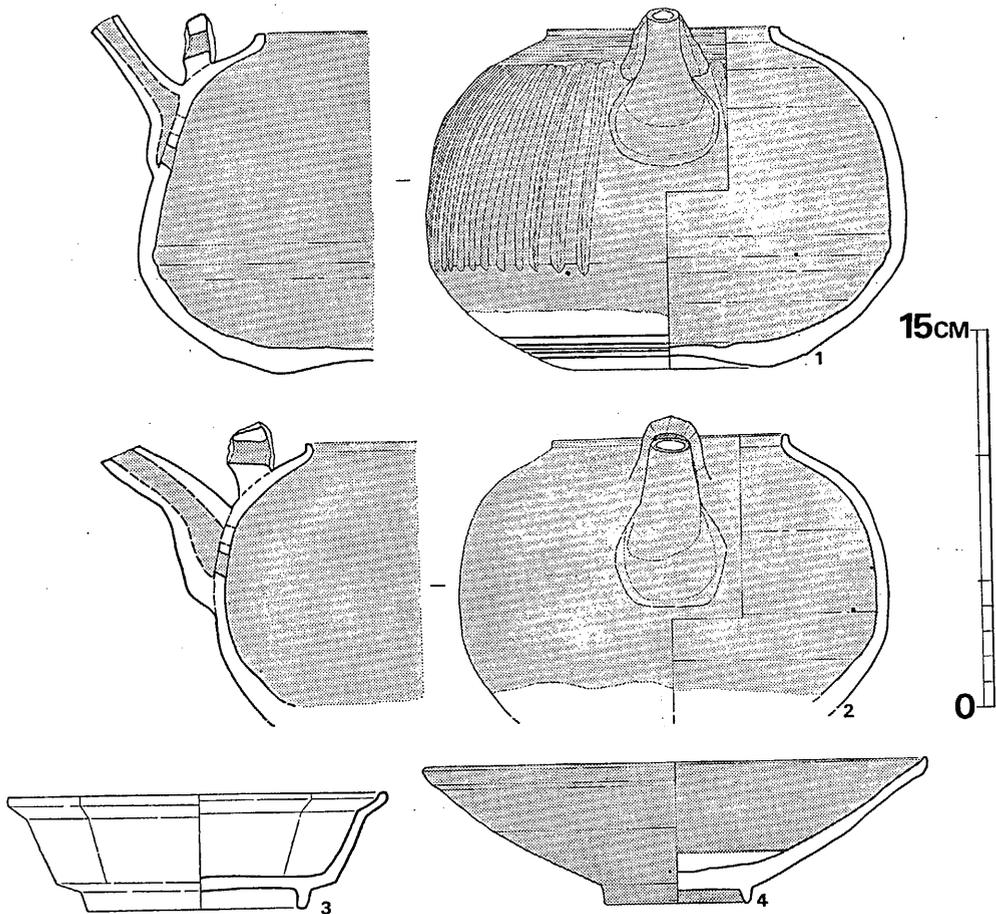


Fig. 77 第1地点第1号竪穴出土陶器実測図(縮尺1/3)

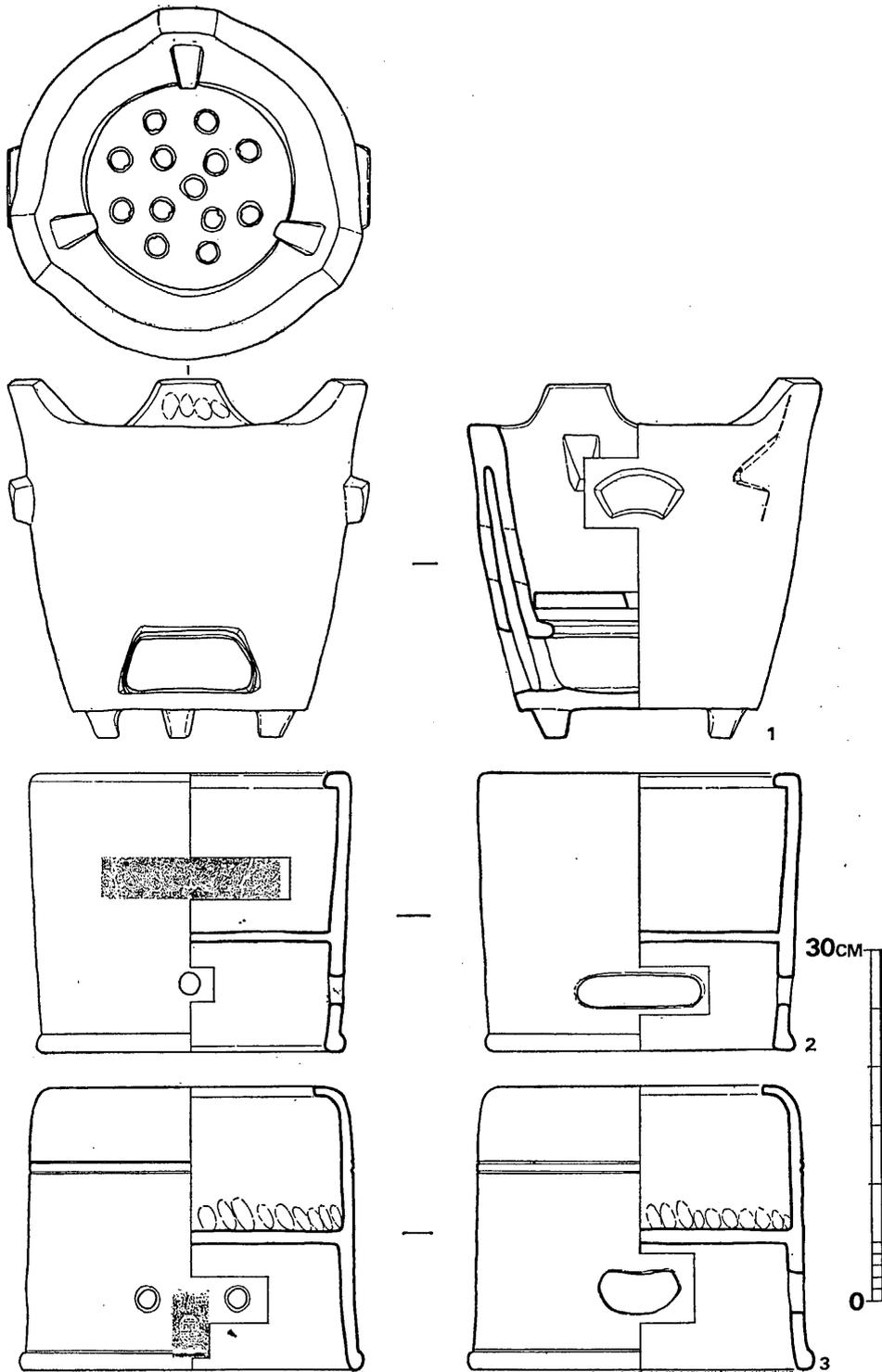


Fig. 78 第1地点第1号竖穴出土火舎七輪実測図 (縮尺1/2)

第2号溝状遺構 (Fig. 79, PL. 44)

一部は建物遺構に切られており、長さ約12m、幅18~55cm、深さ10~50cmを測る。溝の断面はU字形をなし、溝底は北西方向に傾斜する。遺物は陶器細片、弥生式土器片等が検出された。

建物遺構 (Fig. 79)

遺構上部は農耕等のため削平を受けており、礎石、根石は検出されなかった。建物掘方は一辺1~1.3mをなす方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。内部は粘質土を版築しており、固く締っている。深さは30~50cmを測る。掘り方中心間の距離は4.85m(約16尺)を測る。建物主軸方向はN-4°-Wである。建物遺構の東南隅には鍵形の石組遺構が検出された。建物遺構との関連は不明である。遺物として陶器細片が検出された。

2 第2地点の調査 (Fig. 80, PL. 60)

第2地点は第1地点の北方約50mの丘陵先端西部に位置する。第2地点は当初、遺跡として掲げてなかったが、第1地点調査最終日に植木移植作業中第1号甕棺墓が発見されたことが端緒となり、8月5日より9月3日まで約1ヶ月間発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代中期後半の甕棺墓2基、古墳時代後期の住居跡15軒が検出された。遺物として、表土層より弥生式土器片多数が、また、各住居跡に伴って多数の須恵器、土師器が検出された。しかし、調査時における調査担当者間に住居跡ナンバー等の不統一があり、加えて遺物の混入など最終的には、同じ住居跡がいくつも存在したり、住居跡ナンバーのないものなど、住居跡と遺物とが結びつかない結果となってしまった。加えて図面の不備により、住居跡を詳細に検討すること不可能となったものが多い。そこで、本報告では、写真等により確実に住居跡と結びつく遺物のみ図示した。

(1) 弥生時代の遺構と遺跡**第1号甕棺墓** (Fig. 81, PL. 61・62)

第2地点発見の端緒となった甕棺墓である。

第1号甕棺は2個の小形の甕形土器を用いた接ロ式棺で小児用である。墓壙は黄褐色土層から掘り込んでおり、墓壙東側は削平されている。棺は墓壙底に下甕を納めるだけの横穴を掘って主軸N-47°-E、傾斜43°で埋置している。

上甕は、内彎気味に立上がる「く」の字状口縁をもち、頸部に1条の貼付け三角突帯を巡らす。胴部の張りは少なくゆるやかにカーブして底部につながる。口縁部内外面は横ナデ調整、内面はナデ調整で部分的に粗い刷毛目を施す。胴部外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げている。外面には煤の付着が著しい。口径41cm、器高45.8cm。

下甕は大きく外反する「く」の字状口縁をもち、頸部に1条の貼付け三角突帯を巡らす。上甕に比べて胴部の張りが強い。口縁部内外面は丁寧な横ナデ調整、内面はナデ調整、外面は縦

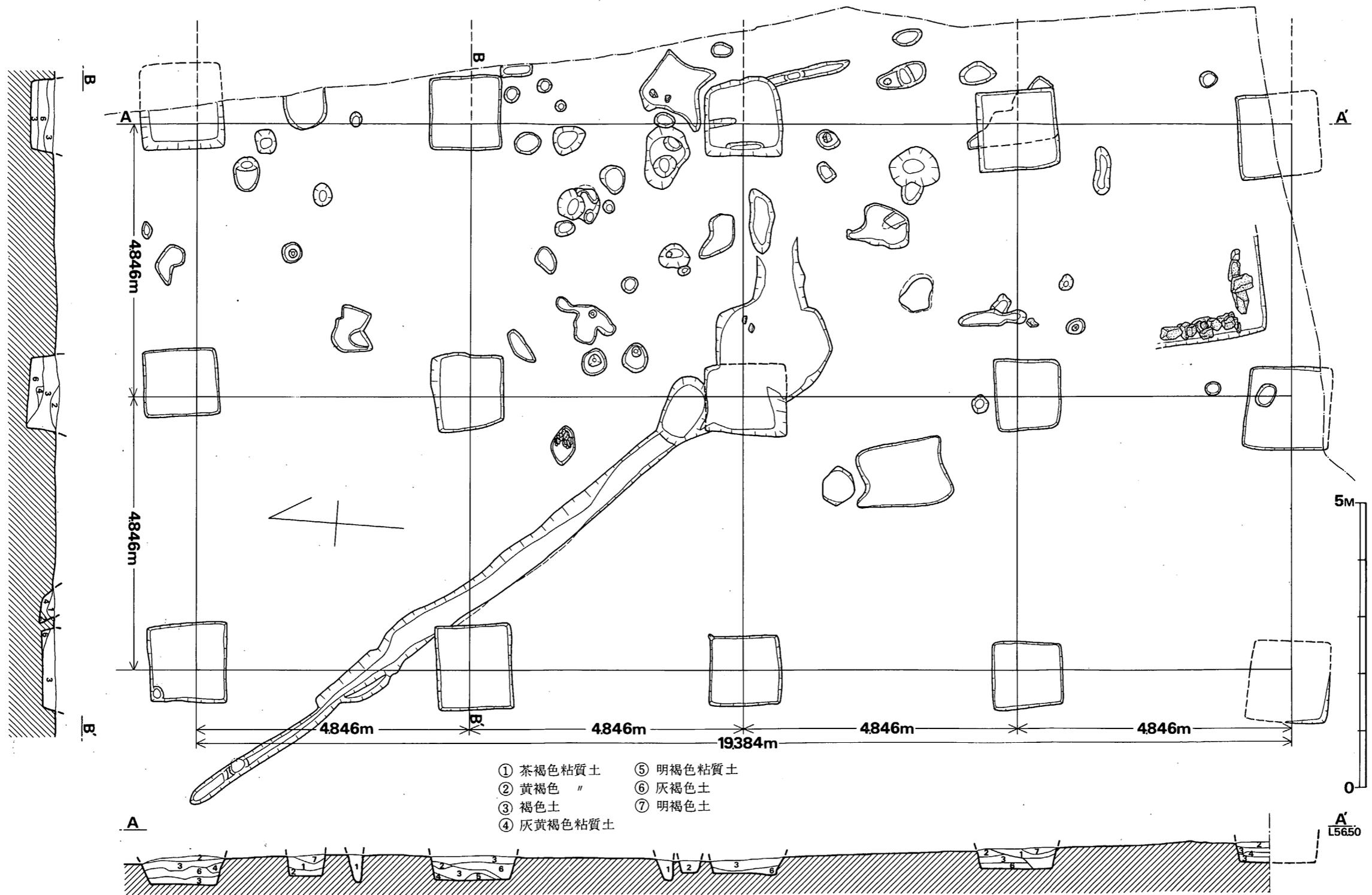


Fig. 79 第1地点建物遺構、第2号溝状遺構実測図(縮尺1/80)

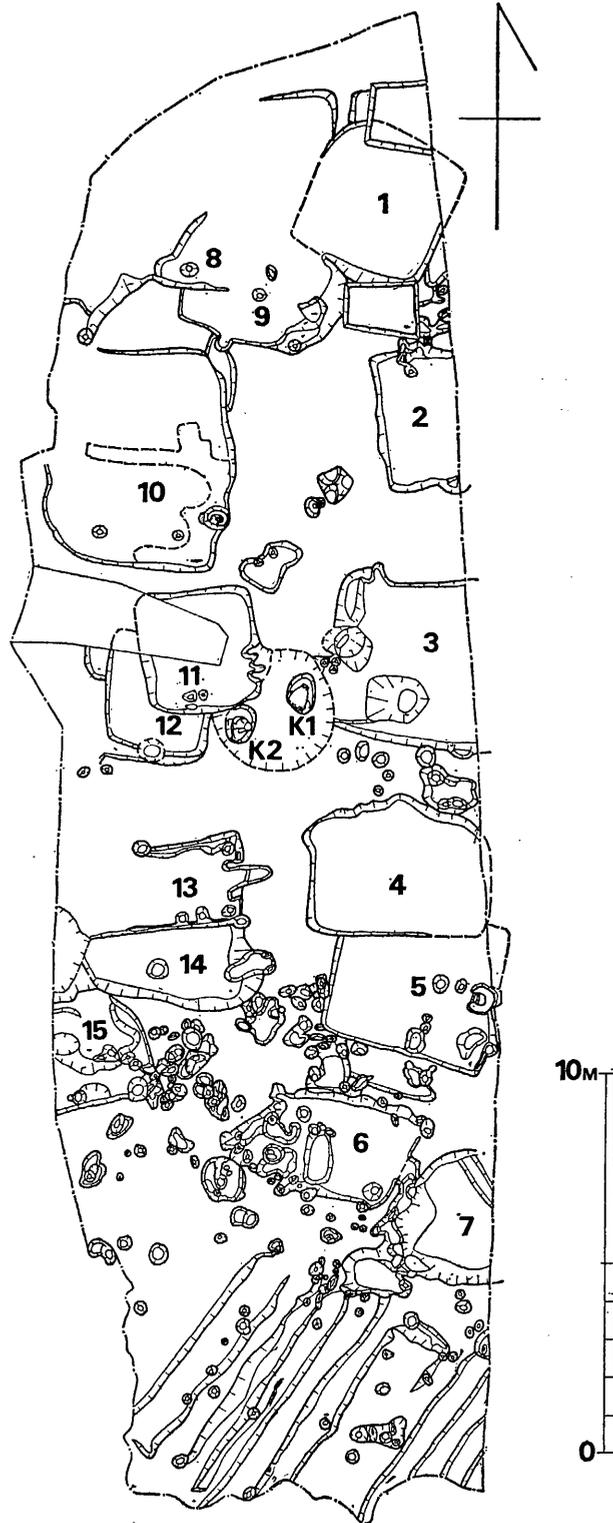


Fig. 80 第2地点遺構配置図(縮尺1/200)

方向の刷毛目で仕上げている。上甕と同様に外面に煤の付着が顕著に残る。口径40cm、器高55.9cmを測る。

第2号甕棺墓 (Fig. 81, PL. 61・62)

第2号甕棺墓は上に鉢形土器、下に打欠きの壺形土器を使用した接口式棺で、小児用である。墓壇の大半は削平されており、本来の形態をとどめないが、第1号甕棺墓と同様に墓壇底の南寄りに横穴を掘り、40°の傾斜をもって埋置され、棺の主軸方位N-8°-Eである。上甕は逆L字状口縁をもつ鉢形土器で、底部は平底で、若干上げ底気味である。口縁内外面は横ナデ調整、胴部内外面は刷毛目調整を施す。胎土は粗い砂粒を含むが焼成は良好。灰黄褐色で一部黒変する。口径36cm、胴部最大径32cm、底径9cm、器高22.6cm。

下甕は肩部以上を打欠いた壺形土器を用いている。胴部最大径は上位にあり、彎曲気味に底部につながる。底部は上げ底である。器面全体が凹凸をなし、歪んでいる。内面はナデ調整、

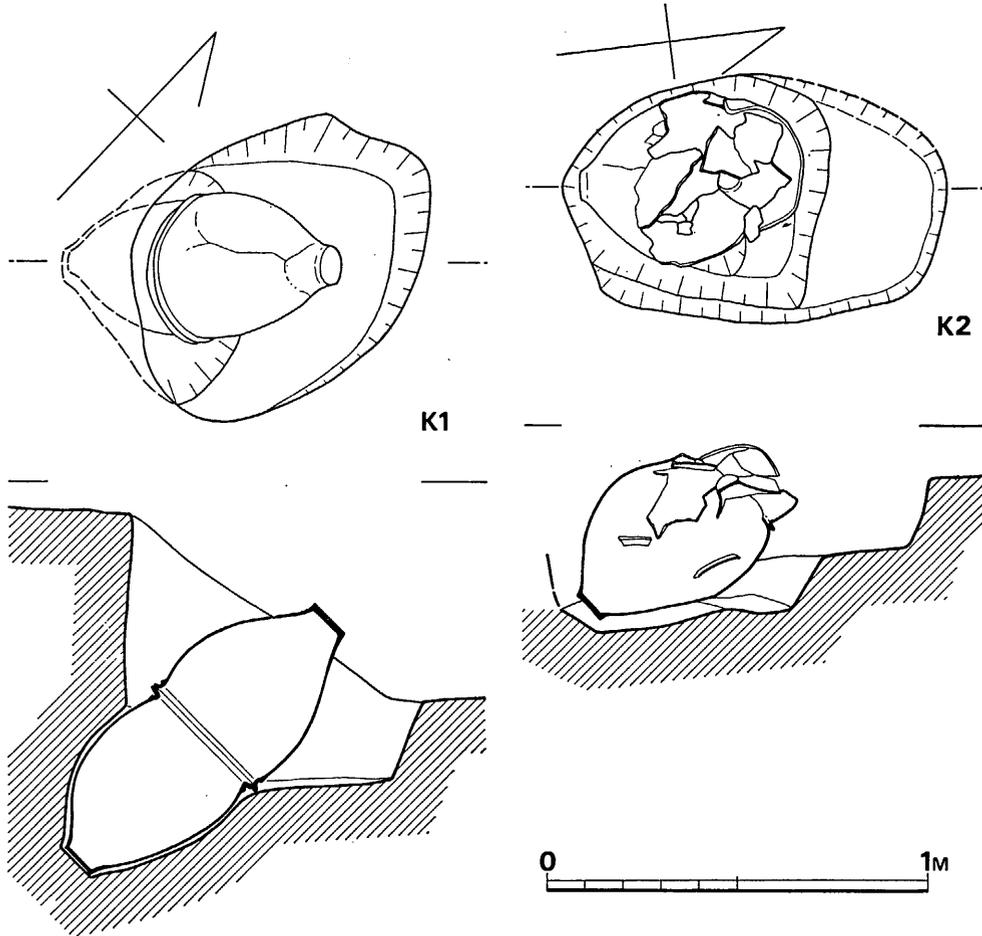


Fig. 81 第2地点第1.2号甕棺墓実測図 (縮尺1/40)

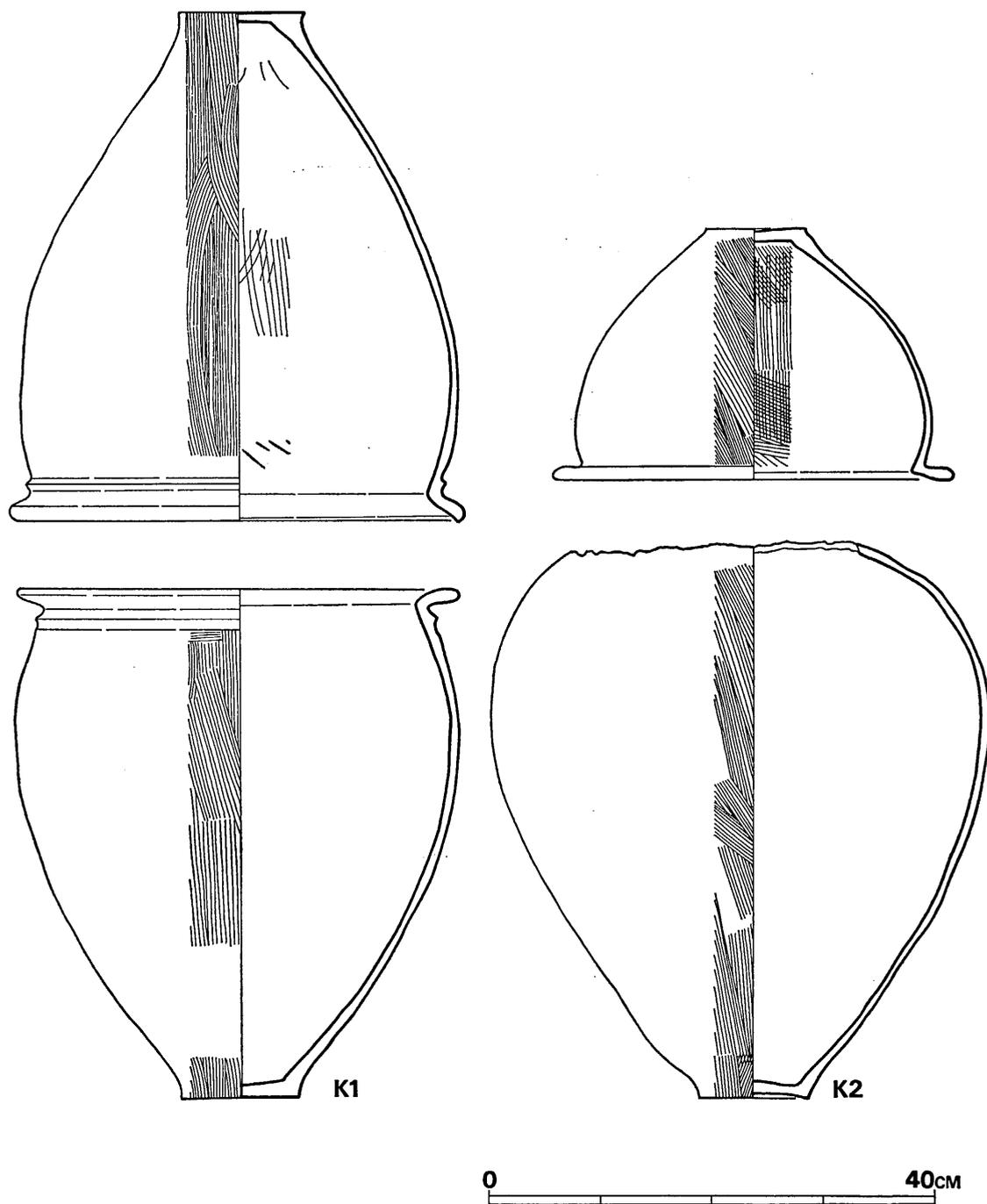


Fig. 82 第2地点第1.2号甕棺実測図(縮尺1/6)

外面は縦方向の刷毛目で仕上げている。胎土に粗い砂粒を含むが焼成は良好。灰黄褐色で一部黒変する。打欠き部口径約26cm, 胴部最大径45cm, 底径10cm, 現存器高50cmを測る。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

第1号住居跡 (Fig. 83, PL. 63)

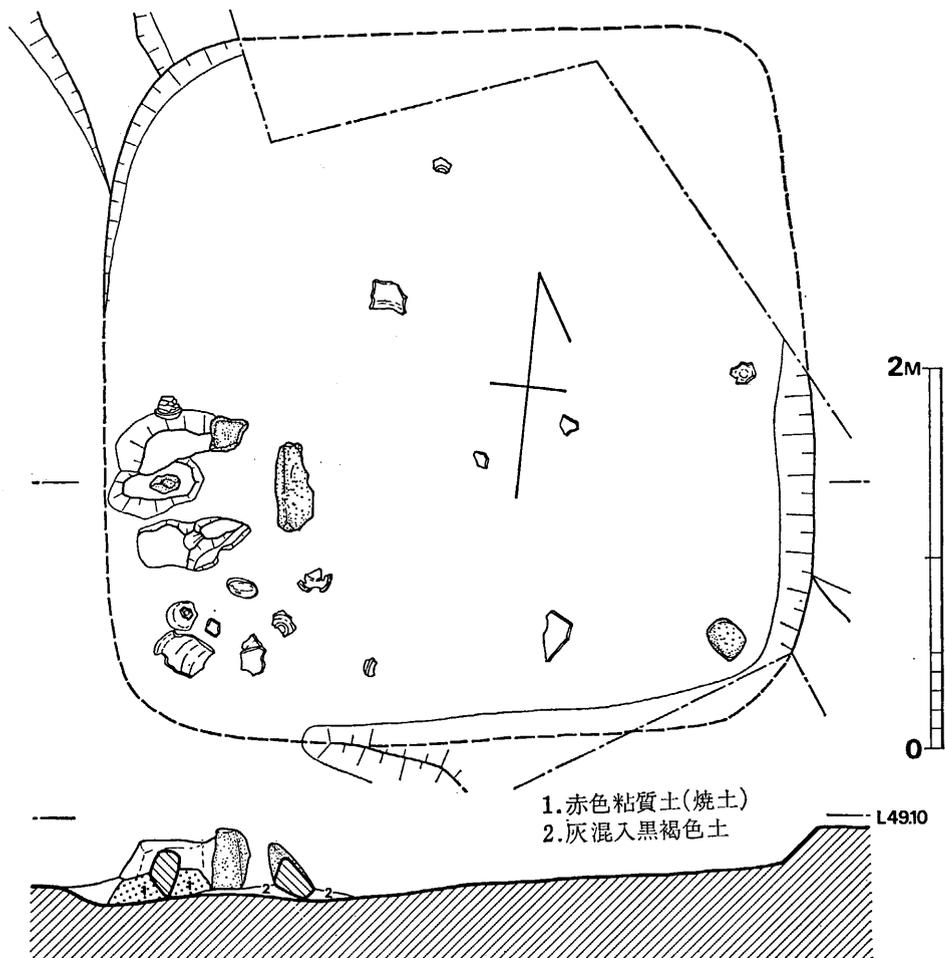


Fig. 83 第2地点第1号住居跡 (縮尺1/40)

第2地点の北端に位置する。樹木等のため、完全発掘に至っていないが、一辺約3.7mの隅丸方形を呈する住居跡である。西壁は第8・9号住居跡に切られている。壁高は東壁で約20cmを測る。床面はほぼ平坦をなす。柱穴は検出されなかった。西壁南寄りには貼付けのカマドを有する。カマド上部を第8・9号住居跡によって削られているが、奥行き80cm, 幅85cm, 焚口の幅35cm, 床面からの高さ約35cmを測る。カマド中央に厚さ約13cmの焼土が認められ、支脚とみられる石が立っている。焚口の両袖には角柱状の花崗岩を置いてカマドを補強している。カ

マド前方の角柱状の石は焚口左袖を補強していたものであろう。遺物はカマドの左側隅から土師器（甕）、須恵器（平瓶・杯蓋・杯）等が出土した。

第2号住居跡

(Fig. 84, PL. 63)

平面形は完全発掘でないために不明であるが、南北約3.50m、東西1.80 (+ α) mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高約50cmを測る。東北隅床面から焼土が検出されている。南壁の東寄りには、削り出しの階段状遺構が認められる。遺物は7世紀後半に比定される須恵器杯等が出土した。

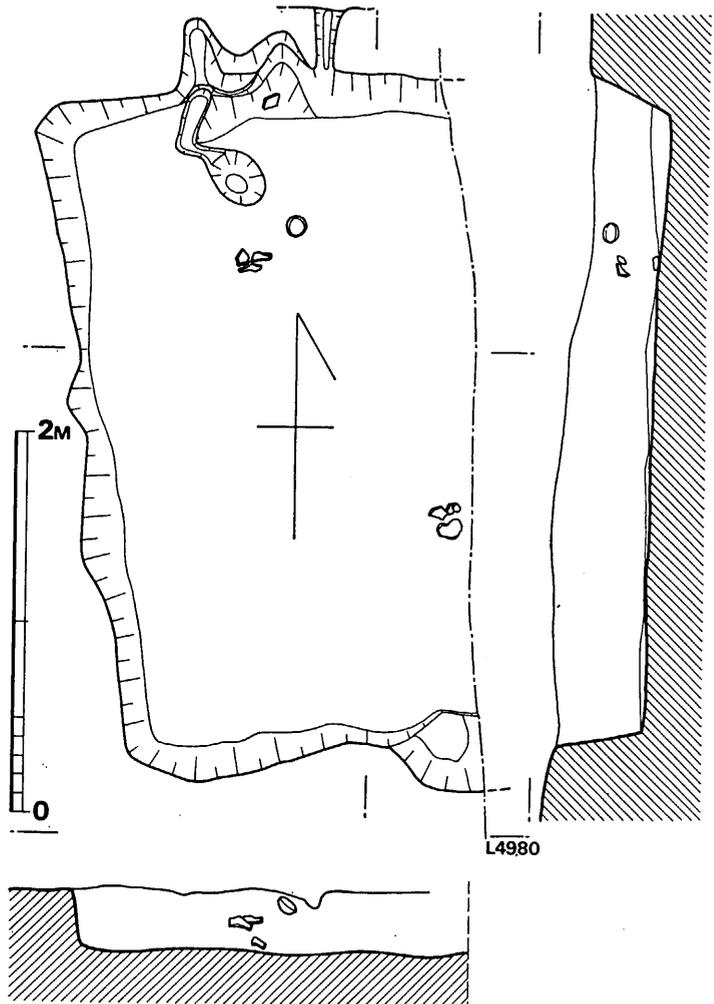


Fig. 84 第2地点第2号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第3号住居跡 (Fig. 85)

平面形は、方形もしくは長方形をなすと考えられるが、限られた調査区域のため、完全発掘に至っていない。

南北方向約4.5m、東西3.5m (+ α) を測る。壁は北壁側はほぼ垂直に掘り込まれているが、西・南両壁側は、ゆるやかに掘り込まれている。西壁北寄りには、階段状遺構を設けている。ピットは、西壁中央と床面南西隅寄りに検出された。遺物としては床面から土師器の高杯1個と砥石4個、鉄塊が検出されたが取上げ後紛失している。

第4号住居跡 (Fig. 86, PL. 64-1)

主軸を東西方向にとる長方形住居跡である。

南壁は第5号住居跡によって切られており、南壁の東半部は削平を受けている。東壁は調査区域外のため検出し得なかった。北壁は胴張りをもつ。規模は東西約4.5m前後、南北約3.20mである。床面は比較的良好に踏みかためられており、南から北へゆるやかに傾斜する。床面か

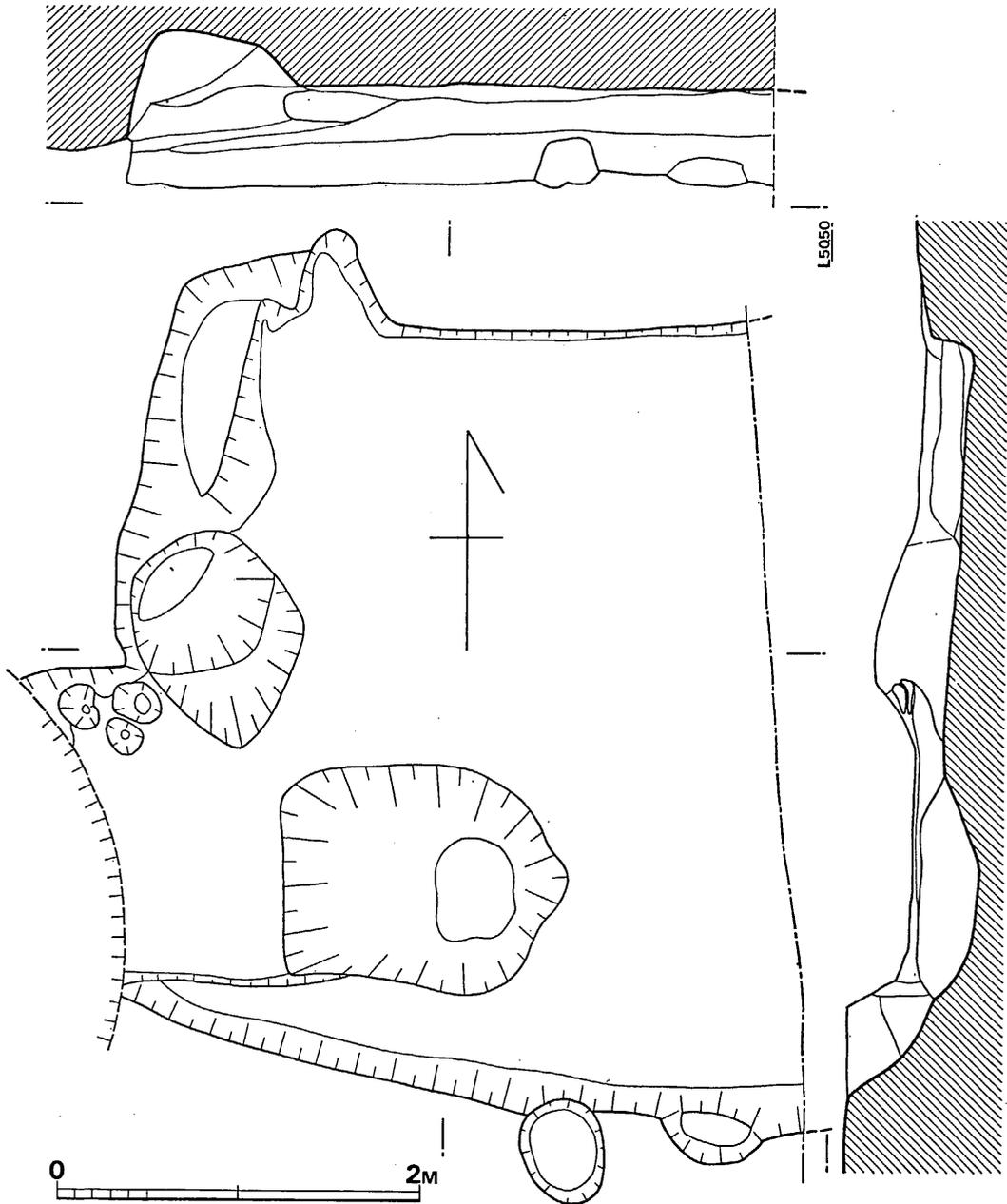


Fig. 85 第2地点第3号住居跡実測図 (縮尺1/40)

らピットは検出されなかった。遺物は土師器細片が数点検出された。

第5号住居跡 (Fig.86, PL. 64-2)

第4号住居跡を切って南側に接して位置する長方形住居跡で、主軸方向は $S-70^{\circ}-N$ であ

- | | |
|-----------|------------|
| 1. 褐色烧土层 | 8. 黑茶色土层 |
| 2. 茶褐色土层 | 9. 暗黄褐色土层 |
| 3. 灰色烧土层 | 10. 淡黄褐色土层 |
| 4. 地山前位层 | 11. 灰黄褐色土层 |
| 5. 黄褐色粘土层 | 12. 灰褐色土层 |
| 6. 黑褐色土层 | 13. 淡茶褐色土层 |
| 7. 暗茶褐色土层 | 14. 淡赤褐色土层 |

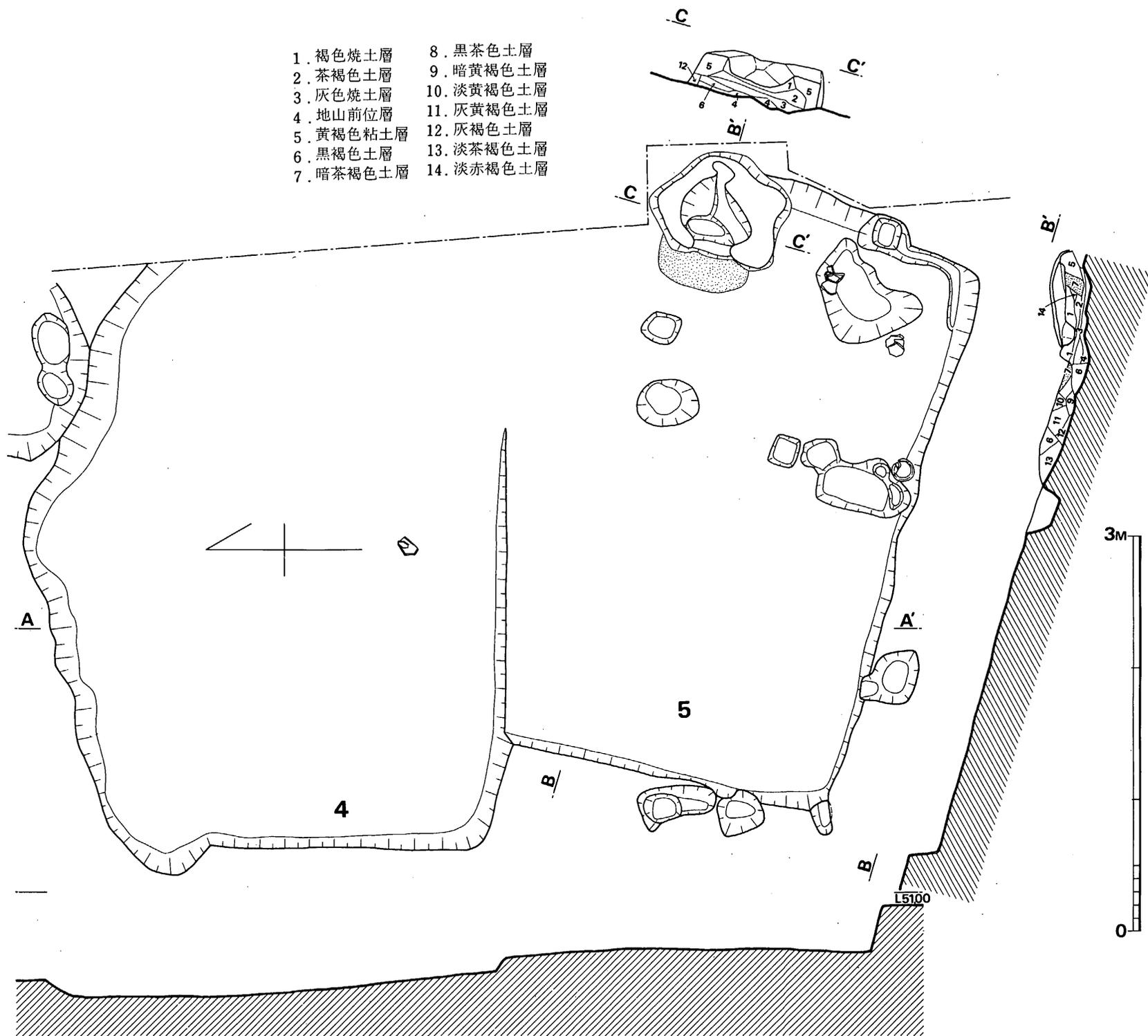


Fig. 86 第2地点第4·5号住居跡実測図(縮尺1/40)

る。規模は長軸約4.60m、短軸約3m前後である。

東壁には貼り付けのカマドを有する。奥行80cm、幅110cm、焚口の幅は29cm、床面からの現高40cmを測る。カマド前面の床面には、灰の堆積が認められる。煙出しの穴は確認できなかった。床面東南隅には、85cm×55cmの不整形ピットを有する。床面から数ヶ所ピットを検出したが、柱穴の配列は不明である。

出土遺物 (Fig. 87, PL. 68)

須恵器 1・2は杯蓋で擬宝珠形のつまみと身受けのかえりをもつ。かえりは口縁水平面より若干内方につく。天井部はカキ目調整。焼成

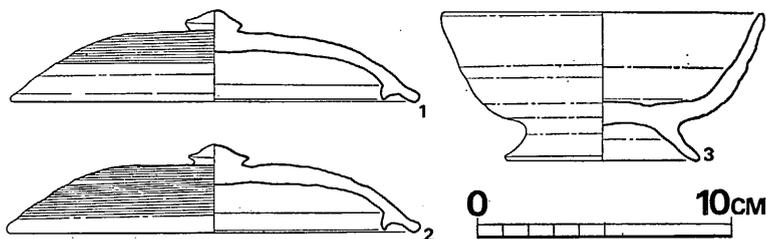


Fig. 87 第2地点第5号住居跡出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

は良好。1は最大径16.1cm、器高3.6cm、2は最大径16.2cm、器高3.5cmを測る。3は杯で高台を有する。口径に比して器高は高い。高台は細長く、外方へのびる。底部内外面はナデ調整、他は丁寧な横ナデ調整。口径12.8cm、器高5.8cm。胎土、焼成ともに良好。

第6号住居跡 (Fig. 88, PL. 65)

不整長方形を呈し、西壁附近は攪乱を受けている。本来の規模は3.7×2.7m程度と考えられる。壁高は約20cmを測る。床面はほぼ平坦であるが東壁から西壁側へとゆるやかに傾斜する。西壁寄りに140cm×65cm、深さ約25cmの長方形ピットを有する。床面各コーナーの四個のピットは柱穴であろう。

第7号住居跡 (Fig. 80)

第6号住居跡の東南部にあり、極めて不整形をなす。西壁附近は攪乱が著しい。床面は平坦をなすが、完全発掘に至ってないので詳細は不明である。

第8号住居跡 (Fig. 80)

第8号住居跡壁は第9号住居跡を切っていると考えられるが、掘り過ぎと、攪乱のため、住居跡の形状等は不明である。遺物は須恵器と土師器数点が出土した。

出土遺物 (Fig. 90, PL. 68)

須恵器 1～3は杯蓋でいずれも身受けのかえりをもつ。1はかえりが口縁水平面より外につく。天井部は丁寧なナデ調整、最大径13.4cm、器高2.1cm。2はかえりが口縁水平面と同位置につく。擬宝珠形のつまみを有し、天井部はやや内方に凹む。カキ目調整で仕上げています。最大径15.4cm、器高2.3cm。3は擬宝珠形のつまみを有し、かえりはやや内方につく。最大径16.0cm、器高4.0cmを測る。1～3はいずれも胎土、焼成ともに良好。4・5は杯身の口縁部

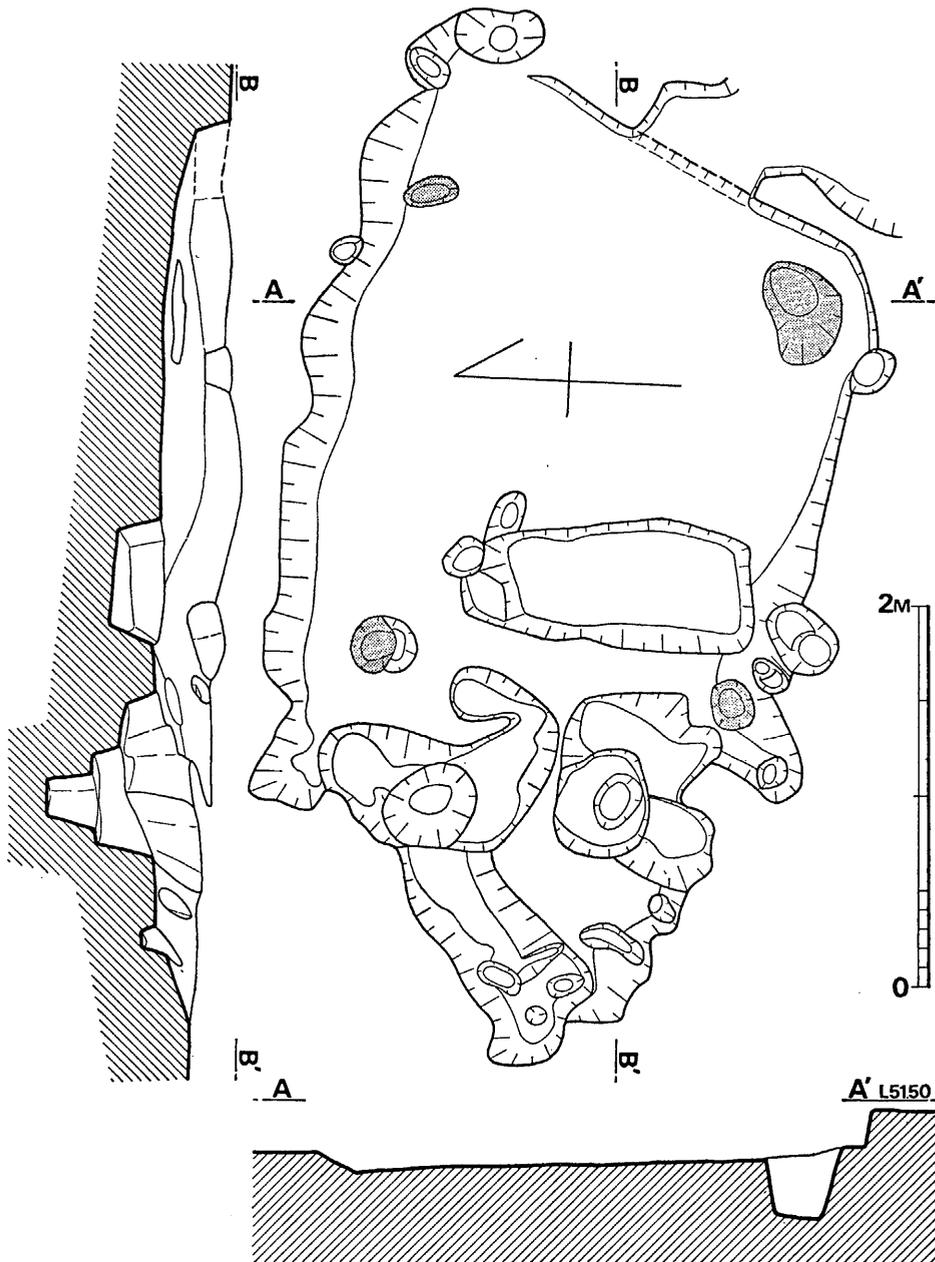


Fig. 88 第2地点第6号住居跡実測図(縮尺 1/40)

で、いずれも口縁端が外反する。内外面ナデ調整である。胎土、焼成ともに良好。

土師器 6は土師器甕で1/2現存する。平底気味の底部から張りのない胴部へ続き、口縁部は短く、大きく外反する。内面甕削り。外面はナデ調整で外面に煤が付着する。胎土に粗い砂粒を含むが焼成は良好である。暗茶褐色で一部黒変する。復元口径26.7cm、器高17.1cmを測る。

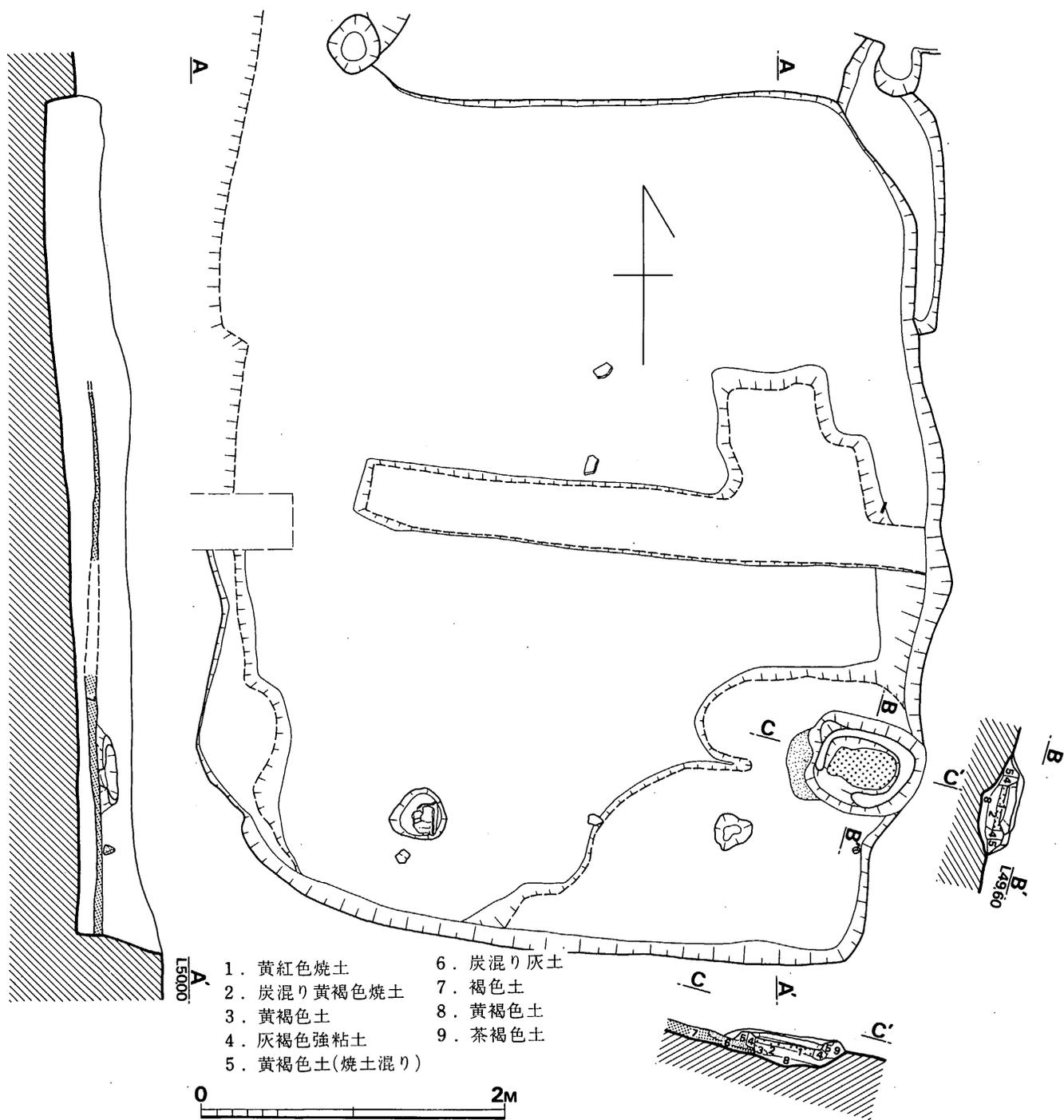
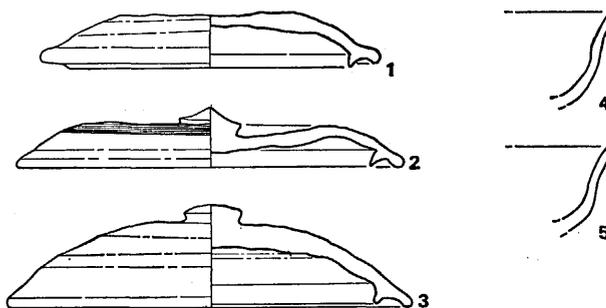


Fig. 89 第2地点第10号住居跡実測図(縮尺1/40)

第9号住居跡

(Fig 80)

1 辺約3mの方形住居跡と考えられるが、掘過ぎのため、詳細は不明である。床面は貼り床の可能性が大きいという。

**第10号住居跡**

(Fig 89. PL 65)

5.7m×4.8mの隅丸長方形を呈する住居跡で、長軸方位はほぼ南北である。住居跡掘り方床面が南から北へ傾斜するため、黄褐色土を貼り、床面を同レベルに整えた後、さらに薄く褐色土を貼って生活面としている。

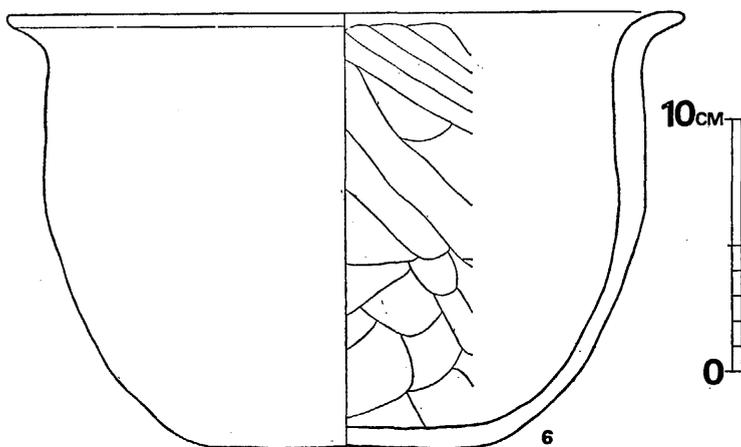


Fig. 90 第2地点第8号住居跡出土土器実測図(縮尺 1/3)

東壁南寄りには貼り付けのカマドを有する。カマドは貼り床面上につくられており、奥行き80cm、幅65cm、焚口幅は削平されているため不明である。カマドには焼土が詰っており、カマド前面には灰の堆積が認められる。柱穴は南壁に沿って二箇所検出した。遺物は床面上より多数の土師器片、須恵器片が出土した。

第11号住居跡 (Fig. 92, PL. 66-3)

3m×3.3mの隅丸方形を呈し、第12号住居跡を切る。東壁南寄りにカマドを設けている。カマドの中央には花崗岩の柱状石を用いた支脚が立っている。現存壁高は不明である。床面から土師器、須恵器、鉄器(刀子2本)が出土した。いずれもカマド周辺からの出土である。

出土遺物 (Fig. 91, PL. 68)

遺物取上げ時に、他の住居跡出土遺物との混入、紛失等が生じ、明確に第11号住居跡出土遺

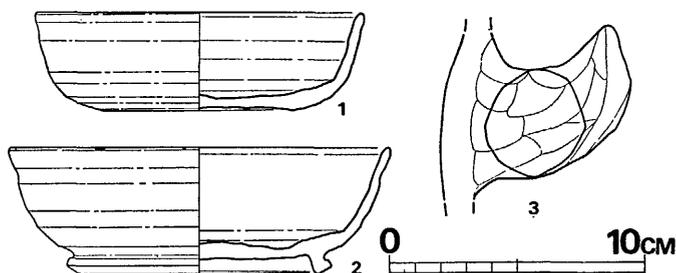


Fig. 91 第2地点第11号住居跡出土土器実測図(縮尺1/3)

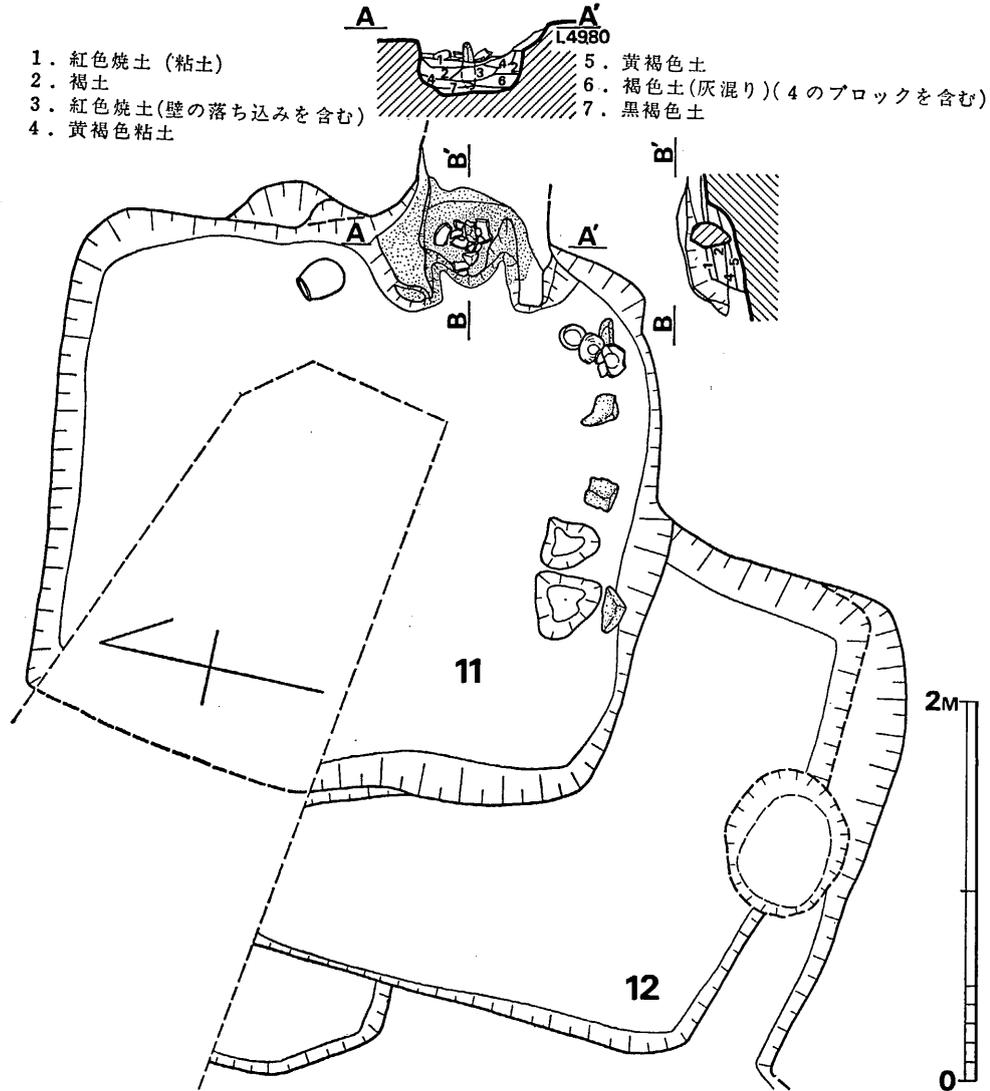


Fig. 92 第2地点第11・12号住居跡(縮尺1/40)

物と判明したものを図示した。

須恵器 1は杯身で、底部を含む内外面にわたって丁寧な横ナデ調整で仕上げている。口径13cm, 器高3.9cm。胎土は良質であるが焼成はやや悪く、黒褐色を呈する。2は高台を有する杯身で、体部と底部の境は丸味を帯び、脚端部は上に向ってはね上がっている。薄手である。口径15cm, 器高5cmを計る。良質の胎土を用いているが、焼成は不良で、灰黒色を呈する。

土師器 3は甔の把手で、焼成は良好で、赤褐色を有する。

第12号住居跡 (Fig. 95, P L. 66-2)

一辺約2.7mの方形住居跡であろう。北壁周辺を第11号住居跡によって切られている。壁高は不明である。床面から柱穴は検出されなかった。

出土遺物 (Fig. 93)

須恵器 3・4は杯蓋で、ともに身受けのかえりをもつ。5・6は杯身で、高台をもつもの(5)、もたないもの(6)がある。5は短い高台をもち、体部と底部の境に明瞭な稜をもつ。6は底部にヘラ切り離しの痕跡を残し、横ナデ調整を施す。口径11.8cm, 器高3.5cm。灰黒色を呈し、焼成は良好。

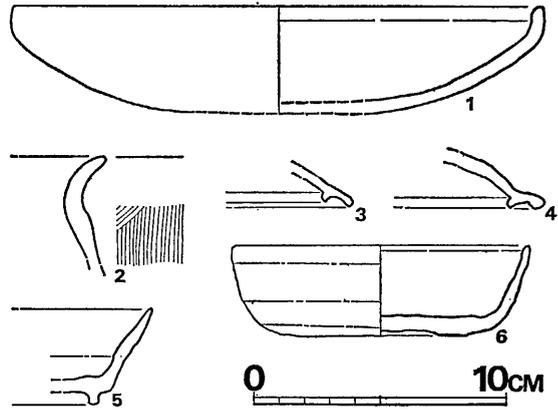


Fig. 93 第2地点第12号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)

土師器 1は盤で底部を欠失する。底部からゆるやかに立上がり、口縁部はほぼ垂直に短く立上がる。器面の荒れが著しい。明褐色を呈し、口径21cm, 器高約4.2cmを測る。2は甕で口縁部は外反し、外面は細かい刷毛目調整がみられる。胎土に粗い砂粒を含むが、焼成は良好。茶褐色を呈す。

第13号住居跡 (Fig. 95, PL. 67)

平面形は長方形を呈し、長軸方向はN-85°-Eである。南壁は第14号住居跡を切る。自然地形の傾斜及び攪乱により、西壁と南北両壁の一部は検出されなかった。規模は東西4.3m(+α), 南北約4.2m, 壁高約45cmを測る。東壁中央にはカマドを設けている。カマドは壁を若干掘り窪めて、両裾を貼っており、カマドの中には支脚とみられる赤く焼けた花崗岩が立っている。東壁両コーナーには方形のピットがあり、柱穴と考えられる。南北両壁下には周溝を設けている。北壁下の周溝が幾分幅広である。

出土遺物 (Fig. 94, PL. 68)

遺物はカマド右側床面から土師器盤、住居跡中央床面から甕が出土した。

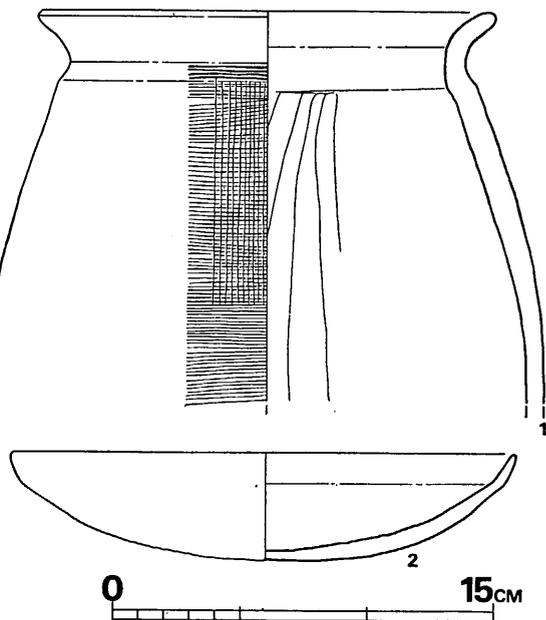


Fig. 94 第2地点第13号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)

土師器 1は甕で、胴下部を欠失する。口縁部は大きく外反し、最大径は胴下部にある。外面は横方向の細い刷毛目を施し、部分的に縦方向の刷毛目を重ねている。内面は篋削りである。口縁内外面は丁寧な横ナデ調整。口径18cm。胎土は粗い砂粒を含むが、焼成は良好。赤褐

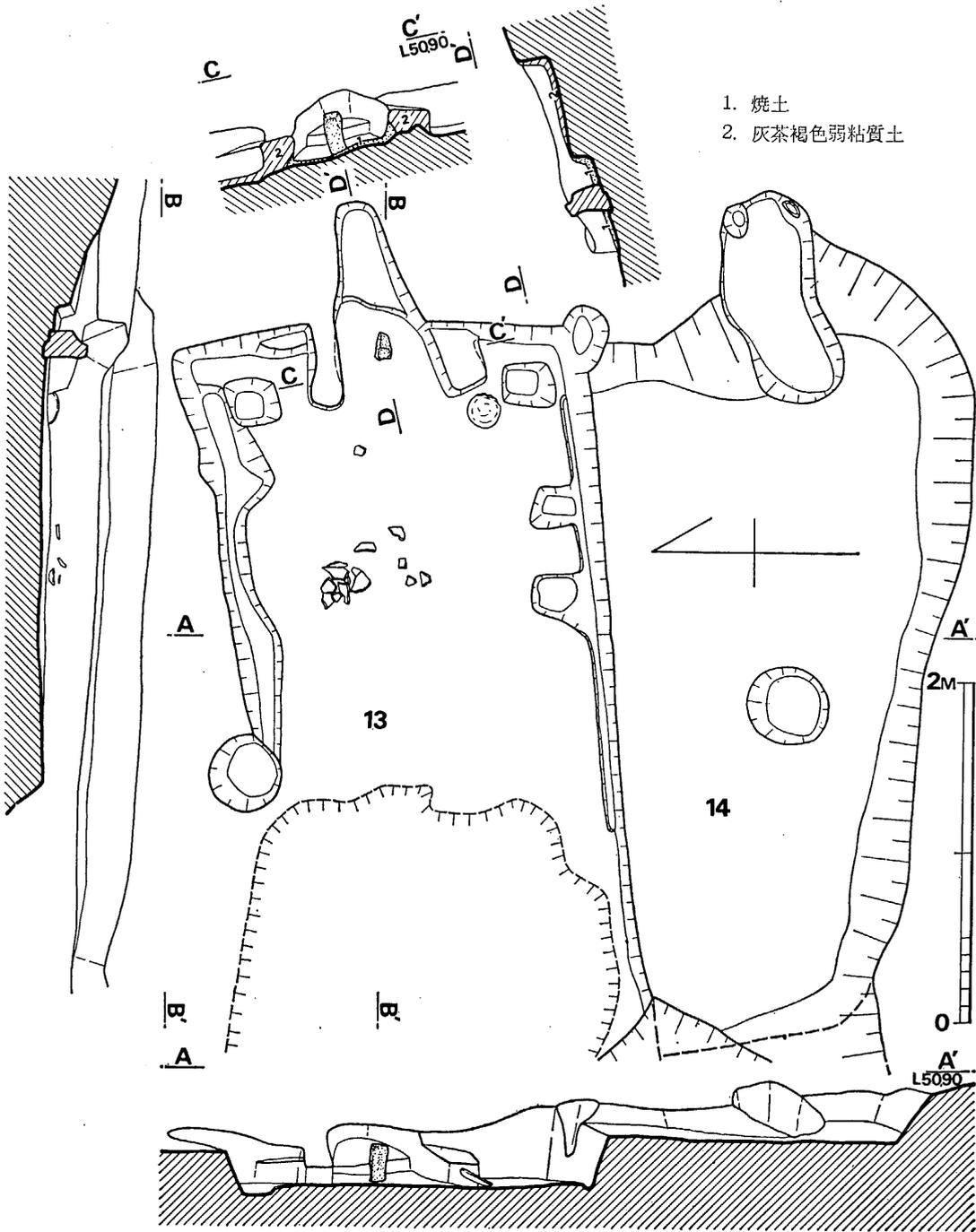


Fig. 95 第2地点第13・14号住居跡実測図 (縮尺1/40)

色を呈する。2は盤で、丸味をもつ皿状をなし、口縁部下に弱い稜がつく。胎土、焼成ともに良好。灰明褐色。口径20cm、器高4.3cm。

第14号住居跡 (Fig 95)

長軸方向をほぼ東西にとる長方形住居跡で、北壁側は第13号住居群によって切られ、西壁は攪乱されている。規模は長軸約4.7m、短軸2.2m(+α)を測る。東壁には128×55cmのピットを有する。床面はほぼ平坦をなし、壁高は約20cmを測る。床面中央右寄りに径約50cmのピットを有する。

第15号住居跡 (Fig 80)

第14号住居跡の南に接して位置するが切合い関係は不明である。方形もしくは長方形をなすと考えられるが、西壁側は工事で削られており不明である。床面は平端である。

3 小 結

第1地点では弥生時代から明治時代初期にいたる遺構と遺物が検出された。

弥生時代に属する遺構として住居跡8軒と溝がある。住居跡は弥生中期後半を中心とする時期の所産で、円形と方形の形態が認められる。第11号住居跡は後期に比定される。第1号溝は中期後葉の所産と考えられる。

古墳時代の住居跡は3軒検出された。前期に属する住居跡に第9・13号住居跡がある。第9号住居跡は出土遺物から5世紀代に比定されるが、東壁にカマド状遺構を有している。当地方においてカマドの付設が普遍化するの6世紀前半以降であり、第9号住居跡は最も先行する例であろう。後期に属する住居跡として6号住居跡が7世紀前半に比定される。大溝は明治以降の所産である。第1地点南部を中心とした江戸～明治初期の遺構は、八隈1・2号墳周辺の近世遺構に関連するものであろう。

第2地点では弥生時代の甕棺2基と古墳時代の住居跡15軒が検出された。甕棺は中期後葉に比定される。八隈遺跡の丘陵では、第1地点西南部の鞍部より中期後葉の甕棺1基が出土しており、また丘陵東端に位置する原口古墳下より中期の甕棺数基が検出され、付近にはまだ多数が埋置されている可能性が強い。第2地点と原口古墳の間では、甕棺破片が採集されていることから第2地点の甕棺墓はこれらの甕棺墓地の端部であろう。第1地点は第2地点より2m程高位置にあり、第1地点東方には200×100m程度の平坦部が広がっており、第1地点の遺構配置よりみて、第1地点の遺構はさらに東方へ広がるものとみられる。第2地点の住居跡は古墳時代後期の7世紀前半を中心とした時期の所産である。これらは八隈古墳群と密接な関係—おそらく、八隈古墳群に追葬された最終末被葬者の集落としてとらえることができよう。

(松村一良)

V 第1・2号墳周囲の調査

Iで概述したように、1・2号墳の周囲には、1・2号墳の二次利用を含めて、古墳とは直接関係のない種々の遺構が発見された。それらの遺構群は各々相互に関連するものも多いと思われるが、ここでは便宜上1・2号墳の周囲の調査の際に分区したA～D区、および第2号墳凹地、第1号墳墳丘部の各区に分けて述べることにしたい。

1. 第1号墳墳丘部の遺構

1号墳の墳丘は、墳頂を削平され、北側に土盛りが加えられる等、後世の人為的な作為によってかえられ、墳頂部は南北に長い隅丸形状の平坦地(約 $7.2 \times 3.5 \sim 5.4m$)をなすが、調査の結果、柱穴、礎石等は発見されず、建物の存否は不明である(Fig.96～98)。

墳丘の北西部、北東部、南東部の傾斜の肩口の所には、いずれもやや大き目の石が10数個散在して発見された。これらは頂部「土留め」を目的として整然と配されていたものが崩壊したものであろう。

墳丘西側においては、頂部肩口下に平石が4枚横に並列されて、やや南側に低まる状態で発見された。これは一種の階段状遺構と考えられ、西側裾より墳頂に上る通路の下に敷いたものと解される(Fig.99)。

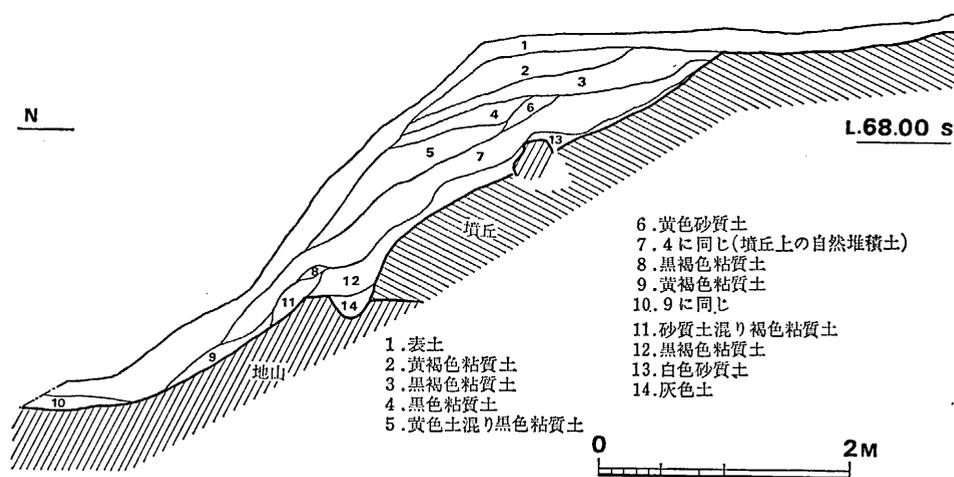


Fig. 96 第1号墳上盛土北側土層断面図(縮尺1/60)

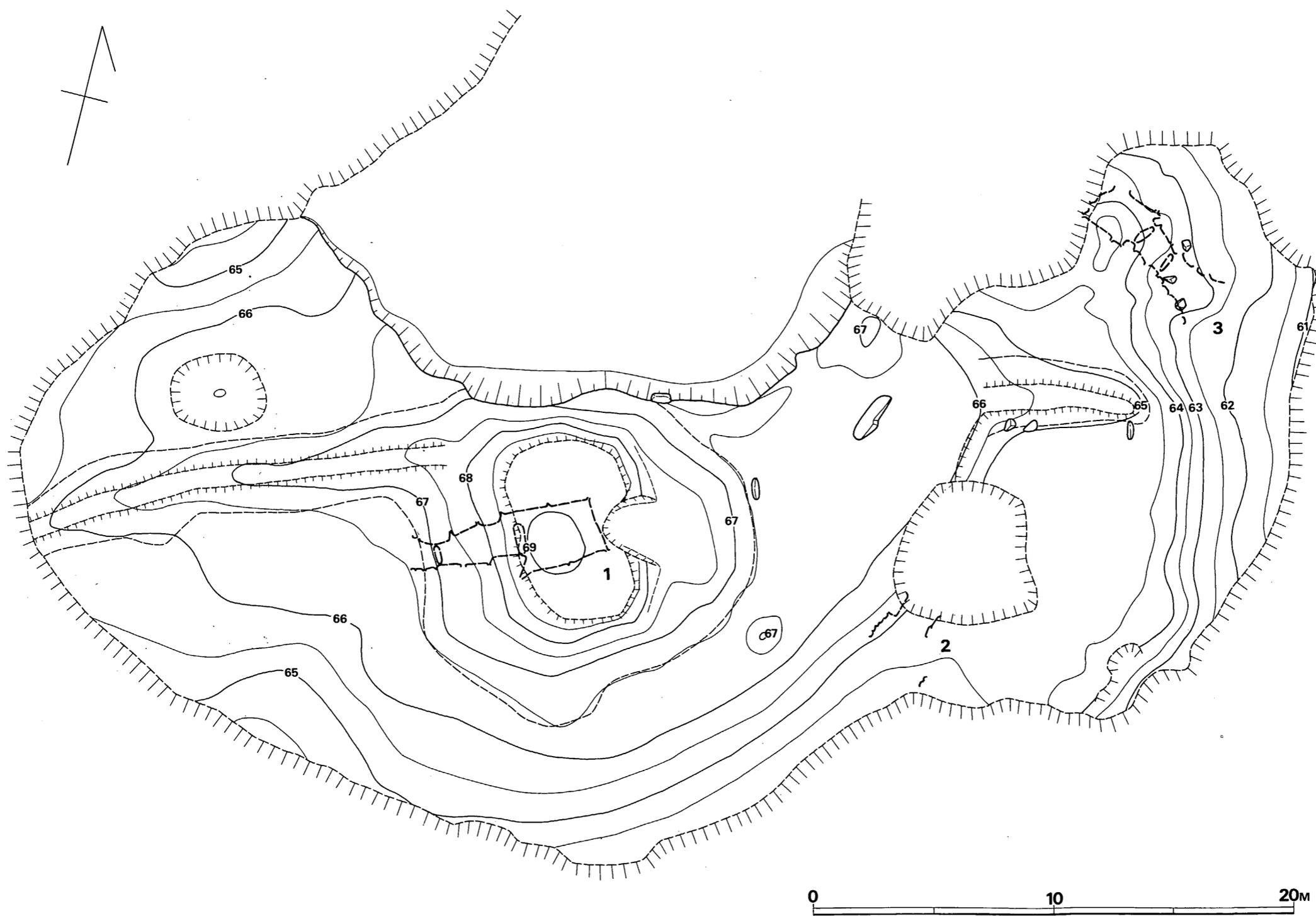


Fig. 97 第1・2号墳周囲の地形図（縮図1/200）

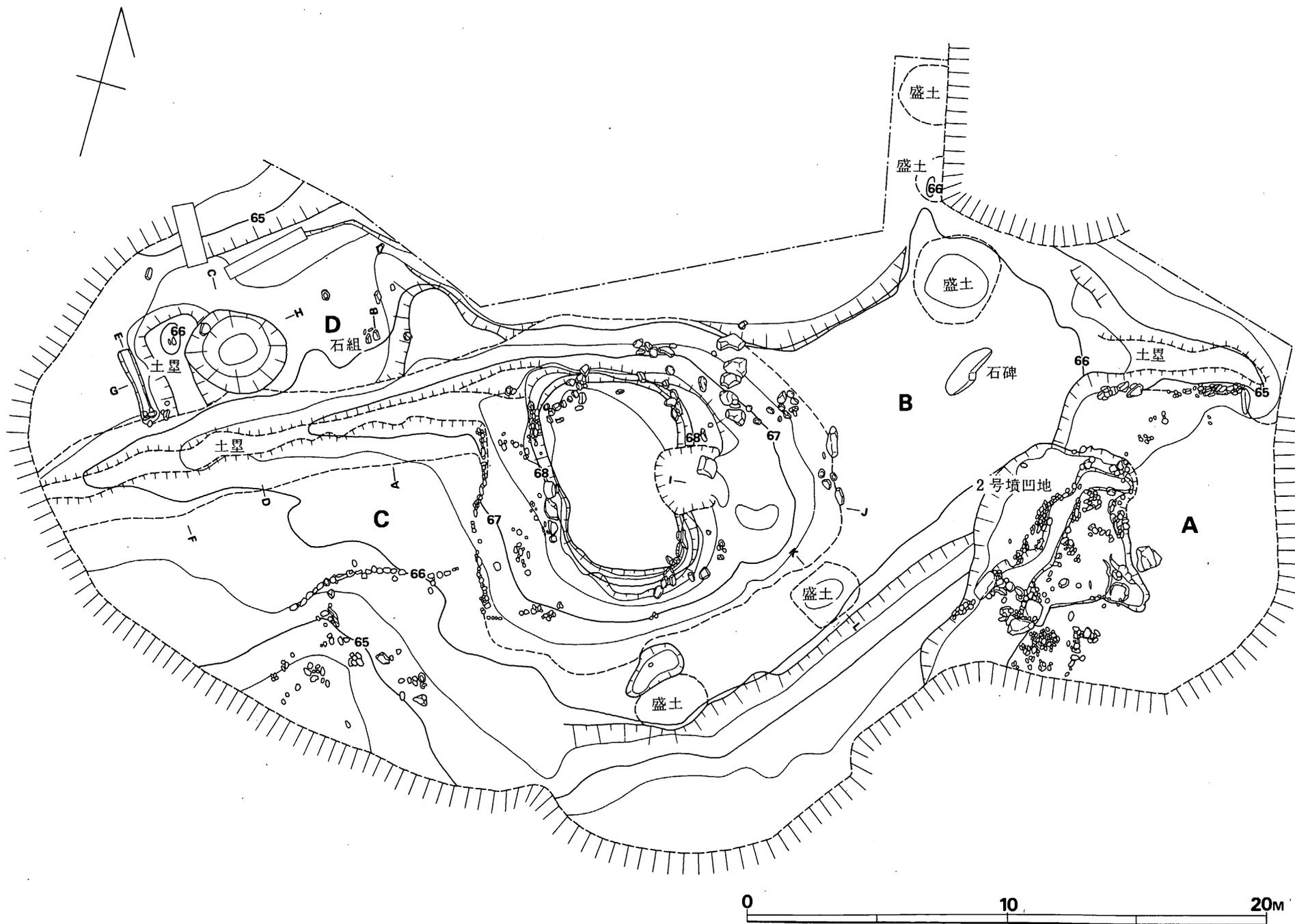


Fig. 98 第1・第2号墳周囲の遺構配置図(縮図1/200)

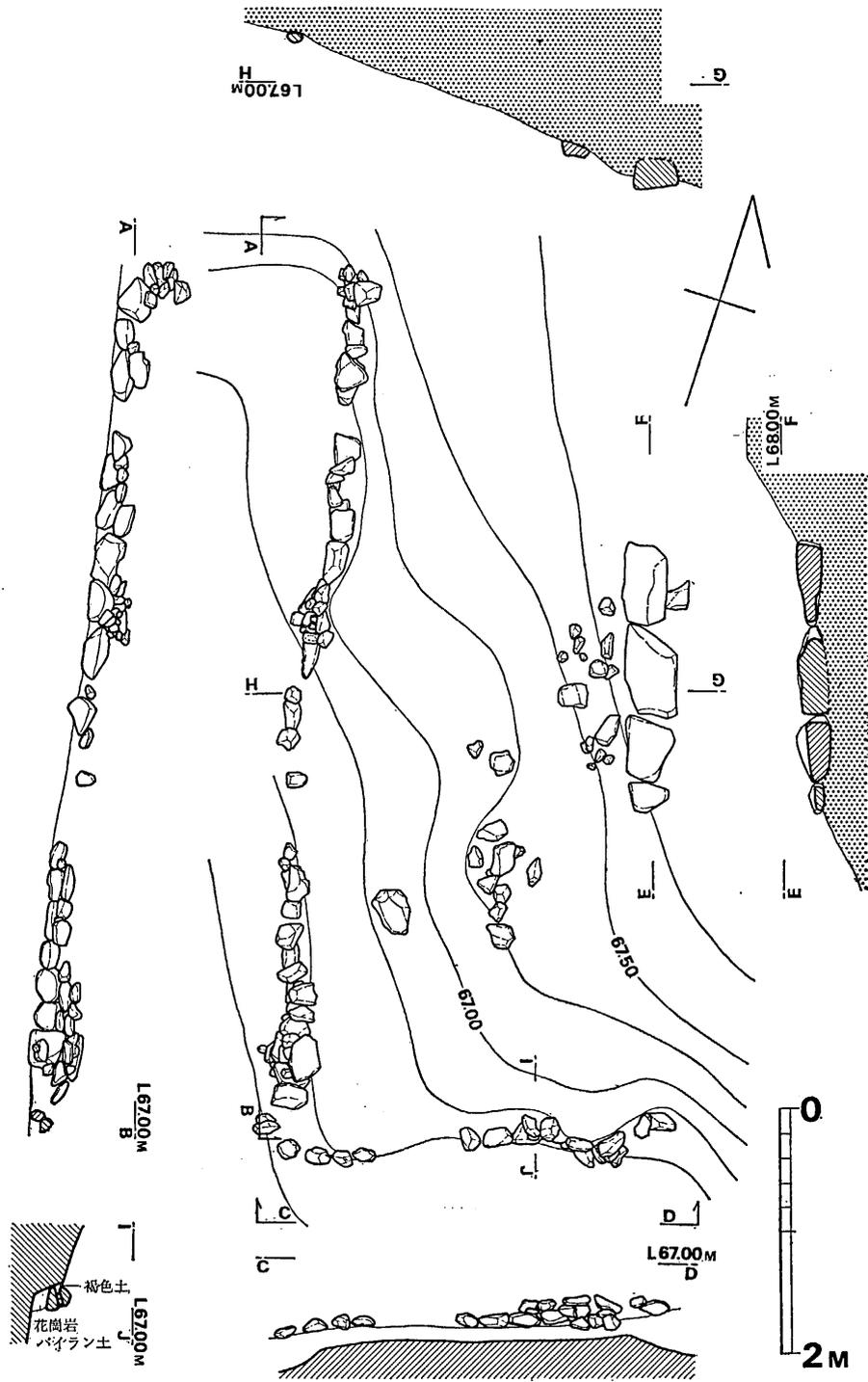


Fig. 99 第1号墳西側裾部石組列 (縮尺1/60)

この配石の下方には各種の礫石が散在していたが、土塁側の集石群と同様、頂部肩口付近の配石の崩れ落ちと考えられる。

さらに墳丘裾部においては、石組の列石遺構が検出された (Fig. 99, PL. 74~76)。20~30cm ほどの花崗岩の割石や角のとれた礫を用い、長辺を横置して3~4段に積み重ね、小口や平たく広い側面の面を見せている。裏込め石は認められない。土塁基部より南北に約7m配され、墳裾西南隅で角をなして東側に3mほど延びているが、東側は著しく崩壊している。この石組中、付近から種子島銃の鉛玉が3個発見された。また、石組中に石臼を割ったものを石材として4~5個使用しており、年代的に近世以降に属する遺構と考えられる。

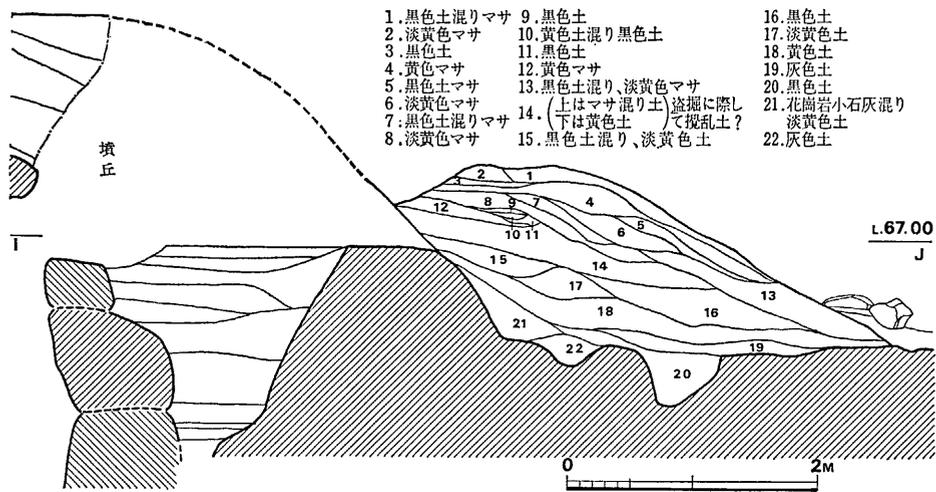


Fig. 100 第1号墳上盛土東側土層断面図 (縮尺1/60)

墳丘北東部においては、奥壁盗掘墳に向かって、段々に5個の大石を配した遺構が発見された。これはその状況から見て、明らかに階段として使用された遺構であろう (Fig. 101, PL. 73)。

奥壁側の墳丘は東側に張出して小築山状を呈しているが、これは盗掘の際の排土がたまつたものと考えるより、Fig. 100の土層断面図で見る通り、淡黄色のきれいな山砂が使われており、意識的に土盛りしたものと考えられる。

本土盛りと1号墳墳丘との境には、南側裾より細い谷状の凹みが奥壁盗掘墳に

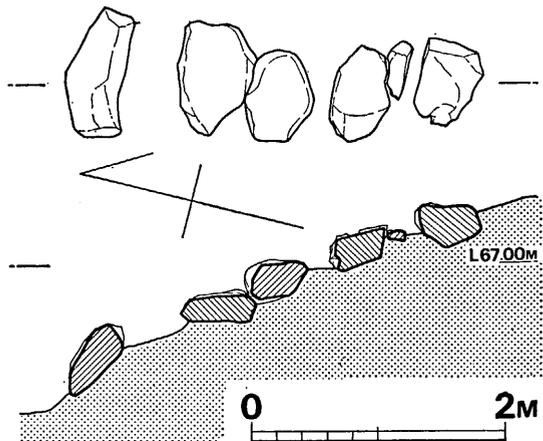


Fig. 101 第1号墳上配石階段状遺構 (縮尺1/60)

向かっており、通路としての可能性も認められよう。

また張出した土盛りの東側裾には1枚の大石と、他にそれより小さい数個の石が横置されているが、「土留め」の機能をもたしたものであろう。

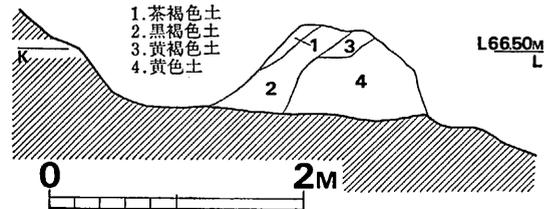


Fig. 102 第1号墳南東盛土断面図 (縮尺1/60)

このように1号墳の墳丘は頂部を平坦化し、周囲に土盛りを加え、西側基部に石組による石を配して、全体として高い方形土壇状の構築物としている。そこに上るために石を配した階段や通路状の遺構もみとめられ、建物の存否は確認し得なかったが、少なくとも「物見台」として利用された可能性がよい。

墳丘の南側には、高さ約70cm、径1.6mの方形状の土盛りがみとめられたが、これも人為的な遺構と考えられる(Fig. 102)。この土盛りの西側にも高さ約60cm、径2.5mほどの長楕円形の土盛りがみとめられ、同様の性格を有するものであろう。また楕円形の土盛りと墳丘との間には、長さ約2m、深さ20cmほどの卵形をした浅い掘り込みが検出された。中から須恵器甕の同一個体破片がやままとまって発見され、須恵器甕を掘り据えた古墳に属する遺構とも考えられる。

2. C 区 の 遺 構

1号墳の西側、土塁の南側の部分である。

先述のように、表土下には一帯に黄褐色の純度の高い山砂の層があり、整地して平坦化した形跡が窺われる。

この区のほぼ中ほど整地面において、1号墳裾部の石組列石遺構と直交し、ほぼ東西にやや彎曲気味に連なる列石遺構が検出された (Fig. 103, PL.75)。約30~40cmほどの大きさの角のとれた礫を20数個1列に並べ配しただけのものであるが、その南側に同様の石が散在しているところから、1号墳裾のものと同様、一段以上積まれていた可能性も考えられる。途中崩れて石を欠失した部分もあるが、現長は約5.3mを測る。

本列石と土塁との距離は4~5mで、土塁と1号墳裾の石組列石遺構とによって画された平坦地が形成されるが、この平坦地上には、地山面まで掘り下げたにも拘わらず、遺構らしきものは全く検出されなかった。

本列石は「土留め」及び「境界」としての機能を有したものと考えられる。

列石の南側は、表土下に黒色土が顕著で、列石に沿って浅く谷状に窪んでおり、1号墳墓道内の堆積土かと推測された。また先述のごとく大小の角礫が多数散在している中に、列石西端のすぐ南側に2枚の平石を直交して組合せた立石石組遺構が検出された。この立石石組遺構と列石とは何らかの関係の有すると考えられるが、その性格は不明である。

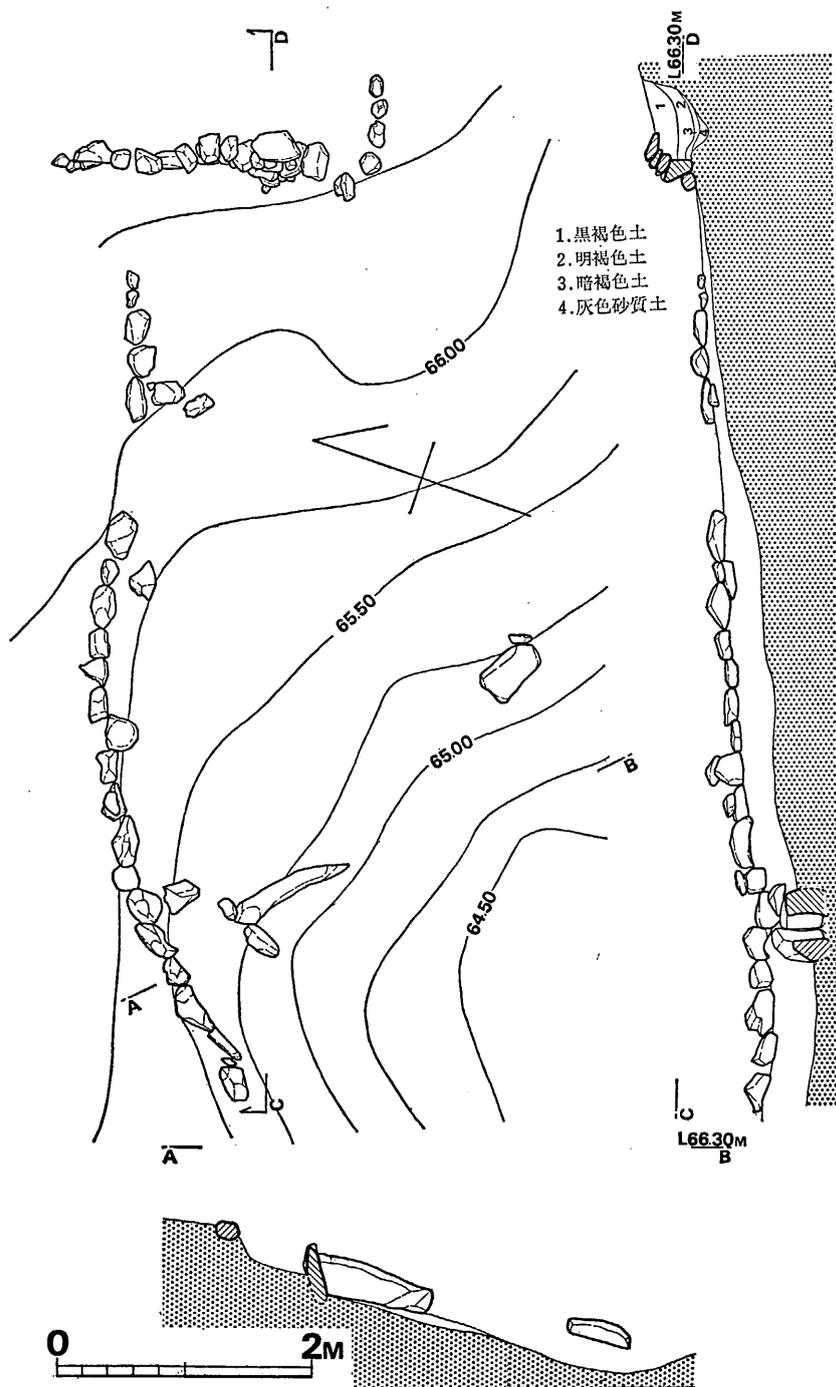


Fig. 103 C区列石遺構 (縮尺1/60)

3. 土塁およびD区の遺構

土塁は1号墳の北西隅より始まり、西方に真直ぐ17mほど延び、一旦私道によって切断されるが、さらに反対側に続いている (PL.75-1)。現状での基底幅は略3m、高さは1号墳側約1m余を測り、西に行くにしたがって漸次低まり、約30~50cmほどの高さとなる。

土塁の基部側での土層断面より構築状態をみると (Fig. 104), 地山の上に黄褐色の山砂を混ぜた花崗岩バイラン土を版築状に築き固めて約60cmほどの高さとし、その上に黒色の腐植土があり、さらに花崗岩のバイラン土の混った暗褐色の柔らかい土が盛られている。これより二段階の築成が考えられよう。すなわち黒色土は第1次築成後の表土面であり、その上に時間を置いて、さらに、少なくとも40cmほど土盛りしたものと考えられる。第1次築成の基底面幅は約2mで、その両側に配された幅約40cmの細い溝状遺構を埋めている。

また土塁と1号墳の石組列石遺構との築造の時間的先後関係は、両者の接する部分の断面よりみると、第1次の土塁をやや削り込んで石組の列石を構築しているのです、土塁が先に築かれたものと考えられる。

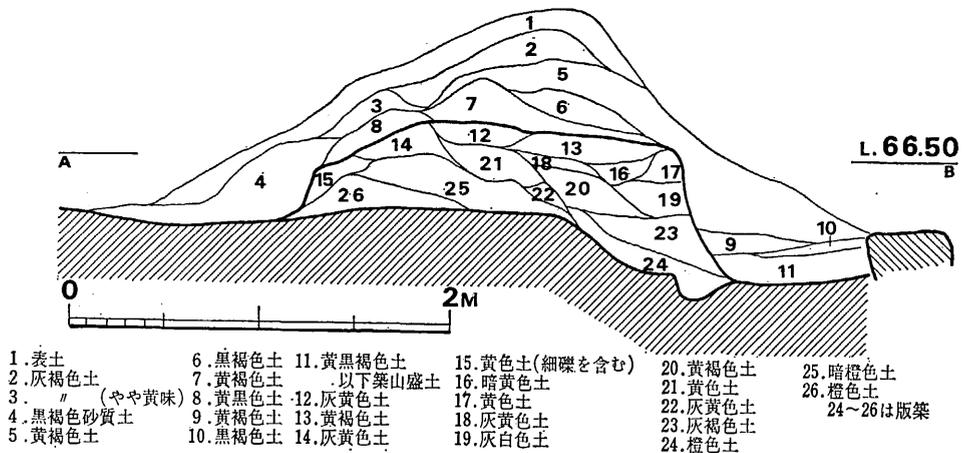


Fig. 104 第1号墳西側土塁断面図 (縮尺1/40)

D地区は土塁の南側の部分で、調査以前に浅い楕円形の凹地のみとめられた平坦地である。表土を20cmほど取り除くとC区同様黄褐色の山砂による整地面が認められ、凹地の西側においては、それと接して土塁状の高まりが発見された。この高まりは土塁と一段下って直交し、南に約4mほど短く延びて終る。頂部幅約1mで、高さは約30cmほどである。土塁と接する部分に6~7個の小割石が集在するが、原位置を有しているものか否かは判定し難い。

この土塁状の高まりの西側には、これに沿う溝状の遺構が検出された (Fig. 107・108)。上口幅1.5m前後、長さ約5mの両端の閉じられた溝状遺構である。深さは30~80cmで、南側

が徐々に高くなっている。

浅い楕円形の凹地は調査の結果、ほぼ東西に長軸をもつ鍋底状の地山掘り込みの遺構となった (Fig.105)。その大きさは上口で約3.8×3m、深さ90cmである。西側上口付近の壁面上に1枚の平石が存したが、原位置を保有したもののか否かは判定できない。

本凹地の東側2mほどの所で、整地面に据ったやや小振りの礎石様の石1個が検出されたが、これのみで、建物の存否を確認することはできなかった。

また凹地の東側約3m、土塁と接した位置に、長さ40cmほどの石を2個並置し、その北側に接して1枚の小振りの石を立石とする配

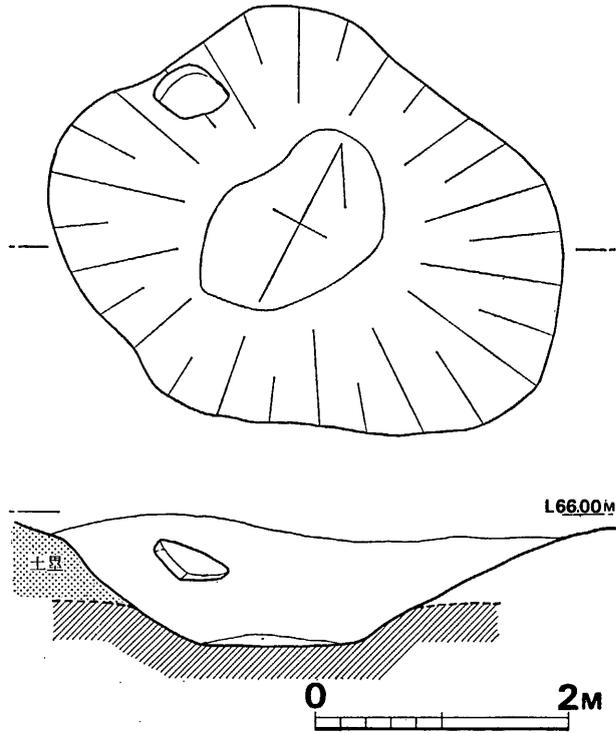


Fig. 105 D区凹地実測図 (縮尺1/60)

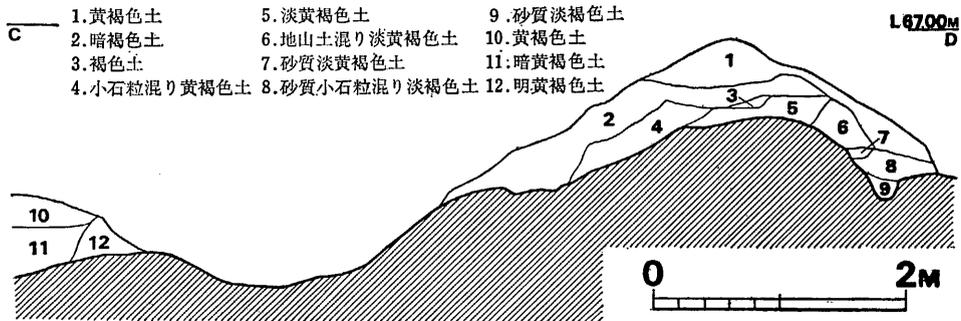


Fig. 106 第1号墳西側土塁及び凹地断面図 (縮尺1/60)

石石組遺構を検出した。この石組の下には、掘鉢が埋納されていた (Fig. 109, PL.78-2)。掘鉢内からの遺物の出土は認められなかった。

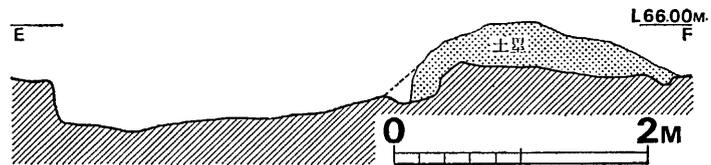


Fig. 107 第1号墳西側土塁およびD区溝状遺構断面図 (縮尺1/60)

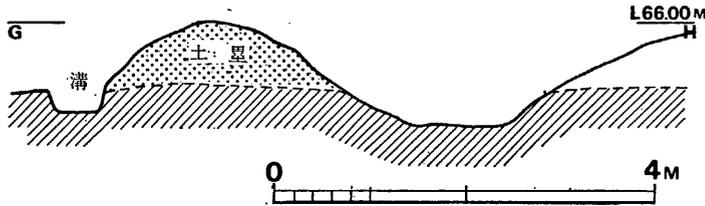


Fig. 108 D区凹地・土壘および溝状遺構断面図 (縮尺1/80)

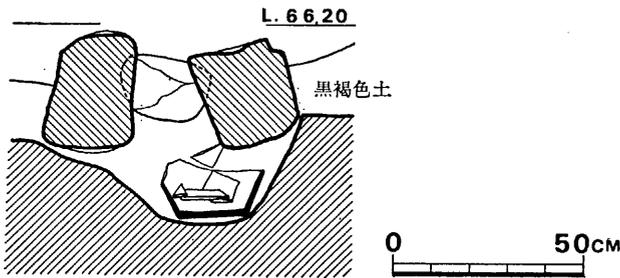
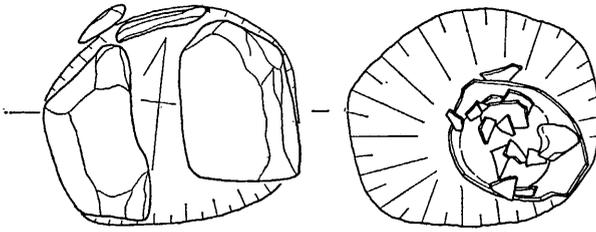


Fig. 109 D区石組遺構実測図 (縮尺1/20)

4. B区の遺構

1号墳と2号墳凹地との間に位置する2号墳の墳丘を埋めたてて整地した平坦地である。

北東隅の高さ約80cm、径約3.5mの円形の土盛りは調査以前に認められたものである。孟宗竹の根があり、土層断面図を作成することは不可能であったが、褐色の花崗岩パイラン土を用いたものであることが確認された。

この土盛りの北方にも2カ所小さな土盛りが認められた。これらの小土盛りは、一見削土の寄せ集めのように見えるが、土層の状態より遺構とすべきであろう。

土盛りの南側には長方形に近い大石が横置されて、調査以前から地表に露出していた。周囲の表土を除去すると、この大石下に10数個の小角礫が配され、根固めの礫石と理解された。大石の表面には碑文が刻み込まれており、石碑であることが確認されたが、大石は本来ここに建立されたものが横倒しになったものか、或いは何処からか運ばれてきて、ここに置かれたものかを判定する資料は見出せなかった。

石の表面は風化が著しく、碑文の文字を正確に読みとることは困難であるが、「前住^妙心^檀□和尚^天禪^師」と刻まれている (PL.79)。

5. 第2号墳凹地の遺構

2号墳の石室が破壊、抜去されたために凹地状を呈すると考えられた地区である。

調査の結果、凹地は西側のB地区より崖状を呈し、東南方向に舌状に張出しており、凹地の南西端には2号墳の墓道および羨道部の両側石と床石の一部がそのまま残存しているので、

2号墳の石室の掘り方を拡張して2次的に利用していることが判明した (Fig.111, PL.78—1)。

石室の掘り方部分には、1号墳西側裾部石組列石遺構と同様、割石や角礫による石組列を両側に配した溝状遺構が検出された。石組の方法は、長辺を横にし、小口を外に向けて3～4段積み重ね、下の方にはやや大き目の石を用いている。裏込め石は認められない。

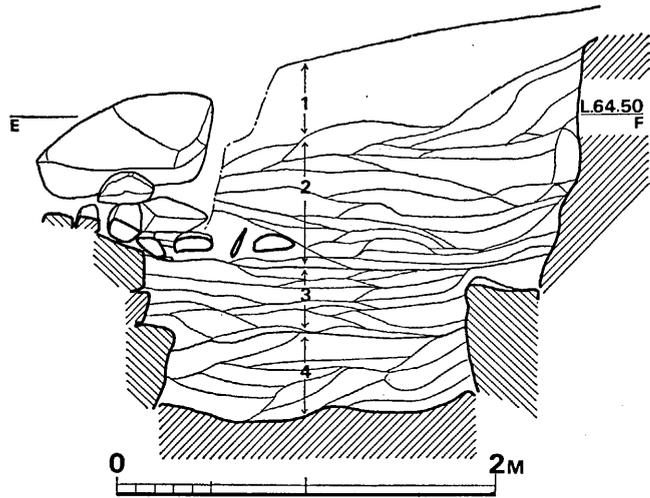


Fig. 110 第2号墳配石溝状遺構南側土層断面図 (縮尺1/40)

溝は北東方向に約5m延びた所で東南に向きを換えて曲がり、1.5mほどで止まる。

羨道部側壁と直交する土層断面をみると (Fig.110)、堆積土(4)の上を2段階(2・3)に亘って花崗岩のバイラン土で埋め立て、溝の南側は閉鎖されており、しかも水の流れた形跡は認められない。溝の覆土内には比較的多くの陶磁器片が含まれており、近世以降に造られ、使用された可能性が強い。

溝状遺構の西側は平坦で、凹地端部の地山を掘り込む小ピット内から鉄釘が発見されている。

東側はやや凹凸があり、東側に向かってゆるやかに立ち上り、石組に用いられたとみられる石材が散在している。舌状部分に認められる凹凸は別の遺構とも思われるが、判然としない。また、凹地の北東のへりには、花崗岩礫を積み重ねて石垣状にした遺構がみつめられた。

6. A区の遺構・土塁

A区の土塁は、その北端に位置し、B区の碑文のある大石付近よりその基部を有し、東側に約8mほど延びて崖際に至り、崖に沿って南に短く2mほど曲って止まる (Fig. 112, PL.77・78—2)。基底幅は基部で約3m、東先端で約2mと細まる。土塁の南側側面のみ石組列を配している。石組列は1号墳西側裾、2号墳凹地の溝状遺構の石組列と同様の手法による。ただ、西側基部付近および東側先端部には大振りの平石を立石として用いている。本石組列は明らかに「土留め」を目的として構築されたものと解される。

なお、本土塁の北側にも、段々によってジグザグに行く土塁の続きがみつめられた。

A区は2号墳の墳丘の傾斜を埋立てて平坦化している。土塁のすぐ南側に小礫や割石が散在してみつめられたが、これは土塁に伴う石組列の崩れたものであろう。

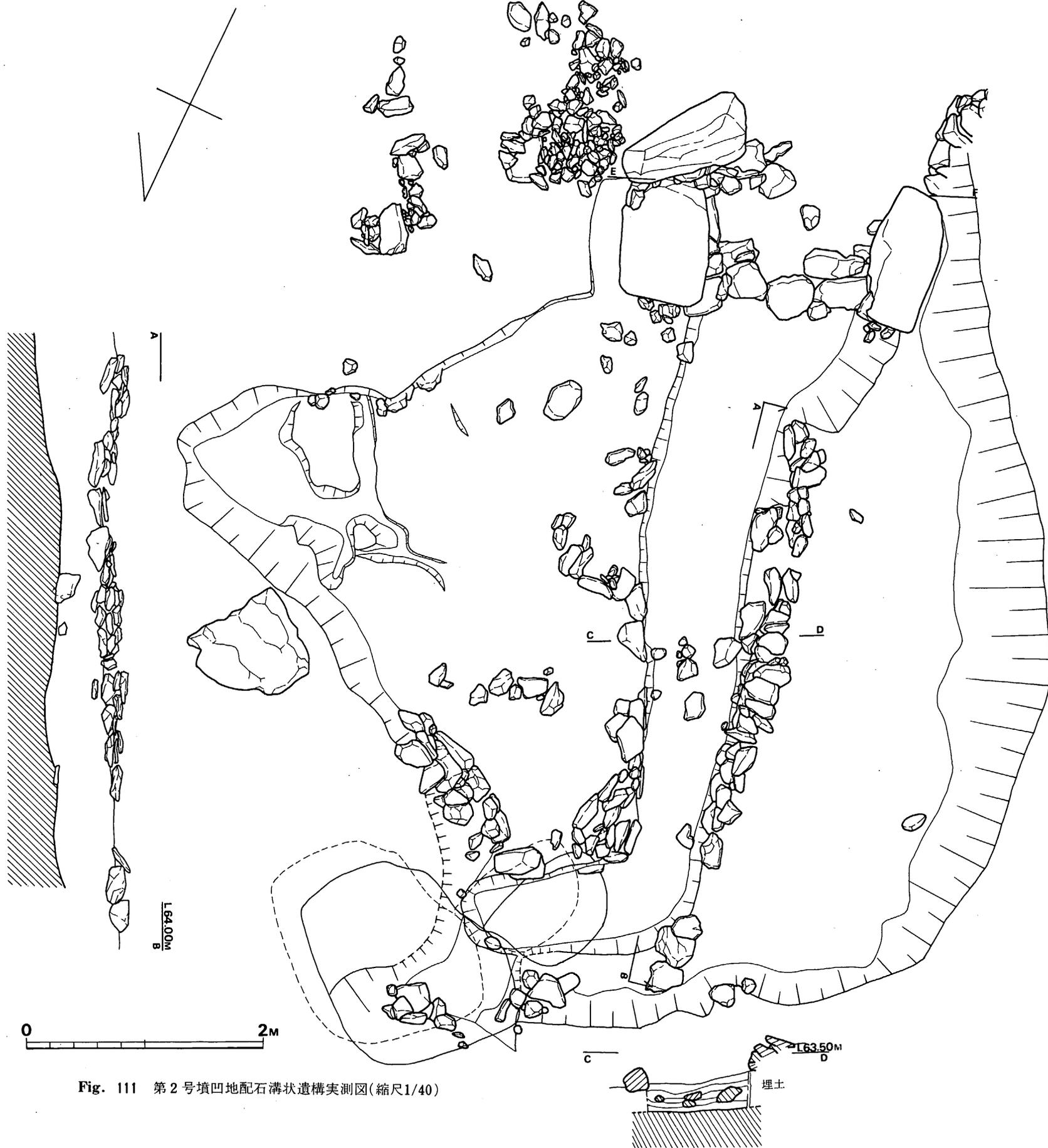


Fig. 111 第2号填凹地配石溝状遺構実測図(縮尺1/40)

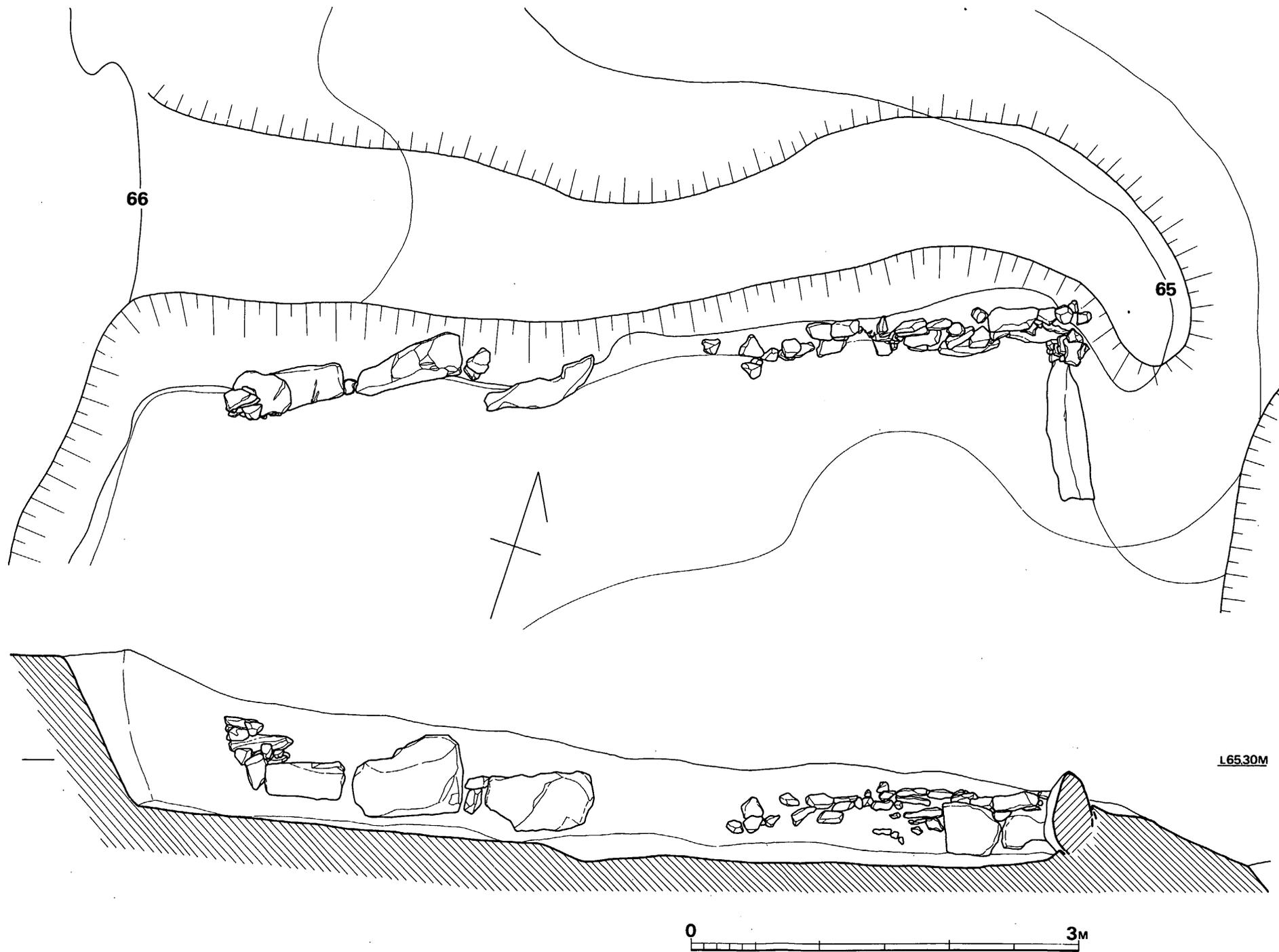


Fig. 112 第2号墳北側配石土壘実測図(縮尺1/40)

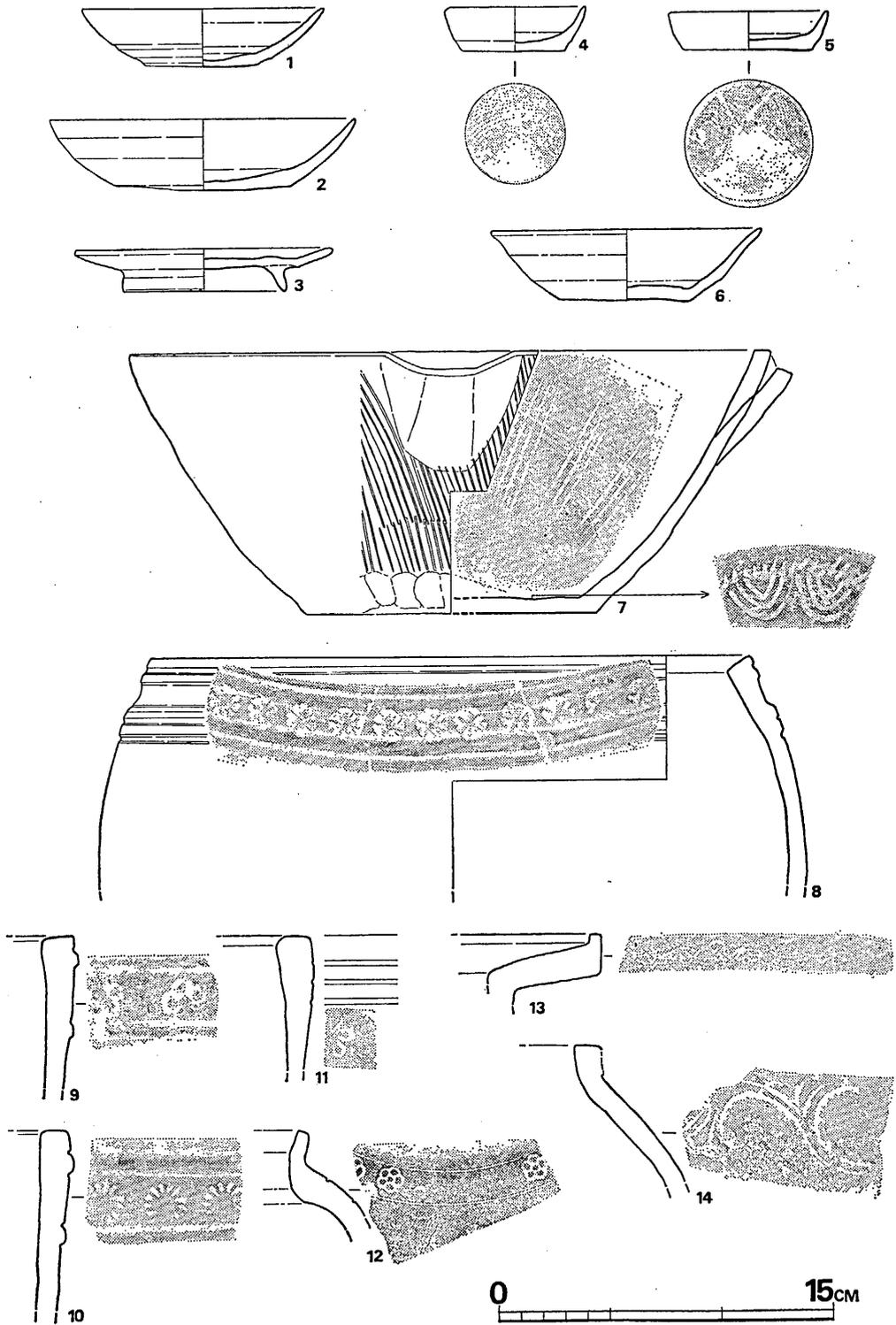


Fig. 113 第1・2号墳周辺出土土器実測図（縮尺1/3）

凹地の舌状部分の東側に1枚の大石が置かれている外は遺構らしきものは、南側に割石を集め敷いた配石遺構のみである。表土に露出していたものもあり、遺構として確定することはできないが、用材の割石自体は先述の各石組列に使われたものと同質であり、やはり関連の遺構と考えるべきであろう。

平坦部分を掘り下げ、2号墳の墳丘の原形を追求する途中、中世の竪穴土壙墓（Fig. 41・42）が発見されたことはⅢで前述した通りである。

7. 小 結

1・2号墳およびその周辺地帯において、1号墳の墳丘にさらに土盛りを加えて高い土壇状に築いた遺構を中心として、同質の石組列、列石、配石溝状遺構、土塁、円形の小土盛り、楕円形状の掘り込み、碑文を刻んだ大石、A～D区にみられる平坦地等、人為的所作によって凹凸ある地形と平坦地との組合せ、そして配石による構成が認められた。これらがすべて同一時期に構築、形成されたものか否かを判定する資料に乏しいが、列石、石組列等の配石遺構には、その構築方法に共通した手法が認められ、また2号墳凹地の配石溝状遺構内より近世陶磁器片が出土していること、1号墳西側裾部の石組列に石臼片を用いていること等から、これらの遺構が近世以降に構築された可能性が大きい。

土塁に関しても、その東側A区のものに伴う石組列から判断すると、少なくとも近世において築かれたか、修復されたかである。

ただ、1号墳石室内の堆積土より発見された陶製火舎の破片や、東側土塁の北側に連なる土塁付近にやや集中してみとめられた土師器の小皿、あるいは中世墳墓の存在等、中世にさかのぼって、この地区が利用されたことは確かである（Fig. 113）。

ところで、これらの遺構の性格やその年代を考える上で、貝原益軒著『筑前国統風土記』の御笠郡武蔵村の項の記事を考慮する必要があるだろう。

- 此村は天拝山の下にあり。林木山につゞきて、うるはしき佳境也。長政公筑前國御入國の始、御笠郡を小河内藏允に預け玉ひ、此邊にて一萬石餘の領地をたまはり、……略……其養子小河權兵衛直常、蜂の隈と云所をきりひらき、大に第宅を經營し、四邊に竹木を栽へ、門前に馬場を作り、胤足屋敷、山の口両所は家士の宅とす。凡此邊は肥前國の境なれば、天拝の大山に據り、飯盛城の舊址につゞきて、頗要害をなせり。其後光之君より、此邊を吉田太郎太夫増年に賜り、七千石餘を領知す。貞享年中又改めて立花勘左衛門増弘後改吉右衛門又號新助を御笠郡の惣司とし玉ひ、此邊にて六千三百石餘の領地を賜る。蜂隈の宅を修造す。其家士此村及近村所々に在宅す。元禄二年冬、綱政公蜂隈の宅に來遊し玉ふ。増弘餐を奉る。同四年の冬も亦、綱政公來り給ふ。翌五年五月廿六日、綱政公此宅に一宿し玉ふ時、増弘餐を奉る。黒田長清君、長重君も此宅に來臨し玉ふ。

○ 武蔵村の境内蜂隈と云所の邊に花山と云所あり。其所に寛永の此、次郎石衛門と云富農あり。其心はせやさしき者にて、極て花をこのみ、我宅の邊なる山に、花木を數百株うへ、園中には石ををき、朝夕花を見てたのしみとす。方二間高五尺許に土臺を築き、其上に、茅舎をかまへ、花を見る所とす。珍花ある事を聞けば、遠きをいとほすして行て乞求めける。伯樂か既には良馬多く、下和か置には美玉多き理なれば、名花珍卉多くあつまり、いかなる富貴豪族の花園にもまされり。是を以て身を終る。人其山を號て花山とす。むかし大江佐國か甚花を愛して六十餘回看不足、他生定作=愛い花人-と作りしに似たる、花數寄なるへし。詩歌をもしらぬ山かつにも、かゝる風流なる者あり、めつらし。其後相續て花を玩ぶ者なければ、花園は其址のみのこれり。

上のように「蜂の隈」ないし「蜂隈」に関して2つの記事がある。

前者の記事では、江戸時代初期に小河権兵衛直常が「蜂の隈」をきり開いて邸宅をかまえたときれているが、少なくとも遺跡の丘陵上においては邸宅に比定される遺構は発見されていないので該当しない。しかし、丘陵下東側の低台地上において発見された建物趾と思われる掘り方の遺構が、その期のものであるなら、該当する小河権兵衛の屋敷跡とすることができよう。掘り方の遺構付近において近世陶磁器片が多量に発見されており、その可能性もあろう。

後者の記事においては、富農次郎衛門が蜂隈の「花山」という所（現在、遺跡地付近にその地名が残っている）の屋敷付近に花園を造り、石を置き、「方二間高五尺」ほどの土台を築き、その上に庵を設けて花を見る場所としたことが述べられている。これが1号墳の墳丘に土盛りを加え、裾に石組列を配した遺構に比定できれば花園の庭園址ということになる。

庭園趾とすれば、各種の遺構がそれに関わるものとして理解されよう。碑文のある大石等も庭石と考えられる。土塁は回遊の通路として、東側より西側へ于余曲節していると考えられる等々。

しかし、著しく破壊されて旧状をとどめていないとしても、庭石の少なさ、池状の遺構の欠落等、庭園址としては貧弱な様相を示しており、当遺跡が『筑前国続風土記』中に記述された江戸時代初期の庭園および屋敷跡と比定するには、なお今後の周辺地帯の調査検討を待たねばならないであろう。いずれにしても近世ないし中世に、この地が大規模に開拓、整地され、要害、景勝の地として利用されたことは、発見された各種の遺構群が如実に物語っている。

(松浦有一郎)

PLATES



(1) 遺跡全景航空写真 (東より)



(1) 遺跡南半航空写真 (北東より)



(2) 第1～第6号墳航空写真 (東より)



(1) 調査前全景写真 (北より)



(2) 調査前全景写真 (東より)



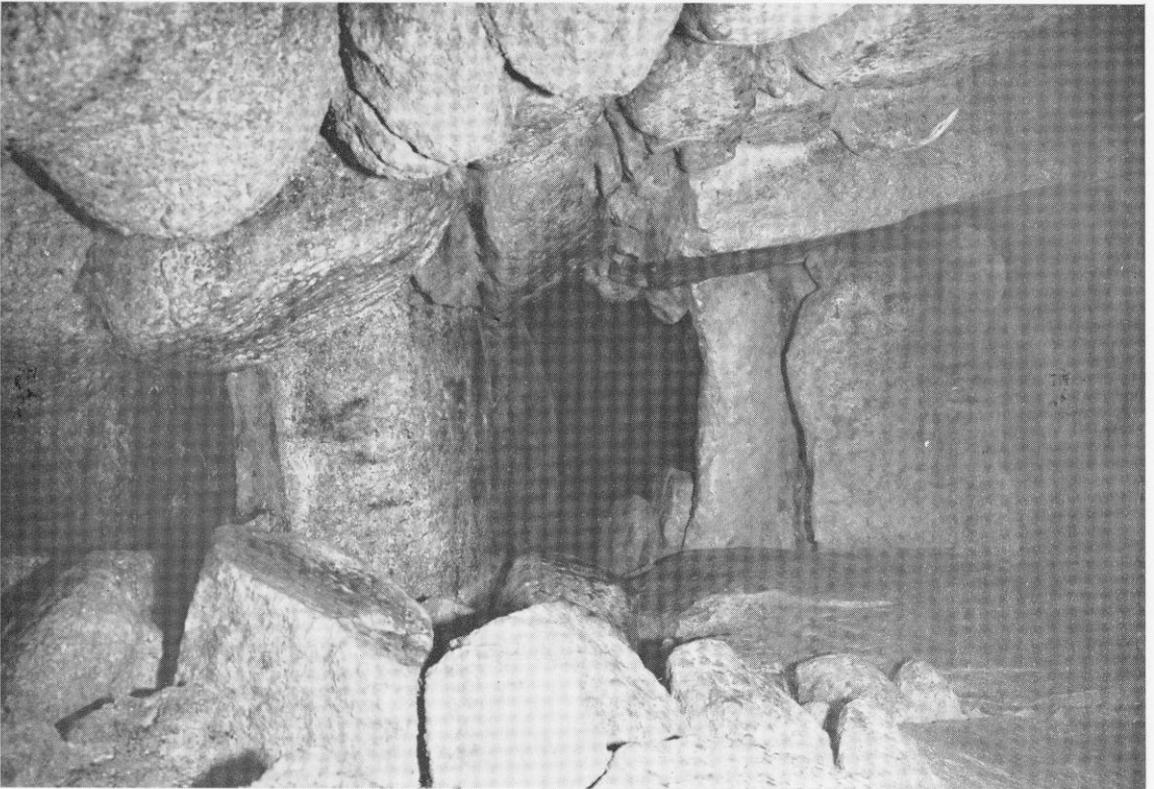
(1) 調査後の全景写真 (北より)



(2) 調査後の前面全景写真 (西より)



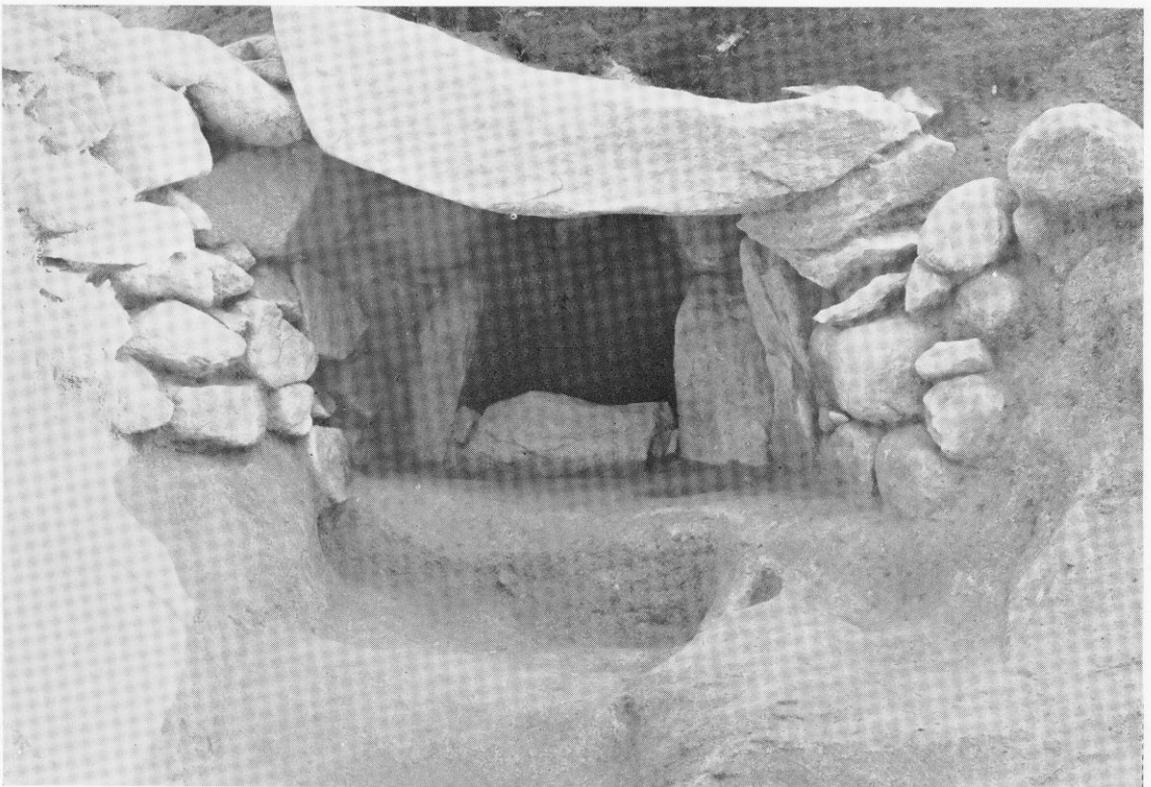
(1) 石室奥壁



(2) 石室羨道及び閉塞石



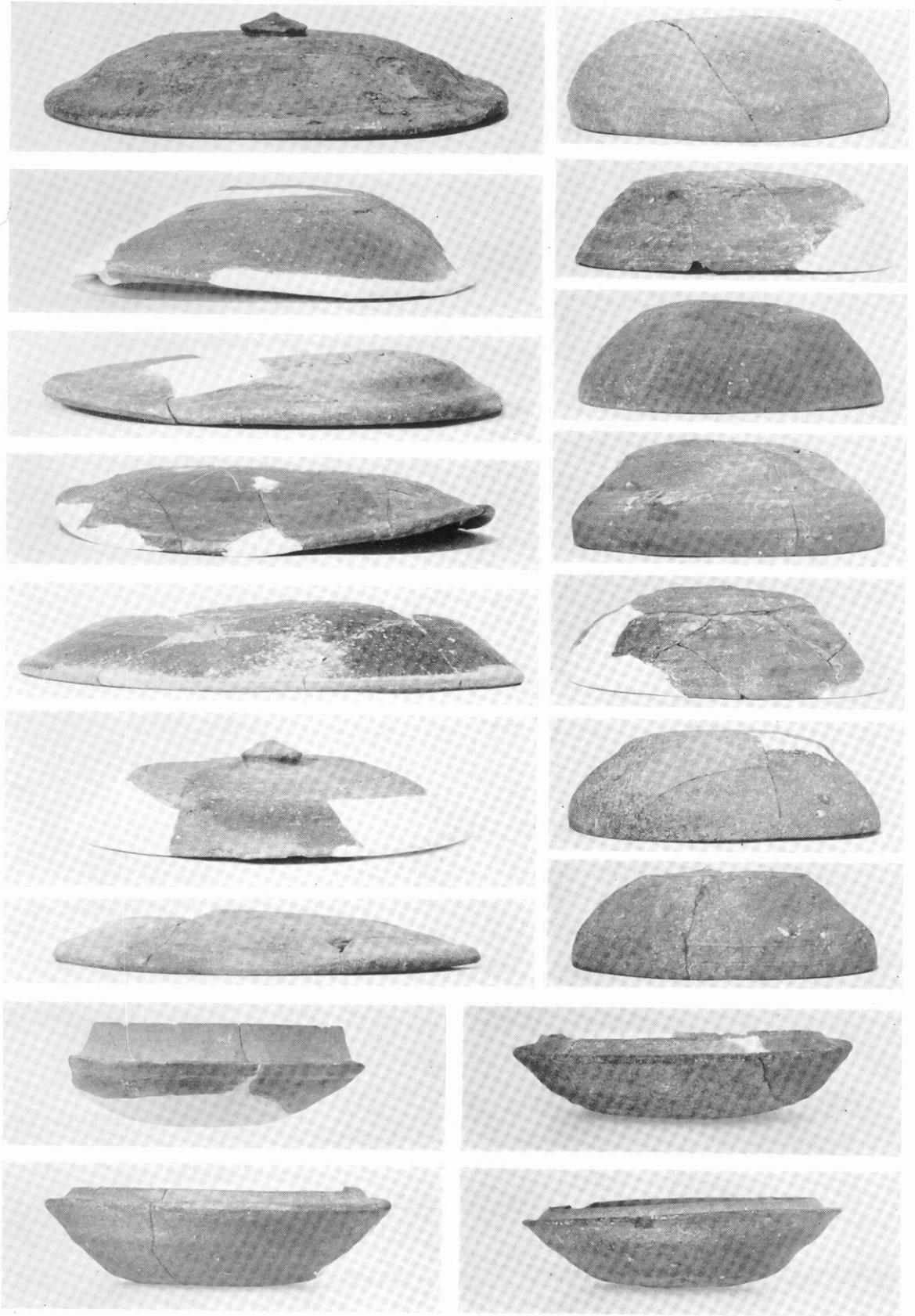
(1) 南側玄門上石組架構狀況



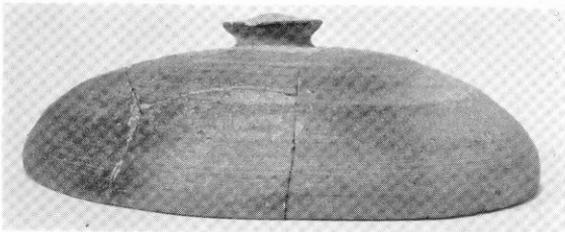
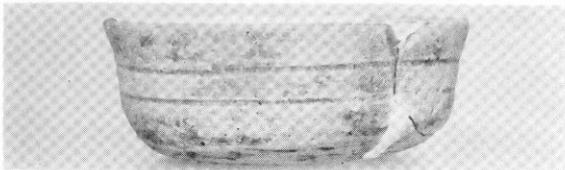
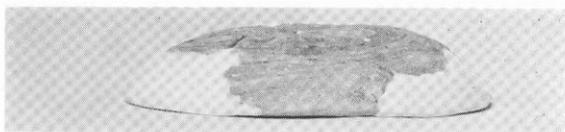
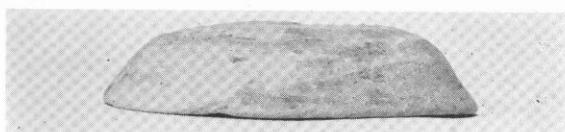
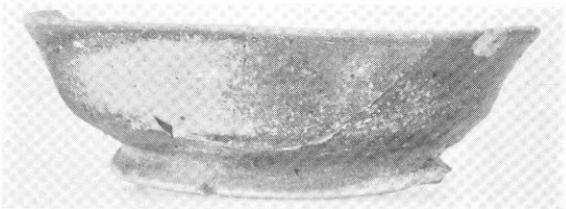
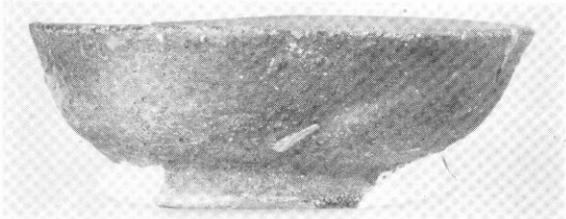
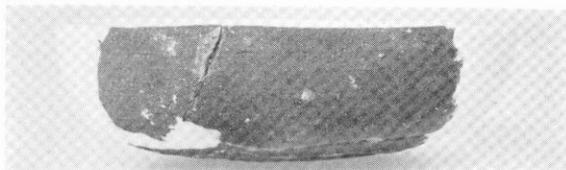
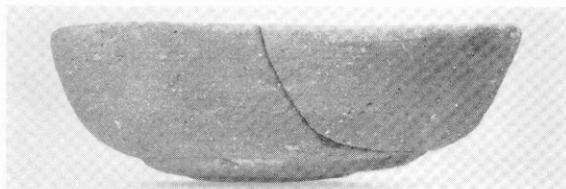
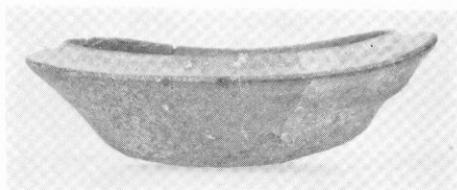
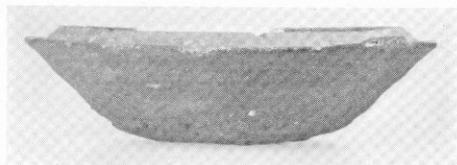
(2) 羨道部石組架構狀況



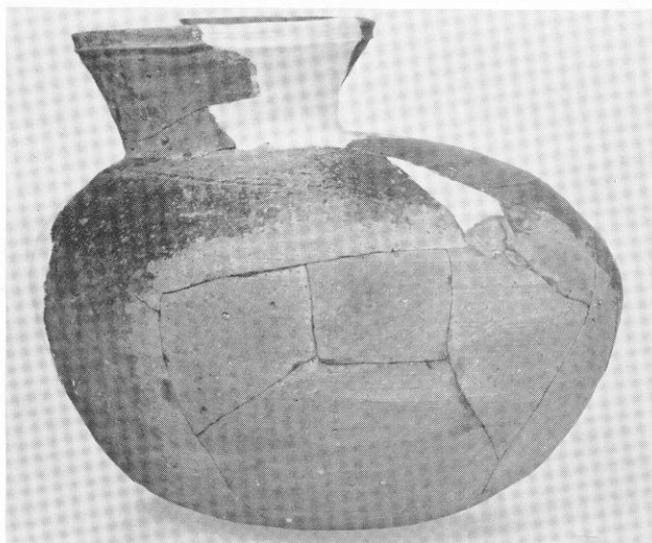
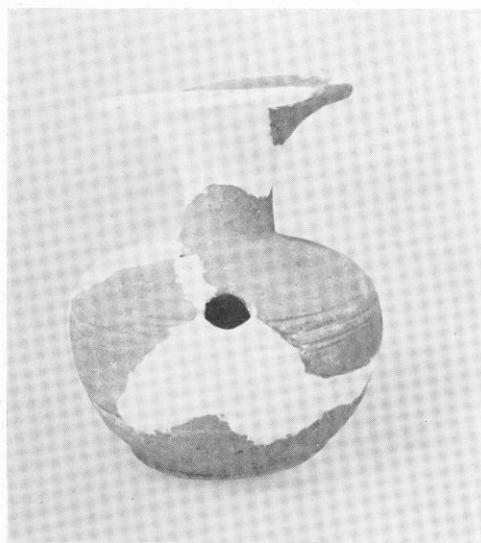
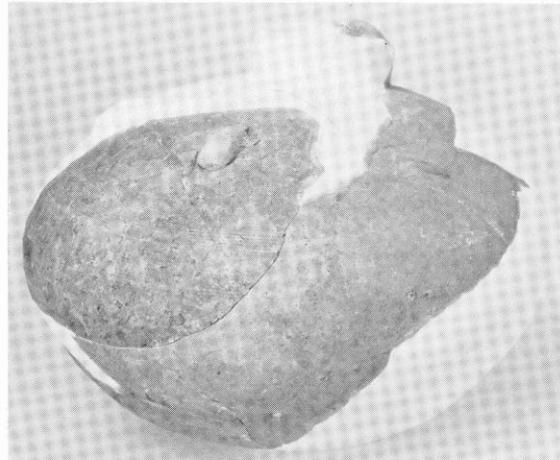
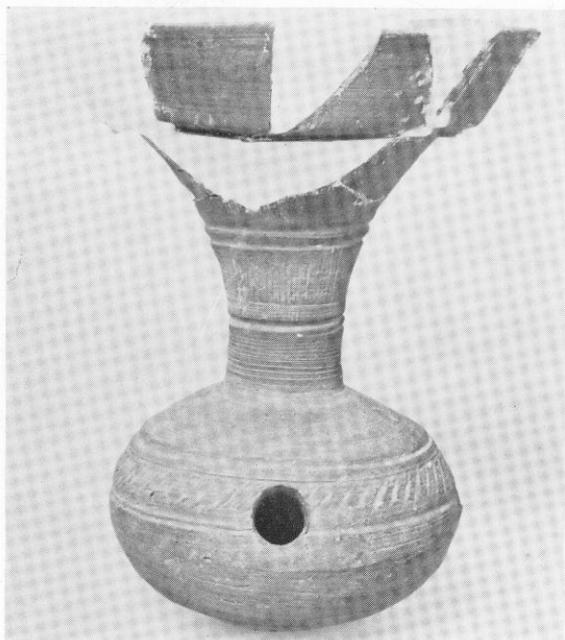
(1) 馬具・鐙・刀子



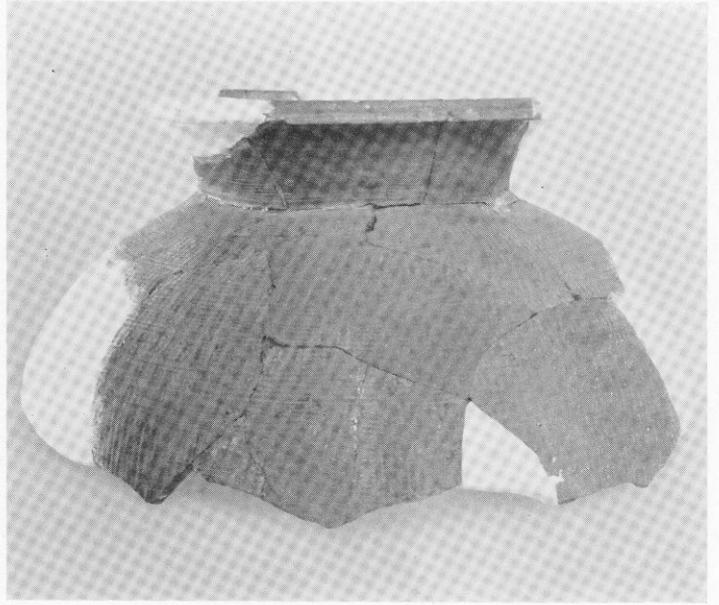
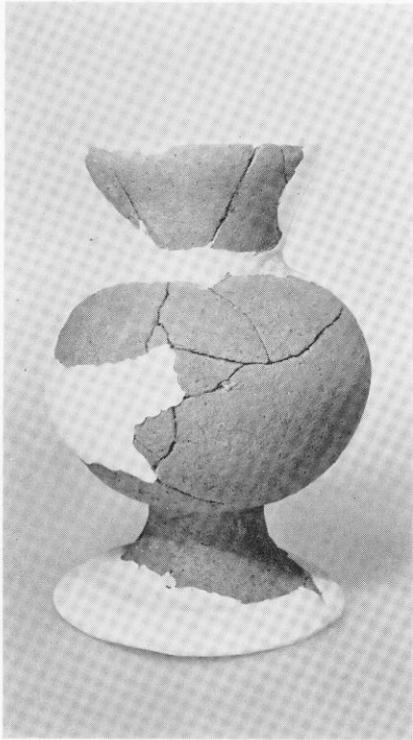
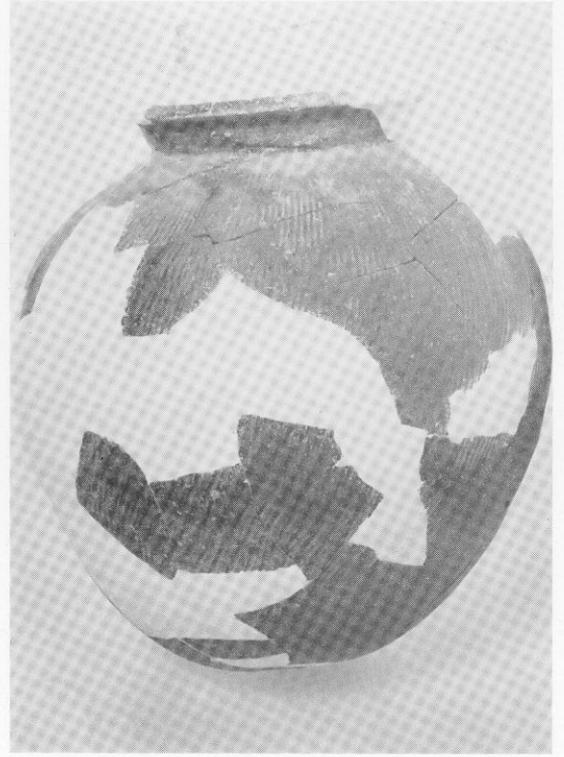
(1) 須惠器 ①



(1) 須 惠 器 (2)



(1) 須 惠 器 ③



(1) 須 惠 器 ・ 土 師 器



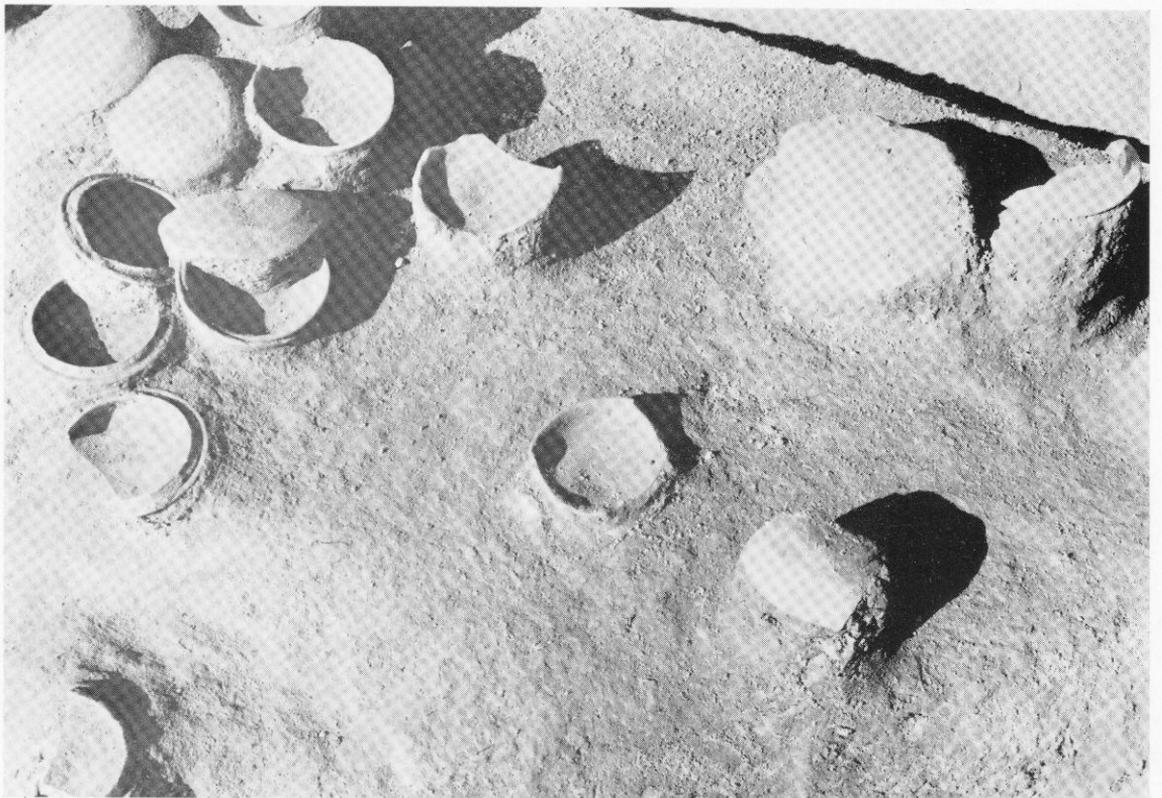
(1) 調査前の盗掘坑 (南より)



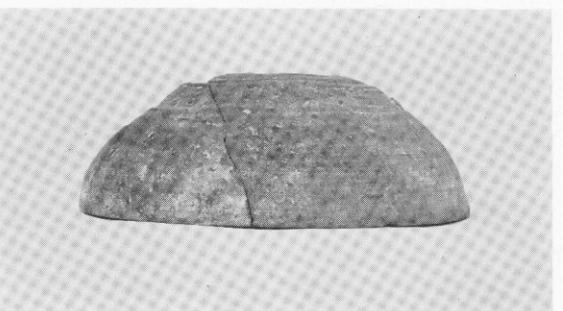
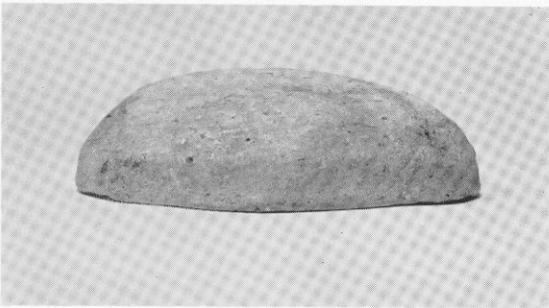
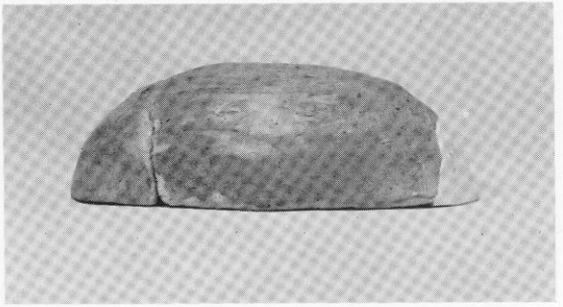
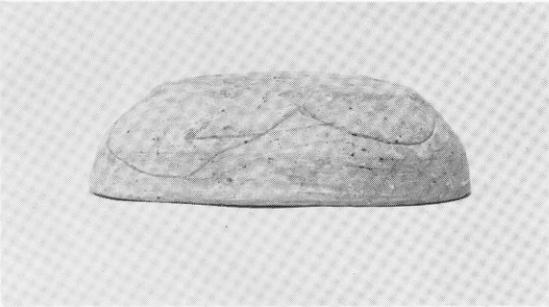
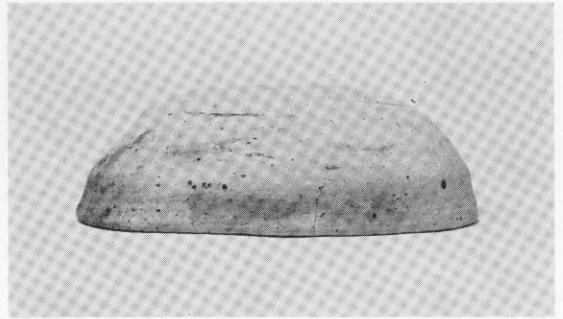
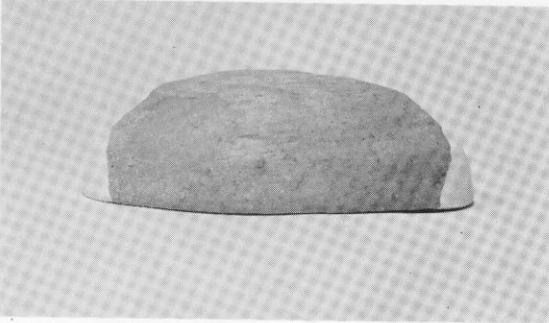
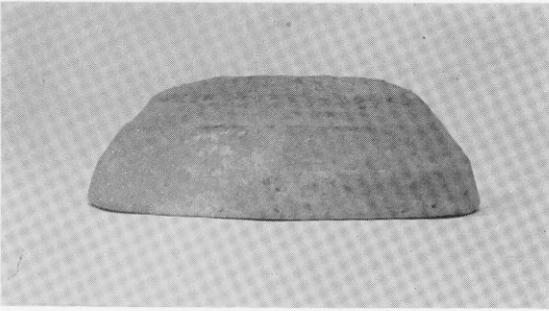
(2) 全景写真 (南より)



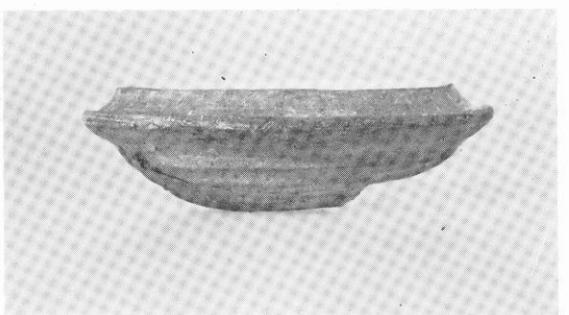
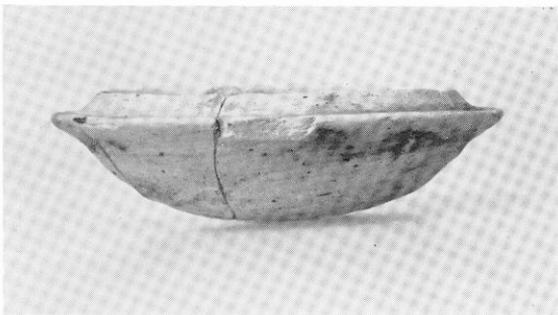
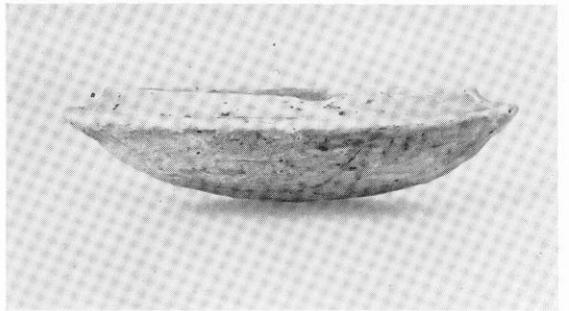
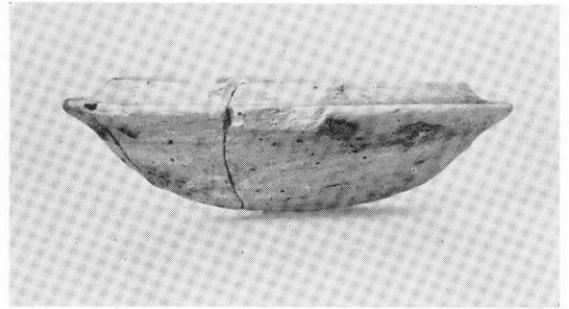
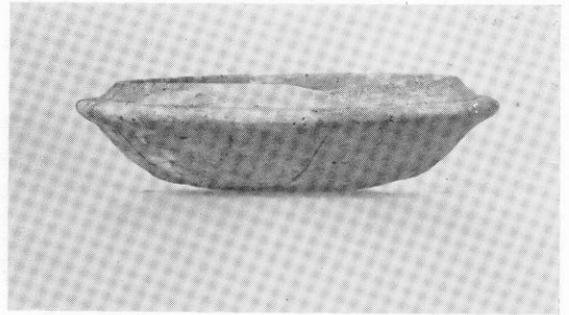
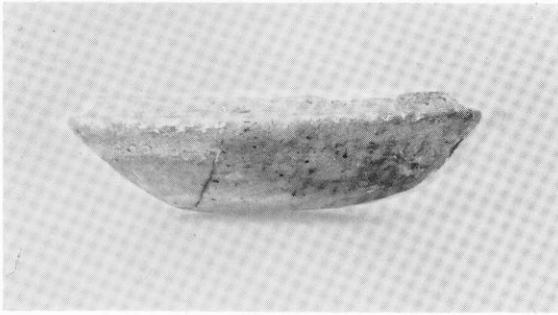
(1) 石室と墓壇



(2) 墓壇の遺物出土状況



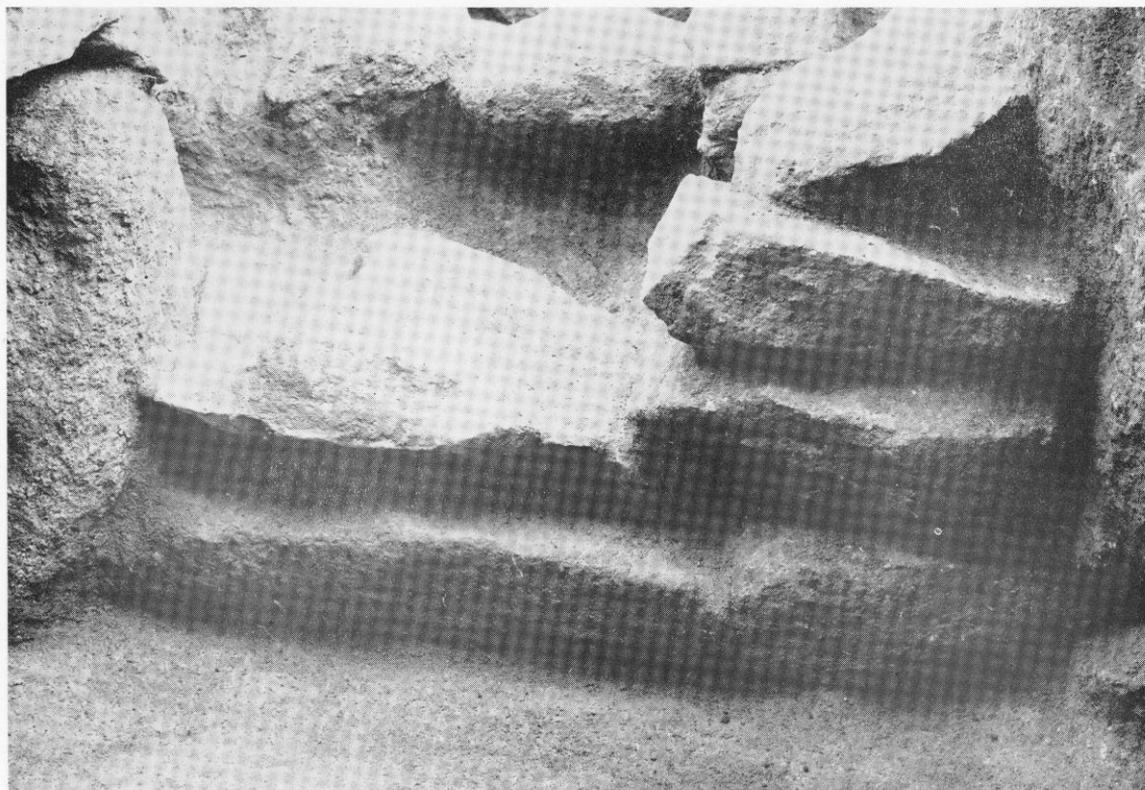
(1) 須惠器 ①



(1) 須惠器 ②



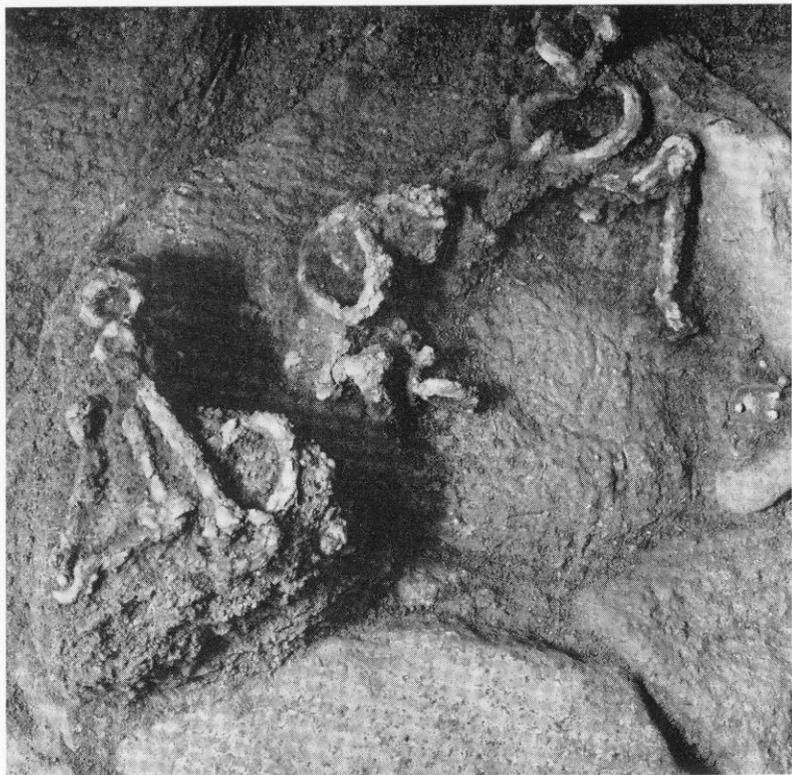
(1) 全景写真 (東より)



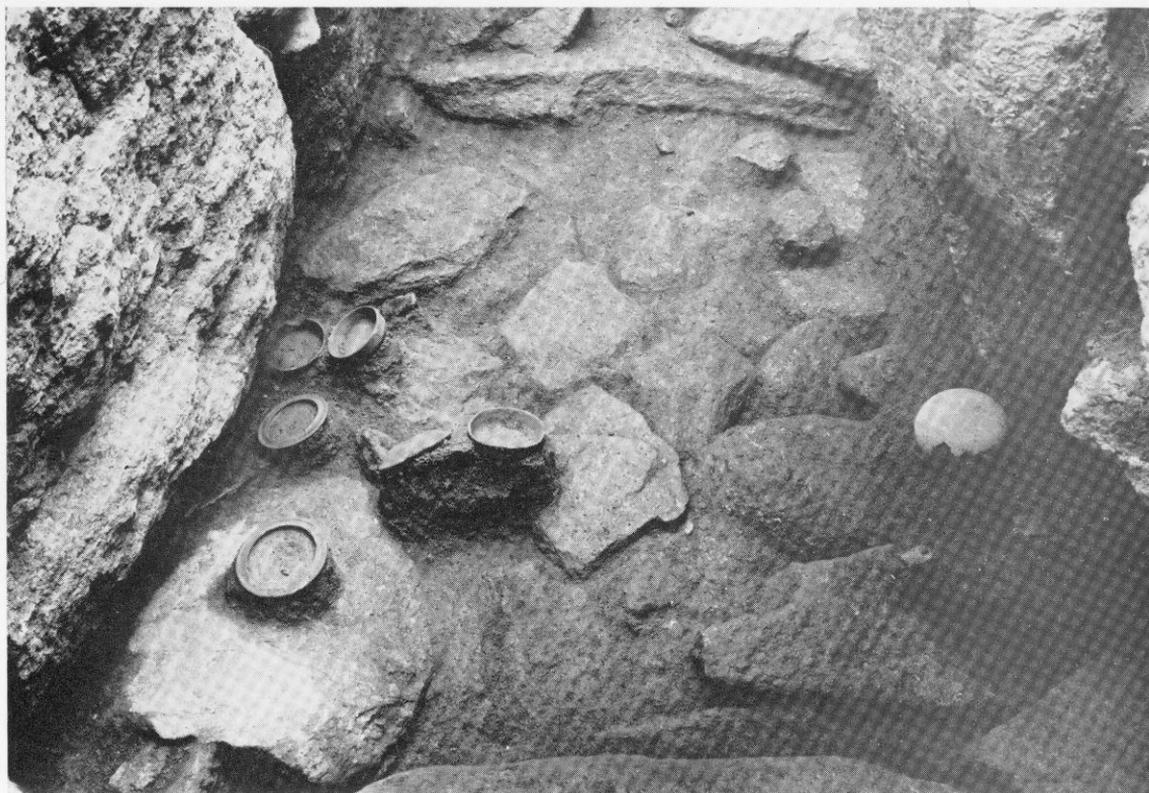
(2) 閉塞石 (石室内より)



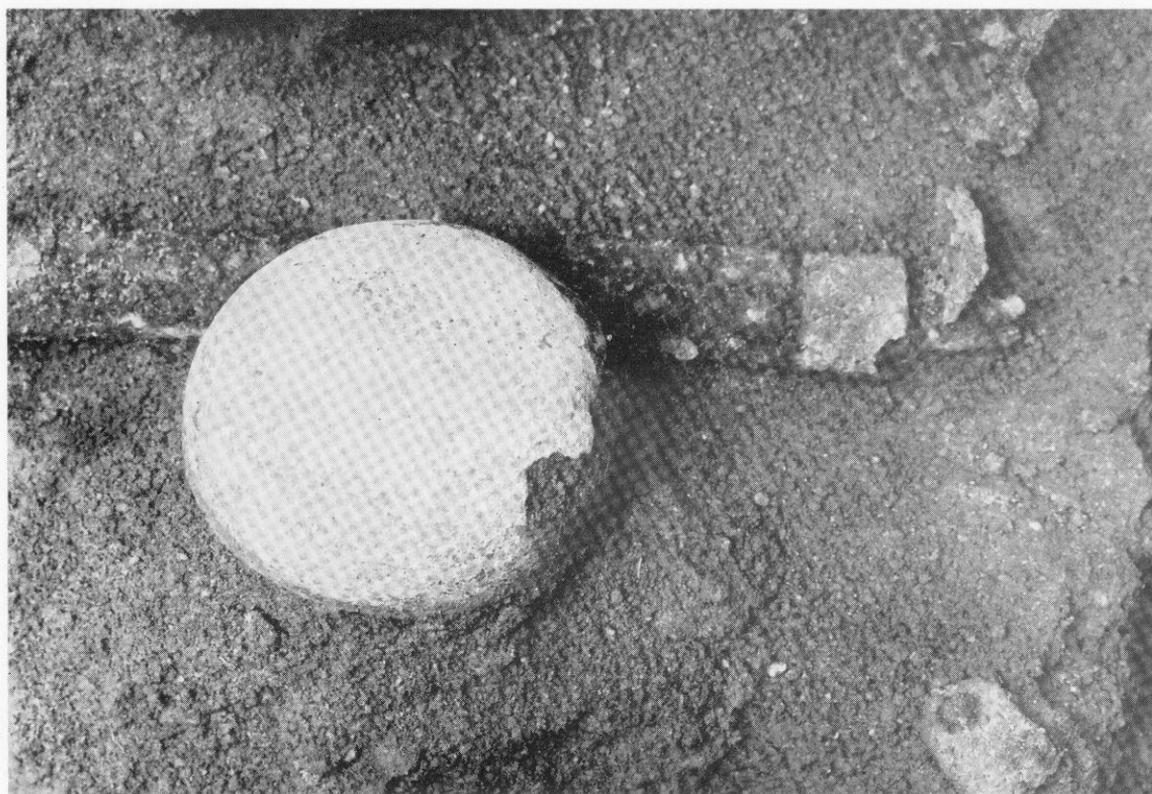
(1) 石室内遺物出土状況



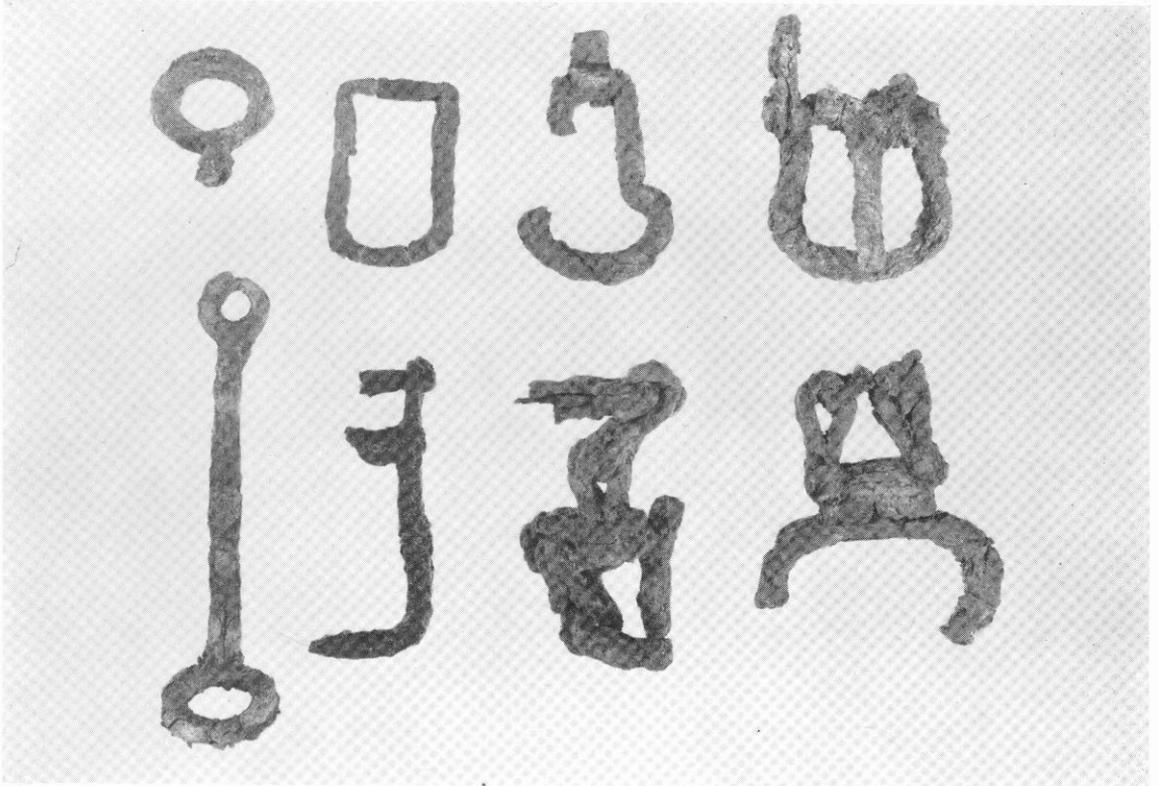
(2) 玄室内馬具出土状況



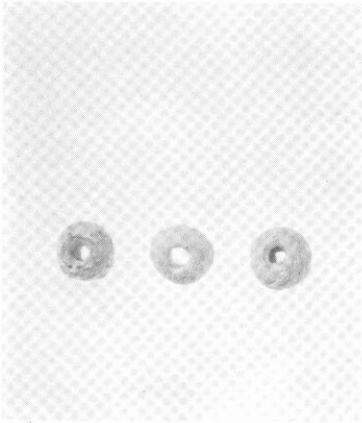
(1) 羨道部遺物出土状況



(2) 銅碗・直刀出土状況



(1) 鐙



(2) ガラス小玉



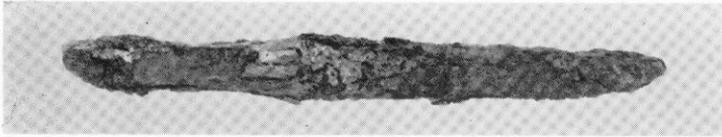
(3) 帯金具



(4) 耳環



(1) 直刀



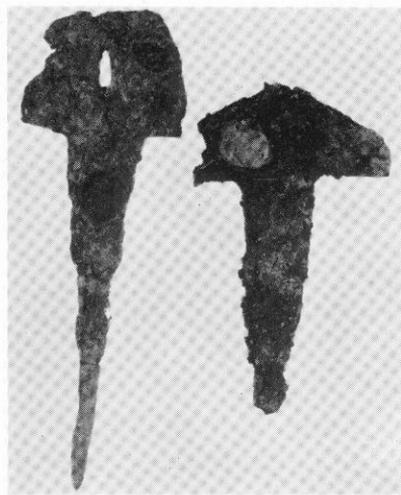
(2) 刀子



(3) 鏝など



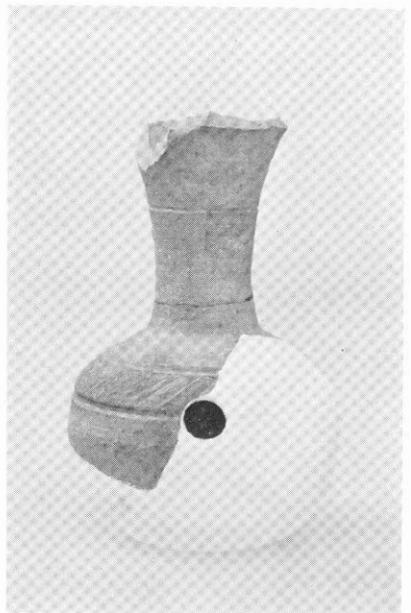
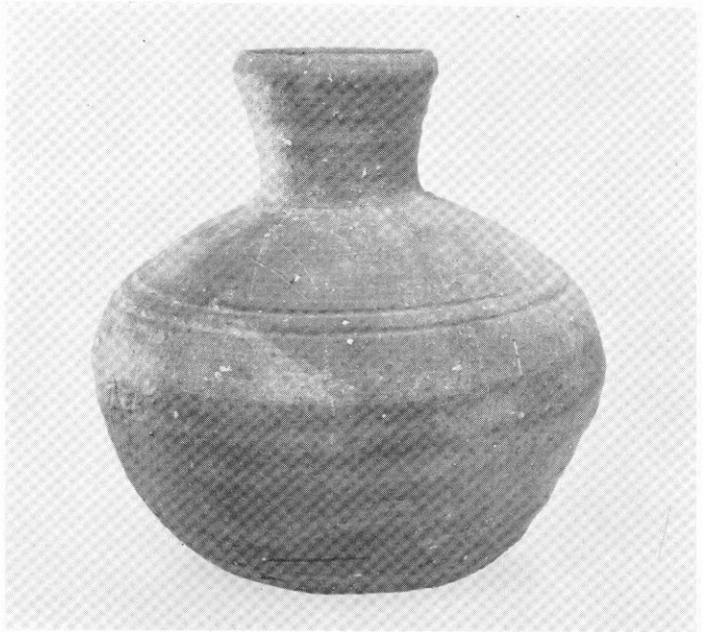
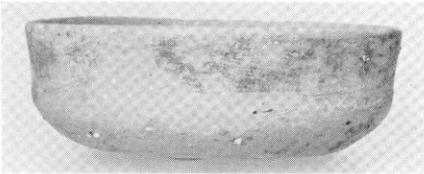
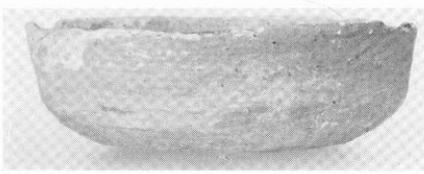
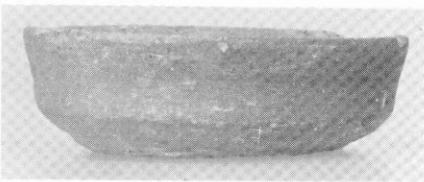
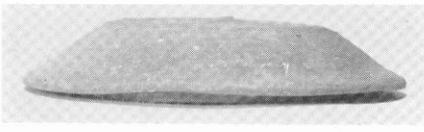
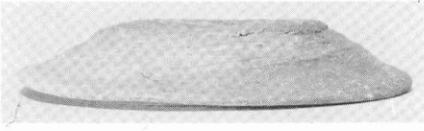
(5) 鏃



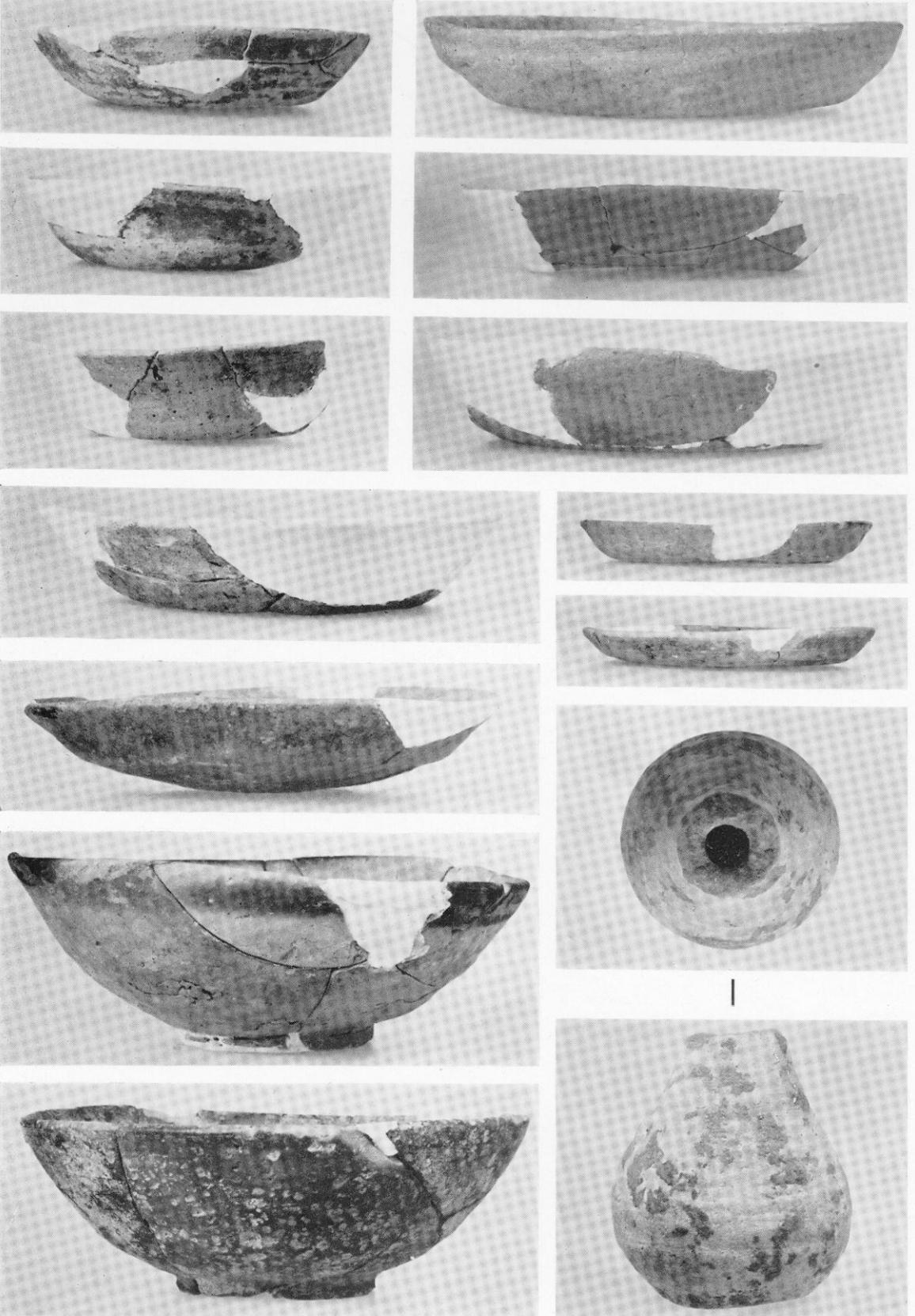
(4) 鏃



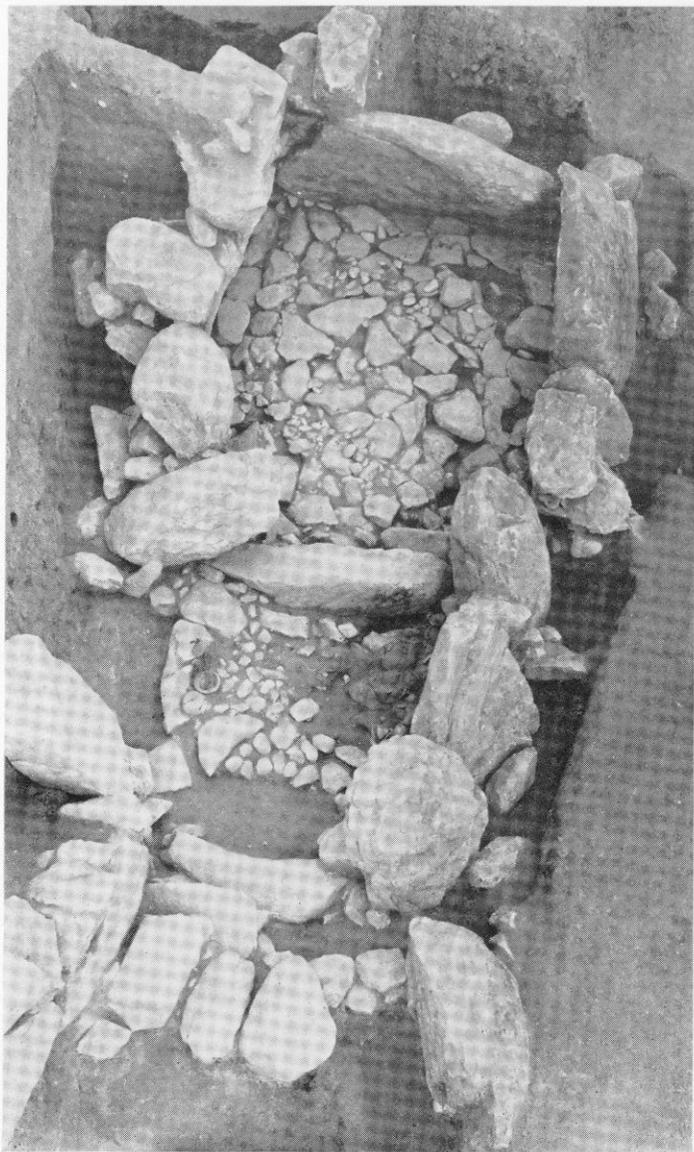
(6) 銅碗



(1) 須惠器



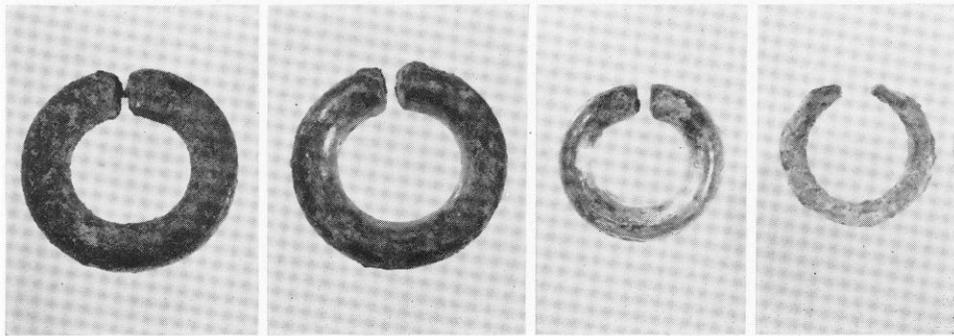
(1) 土 師 器



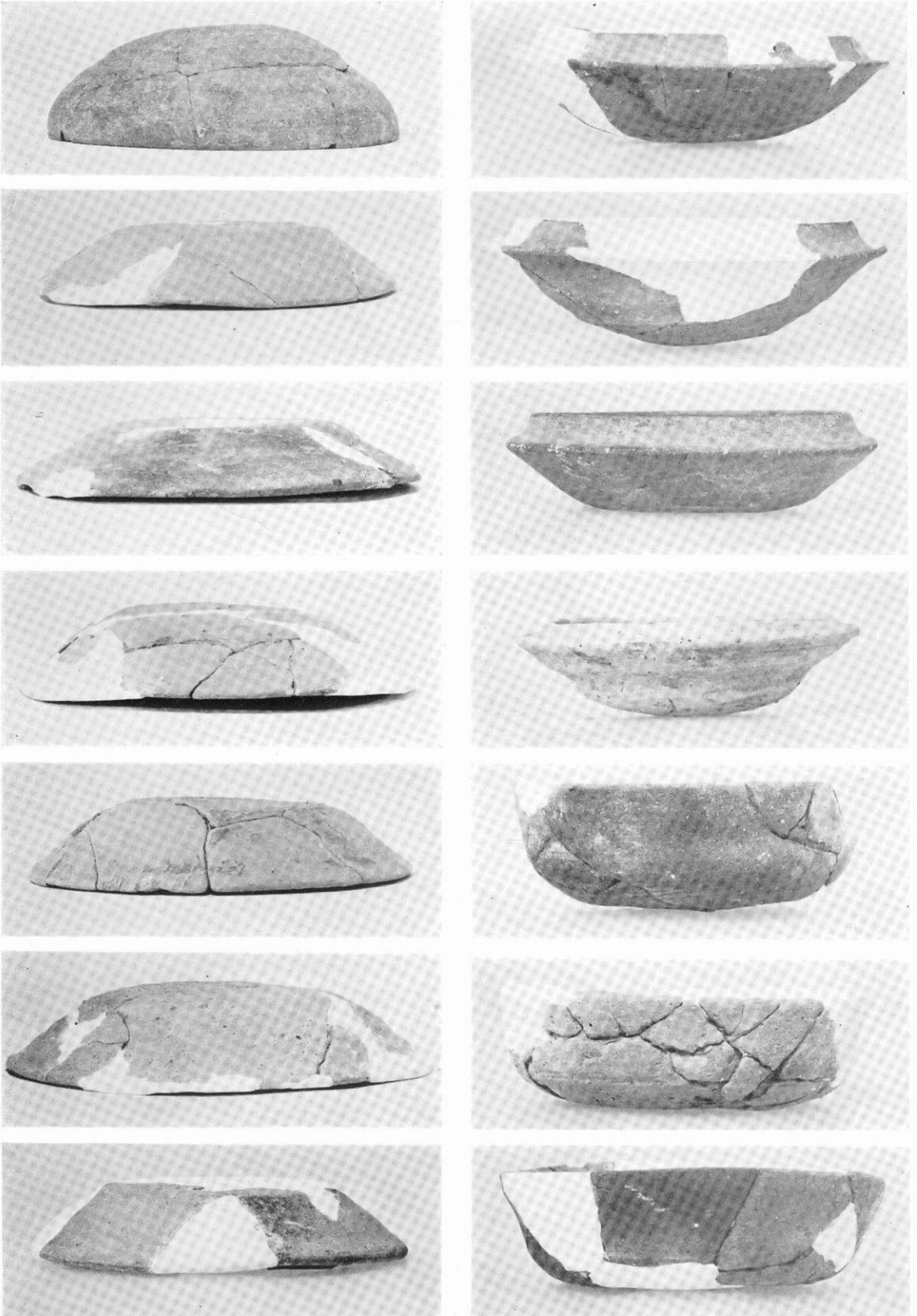
(1) 石室全景 (南より)



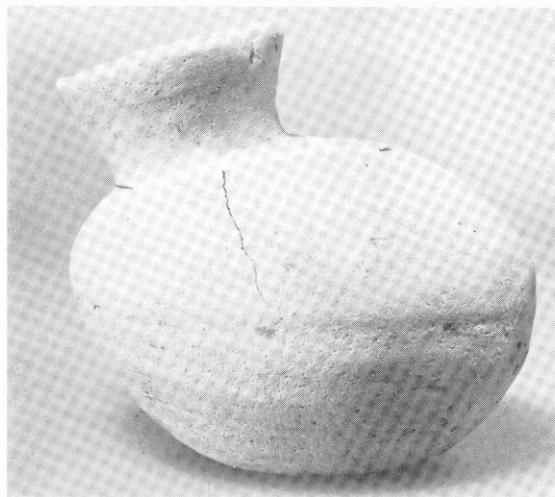
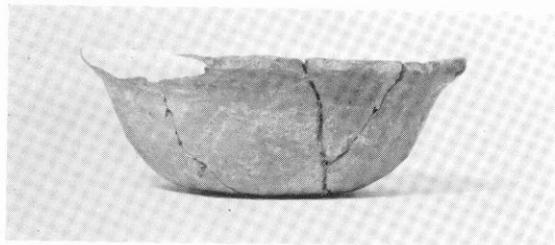
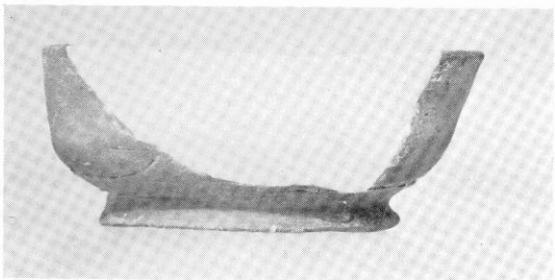
(2) 前室遺物出土状況



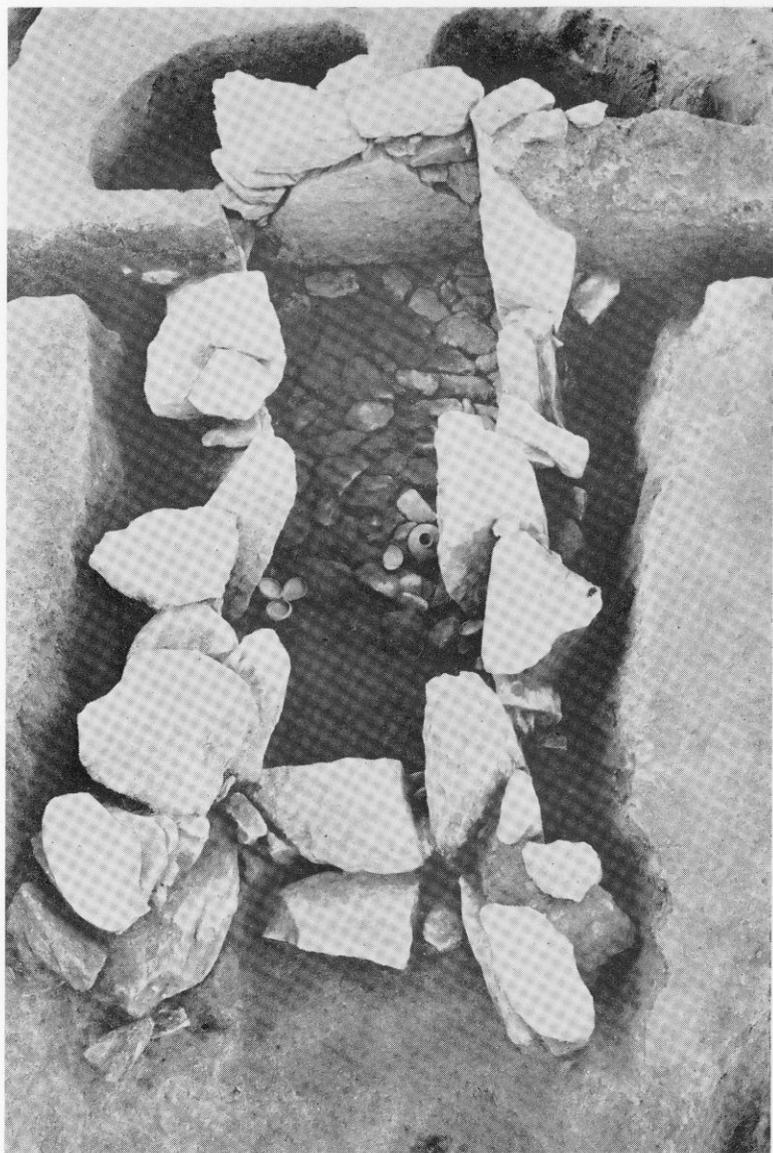
(3) 耳環



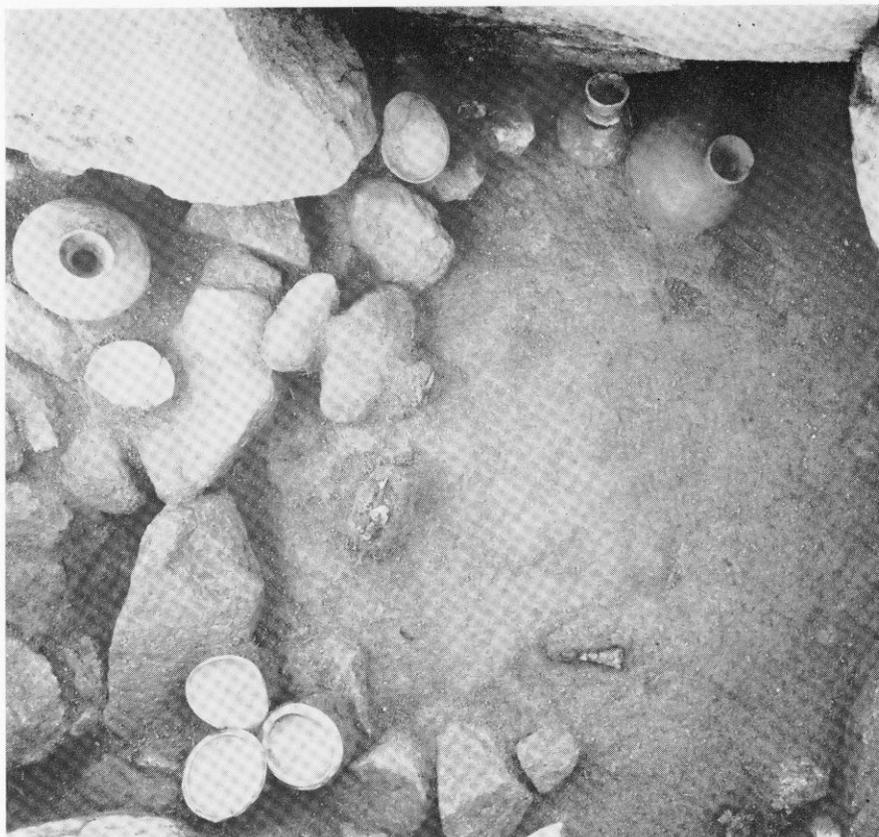
(1) 須 惠 器 ①



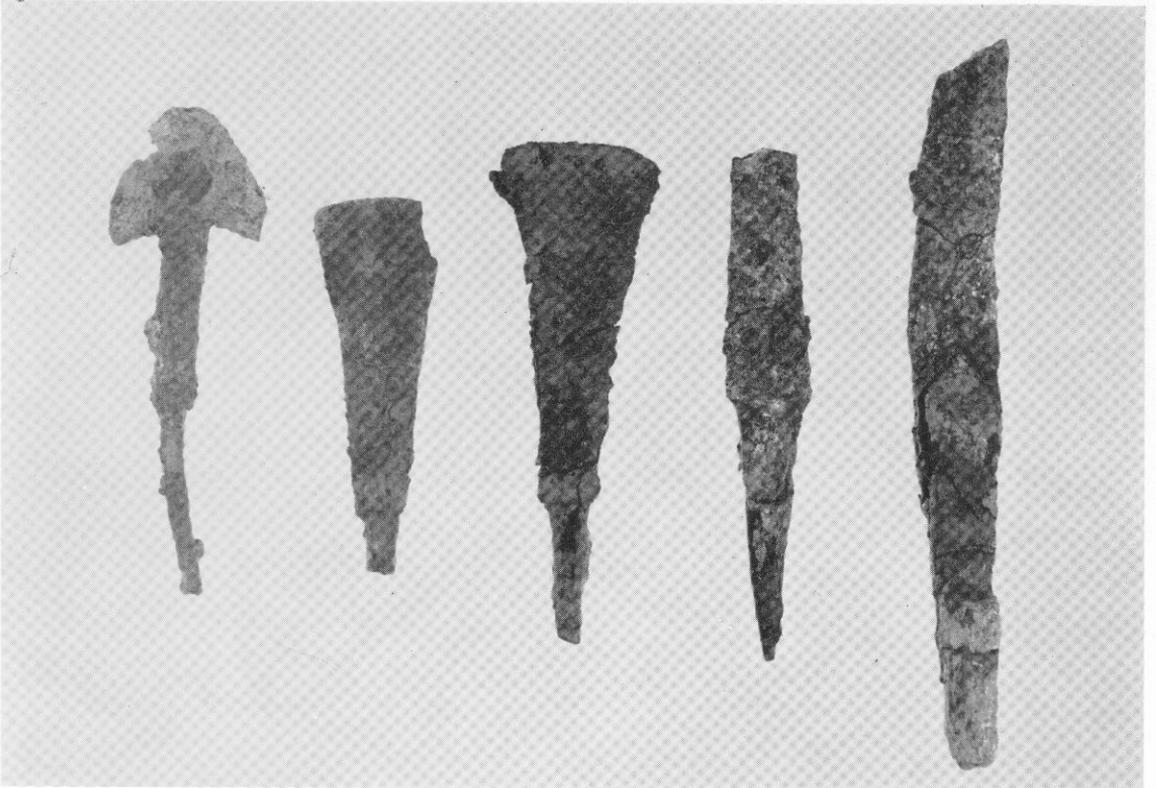
(1) 須 惠 器 ②



(1) 石室全景 (南東より)



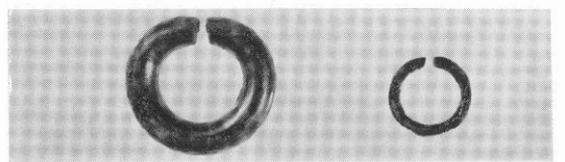
(2) 玄室遺物出土状況



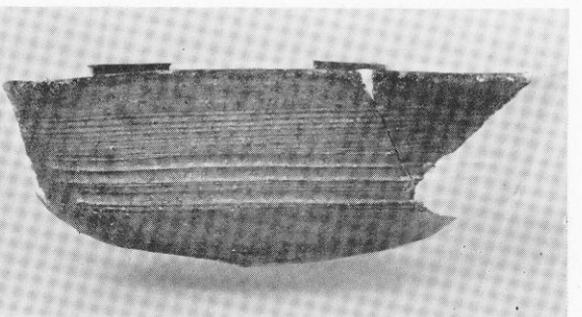
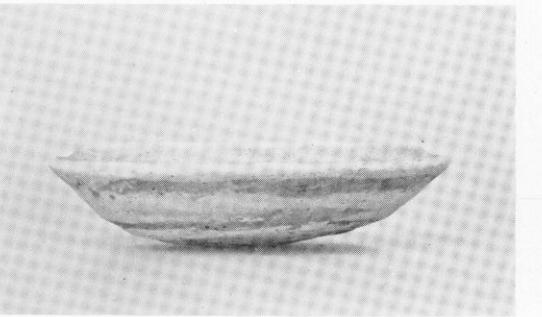
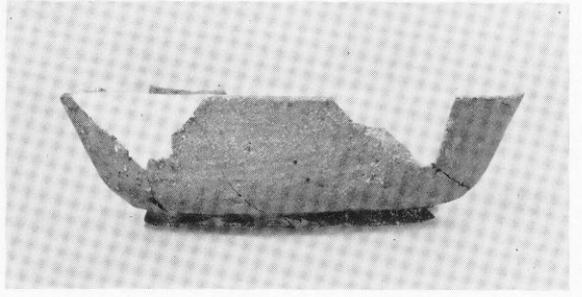
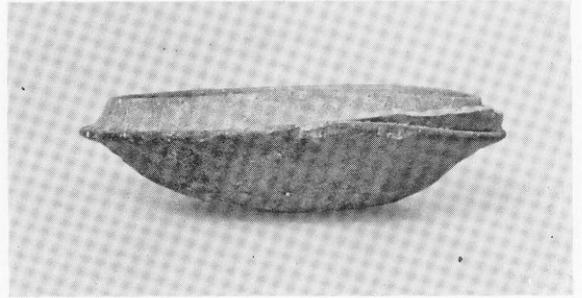
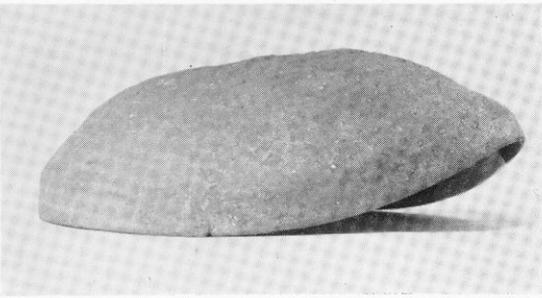
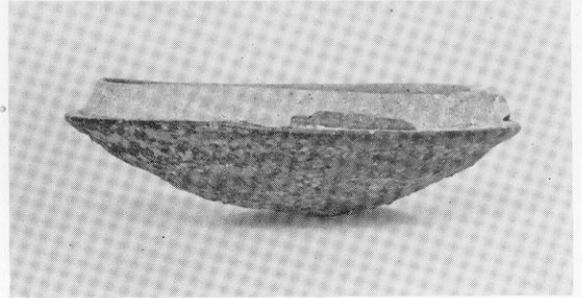
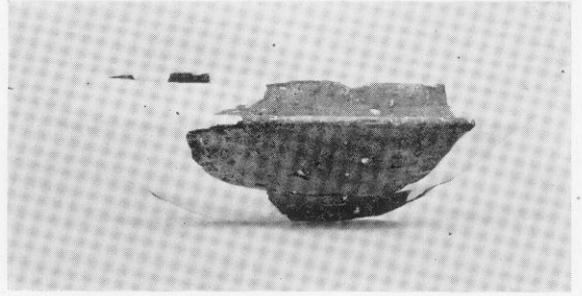
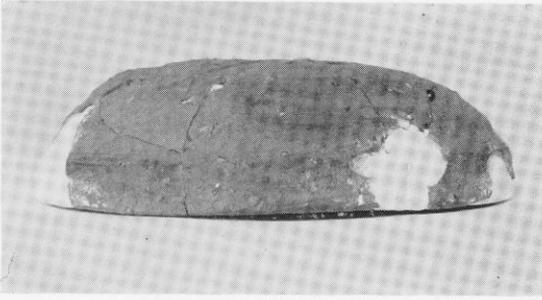
(1) 鍬 及 び 刀 子 ・ 鍔



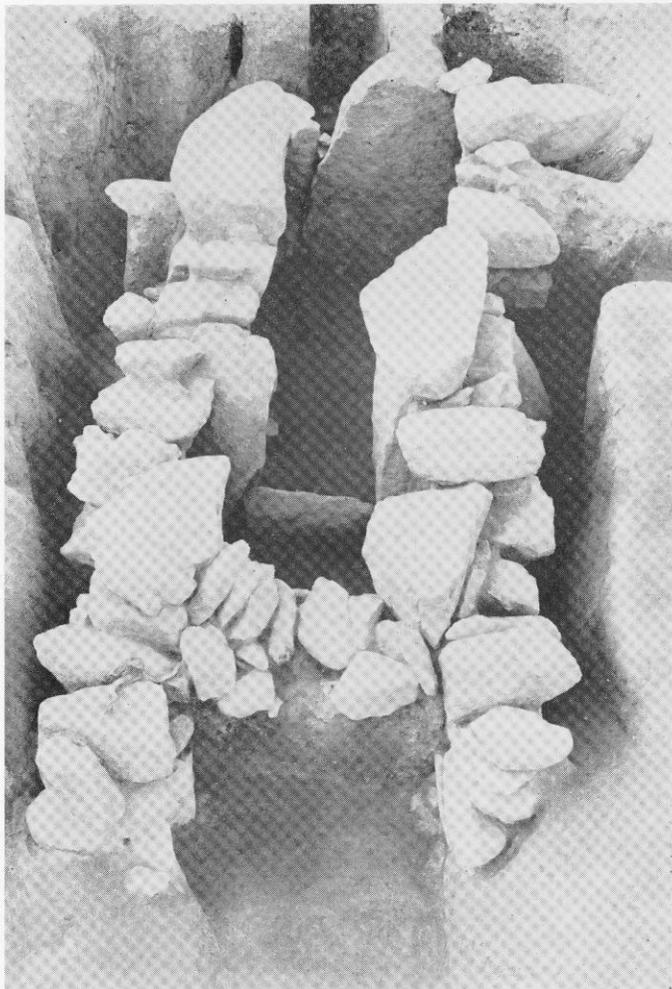
(2) 鉄 斧



(3) 耳 環



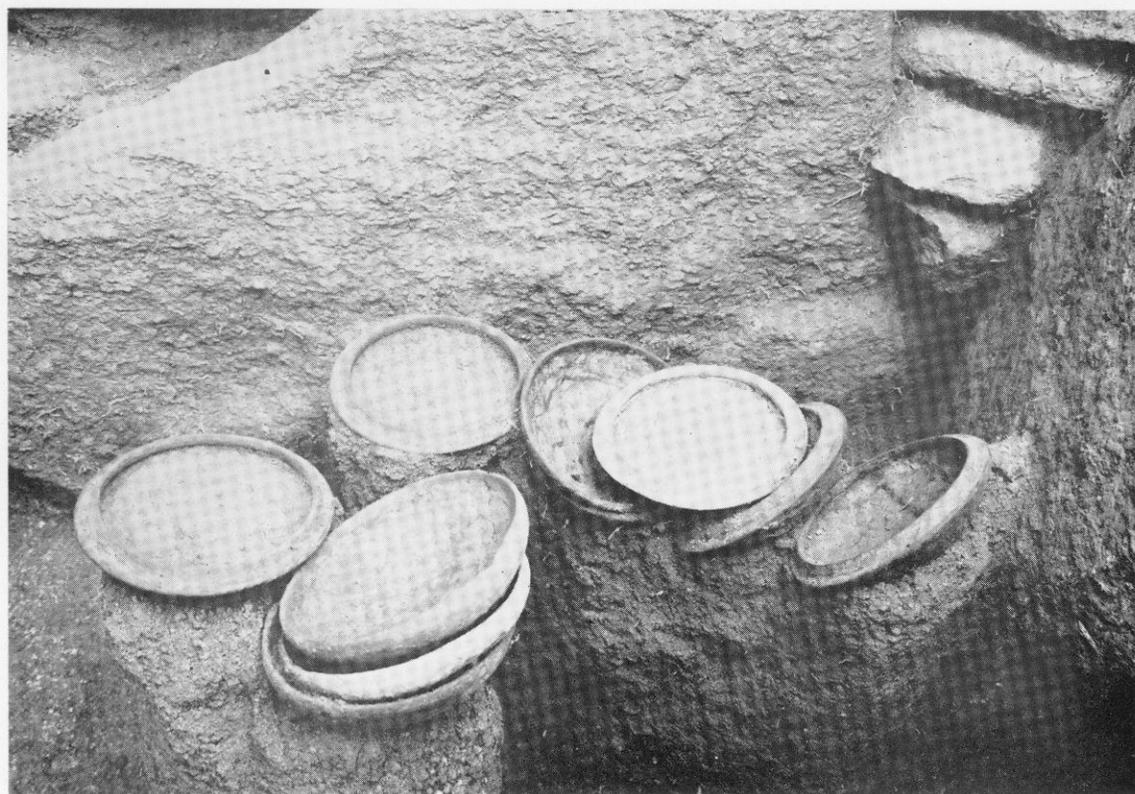
(1) 須惠器



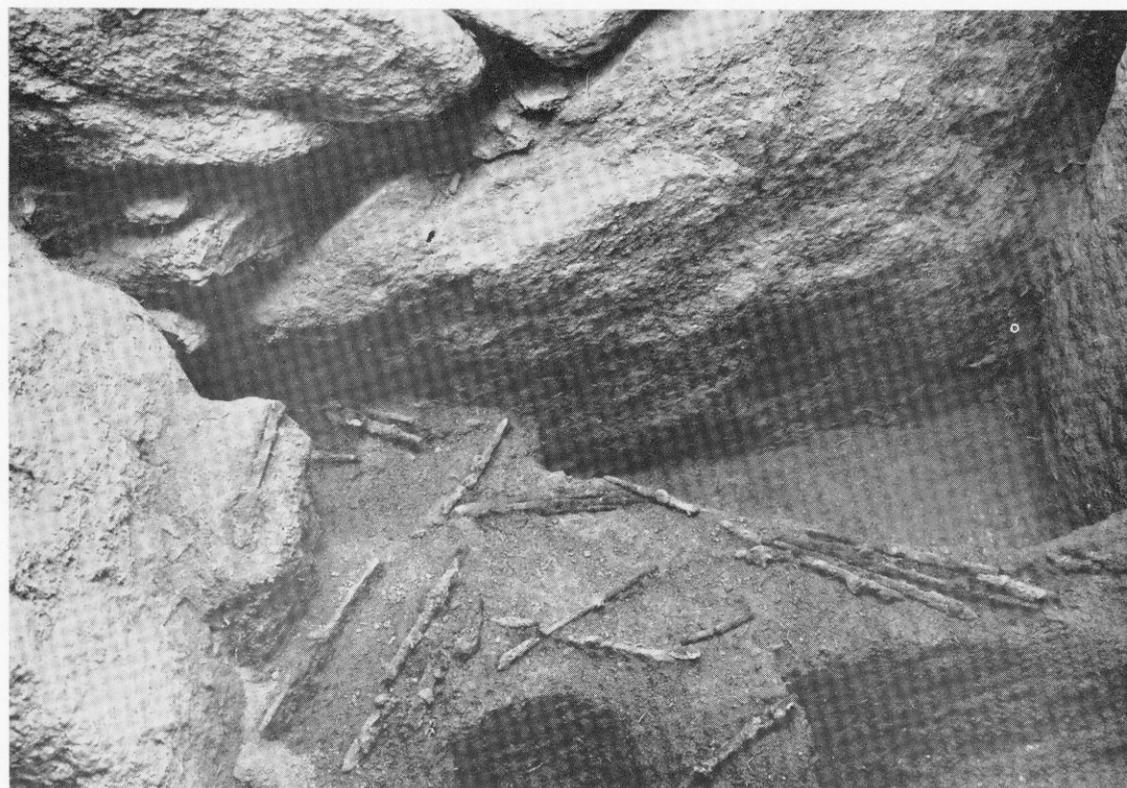
(1) 石室全景 (南東より)



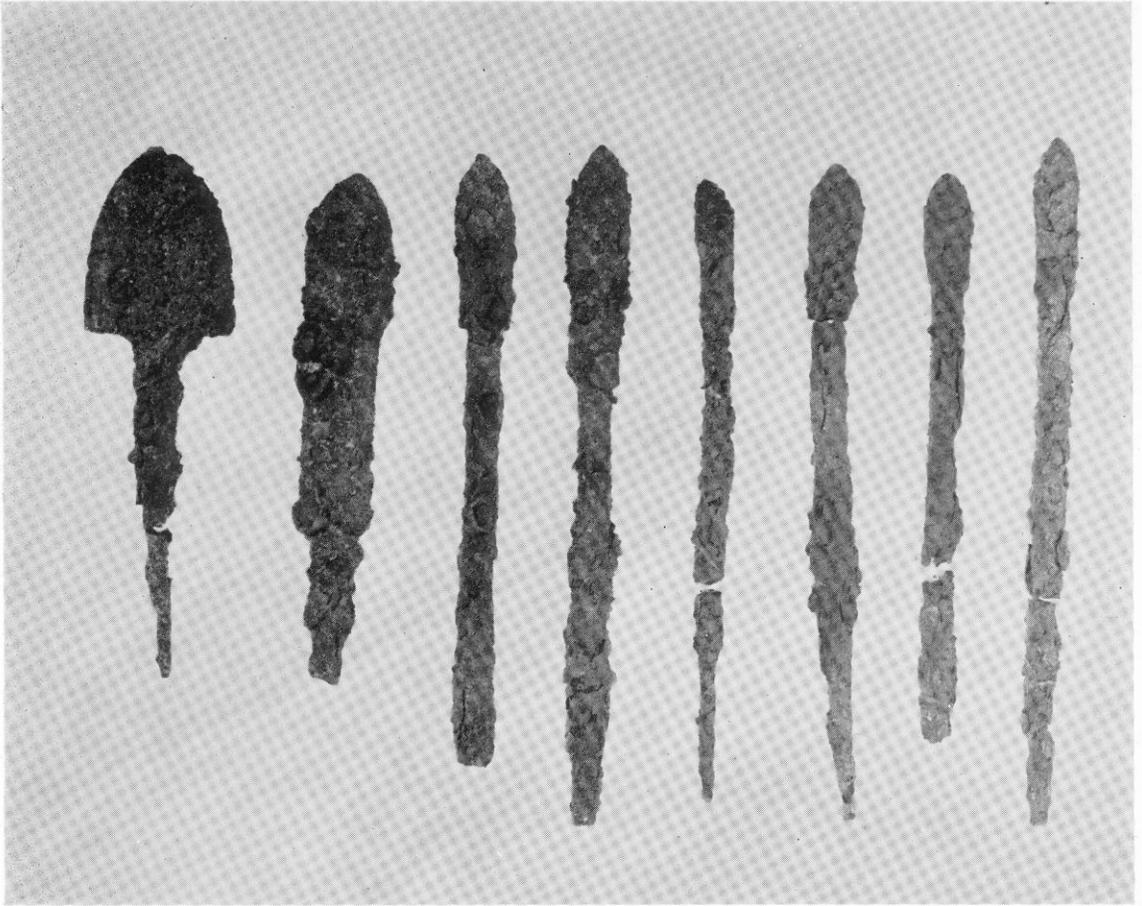
(2) 前室遺物出土状況



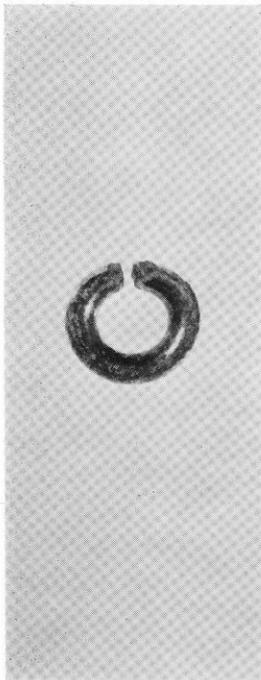
(1) 須恵器出土状況



(2) 鉄鏃出土状況



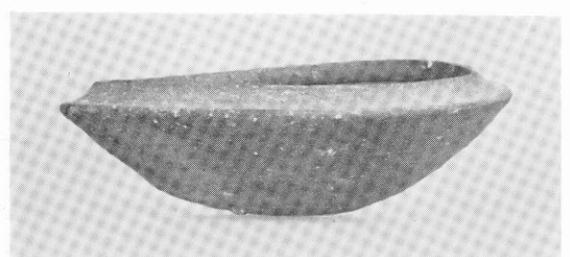
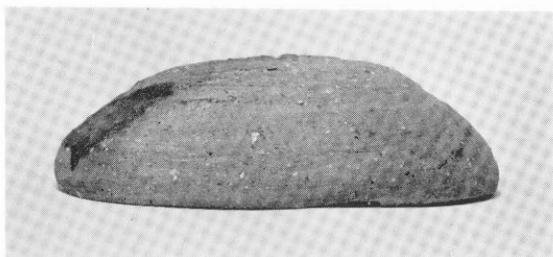
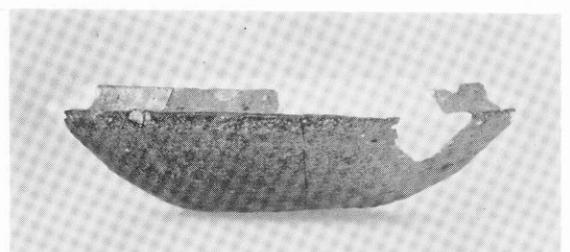
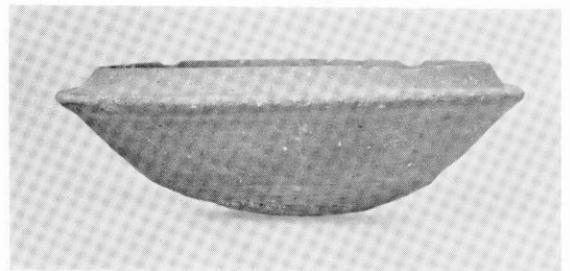
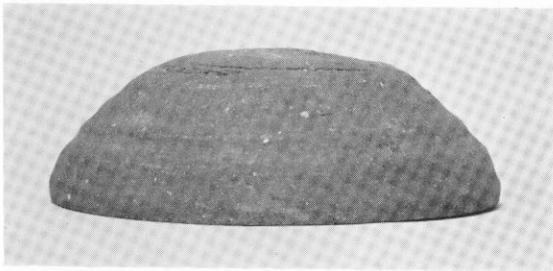
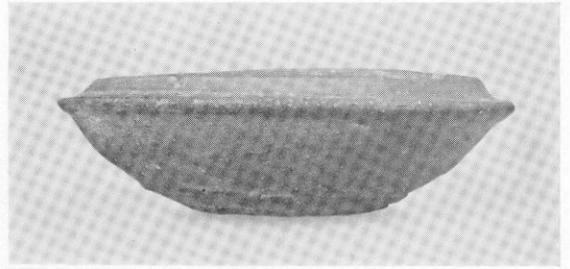
(1) 鍬



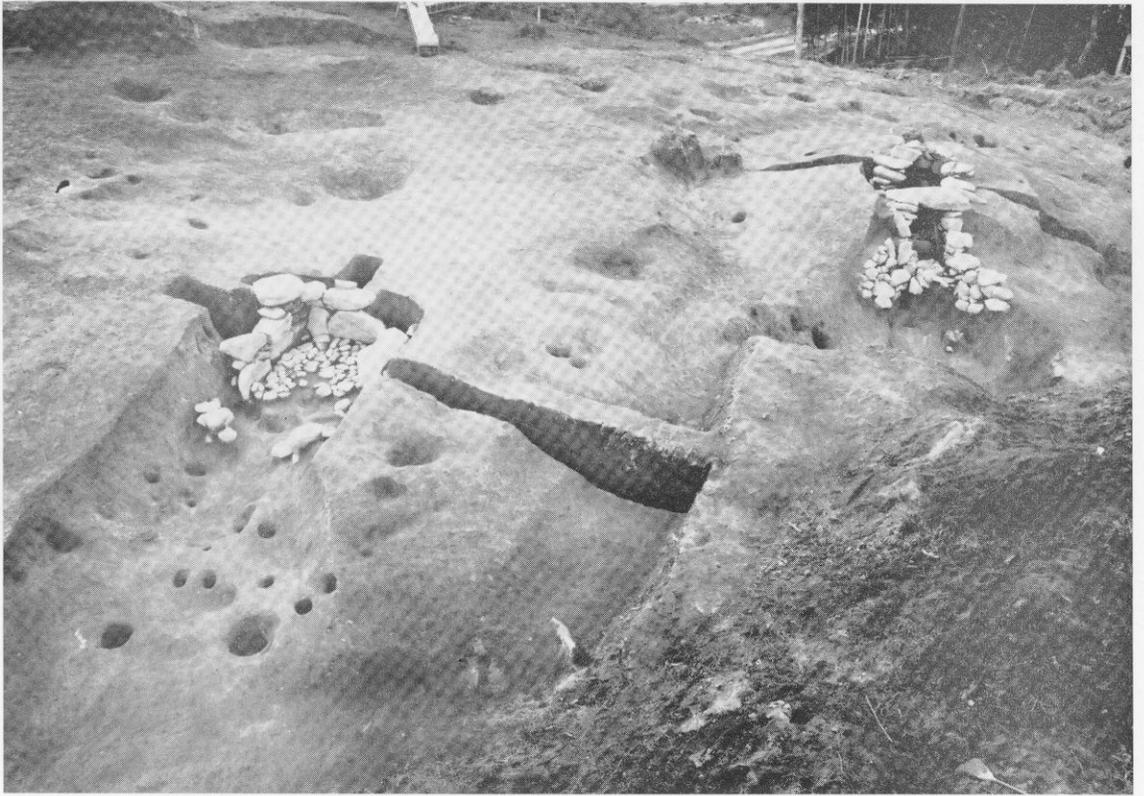
(2) 耳環



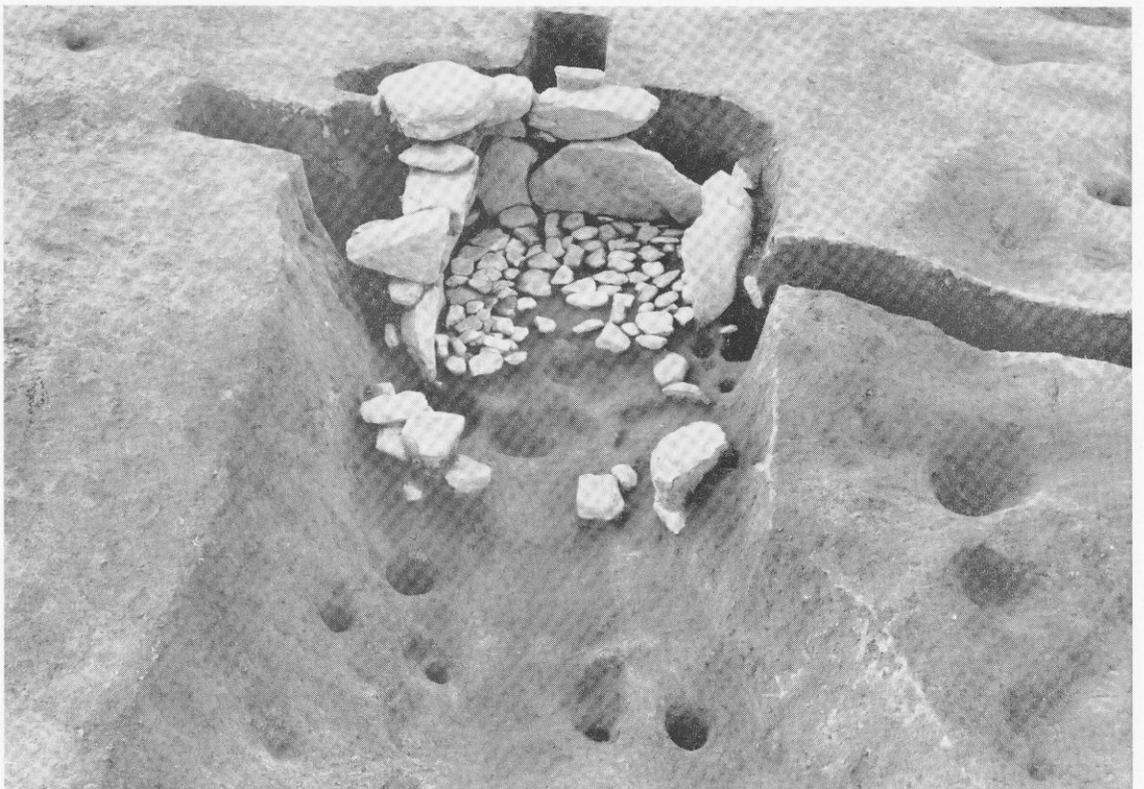
(3) 土師器



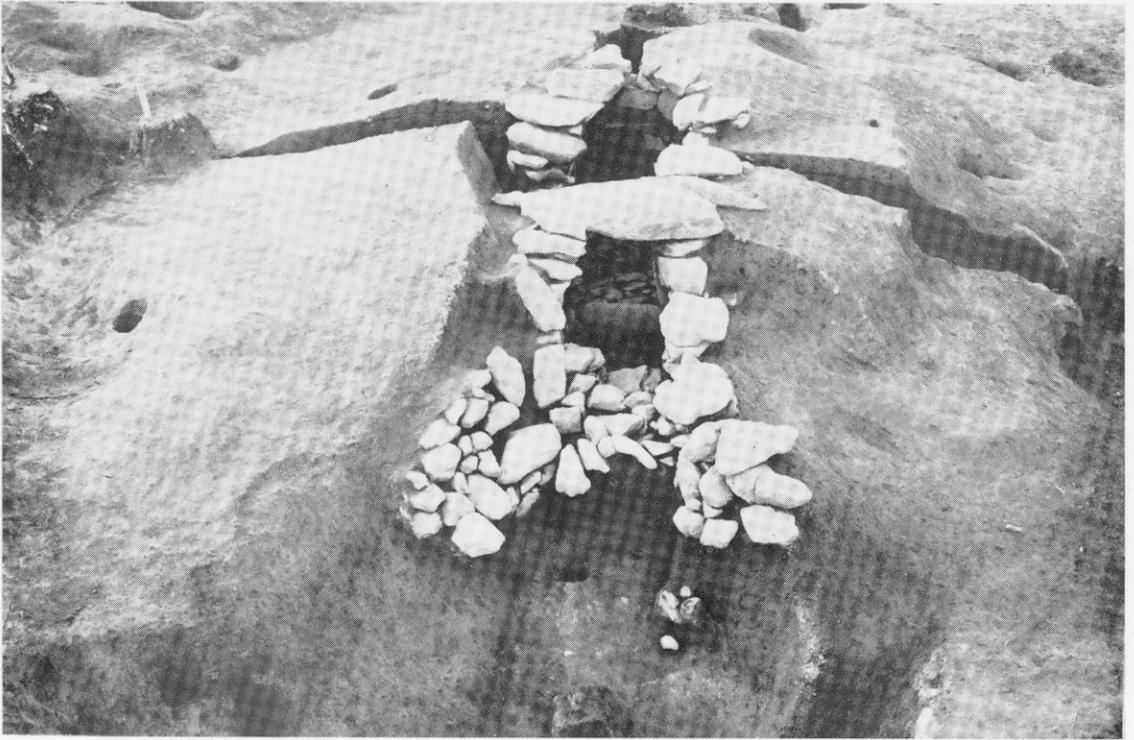
(1) 須 惠 器



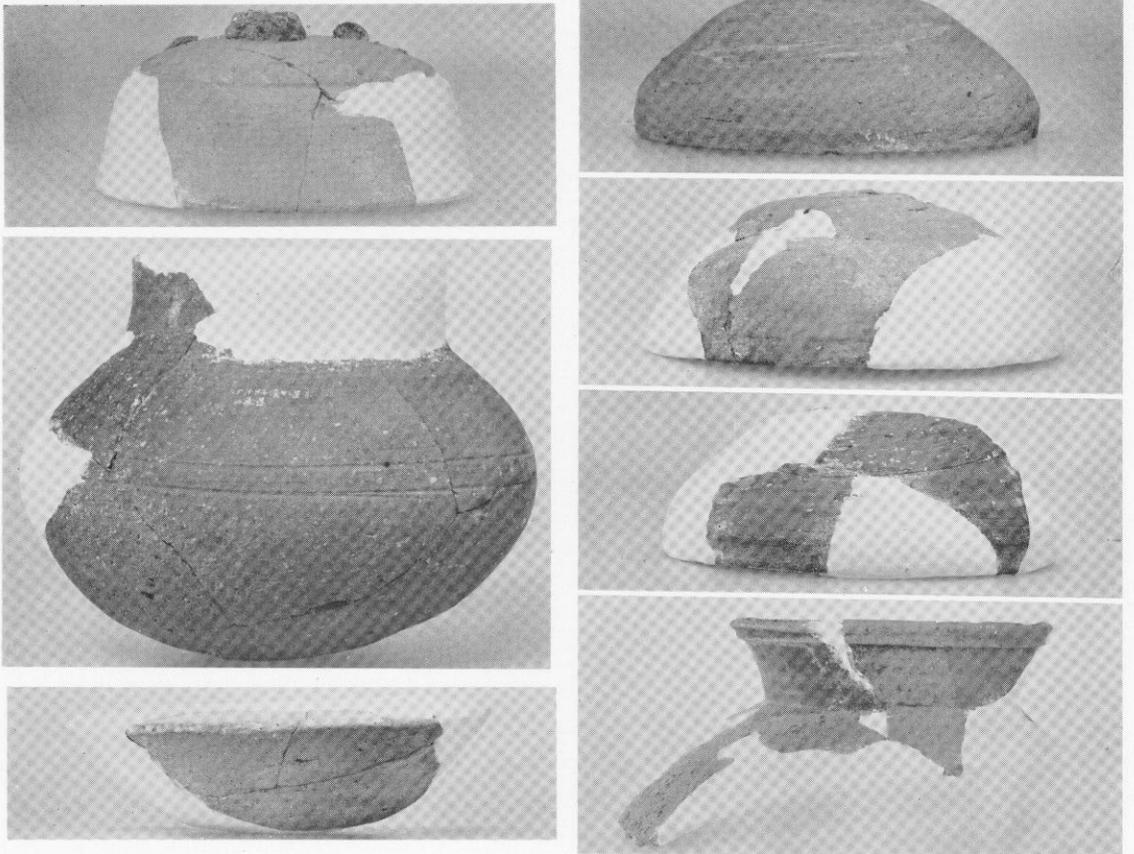
(1) 第 7, 8 号 墳 全 景 (南 東 よ り)



(2) 石 室 全 景 (南 東 よ り)



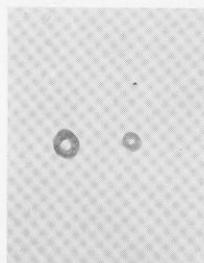
(1) 墳土及び石室全景 (南東より)



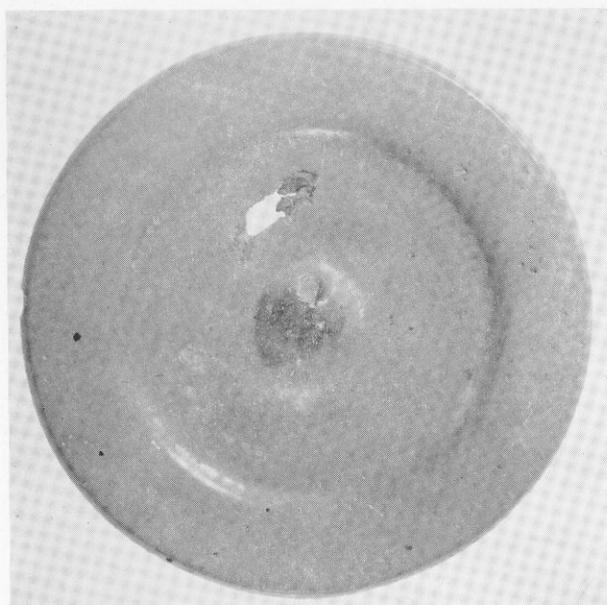
(2) 須恵器



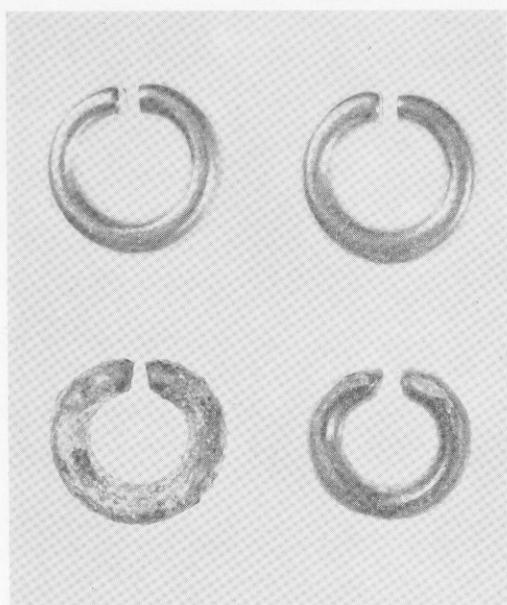
(1) 第7号墳出土須恵器



(2) 第7号墳出土小玉



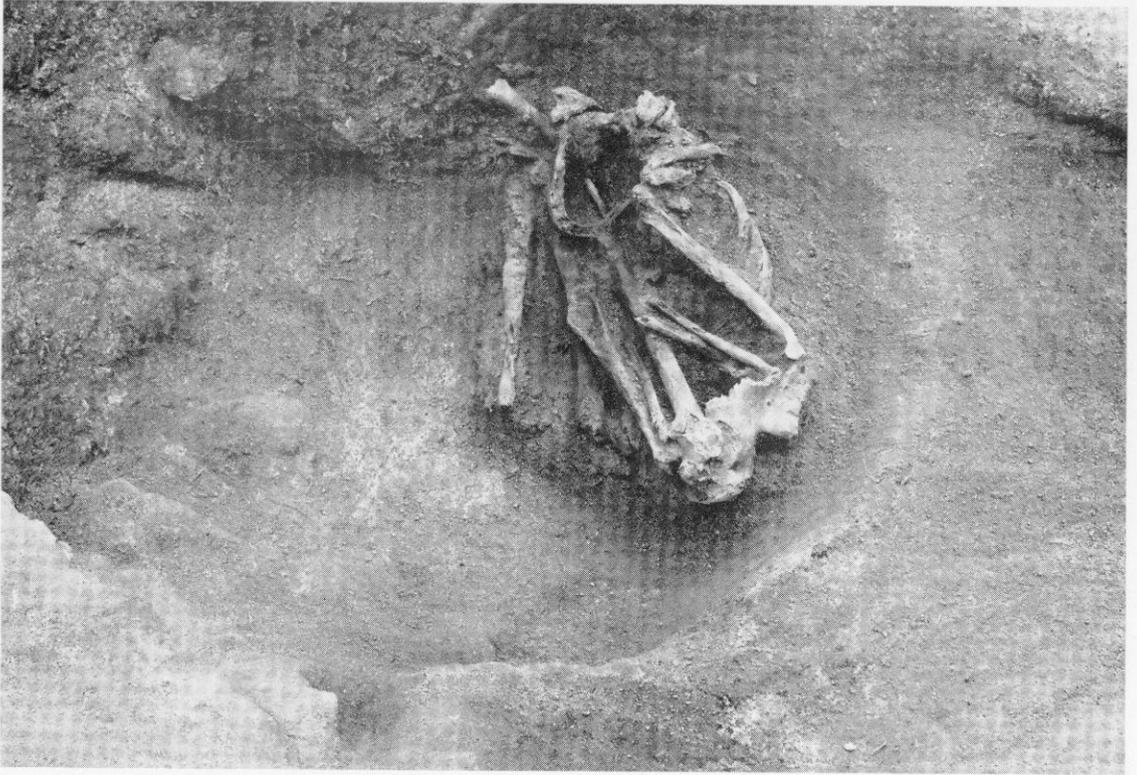
(3) 第8号墳墓道埋土中出土銅鏡



(4) 第8号墳出土耳環



(5) 第9号墳全景 (南より)



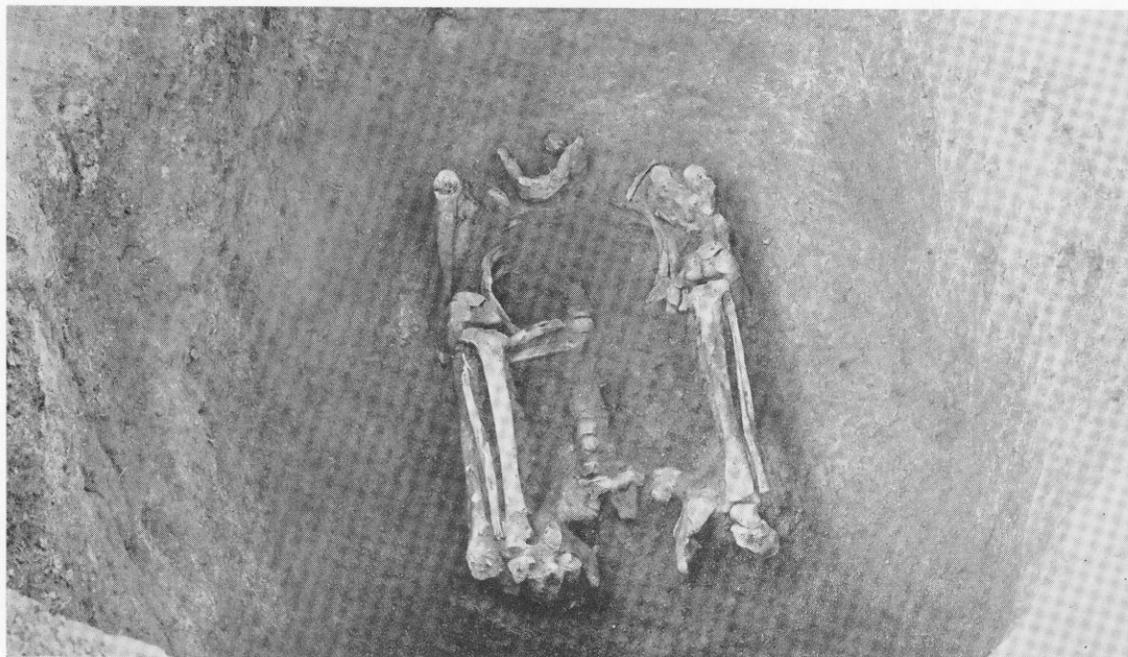
(1) 第 1 号土壙墓 (南より)



(2) 第 2 ・ 第 3 号土壙墓 (南より)



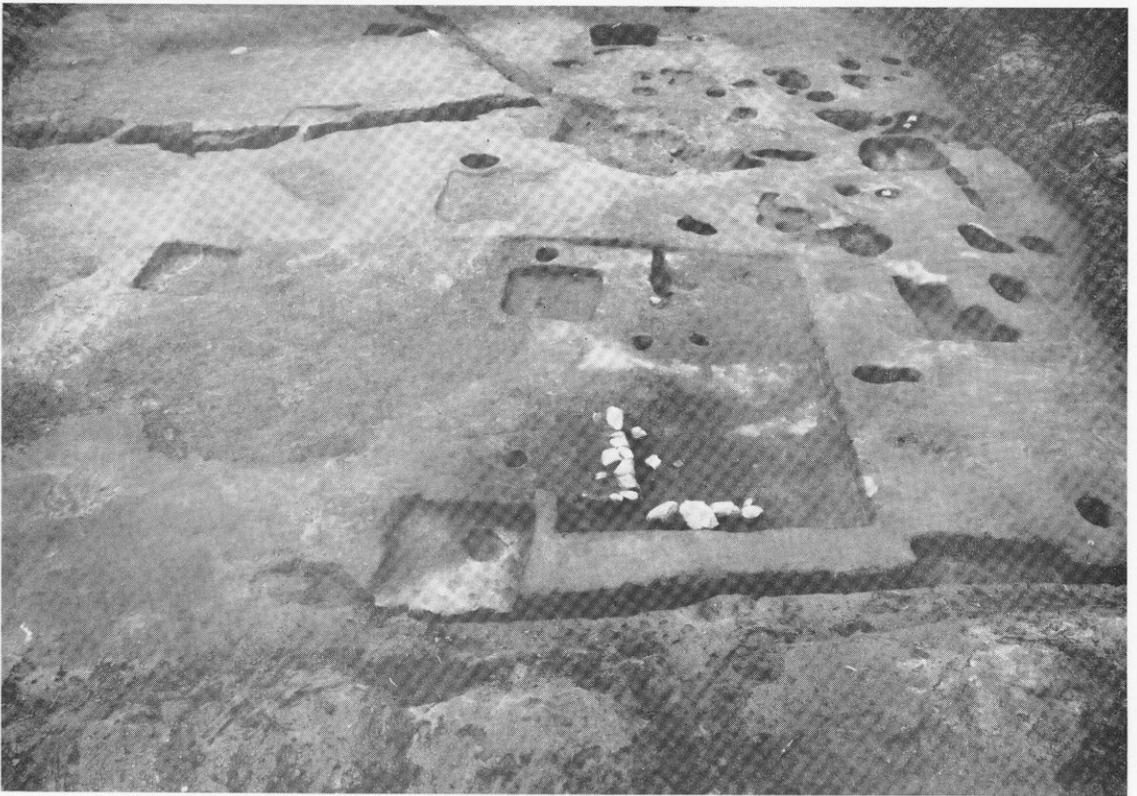
(1) 第 3 号土 壙 墓 (南より)



(2) 第 2 号土 壙 墓 (南より)



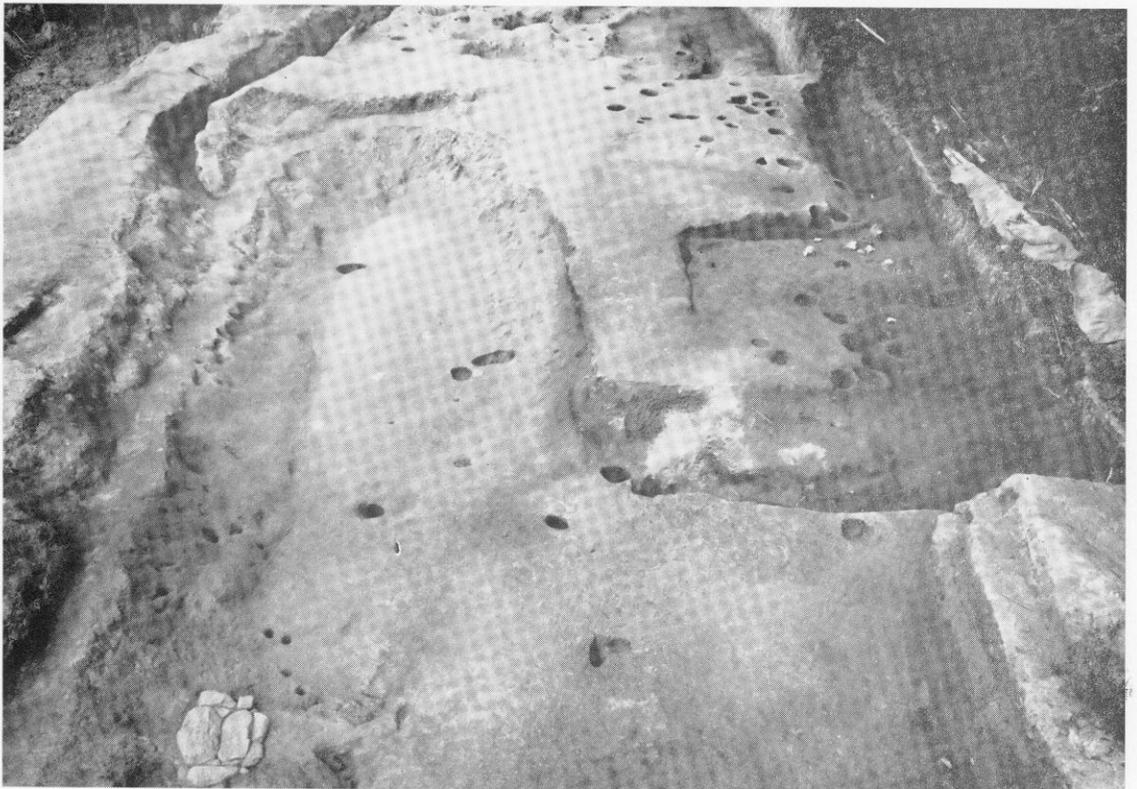
(1) 調査前の第1地点 (北より)



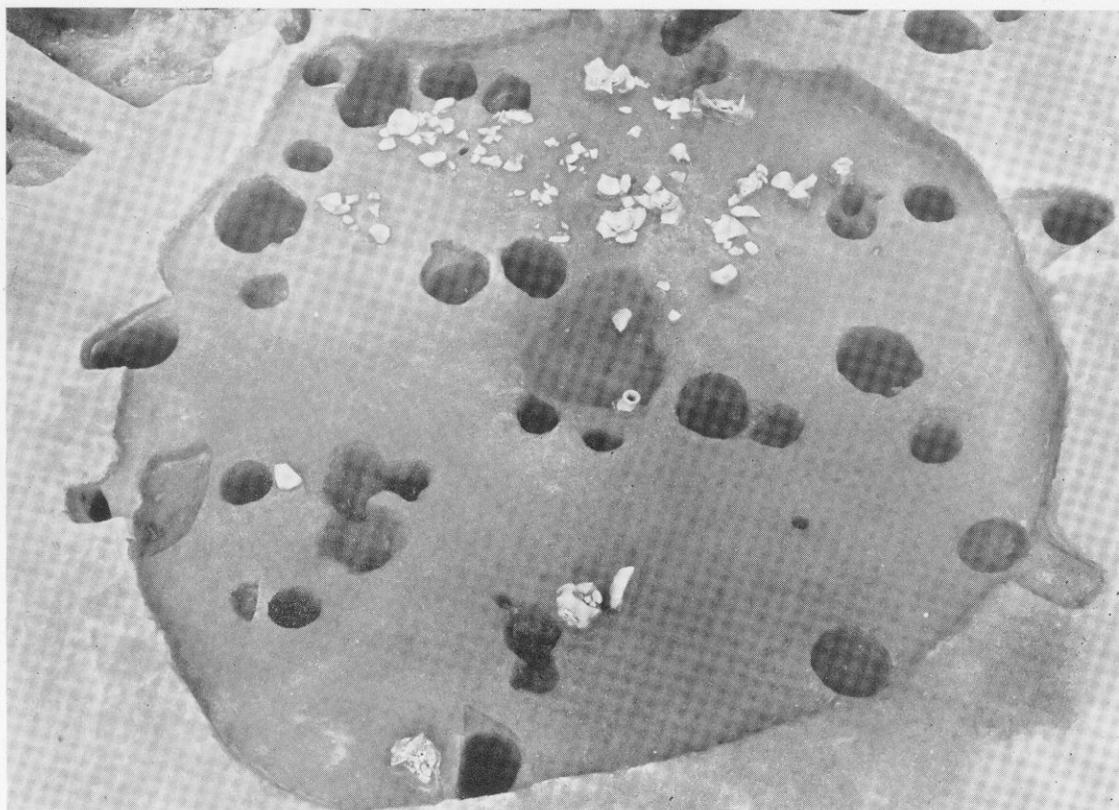
(2) 南部遺構群 (南より)



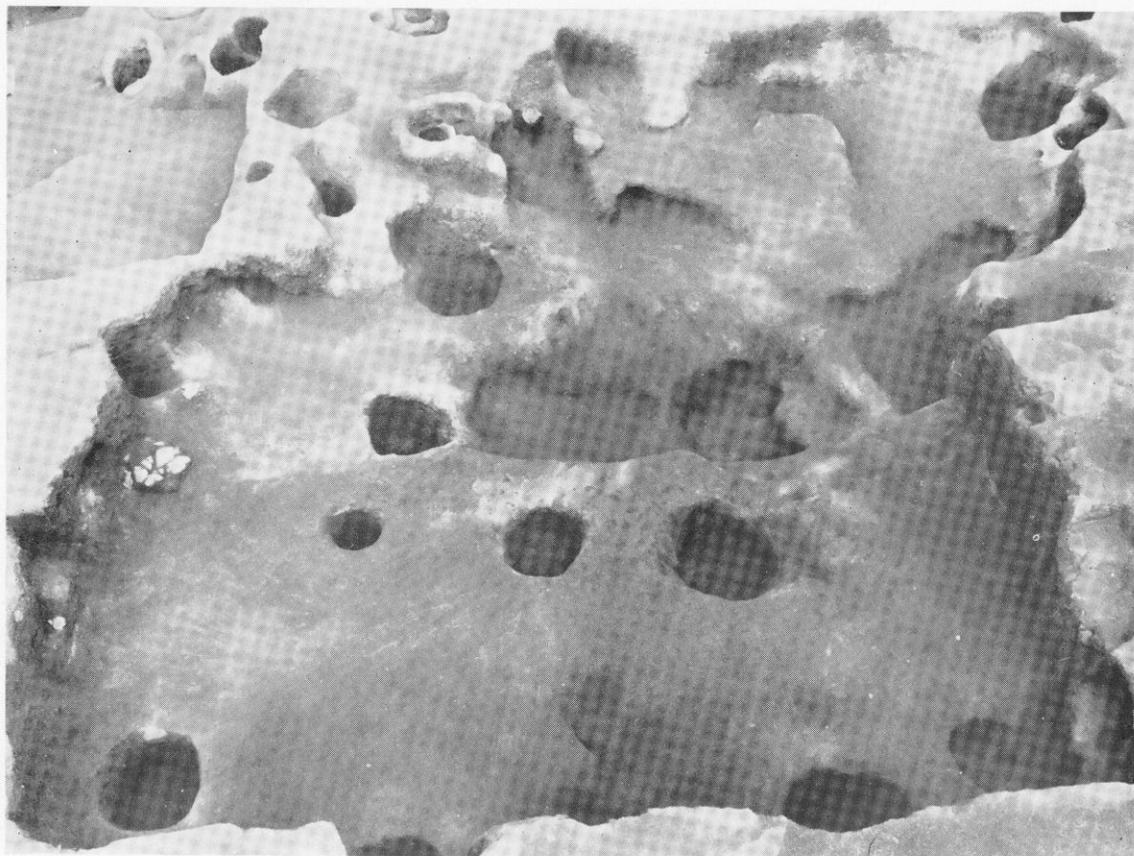
(1) 中央部遺構群 (南より)



(2) 北部遺構群 (南より)



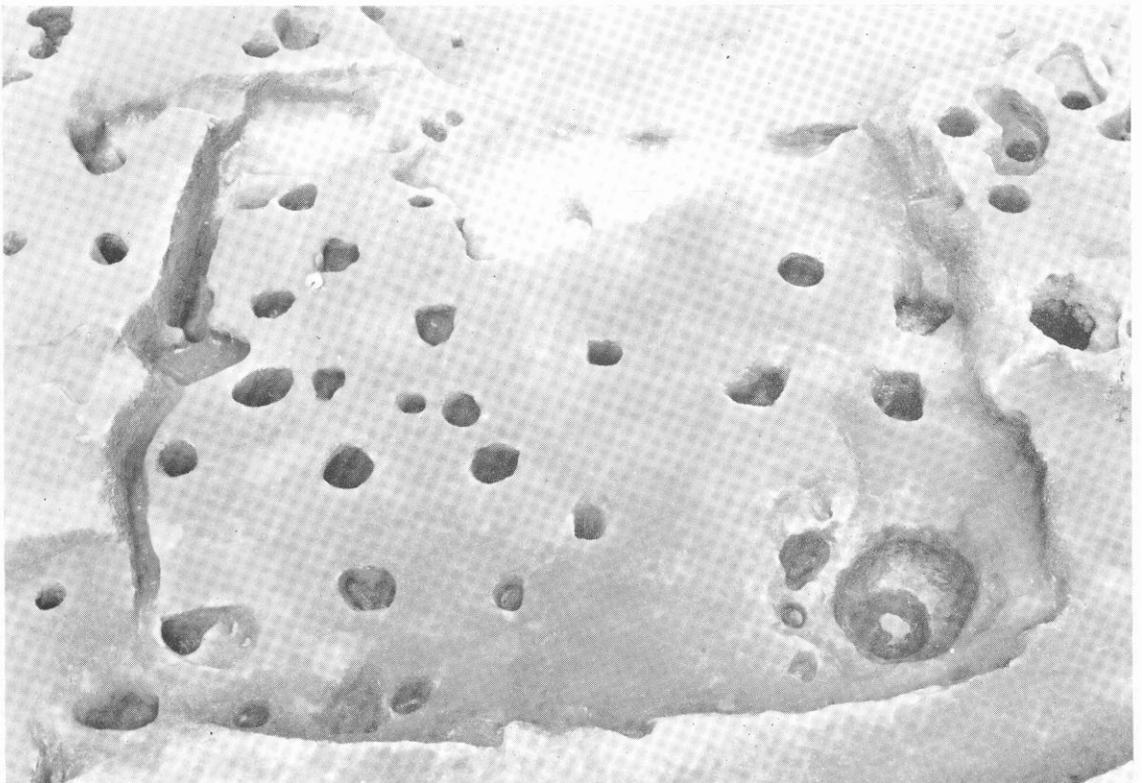
(1) 第 3 号 住 居 跡 (西より)



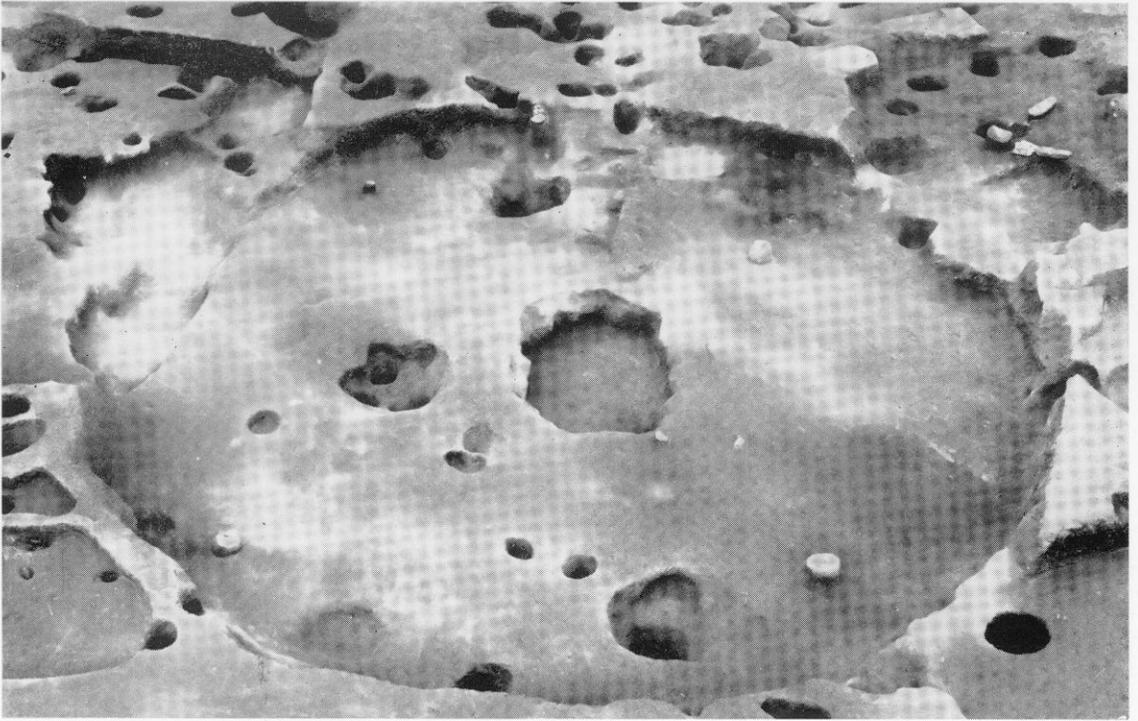
(2) 第 5 ・ 6 号 住 居 跡 (西より)



(1) 第 7 ~ 11, 13 号住居跡 (西より)



(2) 第 7 号住居跡 (西より)



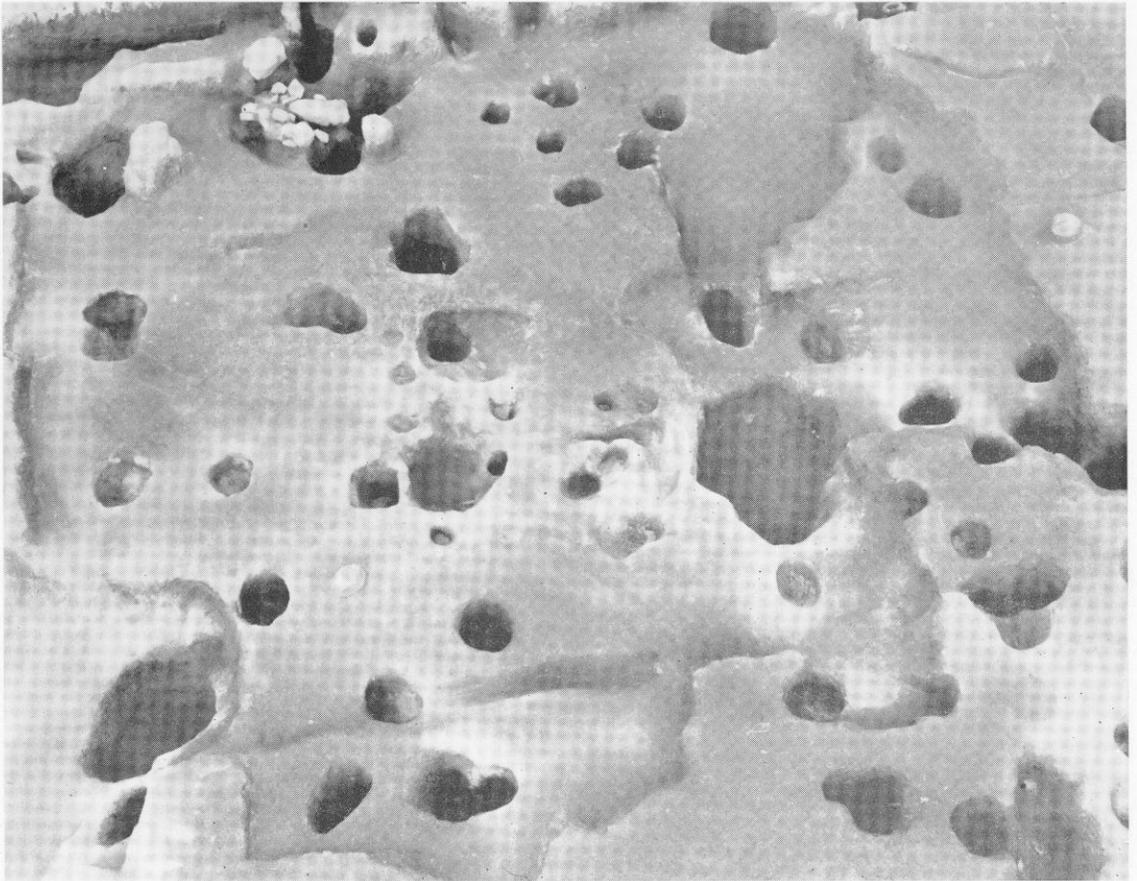
(1) 第 8 号住居跡 (南より)



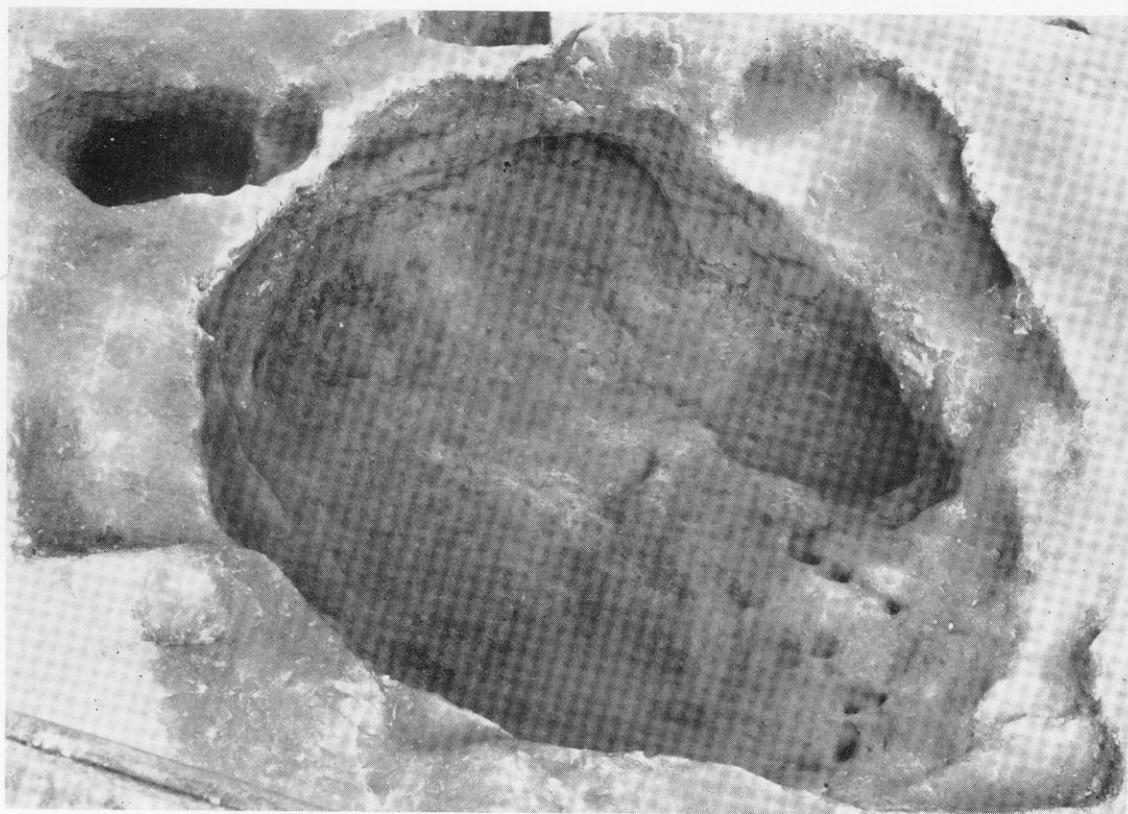
(2) 第 11 号住居跡 (南より)



(1) 第 12 号 住 居 跡 (西より)



(2) 第 9 号 住 居 跡 (西より)



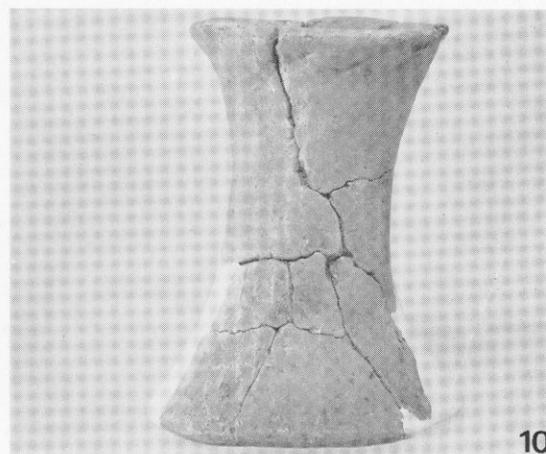
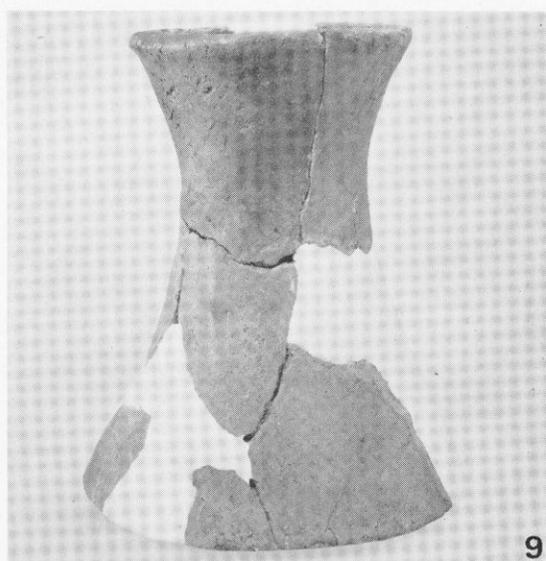
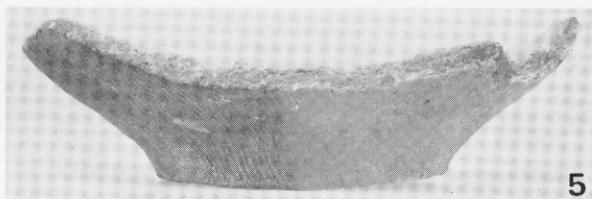
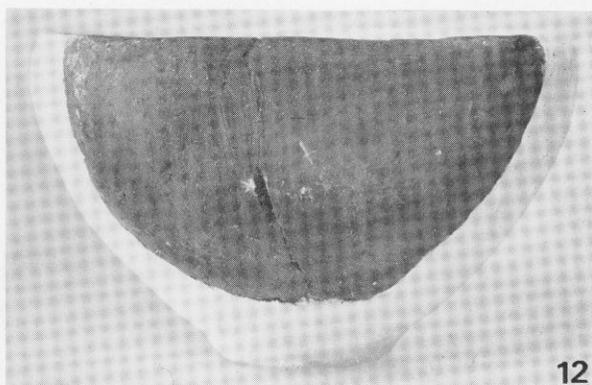
(1) 第14号住居跡・第1号竖穴 (南より)



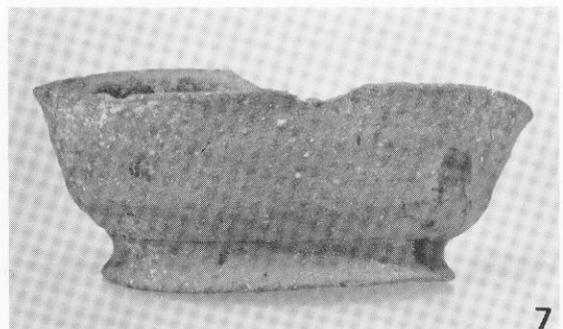
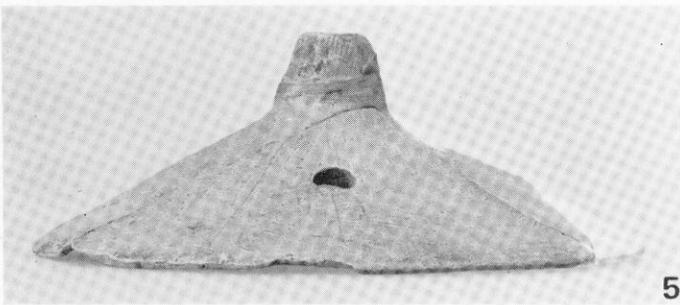
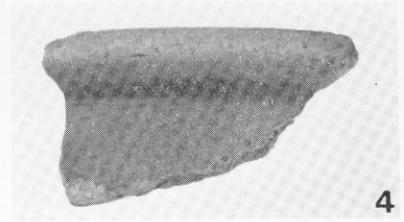
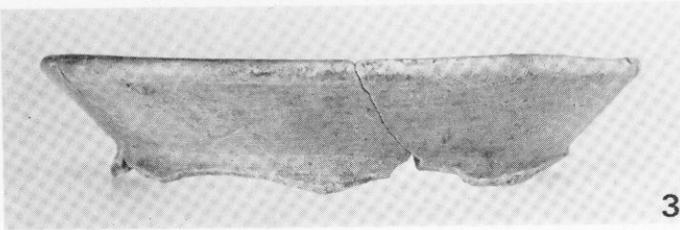
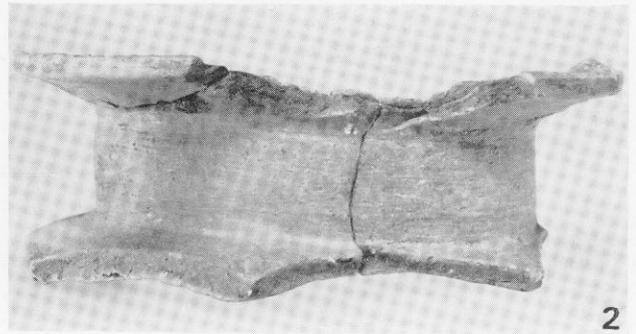
(2) 第1号溝状遺構 (南より)



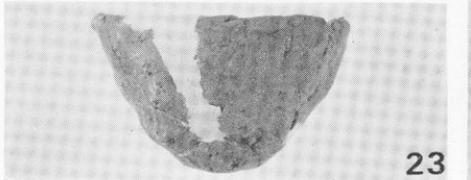
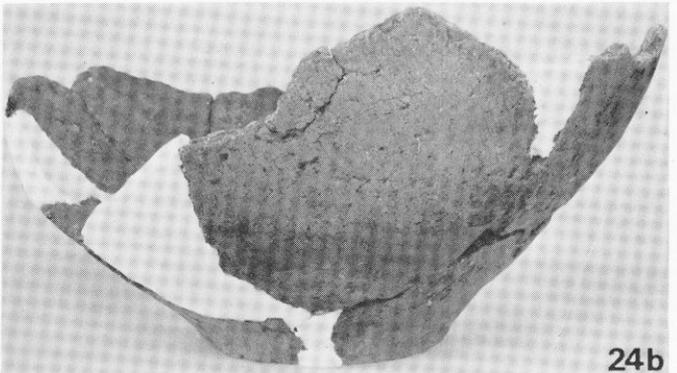
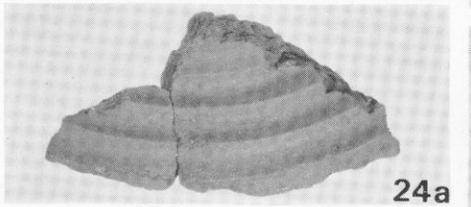
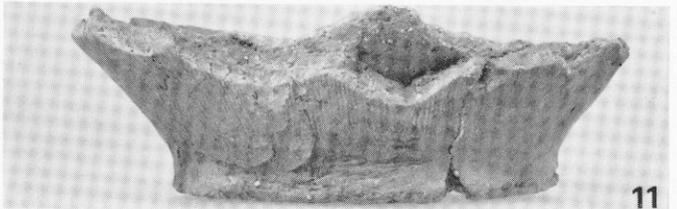
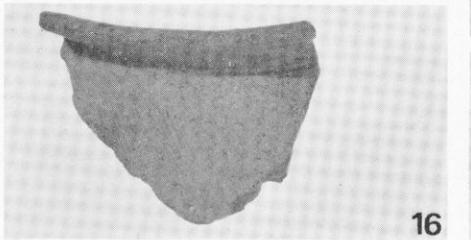
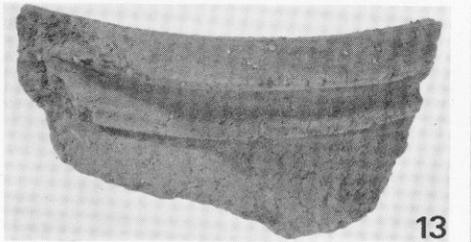
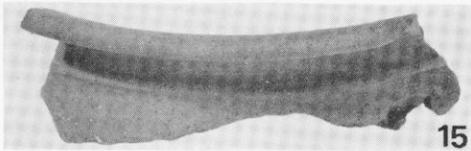
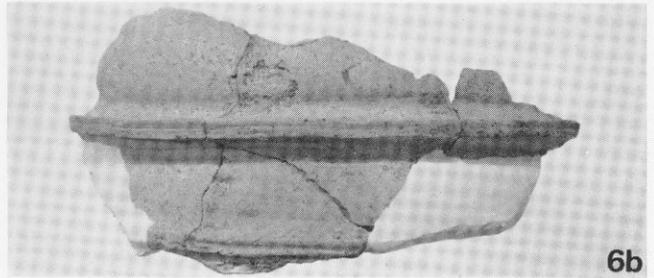
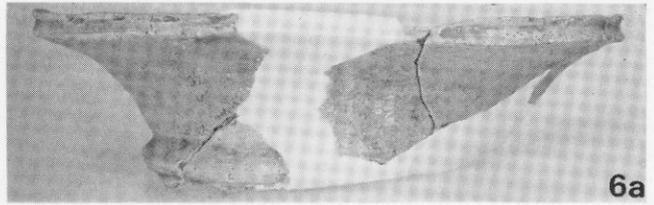
(3) 第2号溝状遺構 (南より)



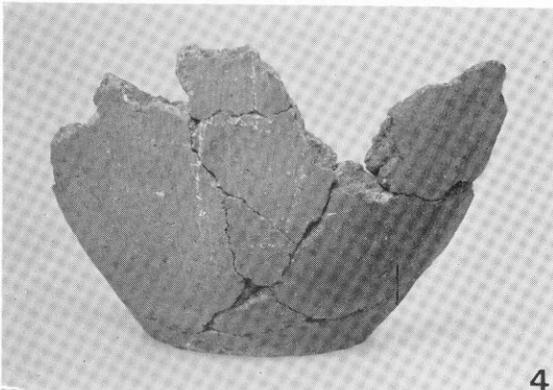
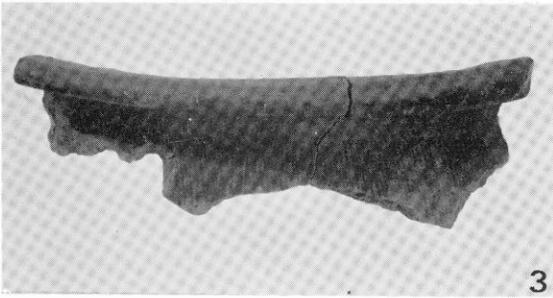
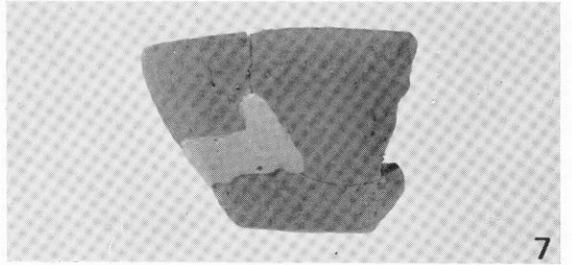
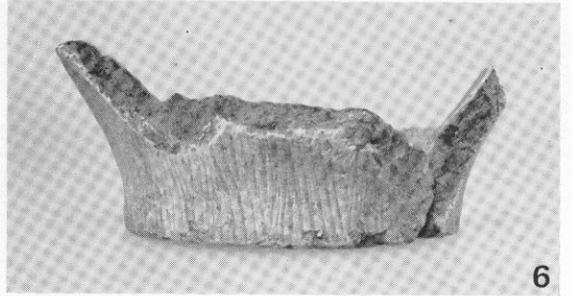
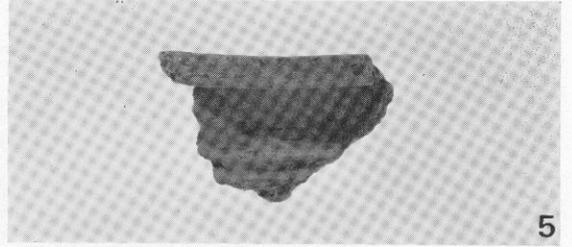
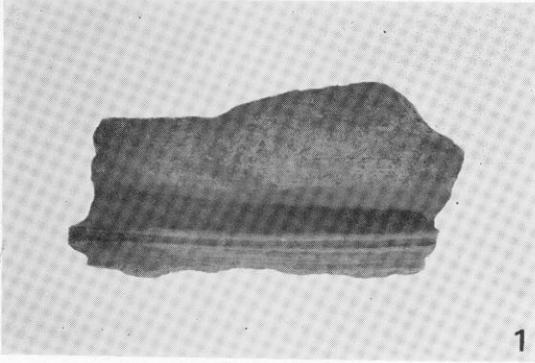
(1) 第 3 号住居跡出土土器



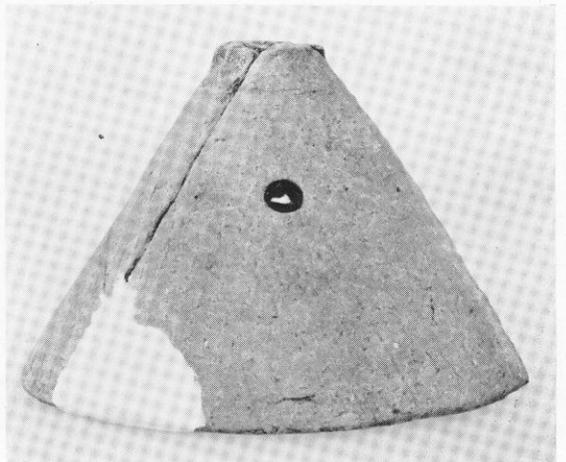
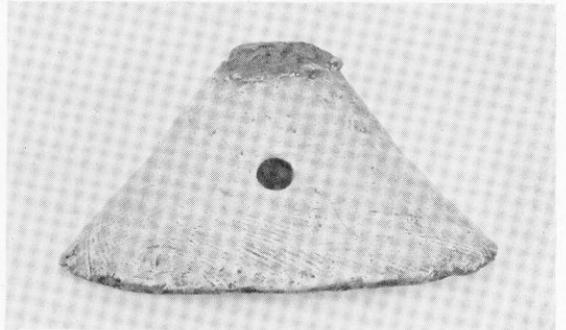
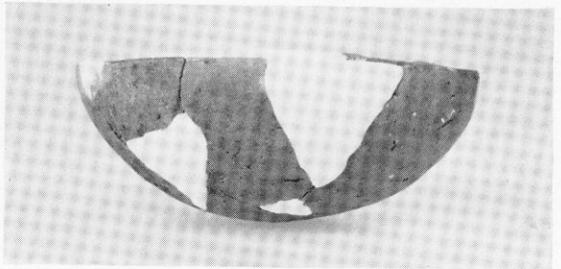
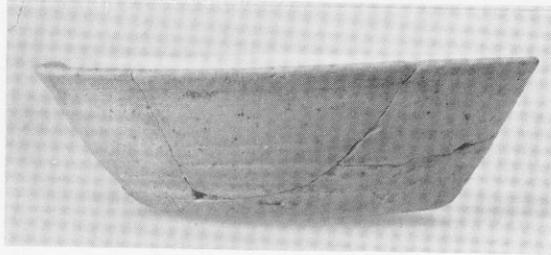
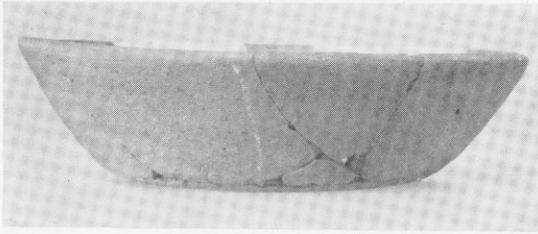
(1) 第4～6号住居跡出土土器 (1は4号住居, 2～5は5号住居, 6・7は6号住居)



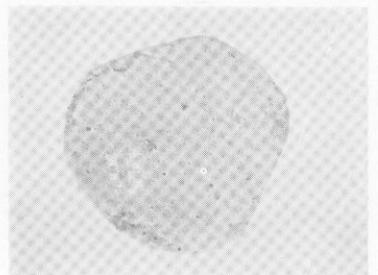
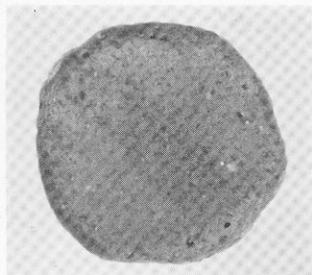
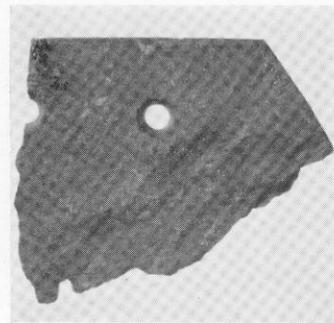
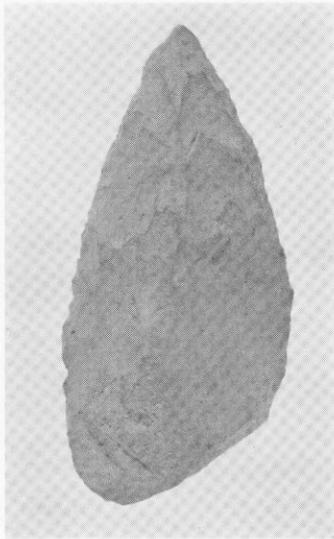
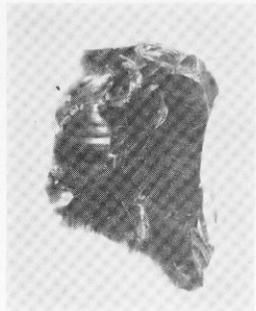
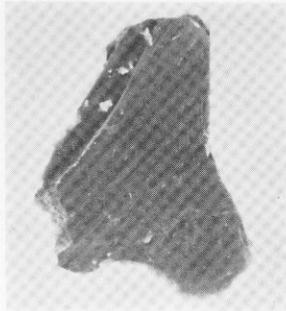
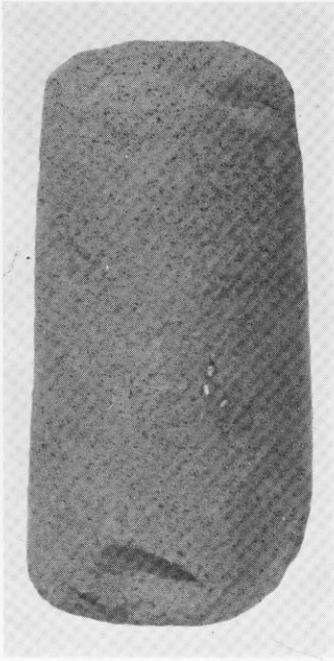
(1) 第 7 号住居跡出土土器



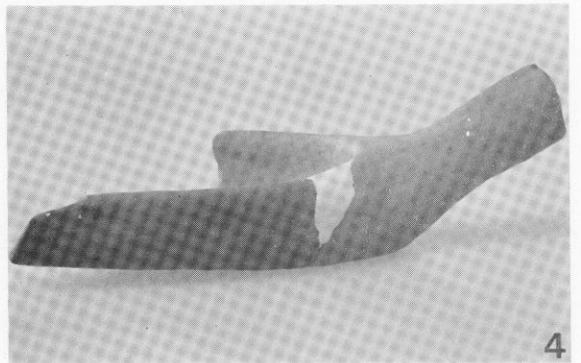
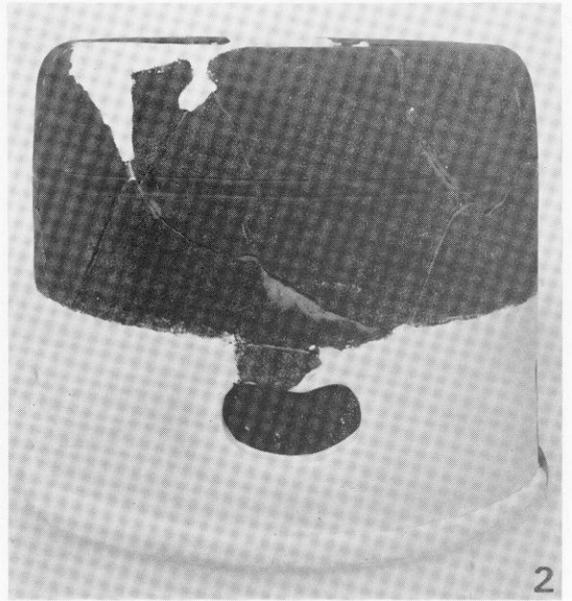
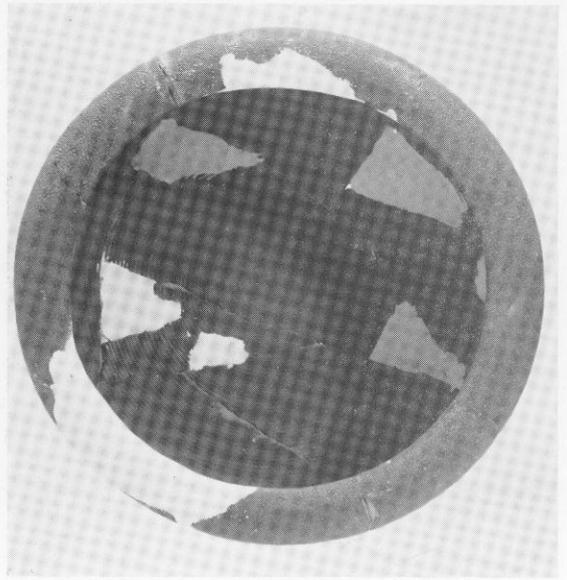
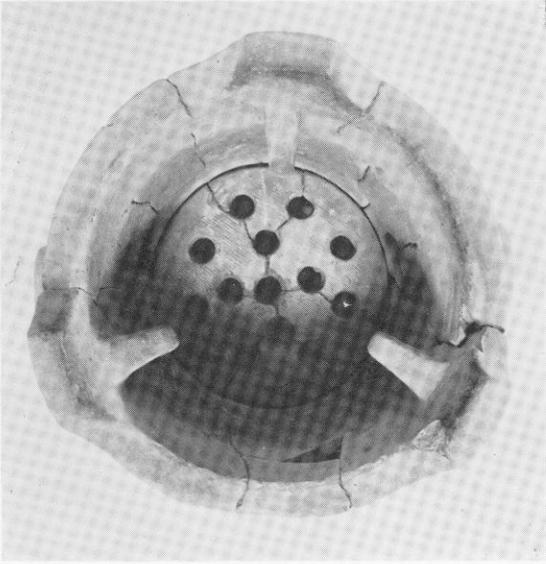
(1) 第10・11号住居跡出土土器 (1・2は10号住居, 3~9は11号住居)



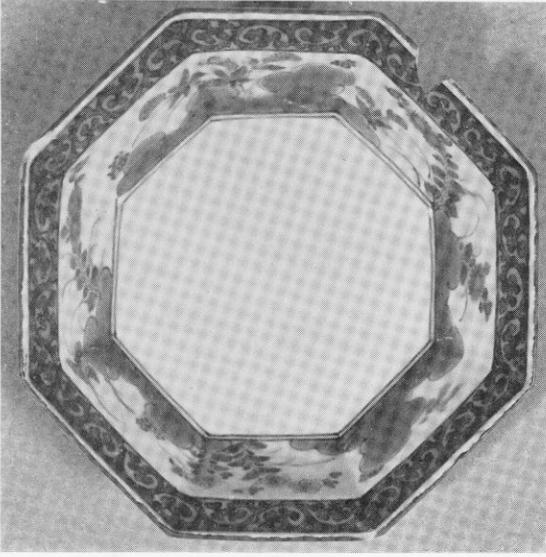
(1) 第 9 号住居跡出土土器



(1) 出土土製品及び石器



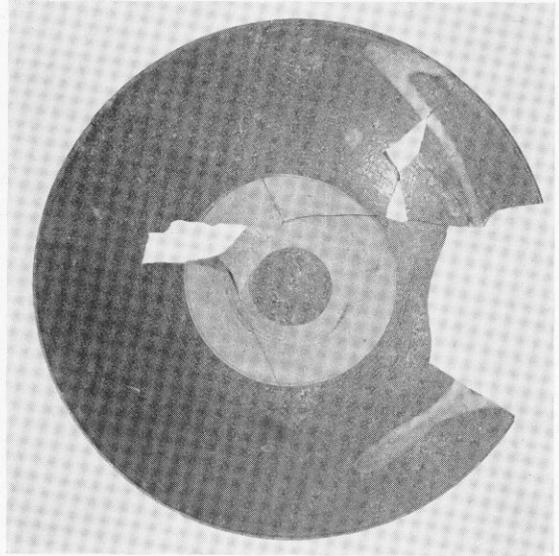
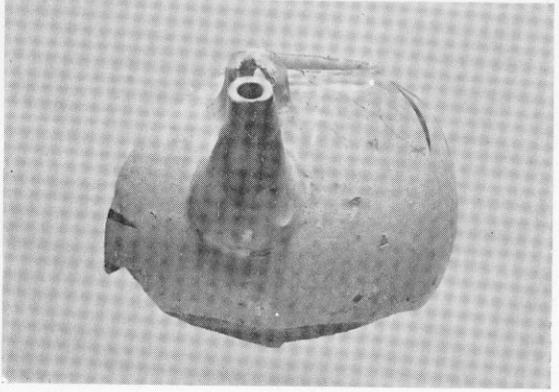
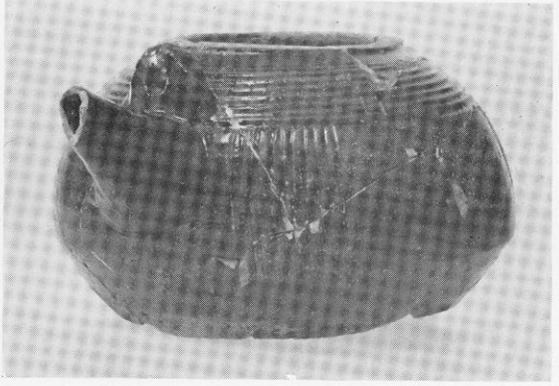
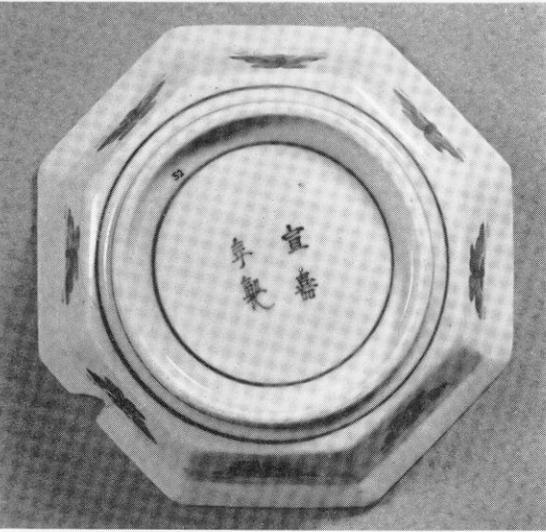
(1) 第 1 号竖穴出土 日常雜器



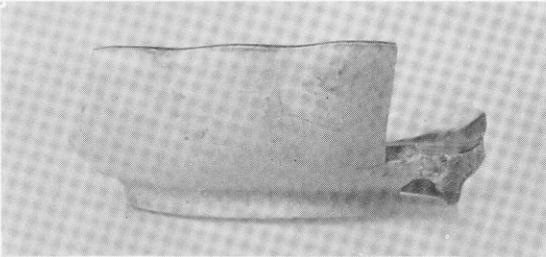
1



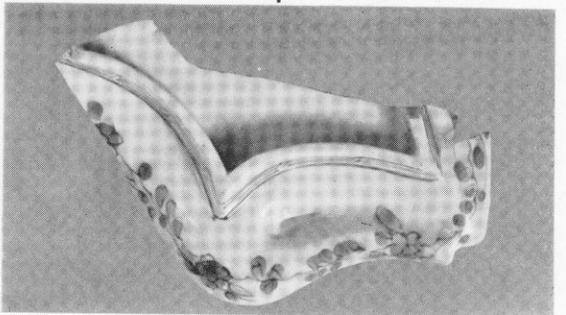
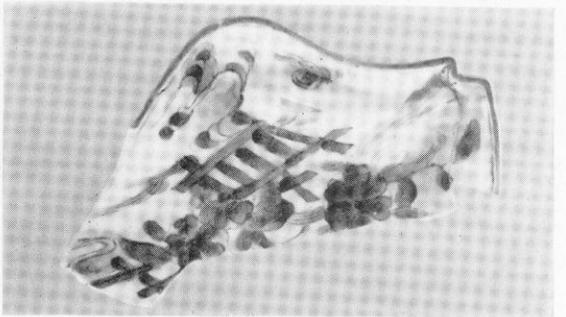
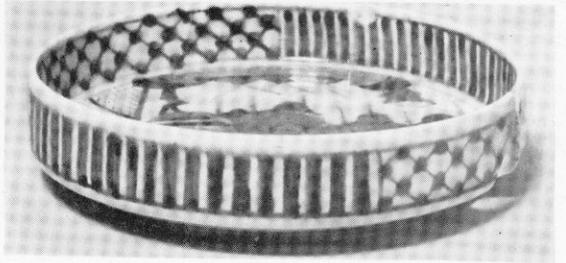
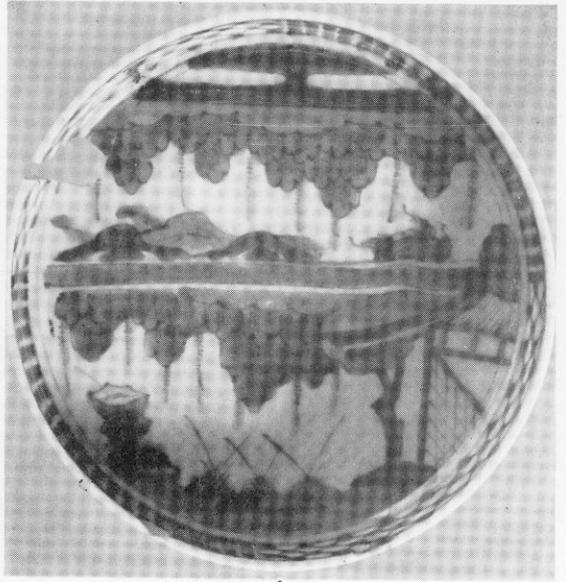
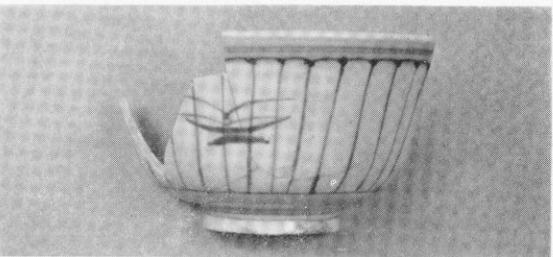
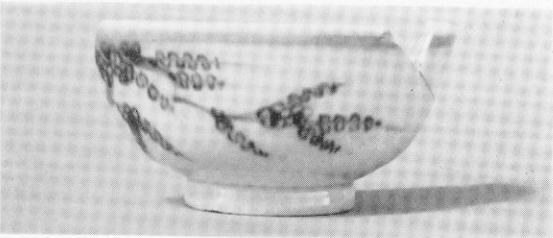
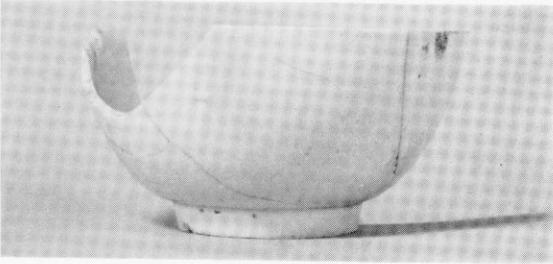
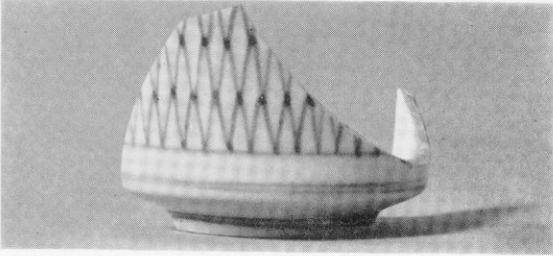
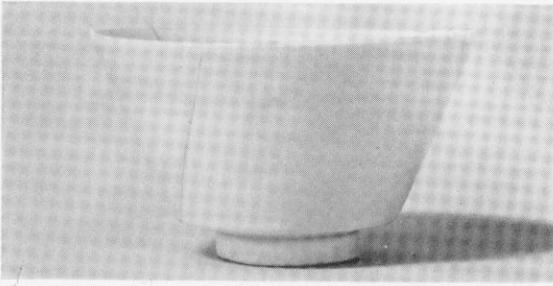
1



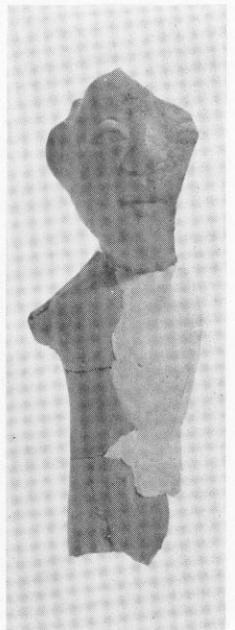
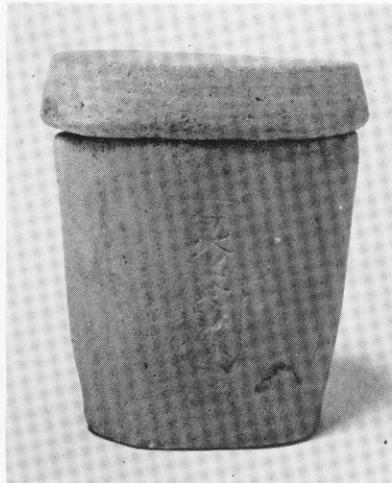
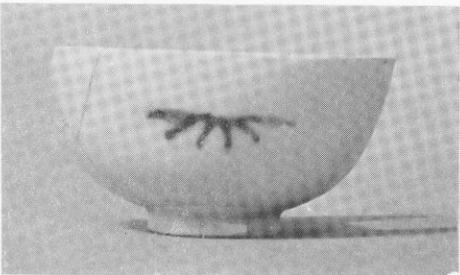
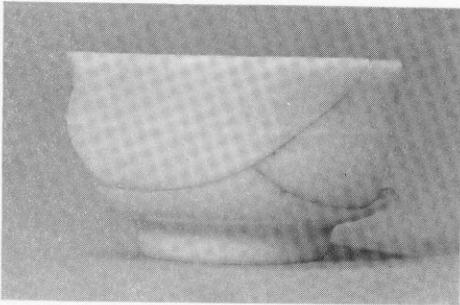
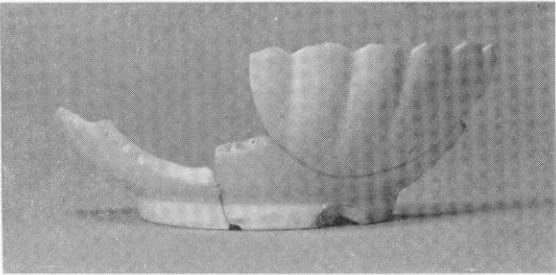
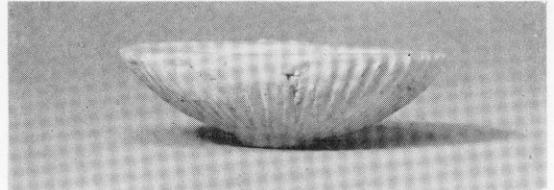
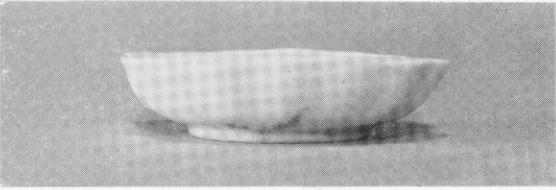
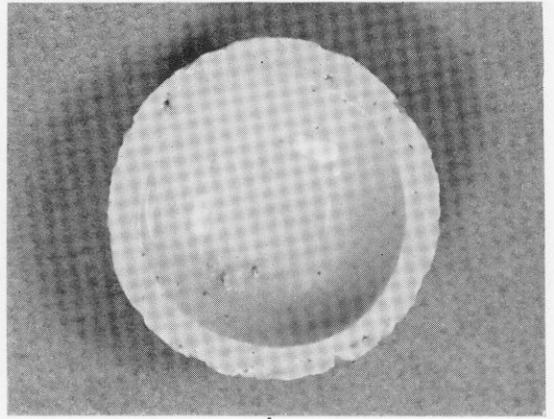
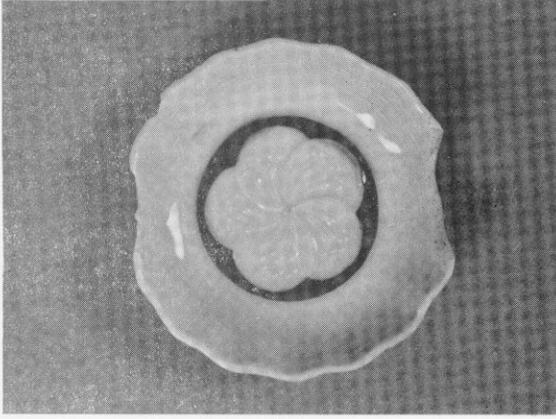
1



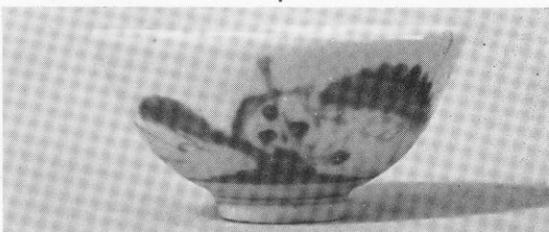
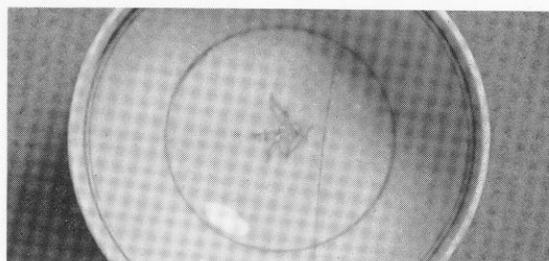
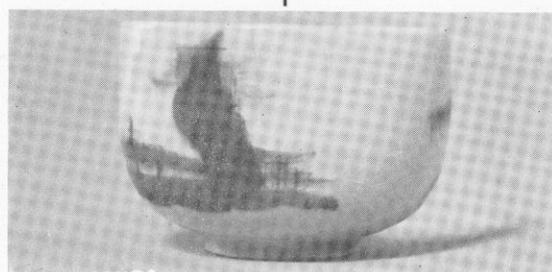
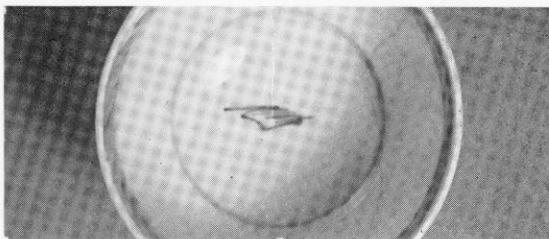
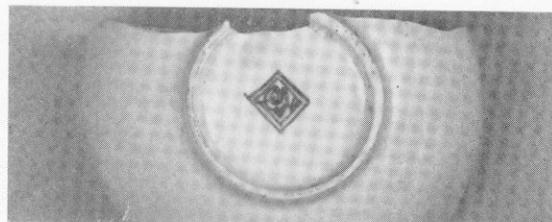
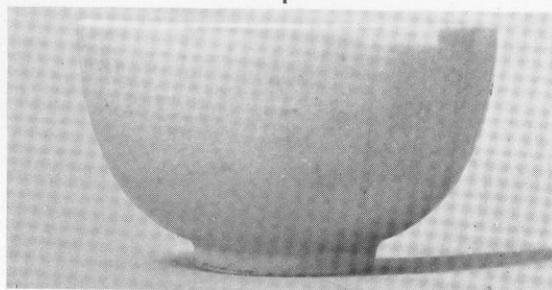
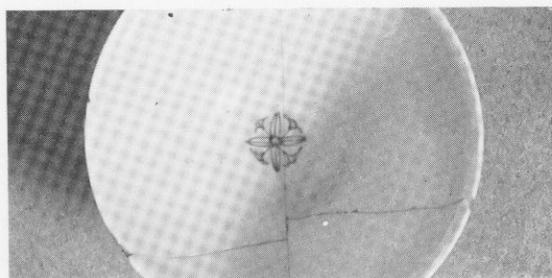
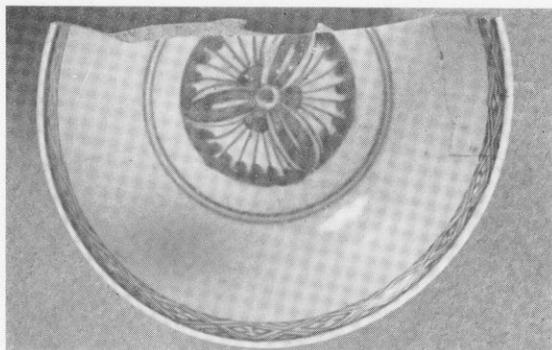
(1) 第 1 号竖穴出土陶器 ①



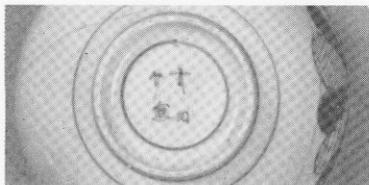
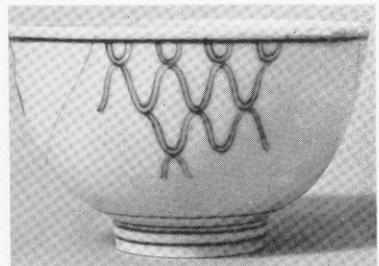
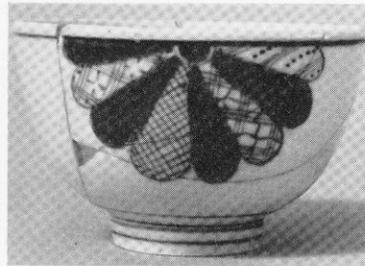
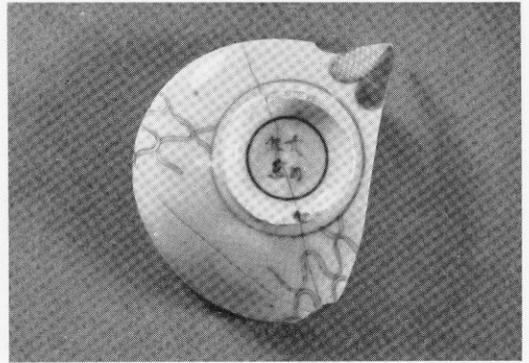
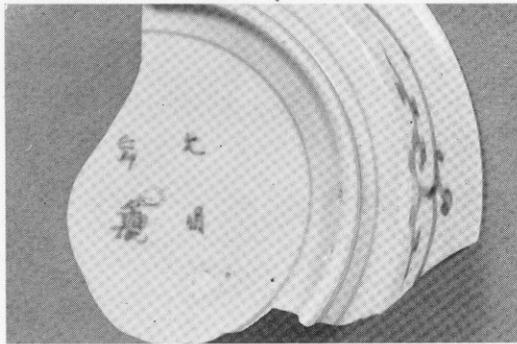
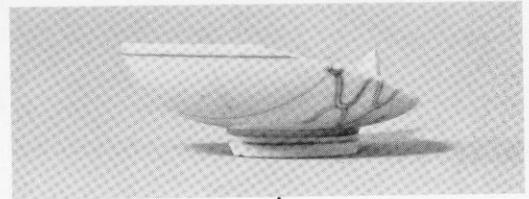
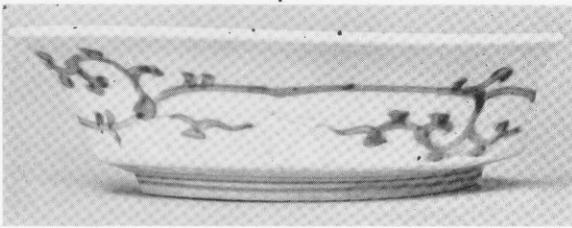
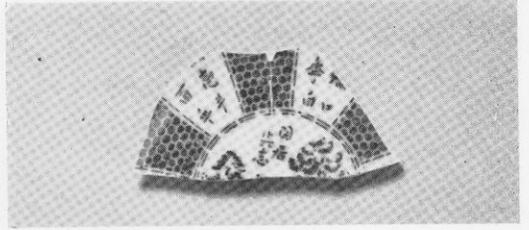
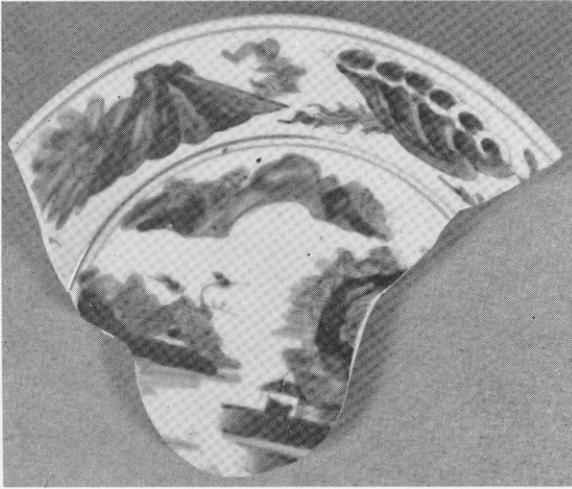
(1) 第 1 号竖穴出土陶器 ②



(1) 第 1 号 竖 穴 出 土 陶 器 ③



(1) 第 1 号竖穴出土陶器 ④



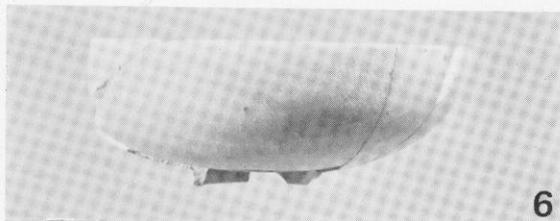
(1) 第 1 号竖穴出土陶器 ⑤



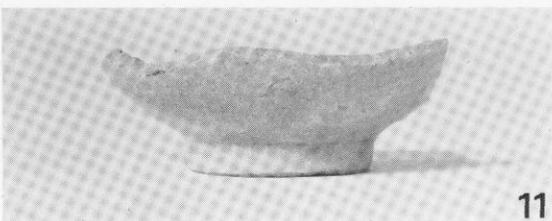
5



10



6



11



7

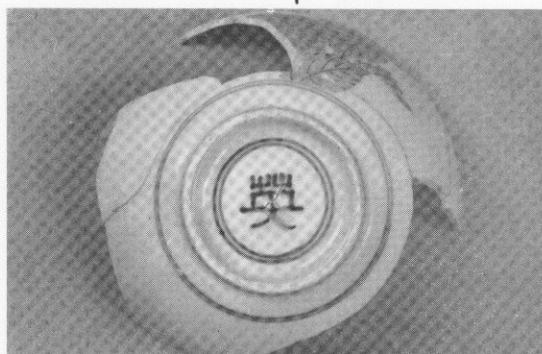
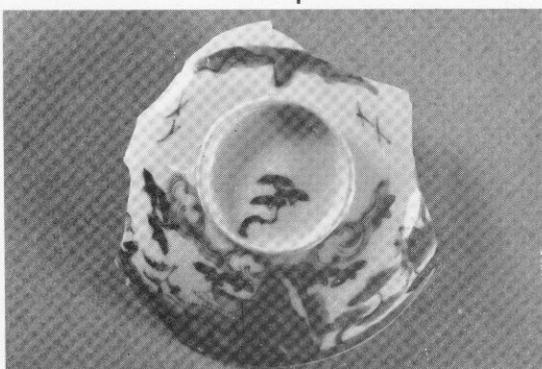
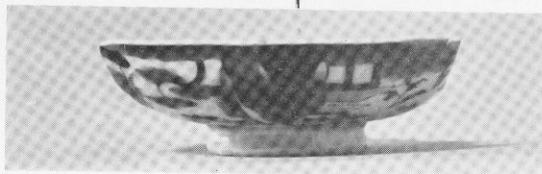
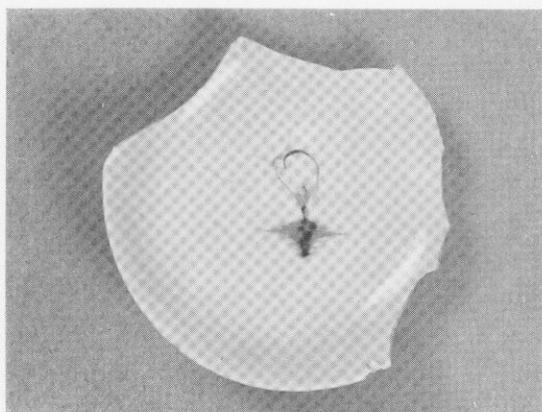
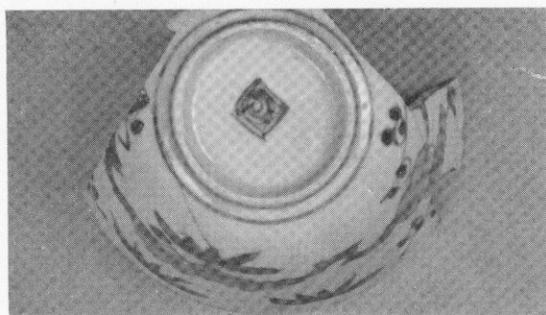
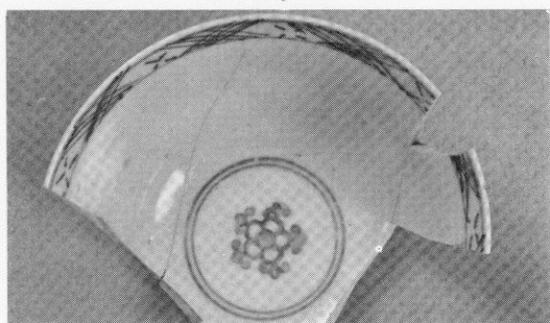
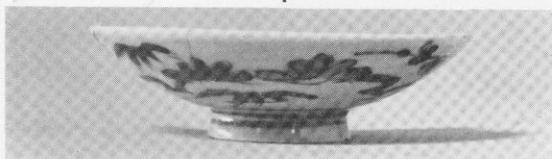


8

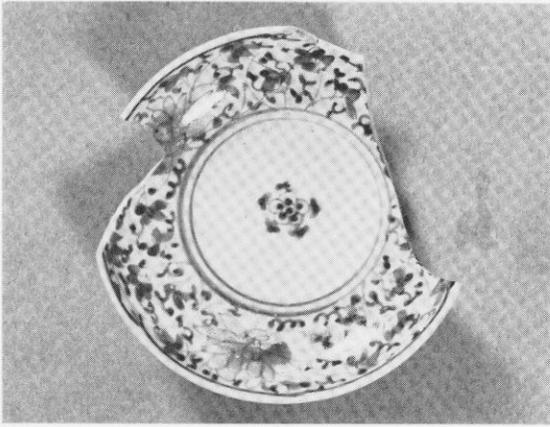
- 5・6 古唐津
- 8・9 唐津(型物)
- 10~11 唐津(上物)



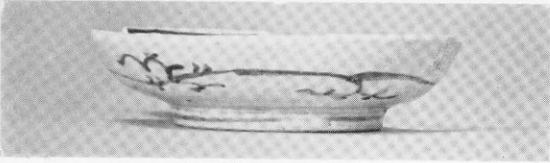
9



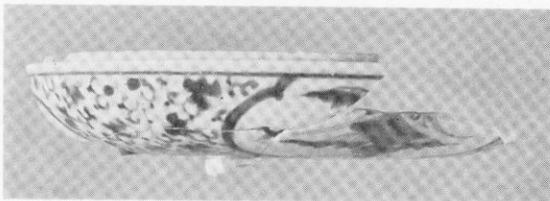
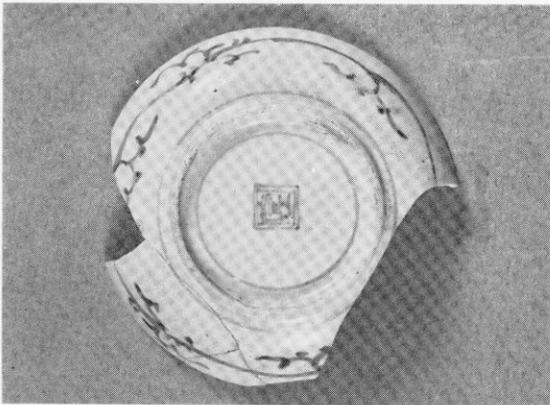
(1) 第 1 号 豎 穴 出 土 陶 器 ⑦



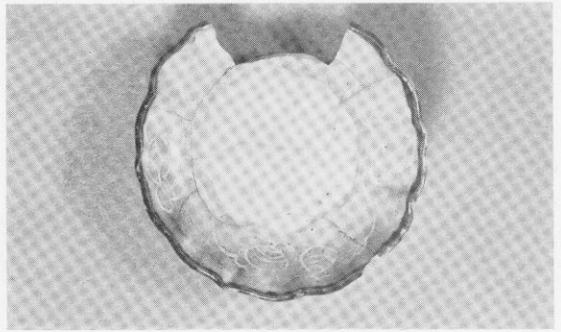
|



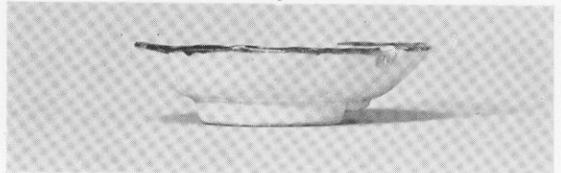
|



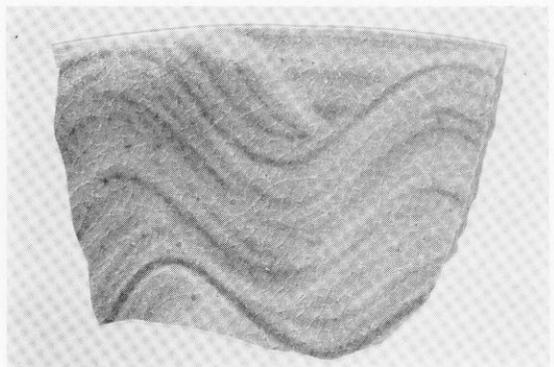
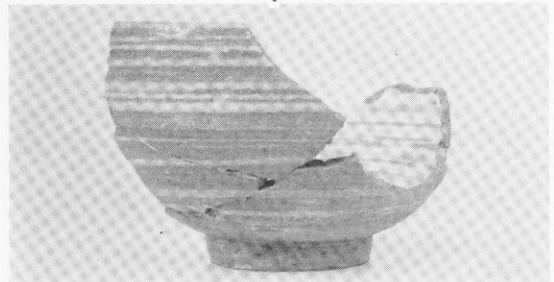
|



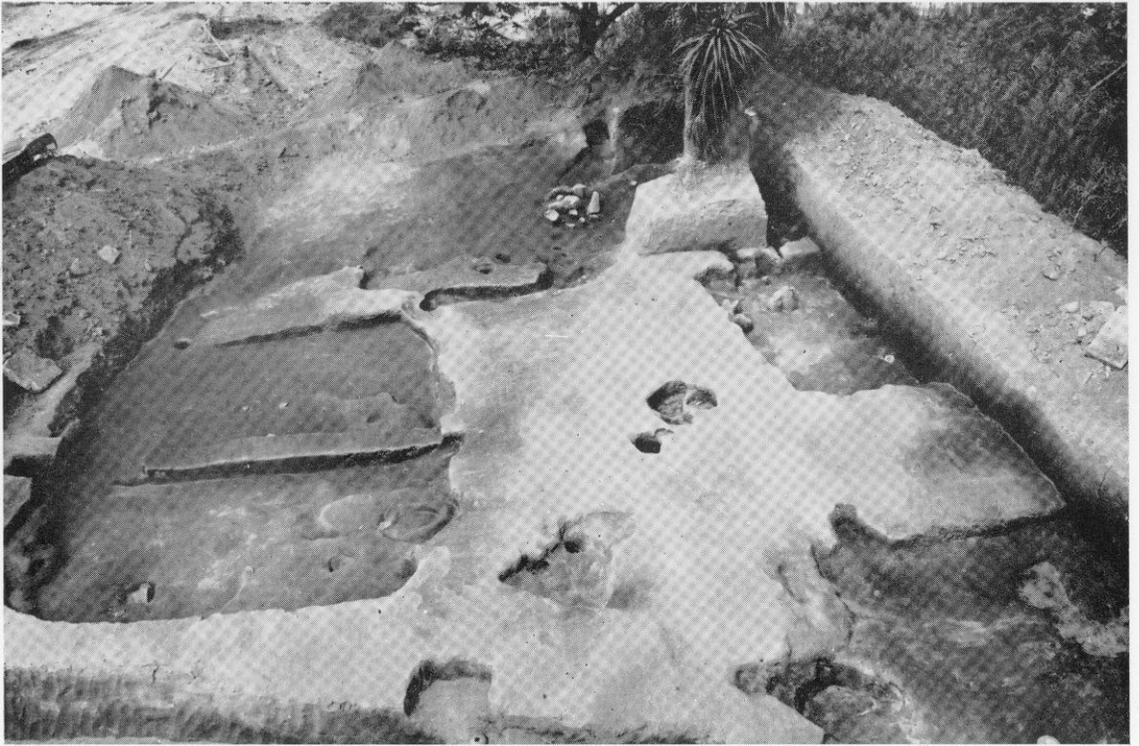
|



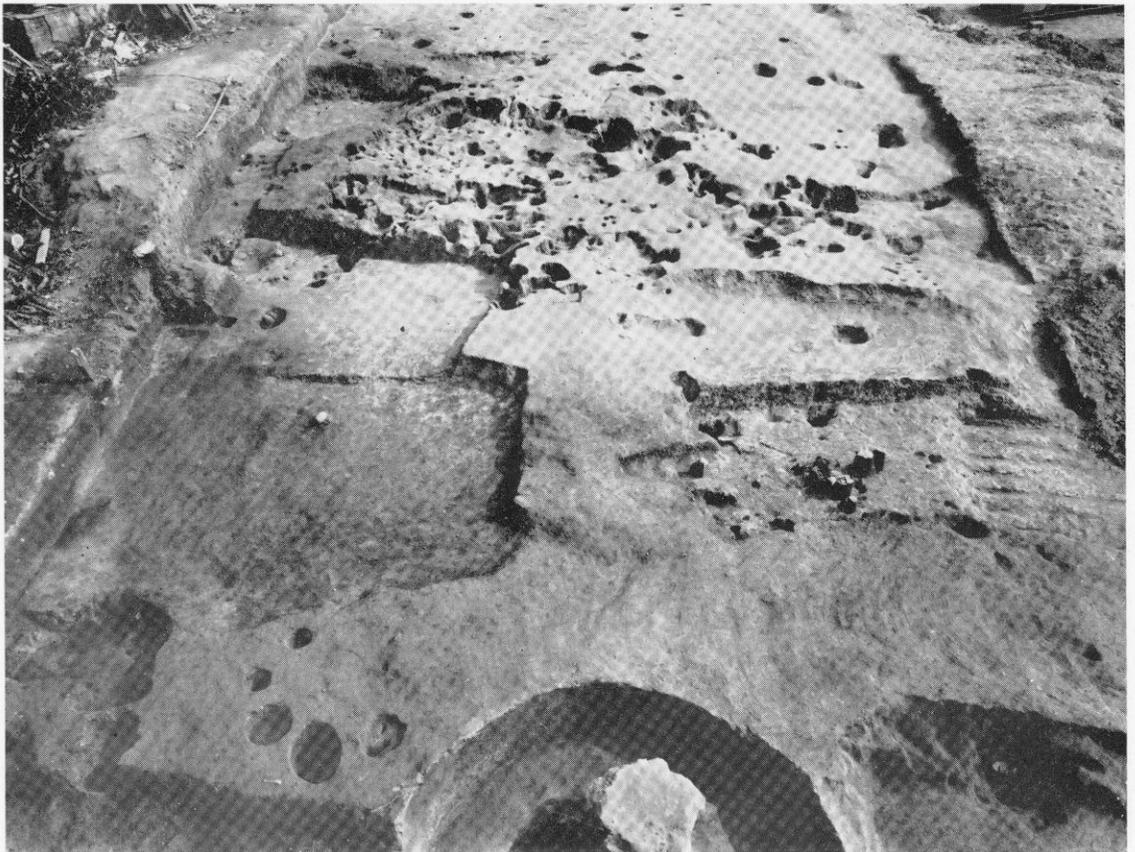
|



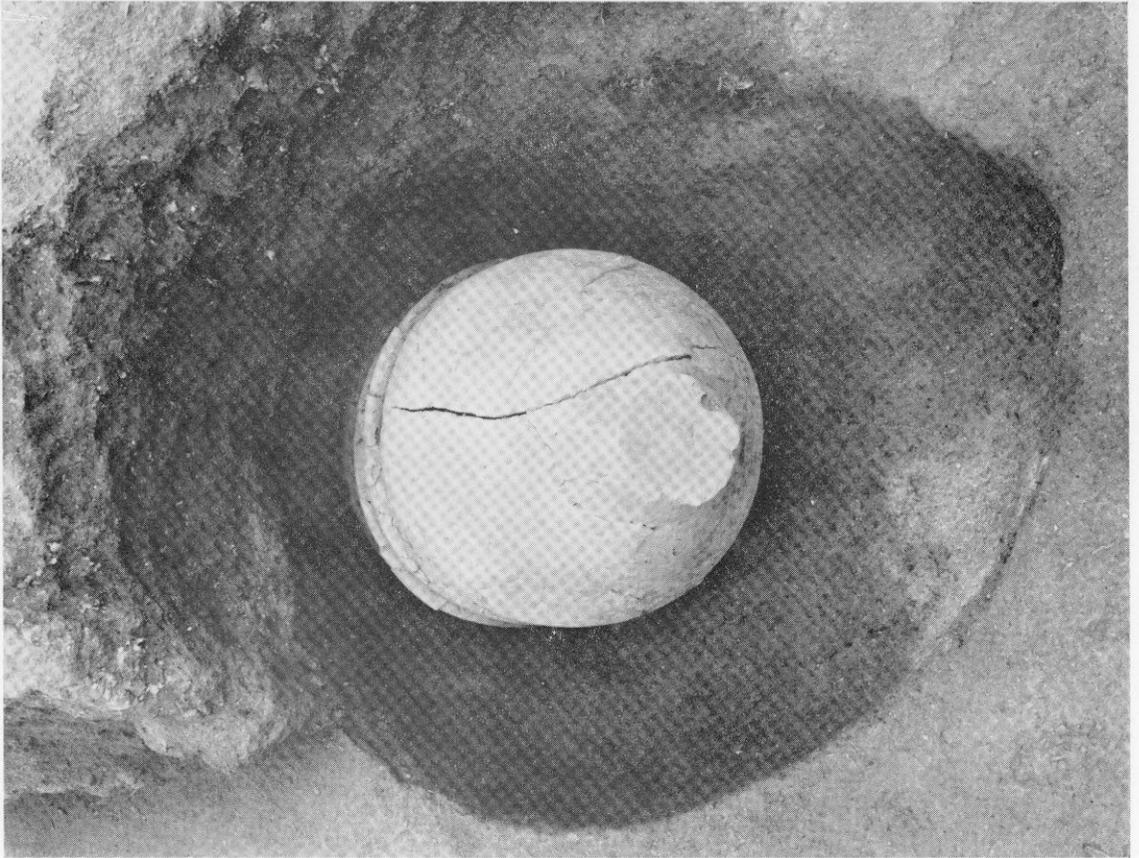
(1) 第1号竖穴出土陶器 ⑧



(1) 北半部遺構群 (南より)



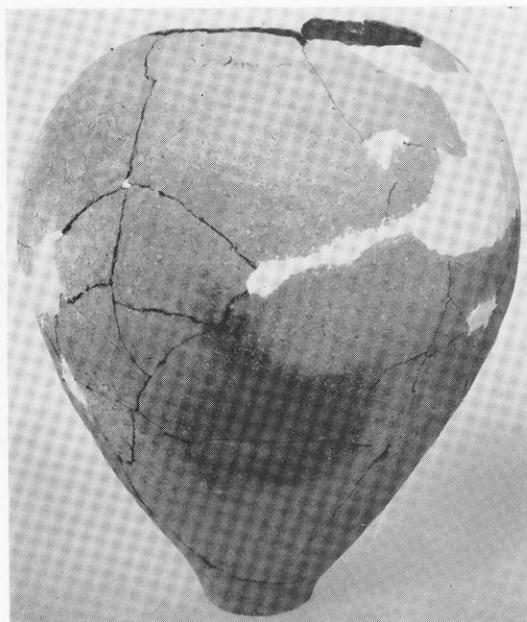
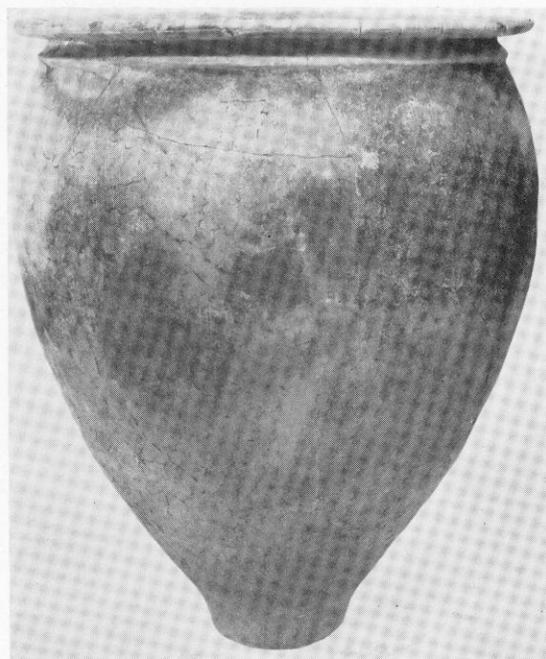
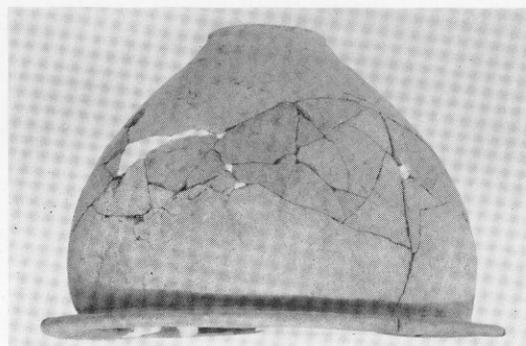
(2) 南半部遺構群 (北より)



(1) 第 1 号 甕 棺 墓 (北より)

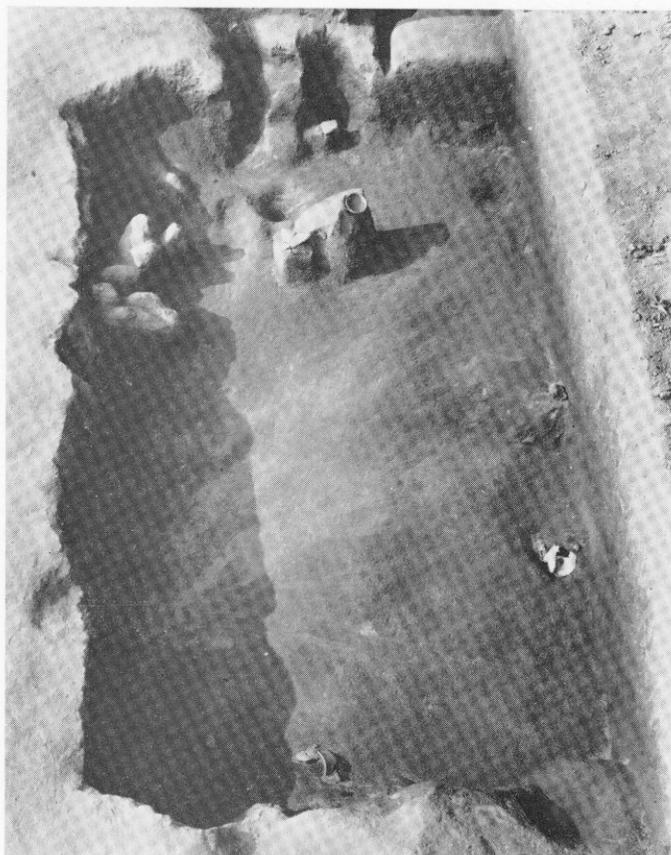
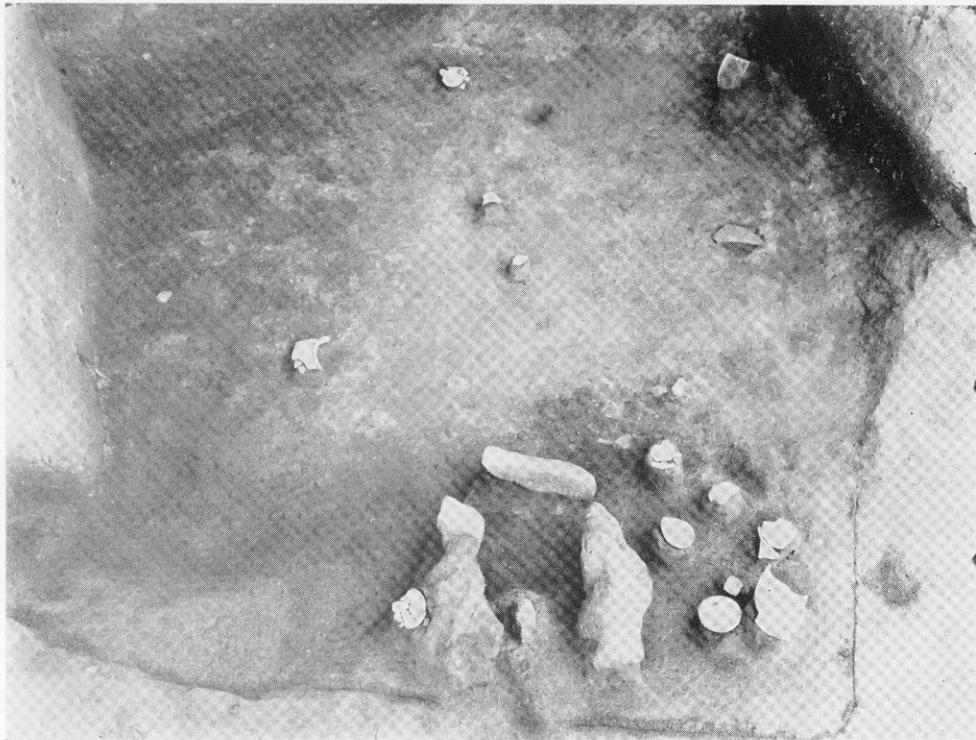


(2) 第 2 号 甕 棺 墓 (南より)

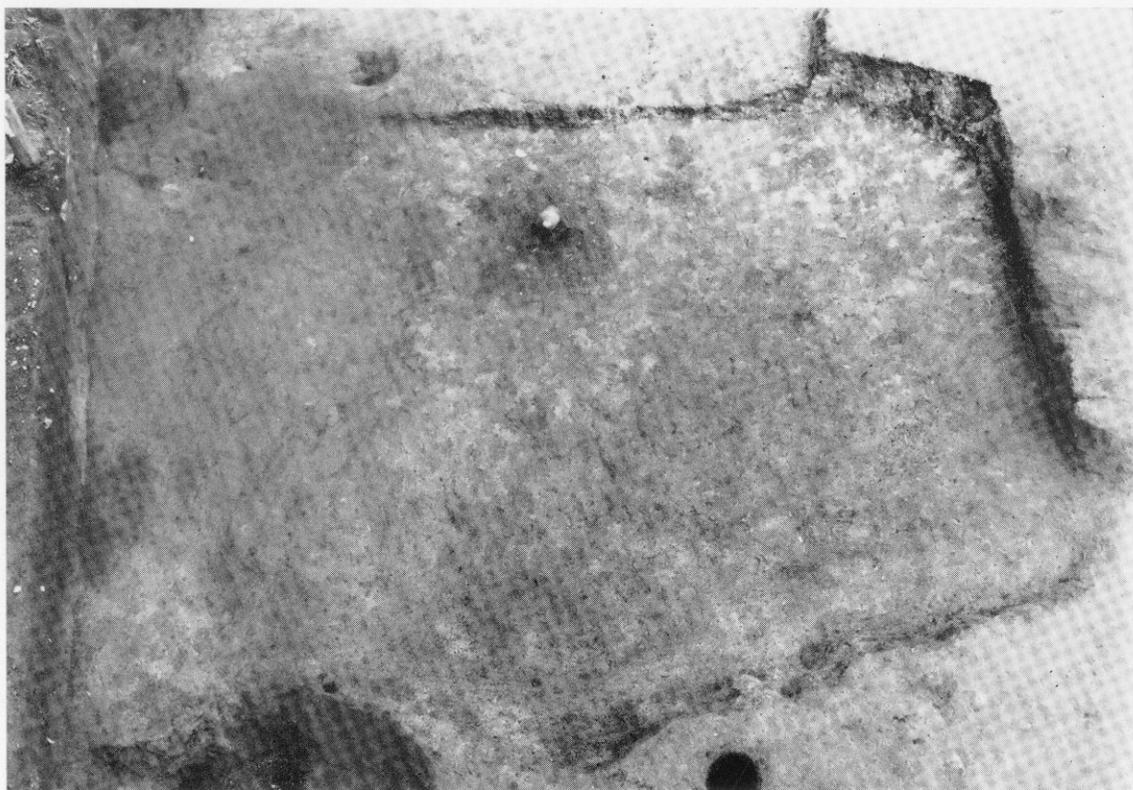


(1) 第 1 号 甕 棺

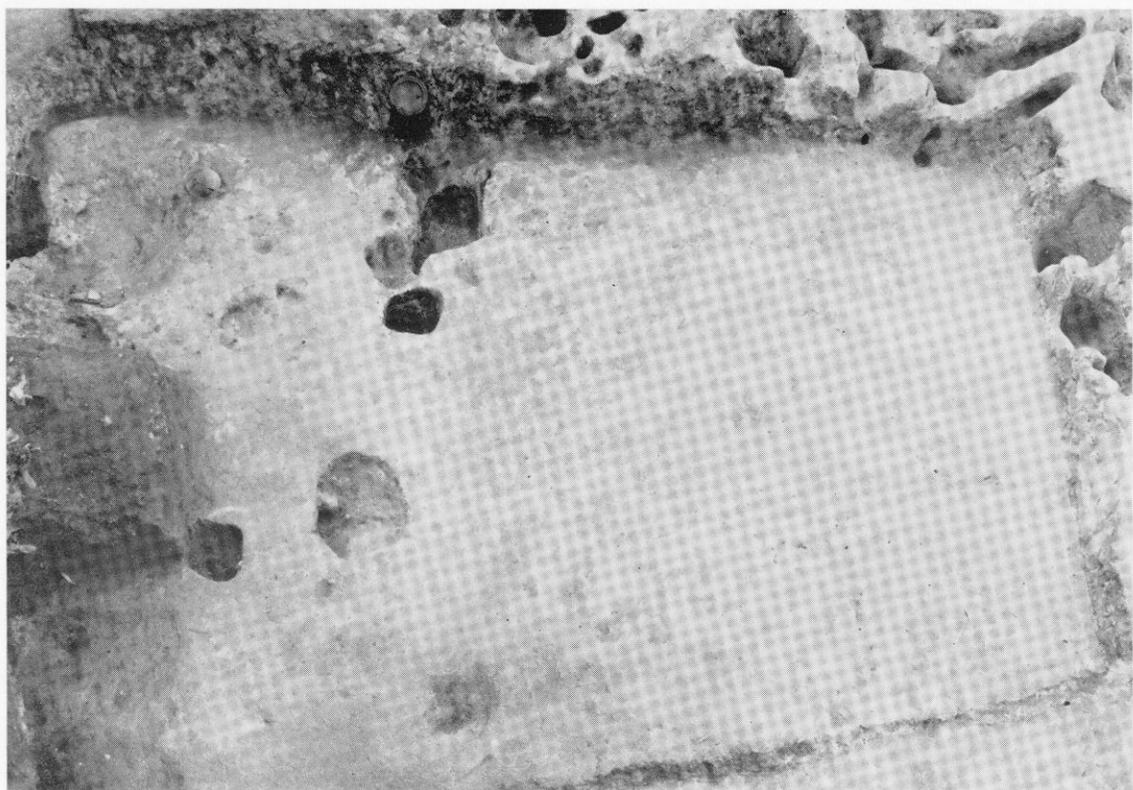
(2) 第 2 号 甕 棺



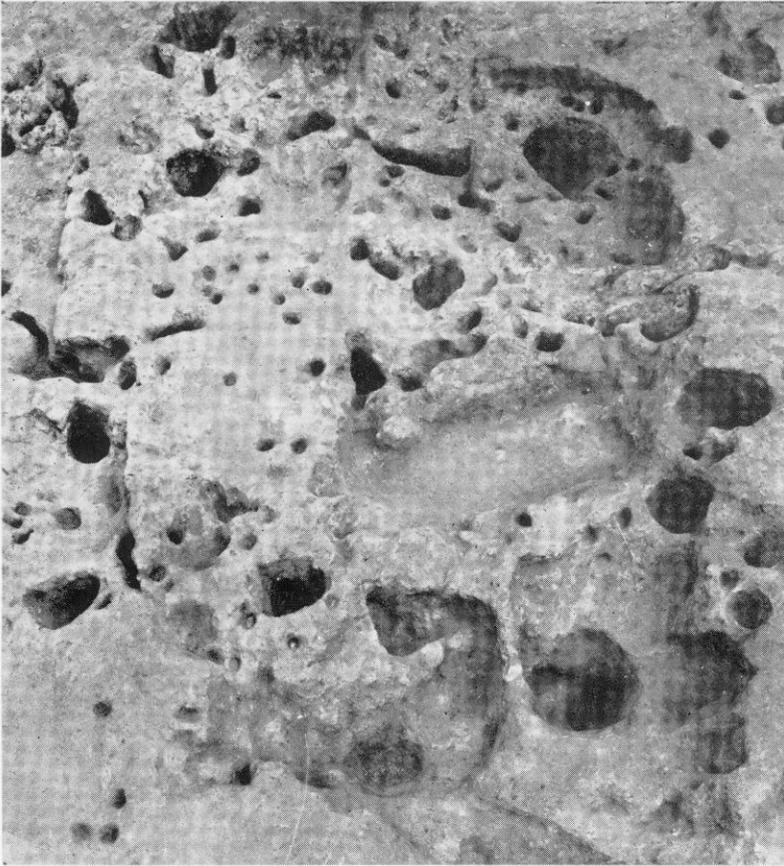
上 第 1 号 住 居 跡 (西 从 从)
左 第 2 号 住 居 跡 (南 从 从)



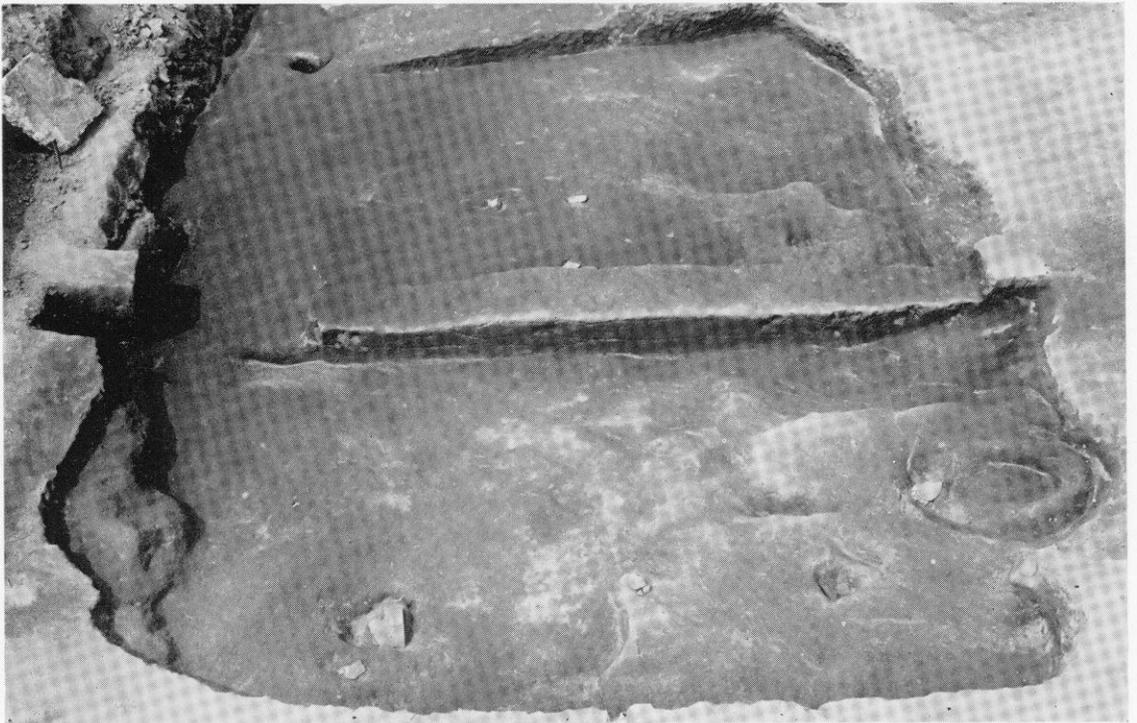
(1) 第 4 号 住 居 跡 (北より)



(2) 第 5 号 住 居 跡 (北より)

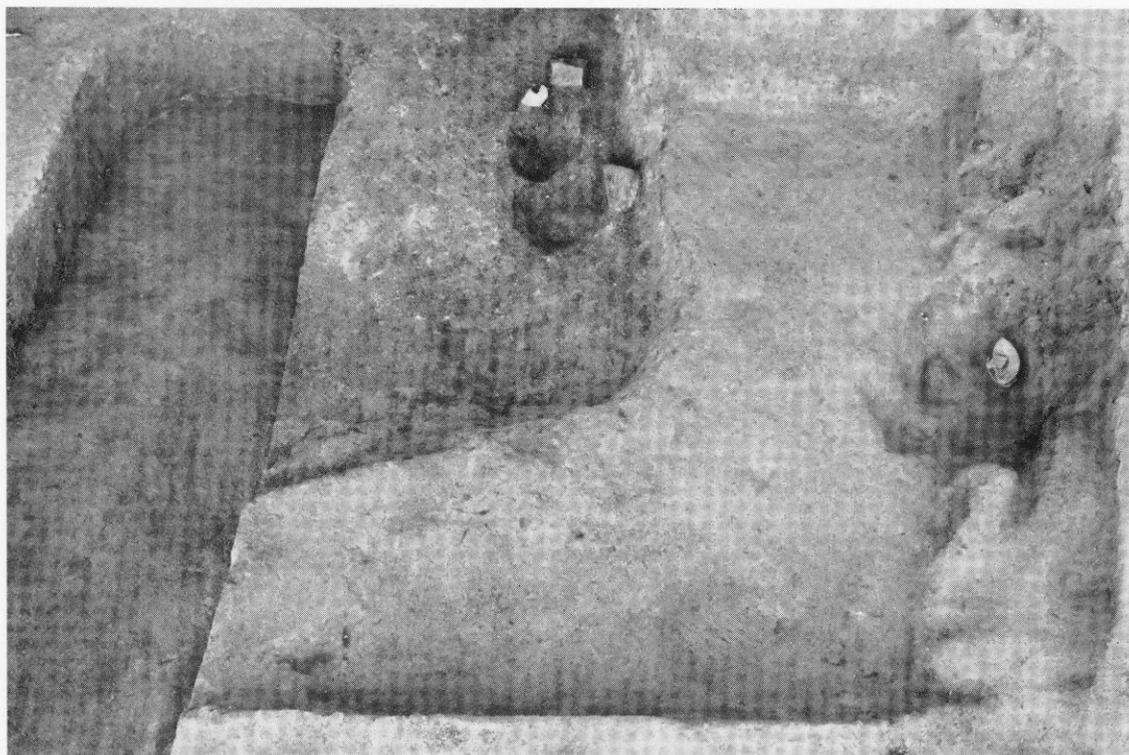


左 第 6 号 住 居 跡
(西より)
下 第 10 号 住 居 跡
(南より)

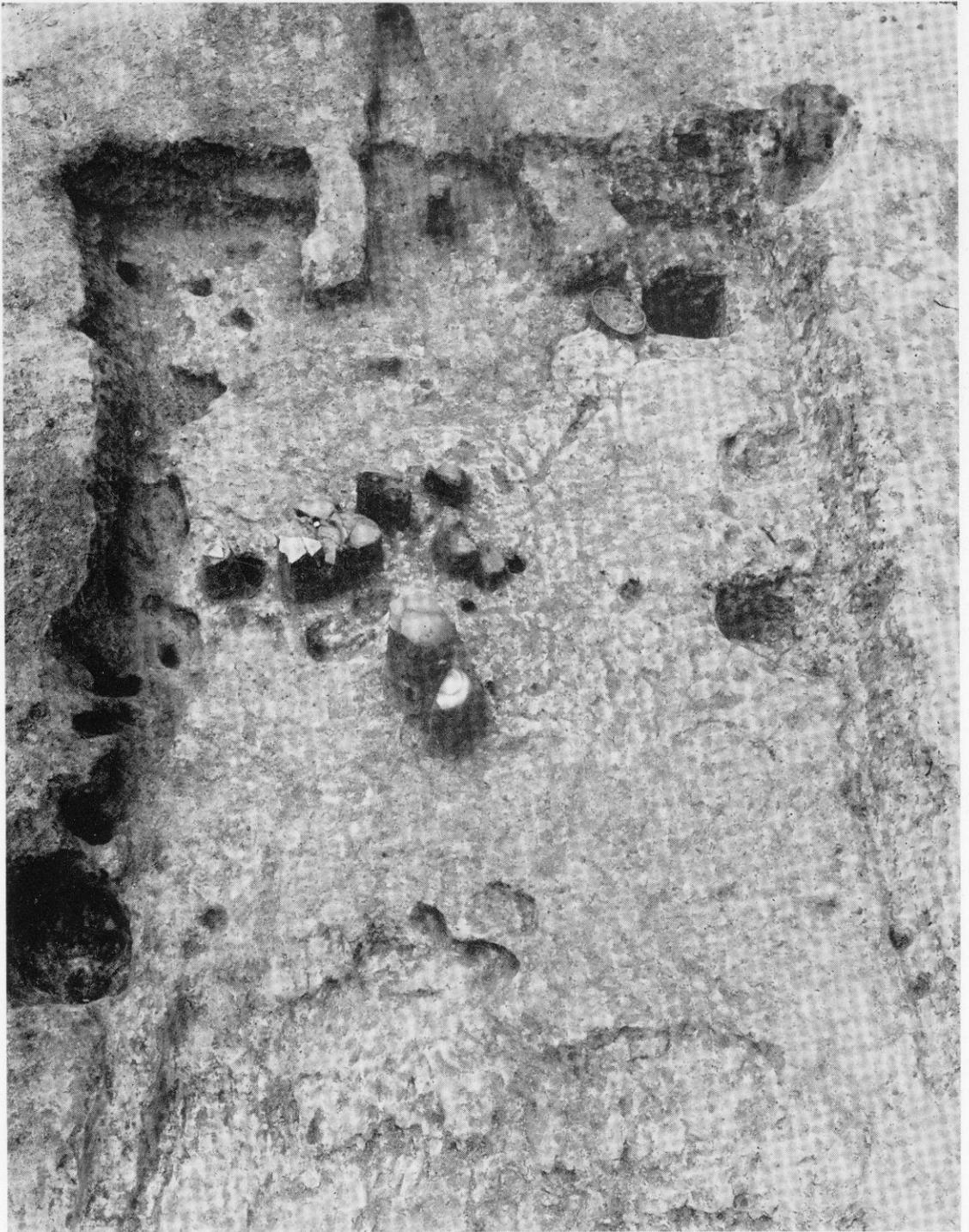




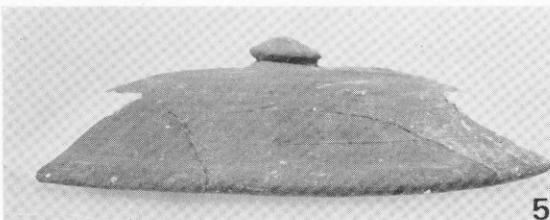
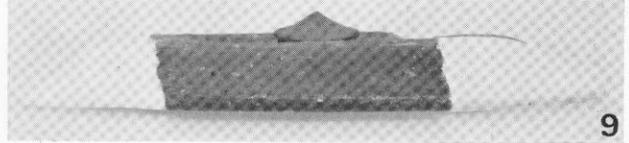
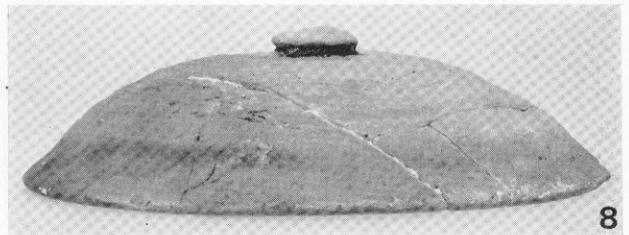
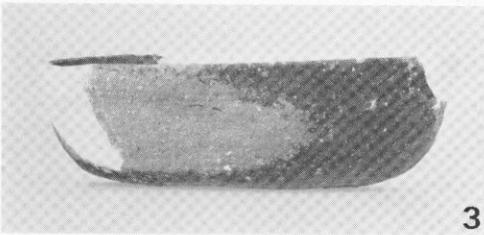
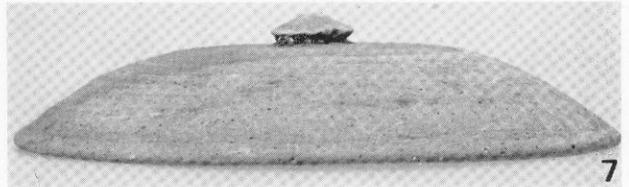
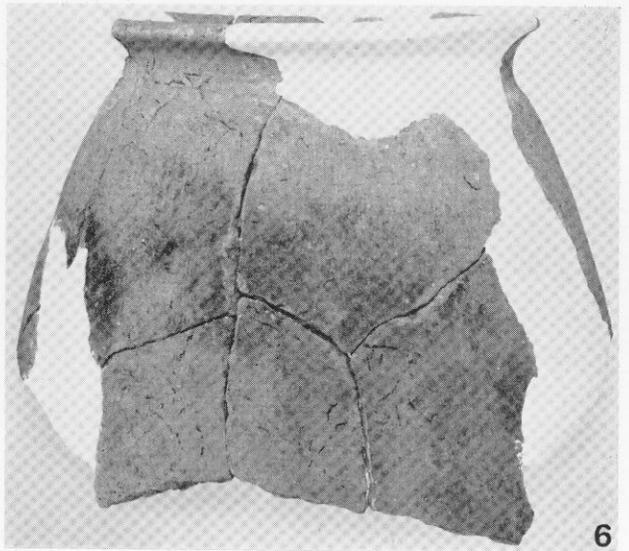
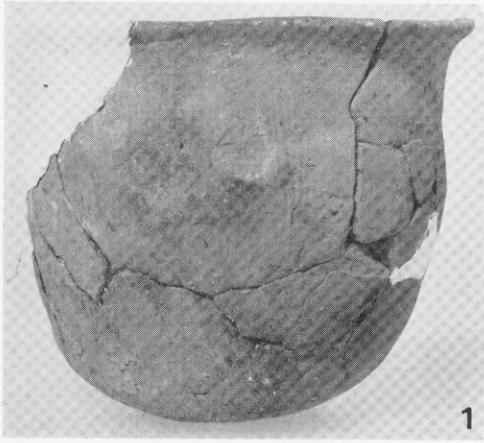
(1) 第 11 号 住 居 跡 (西より)



(2) 第 12 号 住 居 跡 (西より)



第 13 号 住 居 跡 (西より)



(1) 第 5・8・11・13号住居跡出土土器

(2・5・7は5号住居, 1・8・9・10は8号住居, 3・4は11号住居, 6は13号住居)



(1) 第1・2号墳周辺航空写真 (東より)



(2) 第1・2号墳周辺航空写真 (南より)



(1) B区土塁状遺構 (西より)



(2) B区土塁状遺構 (南より)



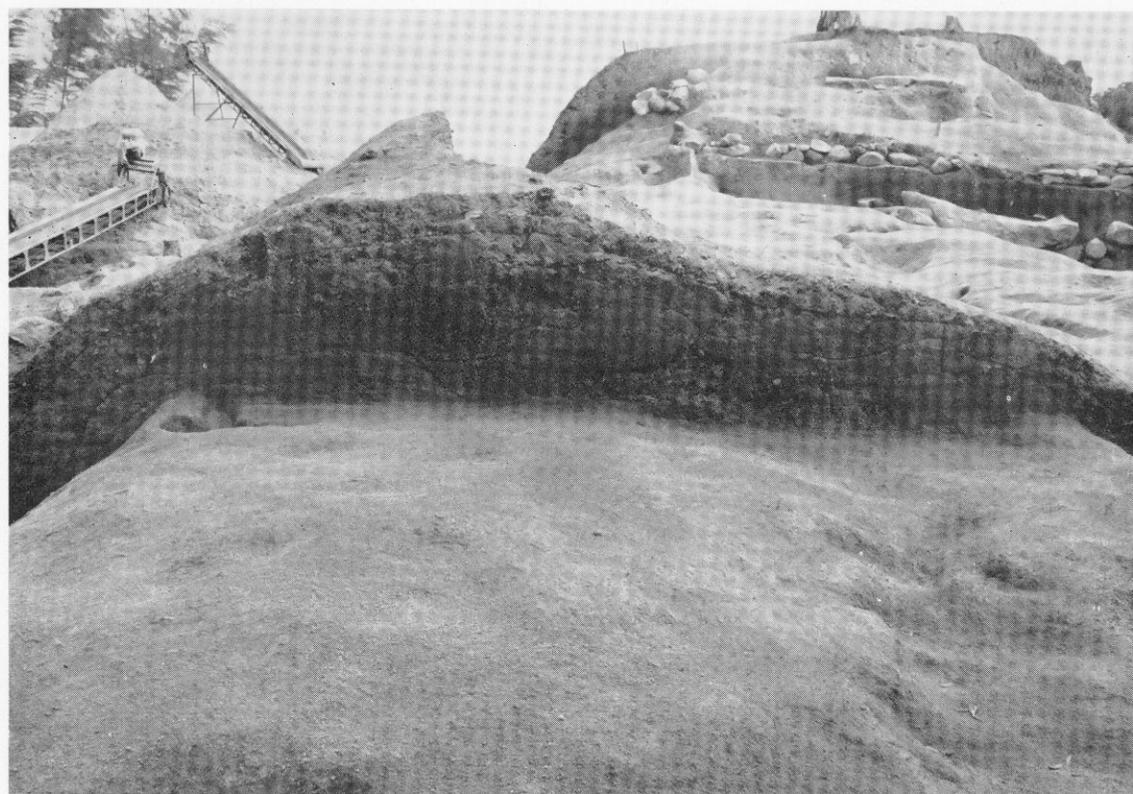
(1) B区階段状遺構 (北より)



(2) B区階段状遺構 (北より)



(1) C 区 土 塁 状 遺 構 (東 よ り)



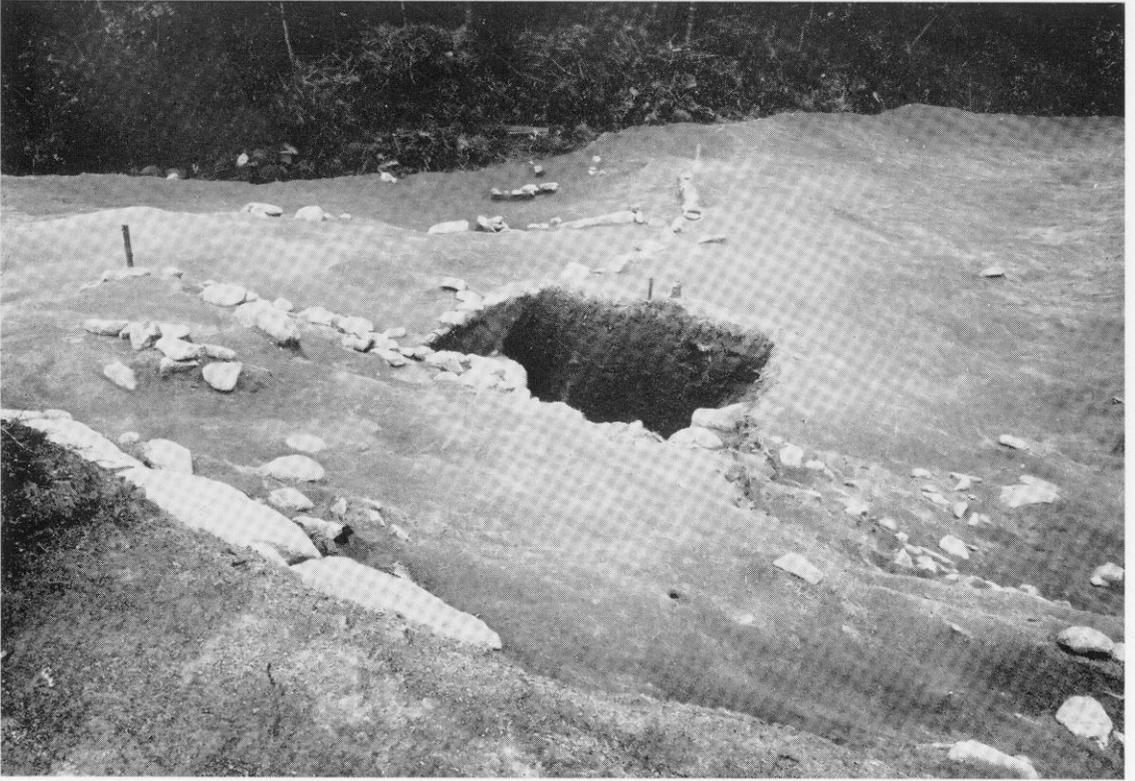
(2) C 区 土 塁 状 遺 構 断 面 土 層 (西 よ り)



(1) C区石組遺構と土塁状遺構 (西より)



(2) C区石組遺構 (西より)



(1) C区石組遺構 (北東より)



(2) C区石組遺構一部分 (西より)



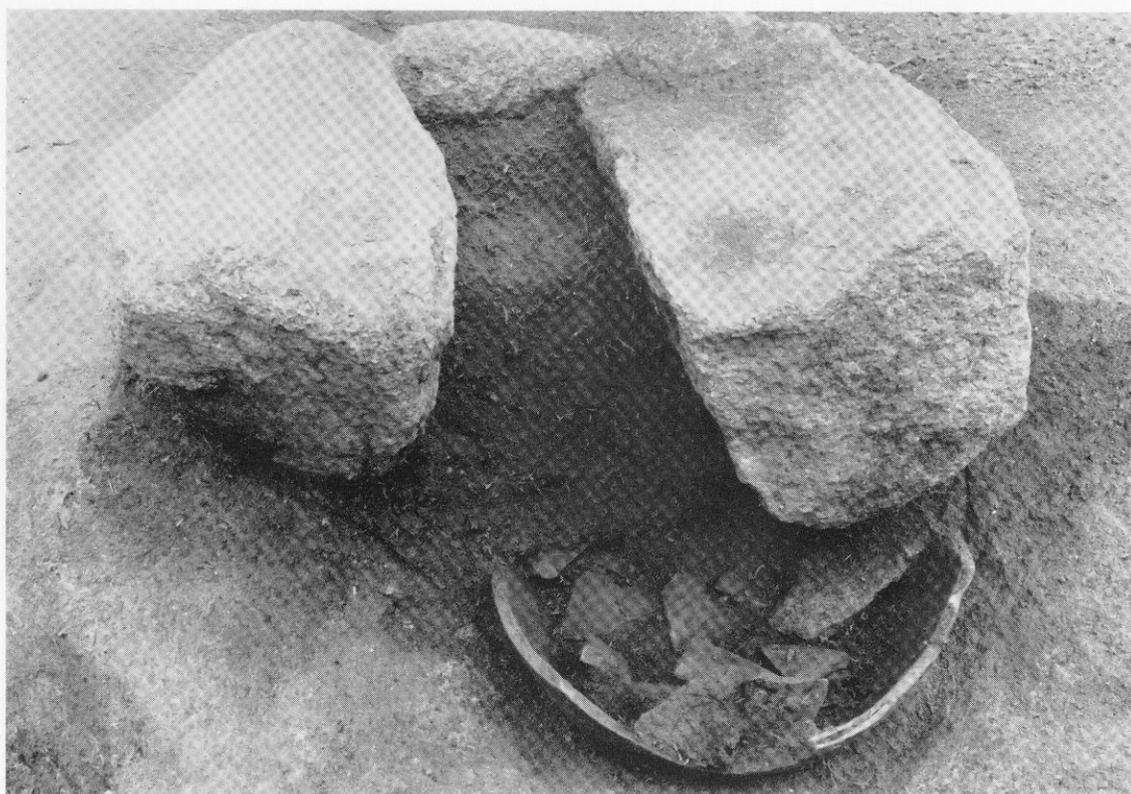
(1) C区石組遺構 (南より)



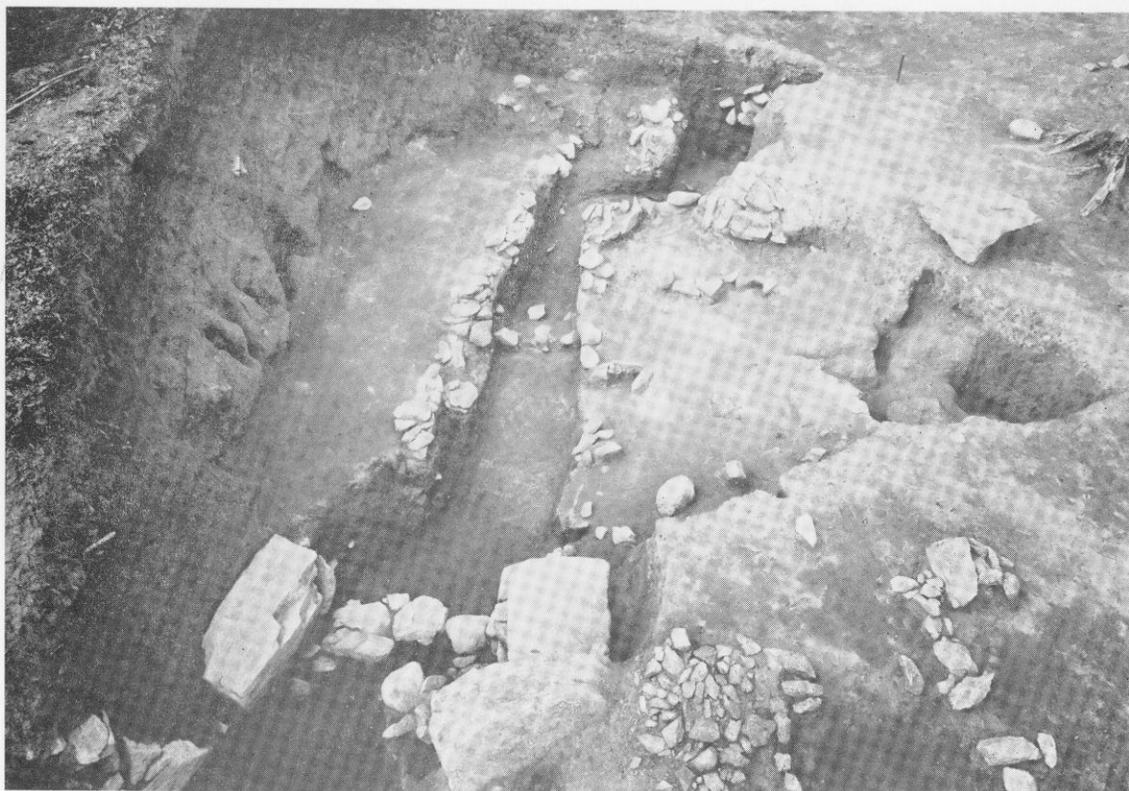
(2) C区石組遺構 (北東より)



(1) D区石組遺構と土塁状遺構 (東より)



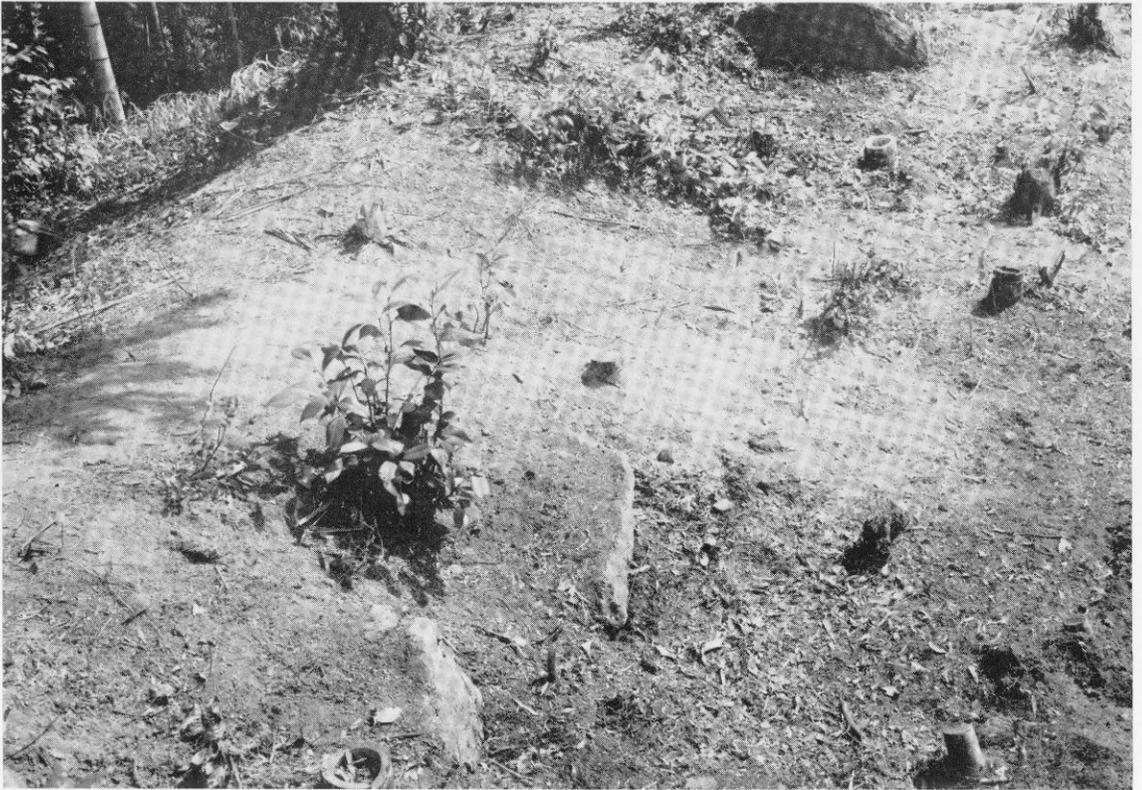
(2) D区石組下の土器出土状況



(1) 2号墳上石組遺構 (南より)



(2) A区土塁状遺構と石組 (南より)



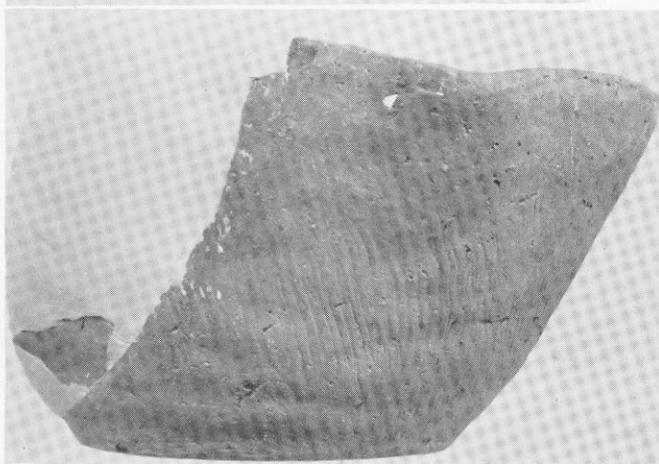
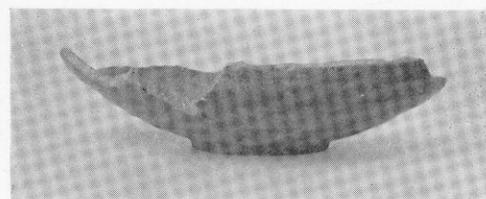
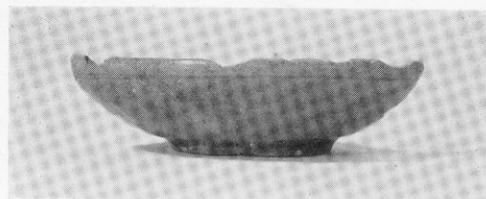
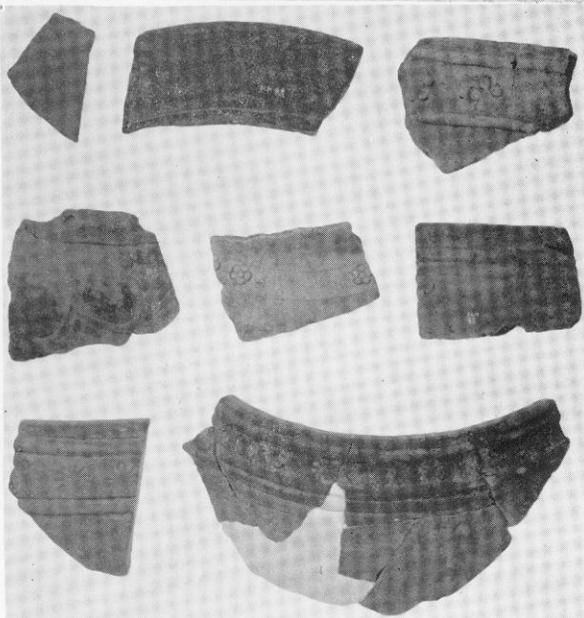
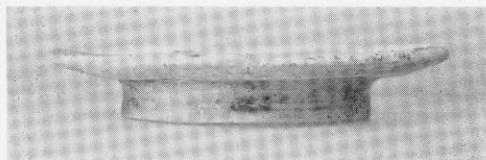
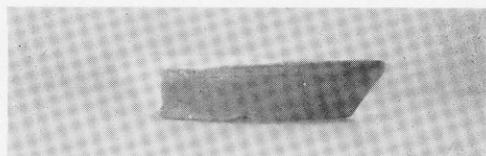
(1) 調査前の A 区土塁状遺構 (西より)



(2) 調査後の A 区土塁状遺構 (西より)



(1) B 区検出石碑



八隈古墳群周辺出土日常雑器, 陶器類

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 一Ⅶ一

昭和51年7月10日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8-3